富士山宝永噴火史料集

津久井 雅志
安藤 広太
金子 徹
編

富士山宝永噴火史料集

津久井 雅志
安藤 広太 編
金子 徹

口絵写真 1　南東から見た富士山　芦ノ湖スカイラインで撮影　正面左中腹に宝永火口，手前の市街地は裾野市

口絵写真 2　**左** 芦ノ湖畔から　わずかに宝永火口が見える　　**右** 箱根関所前から　宝永火口は見えない

口絵写真 3　箱根外輪山　大観山西方で撮影

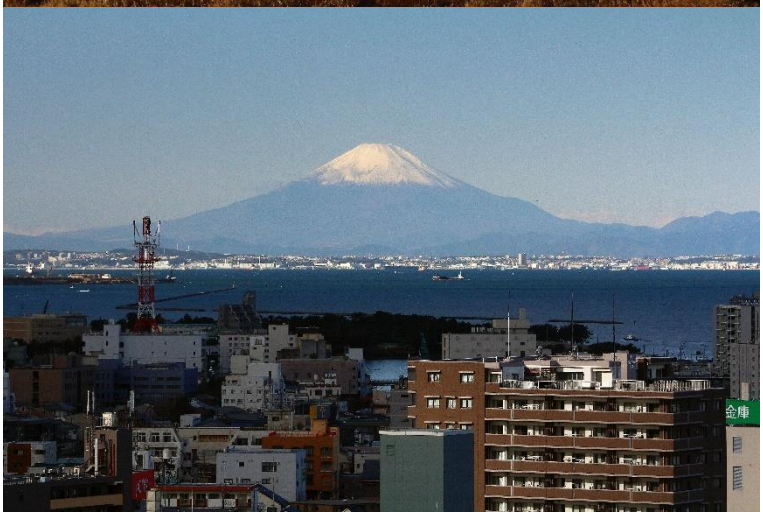
撮影地点（■）

口絵写真 4　静岡県富士市大淵から　右（南東）山腹に宝永火口と宝永山が見える　総合運動公園近くで撮影

口絵写真 5　静岡県裾野市須山から　正面奥に宝永第一火口，その右手前に宝永山　富士山資料館近くで撮影

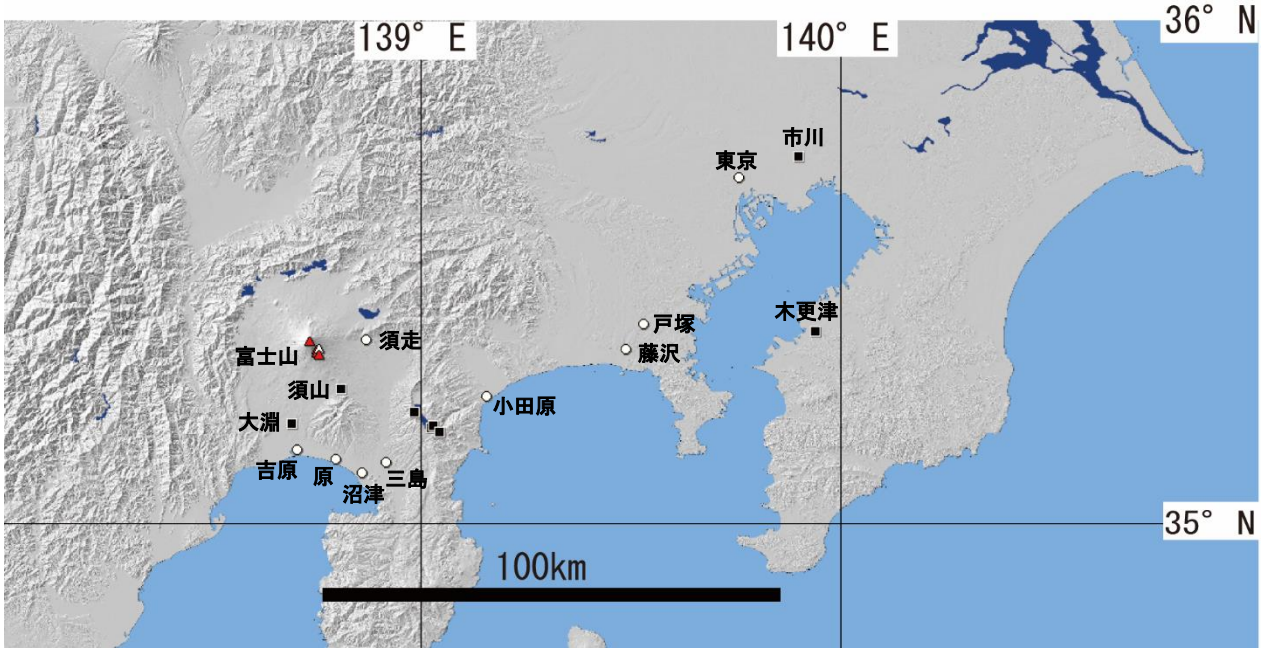
口絵写真 6

千葉県市川市から東京都心越しに富士山を見る　江戸川堤防で撮影



口絵写真 7

千葉県木更津市から富士山を見る　東京湾対岸は横浜市南部　太田山公園きみさらずタワーで撮影



撮影地点（■）と主な地点（○）

国土地理院 50m メッシュ標高をカシミール３D で描画

目次

口絵写真

1. はじめに ……001
2. 宝永噴火関連史料 ……003
3. 噴火推移の復元 ……006
4. 降下火砕物堆積層厚 ……065
5. 注進記録 ……081
6. 被災地への見分の記録 ……084
7. 触書・申渡の記録 ……092

参考文献 ……095

附録史料1　富士山自焼記 ……100
附録史料2　富士山變記 ……108
附録史料3　富士山焼記 ……116
附録史料4　（富士山宝永噴火記） ……120
附表1　富士山宝永噴火史料 ……122
附表2　富士山宝永噴火推移 ……134

1．はじめに

富士山宝永四年噴火は，１７０７年１２月１６日（宝永四年十一月二十三日）に始まり１７０８年１月１日（宝永四年十二月九日）未明までの１６日間断続した．デイサイト質軽石・火山灰と玄武岩質スコリアが富士山東方一帯に降下し，静岡県東部（旧駿河国駿東郡），神奈川県中西部（旧相模国足柄上郡・足柄下郡）では数十㎝以上，最大３ｍ以上の厚さで堆積し，農村部では壊滅的な被害がでたこと，江戸市街地でも降砂があったこと，それらに伴い江戸幕府に大きな財政負担が強いられるなど，大災害となったことから膨大な記録が残されている．

火山学的にも，富士山の直近の大規模噴火であったこと，噴出物は火砕物であって溶岩がなかったこと，デイサイト質と玄武岩質の異質なマグマが関与したことなどから非常に興味深い噴火現象であった．噴出物の物質的な観点から研究することは当然ながら，この噴火の機器観測データはなく，噴火事象の時間・空間分解能を高めるためには当時の文字資料・絵図（一括して史料と呼ぶ）を解析することが重要である．これまでも富士山宝永噴火の研究においても数多くの史料が検討されてきたが，主たる対象史料は噴火の影響の大きかった静岡県，神奈川県，東京都，山梨県のものであった．千葉県，茨城県，埼玉県，栃木県内にも少数ながら重要な史料が地域内では知られていて県史，市史，論文等に収録されているものの，噴火全体の推移や降灰分布を明らかにする目的では充分活用されてこなかった．今回の検討では，つとめて遠方の史料も収録し，噴火期間を通じて広い範囲を理解するデータとして，噴火関連史料，日ごとの降下火砕物分布，降下火砕物堆積層厚の図・表にまとめた．堆積物層厚に関するデータとして，降灰除去作業量の見積りや，砂除け事業の進捗を報告するために，村々名主から領主・幕府役人にあてた諸記録がある．このデータを整理し，検証しやすい形にまとめた．

今回の検討で新たに日々の降砂分布が明かになった．特に噴火が開始した１７０７年１２月１６日（宝永四年十一月二十三日）の９時前後から軽石・火山砂が火口のほぼ真東にあたる神奈川県中南部 - 千葉県中部に降ったのに対し，東京へは正午すぎになって，より細粒の火山灰・火山砂が降ったこと，１２月２０日（十一月二十七日）午前には東京の北側に分布主軸を持ち，茨城県南部の石岡市，ひたちなか市方面へ火山砂が降下したことなどがある．

謝辞

史料の閲覧，撮影，複写や各種情報の照会にあたり，所蔵，管理をされている機関の担当の職員・学芸員，個人の方々には最大限のご協力と多くのご教示を戴いた．一部の古文書の解読と校訂にあたり，小代渉氏には大変お世話になった．ただし，誤り・不備の責任はすべて編者にある．この方々のおかげで，多くの史料に接し，宝永噴火の理解を深めることができた．機関名をあげて心より御礼申し上げます．

青森県弘前市立図書館，秋田県公文書館，岩手県立図書館，東北大学附属図書館，茨城県笠間市立図書館，笠間市教育委員会，龍ケ崎市立図書館，龍ケ崎市歴史民俗資料館，栃木県立文書館（もんじょ），栃木県茂木町ふみの森もてぎ，埼玉県立文書館，越谷市立図書館，伊奈町立図書館，川越市立中央図書館，国立国会図書館，国立公文書館，東京大学史料編纂所，明治大学博物館，東京都立中央図書館・同多摩図書館，公益財団法人徳川黎明会 徳川林政史研究所，公益財団法人 三井文庫，人間文化研究機構 国文学研究資料館，千葉大学附属図書館，千葉県立中央図書館，同東部図書館，千葉県文書（ぶんしょ）館，千葉市中央図書館，千葉県成田市立図書館，大網白里市立図書館，大網白里市

古山豊氏，茂原市立図書館，一宮町立図書館，一宮町教育委員会，いすみ市立図書館，香取市伊能忠敬記念館，伊能 淳氏，勝浦市立図書館，南房総市図書館，木更津市（個人），君津市立中央図書館，君津市教育委員会，袖ケ浦市立図書館，市原市立図書館，船橋市西図書館，神奈川県立公文書館，神奈川県横浜市立図書館，鎌倉市立中央図書館，逗子市立図書館，平塚市立図書館，平塚市博物館，厚木市立図書館，二宮市立図書館，秦野市立図書館，小田原市立中央図書館（かもめ），小田原市成田 村山公一氏，南足柄市立図書館，南足柄市矢倉沢 田代均氏，箱根町立郷土資料館，山北町立生涯学習センター図書室，山北町生涯学習課，静岡県立図書館，裾野市立富士山資料館（現在休館中），静岡県駿東郡小山町立図書館，小山町教育委員会，御殿場市立図書館，御殿場市新橋 鈴木敏之氏，沼津市立図書館，富士市立中央図書館，山梨県立図書館，山梨県南都留郡忍野村教育委員会，南都留郡山中湖村山中湖情報創造館，山梨県富士山科学研究所，長野県飯田市立中央図書館，愛知県刈谷市立中央図書館，三重県伊勢市伊勢神宮 神宮文庫，滋賀県大津市比叡山延暦寺 叡山文庫，福岡県久留米市立中央図書館，佐賀県鹿島市祐徳稲荷神社，長崎県肥前島原松平文庫，宮崎県立図書館

研究の一部に，科学研究費基盤研究（C）２０Ｋ０４０７９ 代表 津久井 雅志 を使用した．

この史料集を富士山の噴火現象をより詳細に理解するため，防災・減災対策のために活用して戴ければ幸いである．

令和六年二月

千葉大学大学院理学研究院

津久井 雅志

2．宝永噴火関連史料

宝永噴火に関する史料は非常に多く残されているが，史料を収集し，検討する際に，記録者は誰か，いつ記録されたものか，どのような目的・視点で記録されたかを明確にすることが重要である．個人として特異現象を記録したもの，支配者へ向けた被害報告・訴状，災害復興見積り，復興進捗報告，公的記録文書，編纂史料などの性質の記録があるので，背景も含めて理解するよう努めた．収集した史料の同時間帯，近隣の地点の複数の観察記述を比較して事象を確認し，記録精度の向上をめざした．

噴火開始から終息までのほぼ全噴火期間を通して記録された文書がいくつかある，富士山南東～東麓の状況を記録した『**土屋伊太夫文書**』，旗本伊東志摩守祐（すけかた）資（屋敷は墨田区東駒形（本所二ツ目）の『**伊東志摩守日記**』，尾張と江戸で観察された宝永噴火を尾張藩士朝日文左衛門が記録した『**鸚鵡籠中記**』はよく知られている．今回の検討ではそれらに加えて，文京区大塚の『**護国寺日記**』，台東区台東の秋田藩家老『**岡本元朝日記**』，木更津市犬成の『**富士山辰巳方焼出シ候事**』等も併せて検討した．これらには噴火の推移全体を把握するうえで重要な天候をはじめ，日ごとの噴煙，降砂の状況を詳細に記録しており，信頼性が高いと評価した．このほか大名の江戸屋敷の公用記録（日記）として肥前鹿島藩，肥前島原藩，対馬藩，津山藩，仙台藩，盛岡藩，弘前藩のものがある．各藩の江戸上屋敷の位置を深井・藤實編（１９９９）や東京都（１９６０）で確認し，観察地点の情報として扱った．

著者・成立年とも不明であるが，幕府内部の情報を収録した史料と考えられるものに『**富士山自焼記**』（謄写本 東京大学史料編纂所），『**富士山變記**』（東北大学 狩野文庫），『富士山焼記』（愛知県刈谷市中央図書館 村上文庫）がある．『**富士山自焼記**』には噴火状況を伝える遠隔地からの注進状が数多く採録されている．『富士山焼記』には噴火が開始した１７０７年１２月１６日（宝永四年十一月二十三日）から終息後の１７０８年１月８日（十二月十六日）までの天候，噴火現象の観察，幕府内の動向などが記録されている．記録地は明示はされてはいないが，十二月七日の小石川伝通院近くの火事が記録されていることから江戸の記録と判断され，貴重である．これまでの研究，史料集の中に『富士山變記』，『富士山焼記』の翻刻資料が見つけられなかったので，附録史料に収録した．

降砂・降灰の影響が大きかった静岡県，神奈川県内には被害および降灰厚さ報告，復興作業量の見積書，復興進捗（「開発」）報告ないしその控が多数残っていて，主に県・市・町史に収録されている．神奈川県立歴史博物館（２００６）「富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川」には，神奈川県を中心とした史料が網羅されて，情報量が多い（が，絶版で入手しにくい）．

遠方の地域では降砂の影響が小さかったこともあり，記録の数や精度がやや低いが，千葉県香取市佐原の伊能家の記録，栃木県芳賀郡茂木町小貫 小﨑家所蔵『**日記**』の茨城県笠間市・石岡市の降灰記録，東京都清瀬市 村野家の記録などは降砂・降灰分布を知るうえで非常に重要な記録である．

下鶴（１９８１），内閣府（２００５）は，降灰層厚を記録した史料を多数収集して紹介している．しかし史料原典と二次史料のデータが混在しているので，今回できる限り，原史料の所蔵者，翻刻刊行物の関係が明確になるよう整理し，表４－１～３，図４－１～３にまとめた．

公儀（江戸幕府）の公的な記録

江戸幕府の公的な記録として，まず，『**柳営日次記**』が挙げられる．これは幕府の各役所が日々の業務を記した公日記である．噴火前後の記録は内閣文庫本『**柳営日次記**』（［**請求番号**］**164-0017**，**No.16**（宝永四年十月-十二月），**No.17**（宝永五年正月-三月））の画像データが国立公文書館デジタルアーカイブで閲覧可．国立国会図書館デジタルコレクションでは別写本の『**年録**』［請求記号833-1］**一四七巻**（宝永四年十月-十二月），**一四八巻**（宝永五年正月-三月）の画像データの閲覧が可能である．なお「柳営」は幕府もしくは将軍を意味している．

宝永元年（1704）から正徳五年（1715）まで，五代将軍綱吉の晩年から七代将軍家継の治世まで12年間の将軍の動静，幕府の諸行事などの史料を収めた記録として『**文露叢**』が挙げられる．内閣文庫所蔵史籍叢刊 48 改正甘露叢・文露叢 2．（1985）汲古書院．364p．（浄書本の複製）の画像データが国立公文書館デジタルアーカイブで閲覧可能である．

『**徳川實紀**』は19世紀前半に編纂された江戸幕府の公式史書で，将軍ごとにまとめられている．宝永四年噴火開始時から宝永六年（1709）までは徳川綱吉（第五代将軍）（正保三年（1646）生-宝永六年（1709）没）の記録『**常憲院殿御實紀**』（黒板勝美 編，1931）にまとめられている．宝永六年（1709）から正徳二年（1712）までは徳川家宣（第六代将軍）（寛文二年（1662）生-正徳二年（1712）没）の記録『**文昭院殿御實紀**』（黒板勝美 編，1931）にある．『徳川實紀』の根拠史料として『**柳営日次記**』，『**文露叢**』等が引用されている．

これらの公的記録には宝永噴火が発生事実，見分，復興のための砂除け・川浚い事業の担当者の任命，復命報告，褒章などが記されている．

江戸において噴火を記録した史料

江戸における個人・寺社の日記記録として主要なものとして以下の史料を挙げる．

『**樂只堂年録**』噴火当時の大老 甲斐藩主 松平（柳澤）美濃守吉保の日記．
宮川葉子 編集・監修（2019）樂只堂年録 第八，史料纂集 205，八木書店．268p．

『**護国寺日記**』文京区大塚にある護国寺の役者が記した公用日記．噴火時の日々の日記があり貴重である．
坂本正仁 編（2019）史料纂集 古記録編 202 護国寺日記 第5 八木書店古書出版部．370p．

『**伊東志摩守日記**』旗本伊東志摩守 祐資（すけかた）（五千石．屋敷は墨田区東駒形）の記録で，噴火開始日から終息するまで連日，詳細に江戸の状況が記録されている．震災予防調査会 編（1904）『大日本地震史料甲巻』Tsuya, H.（1965）をはじめ，多くの報告書，論文に引用されている．

『**鸚鵡籠中記**』尾張藩士朝日文左衛門の名古屋における記録であるが，宝永四年十月の南海地震，富士山宝永噴火に関する名古屋と江戸の状況が収録されている．江戸の記録は十一月二十三日条，同二十八日条にまとめられている．名古屋の記録と江戸の記録とを識別して検討した．
名古屋市教育委員会（1968）名古屋叢書続編 第十一巻，鸚鵡籠中記（三），p262-275．

『**岡本元朝日記**』秋田藩家老で江戸屋敷に勤め，幼小の藩主を補佐していた岡本元朝の日記．
岡本元朝著・秋田県公文書館編（2020）岡本元朝日記 第6巻，秋田県．471p．

『**折たく柴の記**』・『**新井白石日記**』儒学者で噴火当時大納言（第六第将軍 在位1709-1712）であった徳川家宣に仕えていた新井白石の記録にも噴火を目撃した記述がある．
国書刊行会 編（1977）新井白石全集 第3巻，折たく柴の記 中，p50-51．
東京大学史料編纂所編 新井白石著（1953）新井白石日記 下．大日本古記録，p42-46．

『**隆光僧正日記**』護持院の僧隆光（1649生-1724没）による日記
史料纂集期外古記録編（1970）隆光僧正日記第三，p168-171，続群書類従完成会．

『宝永四年富士山焼一件』日本橋呉服商伊豆蔵勤め村山弥兵衛が勢州関の父宛，富士山噴火と自身の無事を伝える書状．噴火開始後3日間の江戸の状況と自身の無事を知らせる内容がまとめられている．

中野義雄編（1985）小澤蘆庵の真面目．里のとぼそ 第五集，p428-429．

災害・復興対応者・役職のまとめ

公儀（江戸幕府）の富士山噴火対応の担当者の役職，氏名，石高を知っておくと幕府や藩，村の対応の背景を理解しやすい．役職武鑑（深井・藤實編，1996），大名武鑑（深井・藤實編，1999），寛政重修諸家譜（堀田ほか編，1964～1967），江戸幕府諸役人御用番名鑑（深井監修，大滝・嵩田編，2014）等から整理した．

深井雅海 監修，大滝敦士，嵩田紋子 編（2014）江戸幕府諸役人御用番名鑑．309p．柊風舎．

深井雅海・藤實久美子編（1996）江戸幕府役職武鑑編年集成6 元禄十五年-宝永五年 東洋書林．

深井雅海・藤實久美子編（1999）江戸幕府大名武鑑編年集成5 元禄十五年-宝永五年 東洋書林．

堀田正敦 ほか編（1964～1967）寛政重修諸家譜 第一～第二十二（新訂）．同索引第一～第四，総索引，続群書類従完成会．

将軍 ・徳川綱吉（つなよし）（5代将軍 在職1680（延宝八年）-1709（宝永六年））

大納言・徳川家宣（いえのぶ）（6代将軍 在職1709（宝永六年）-1712（正徳二年），正室 熙子（ひろ）は『基熙（もとひろ）公記』著者 近衛基熙の娘）

大老 ・松平美濃守吉保（甲斐府中 十五万千二百八十八石）

老中 ・土屋相模守政直（宝永五年正月月番 常州土浦 七万五千石）

・秋元但馬守喬朝（宝永四年十二月月番 武州河越（川越）五万石）

・大久保加賀守忠増（宝永五年閏正月月番 小田原 十一万三千百二十九石，宝永二年九月 大久保「隠岐守」忠増→大久保「加賀守」忠増へ改名）

・井上河内守正岑（宝永四年十一月月番 下野烏山 三万石）

側用人・松平右京大夫輝貞（高崎 七万二千石）

・松平伊賀守忠桑（上田 五万八千石）

若年寄・稲垣対馬守重富（下野烏山 三万石）

・久世大和守重之（関宿 五万石）

・加藤越中守明英（下野壬生 二万五千石）

勘定頭・荻原近江守重秀（三千六百石）

・中山出雲守時春（千五百石）

大目付・仙石丹波守久尚（千五百石）

目付 ・河野勘右衛門（五百石 宝永五年七月から）

道中奉行・安藤筑後守重玄（大目付 千七百石 宝永四年まで）

・石尾安房守氏信（勘定頭 二千二百石）

関東郡代・上総・下総・安房・武蔵・相模代官 伊奈半左衛門忠順（四千石）

相模・伊豆代官 ・小長谷勘左衛門

駿河・伊豆・相模代官 ・能勢官兵衛

三河・遠江・駿河代官 ・窪島市郎兵衛

３．噴火推移の復元

宝永噴火は，南海トラフを震源とする宝永地震（１７０７年１０月２８日（宝永四年十月四日））の４９日後の１７０７年１２月１６日（宝永四年十一月二十三日）８時～９時に開始し．１７日目にあたる１７０８年１月１日（宝永四年十二月九日）未明に終息するまで１６日間に及んだ．宝永地震と富士山宝永噴火の関連を考察する目的も含めた基礎資料として，宝永四年九月末からの地震・噴火に関する記述を富士山噴火関連史料から抽出・整理して日ごとの推移を復元した（附表２）．これまでに宮地（１９８４），宮地・小山（２００７），小山（２００９）や Miyaji, *et al.* (2011) による解析があるが，観測記録点が静岡県・神奈川県・東京都を主体としていてその外では観測点が少なく偏りがあった．本報告では，千葉県，茨城県，栃木県の観測点を増やすとともに，東京都内の護国寺の記録，岡本元朝日記，諸藩の江戸における記録等を加えて時間空間分解能の向上を目指した．

その結果，日ごと・時間帯ごとの降砂分布を示すことができた．噴火が始まった１２月１６日（十一月二十三日）の午前に粗粒な軽石・礫・砂がほぼ真東方向に降下したこと，次いで午後になってより細粒な砂・灰が江戸市街地を含む東北東方向に降下したこと，一旦火砕物の降下が止んで，暮れ時から１７日未明にかけて暗色の砂が降ったが，風向が変わり，宝永火口南東に降灰分布主軸を持つ時間帯が確認された．噴火二日目の１２月１７日（十一月二十四日）には日中ほぼ真東に降砂があったこと，１２月１９日（十一月二十六日）から１２月２０日（十一月二十七日）にかけて，江戸市街地の北に分布主軸を持つ時間帯があったことが確認できた．また１２月２３日（十一月三十日）に広い範囲で降雨があり，スコリア層中（宮地（１９８４）のＨｏ-Ⅲの中～上部）に挟在している細粒の火山灰薄層が雨とともに降下・堆積した可能性が指摘できる．

噴火の前兆

宝永地震（１７０７年１０月２８日（宝永四年十月四日））ののち，余震と考えられる地震が広い範囲で観測されていたが，静岡県裾野市須山の土屋伊太夫文書によれば，宝永地震の起こる前の九月ころ以降，富士山の中は毎日かなり強さの地震が何度もあったが，里では感じなかったと，通常とは異なる状況があったように記されている．小山（２００９）は小地震の原因が火山性であったと考えている．

噴火開始の二週間前の１２月３日（十一月十日）ころから，富士吉田市の記録にも富士山麓で鳴動が一日に二・三度ないし四度ほど感じられた（『富士山焼出之節之事』）ことが記録されている．

「去十月三日昼（ヒル）八ツ時分大地震，同四日明六時過（スギ）大地震，然共家者不レ損（ソンゼ）、其已後打續（イゴウチツヾキ）少々之地震者絶不レ申（タイズモウサ）、然共、富士山之中者九月時分已来（イライ）、毎日余程（ヨ）之地震者幾度も有之、別而十月三日已来強地震数多（アマタ）、一日之間十度廿度、少々之地震数不レ知（カズシレ）、然共里三者地震も無之候、」（裾野市須山『土屋伊太夫文書』（十月四日昼過ぎの宝永地震，翌十月五日早朝の地震の日付の誤りと思われる））

「頃者宝永四丁亥年十月四日昼（ヒル）之九ツニ大地震，冨士山麓表口駿州大宮町之民屋不残潰（ツブレ）、其後地震日々無止、月ヲ越霜月十日頃ゟ冨士山麓一日之内二三・四度ツ、鳴動する事甚し、同月廿二日夜地震之する事及三拾度、」（富士吉田市　山口由富家文書『富士山焼出之節之事』）

噴火１日前　宝永四年十一月二十二日（１７０７年１２月１５日）

噴火開始前日からの地震活動

１７０７年１２月１５日（宝永四年十一月二十二日），山梨県甲府市で０８時（朝五ツ時）から翌１６日（二十三日）昼時まで震動・雷電を感じ，地震が甚だしかった（『富士山自焼記』収録　松平美濃守（甲斐甲府）在所より注進状）．静岡県裾野市須山周辺でも１０時（四時分）から暮１８時（六時分）までに大地震が七，八度から十度程もあり，夜に入ってからも数えきれないほど頻繁に地震があった（静岡県裾野市須山周辺『土屋伊太夫文書』）．

「一、廿二日朝五ツ時（０８時）ゟ昼夜翌廿三日昼時迄震動、雷電、地震甚、」（松平美濃守（甲斐甲府）在所より注進状『富士山自焼記』）

「霜（シモ）月廿二日昼四時分（１０時）已来及暮六時分（１８時）迄三大地震者（は）七八度十度程も有之、夜入候而之地震も度々有之、其数不レ知（シレ）、」（静岡県裾野市須山周辺『土屋伊太夫文書』）

午後からは，静岡県沼津市原・富士市吉原（『文露叢』ほか収録　東海道吉原駅の問屋・年寄からの注進），山梨県南都留郡忍野村（『富士山焼砂吹出乱剰』），日暮れからは神奈川県足柄下郡箱根町『箱根御関所日記書抜　地震之事』），夜に入ると山梨県富士吉田市（『富士山焼出之節之事』），神奈川県小田原市小船（『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』），長野県下伊那郡下條村『大地震之記』，名古屋市『鸚鵡籠中記』，東京都（台東区下谷（したや）　對馬藩『江戸藩邸毎日記』，青梅市二俣尾『谷合氏見聞録』）でも有感地震が頻発したことが記録されている．地震の回数と強さは報告されている史料により異なるが，地震が群発し，有感地域が広がっていった．

十一月二十二日夜の地震と二十三日夜明け前の地震（12月15日）（12月16日）

噴火前日12月15日（十一月二十二日）午前から頻発していた地震のうち，12月15日夜の地震と，12月16日（十一月二十三日）夜明け前の地震の二つの地震は，名古屋市～東京の多くの地点で有感であった．夜の地震の発生時刻は20時（五ツ時分）（下伊那郡下條村『大地震之記』），22時過（亥過）（名古屋市『鸚鵡籠中記』），24時（夜九ツ時分）（静岡県沼津市原 土屋家文書『覚書』）と記録されており，夜明け前の地震は12月16日02時（八ツ時分）（『大地震之記』），03時過（寅上刻）（台東区下谷 對馬藩『江戸藩邸毎日記』），04時（七ツ前・七ツ時・寅刻・寅過）頃（文京区大塚『護國寺日記』・静岡県沼津市原 土屋家文書『覚書』・名古屋市『鸚鵡籠中記』），05時（七ツ半時）（小田原市成田（なるだ）『御用留』），06時頃（明六つ）（東京『冨士山焼記』）とされている．史料によって時刻に幅がみられるが，比較的強い二つの地震を書き留めていることから，それぞれ同じ地震を記録したものと判断した．下伊那郡『大地震之記』の時刻はほかの史料に比べ記録された時刻が少し早い．

「廿二日昼時ヨリ今廿三日五ツ半時（09時）迄之内、地震間もなく三十度程震、少々残候半潰之家、又は（々カ）震潰申候、其上同四時より冨士山夥敷鳴出、其響冨士郡中へ響渡り、大小之男女共絶入仕候者多御座候へ共、死人は無御座候、然処ニ同山雪之流、木立之境より夥敷煙巻出、夥敷鳴渡り、冨士郡中一篇之煙二時計うず巻、如何様之儀共不奉存、人々十方を失罷在候、昼之内ハ煙計ニ相見、暮六ツ（18時）より右之煙皆火焔に相見へ申候、此上如何様之義ニ可罷成不奉存候、右之段乍恐御注進申上候、以上、

十一月廿三日　駿河富士郡吉原宿　問屋　年寄

右之通只今注進仕候間申上候、御代官小長谷勘左衛門ヨリハ未申来候以上、

十一月廿四日　石尾阿波守　安藤筑後守

」（『文露叢』宝永四年十一月二十三日条 吉原驛問屋からの注進）

「二十二日の七ツ（16時）の時剋より大地震、地の下にて只どろくと只しんど（震動）ふのごとく鳴ゆるぎしに、恐しさは身のけもよだつ計（ばかり）也、」（山梨県南都留郡忍野村『富士山焼砂吹出乱剰』）

「暮六ツ（18時）時より夜中度々地震、同廿三日朝初雪少し降、」（神奈川県足柄下郡箱根町『箱根御関所日記書抜 地震之事』）

「二十二日夜地震之する事及三拾度、」（山梨県富士吉田市『冨士山焼出之節之事』）

「十一月二十二日夜、一・二度の小地震、」（小田原市小船『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』）

「二十二日之晩五つ時（20時）分ニ少シつよき地震致、八つ時（26時＝16日02時）分ニも又ゆり、」（長野県下伊那郡下條村『大地震之記』）

「（二十二日）晴、西風少吹、○亥（22時）過少し地震、○寅（28時＝16日04時過）少し地震、」（名古屋市『鸚鵡籠中記』）

「十一月廿三日　曇天　但、寅ノ上刻（03時過）少々地震、」（東京都台東区下谷 對馬藩『江戸藩邸毎日記』）

「二十二日夜地震三度、廿三日終日辰巳（南東）ノ方ヨリ震動、」（青梅市二俣尾『谷合氏見聞録』）

「廿三日　曇懸りたる天氣　夜中七ツ前（04時）餘程地震有之、」（文京区大塚『護國寺日記』）

「十一月二十二日夜九ツ時（24時）分に地震ゆり、又七ツ時（28時＝16日04時）、又二十三日ニ度々ゆり、」（静岡県沼津市原 土屋家文書『覚書』）

「宝永四丁亥年十一月廿三日之朝七ツ半時（05時）地震、同四つ時（10時）分迄地震三度、」（小田原市成田 村山公一家文書『御用留』）

「（十一月二十三日）寅刻（04時）地震、」（東京『冨士山焼記（ふじやまやけき）』）

噴火１日目　宝永四年十一月二十三日（１７０７年１２月１６日）

１２月１６日（十一月二十三日）　噴火開始前の天候

神奈川県足柄下郡箱根町では，朝，初雪が降った（神奈川県足柄下郡箱根町『箱根御関所日記書抜　地震之事』）．東京では，前日夜中から朝まで曇り（『伊東志摩守日記』，『鸚鵡籠中記』），木更津市では晴天であった（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．東京・木更津市は寒かった（『鸚鵡籠中記』・『富士山辰巳方焼出シ候事』）．

「同廿三日朝初雪少し降」（神奈川県足柄下郡箱根町『箱根御関所日記書抜　地震之事』）

「十一月廿三日、夜中より空曇、夜明候得而も曇有之候」（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』）

「〇廿三日、江戸寒威凛々日光翳々風なし」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』）

「宝永四年亥十一月廿三日朝青天三而寒ク、（略）」（木更津市犬成（いんなり）『富士山辰巳方焼出シ候事』）

１２月１６日（十一月二十三日）　地震活動・鳴動から噴火開始

十一月廿三日０６時（朝六ツ時）から東京都港区では少しずつ地震が感じられた（港区六本木『鹿島藩江戸藩邸日記　抜粋』・『直堅（鹿島藩主　鍋島直堅）公　御在府日記』）．宝永火口東約２３㎞にある静岡県駿東郡小山町生土（いきど）では０８時（辰の刻）に大きな地震があり，間もなくして黒雲が西の方から出て，天を覆った．大きな雷鳴があり，１０時（巳の刻）ころ石・砂が降りはじめた（駿東郡小山町生土『降砂記』）．神奈川県足柄上郡大井町篠窪では，０９時（巳上刻）に空が曇り，激し地震動があり，大地が響いてから，間もなく重さ０．７５～１．１ｇから１１～１５ｇ，或は１８８ｇ（三四匁）におよぶ石が降りはじめ，１４時（未刻）まで続いた（小島家『（大地震噴火の一件）』）．東京でも，０８時（辰の刻）から震動を感じ，１０時（巳刻時分）ころには南西方向に青黒い山のような雲が目撃された（日本橋　村山弥兵衛『宝永四年富士焼一件』，『伊東志摩守日記』，『鸚鵡籠中記』）．この雲は小山町生土で見られた黒雲すなわち噴煙を遠望したと考えられる．

「同廿三日　昨夜中地震二度、今朝六ツ時（０６時）ゟ少ツヽ之地震、昼之間九ツ時過迄不止、昼八ツ時比ゟ南ニむら雲下リ、其様子何そ出そふ成ル雲ニて、暫有テ都合の雲うす赤白ク曇リ雷も時々之有、間もなくあくの様成物ふり、余程積、夜四半時迄降リ、夜中ニ両度、余（ママ　余程カ）餘　之地震有之候、」（港区六本木『鹿島藩江戸藩邸日記　抜粋』）

「（十一月）同　二十三日昨夜中ニも地震弐度、明六時（０６時）ゟ少々宛之地震、昼之九半（１３時）迄不止、昼八時ゟ南ニむら雲さかり、其様子何そ出左右成雲ニ而、暫有而都合之雲、うす赤白クくもり　虫損（雷も時々）　之有、間もなく、あく　虫損（の様）　成ル、はい色之ふりもの　虫損（余程カ）　つもり、夜四半時（２３時）まてふり、夜中ニ両度、よほとこの地震之有、（略）」（港区六本木『直堅（鹿島藩主　鍋島直堅）公　御在府日記』）

「宝永四丁亥年冬十一月廿三日の昼辰（タツ）の刻（０８時）大地俄かに動揺して、須臾（シバラク）あって黒雲（クロクモ）出で西方より一天を蓋（オ）ふ、雲中に声有り、百千万の雷鳴（ライメイ）の如し、巳（ミ）の刻計（ハカリ）りに頻りに石砂（セキシヤ）を雨（フラ）す、大（オ）い蹴鞠の如し、地に落破裂（ラチヤブケテクワエン）而火焔を出す、草木を焦（コガ）し民屋（ミン）を焼く、時に東西より雷声（ライセイ）の有りて、中途（ト）に至って亦（マタ）東西に別る、焉（コレ）ヲ聞く者数十里の中、己（ヲノレ）が屋上にあるが如し、火災無き所は日中猶暗夜（ナヲアンヤ）の如し、燭（トモシビ）を点じこれを見るに、黄色（キ）にして塩味（シホノヤキアジ）あり、（略）夜半に至って雲（クモ）の間（アワイ）に星光を見て天の未だ地に落ちずを識（し）る、（略）」（駿東郡小山町生土『降砂記』）

「宝永四丁亥年十一月廿三日巳ノ上刻（０９時過ぎ）雲（空カ）　雲り　俄（にわか）　ニ西方地震　勤（動）　夥（おびただしき）　敷　事大地ひゝ（響）け、老若男女　肝（きも）ヲ消、地ニ伏シ、或ハ気ヲ失イ、或ハ前後ヲ　忌（亡カ）　事、未刻（１４時）迄、夫（それ）より、暮六ツ時（１８時）より砂降事大雨之如し、震動地震如ク成事十二月九日迄砂降砂積ル、深サ壱尺五寸六寸十一月廿三日巳ノ上刻（０９時過）より極月九日迄昼夜ノしゆ別無し、ともしび三而　給（たべもの）　物　等

仕出し奉、隣家江も人ノ通イなし、」（足柄上郡大井町篠窪　小島家文書『大地震噴火の一件』）

「当廿三日朝五つ（08時）時より殊外震動仕、西南の方より黒雲おゝひ来雷も強くなり段々一面に罷成候て、（略）」（日本橋　村山弥兵衛『宝永四年富士焼一件』）

「（十一月廿三日）巳刻（10時）時分ゟ南西之方ニ青黒き山之ことく之雲多く出申候は、（略）」（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』）

「（十一月二十三日条）○廿三日、（略）今朝坤（南西の方向）の方に墨雲起り、南へなびき、雲色煙の如く、雲端に薄紅の色を現す、雲気次第に厚くなる、辰（07時過）前刻ゟ何方共なく鳴動して午（12時）の刻には石臼を牽立、臼を転ばすやうに、ごろごろとろとろと鳴響き、戸障子ぐはたぐはたと鳴りひゞき、南方にてすさましくごろつき、未（14時）の過刻雪起しの如くに鳴り、夫ゟ空中雪の如きもの降る、外へ出て見るに雪にはあらで灰也、色蕎麦粉の如し、次第に厚くなり霧の降るか如く也、申（16時）の刻ゟ灰と黒き砂と交り降、及レ暮鳴動強く、雲坤ゟ南へ行事早シ、黒雲の内に時々光あり、酉（18時）刻ゟ黒き砂斗コンコンシヤウ鍬倉砂の如し降る、とをしにて揮ひ箕にて簸るが如し、戌の刻過に降止、子刻、天晴けれ共、西南の黒雲はうすろがす、鳴動終夜絶間なし、子（12月17日01時）の半刻月出明也、丑（12月17日02時）刻北西風吹き、砂を吹立申候、八（12月17日02時）つ過ゟ少宛両度地震、今夜諸人皆不眠、○昼之内往来する輩、傘或は笠を冠り往来す、」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』）

噴火に伴う空振

黒雲が現れたのとほぼ同時刻に，多くの地点で，地震動や風はないにもかかわらず，戸・障子が鳴り出した．東京『富士山焼記』では08時（辰ノ中刻）から，小田原市小船では08時過から10時（四つ）過まで（『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』）．文京区大塚『護國寺日記』では09時（五ツ半）からと記録されている．墨田区東駒形では10時（昼四ツ時）から「地は震え申さず候えて震動間もなく致し、家震え、戸・障子強く鳴り出し候、風少しも吹き申さず候」（『伊東志摩守日記』），また，江戸城西の丸で観測された徳川家宣正室 熙子の書簡には「地震のように戸障子など響き申候、地震にてはござなく、ゆらゆらといたし」とその様子が書かれている（『基熙公記』）．木更津でも雷のような震動が記されている（木更津市大成『富士山辰巳方焼出シ候事』）．この震動は地震でも強風による振動でもなく，噴火活動に伴う空振であったと推定されている（小山，２００９）．小田原市小船では鳴り物，震動が止まないので大地震の予兆かと思っていたところ，11時（四つ半）過から雷もしきりに鳴り出した（『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』）．そうしたところに「黒石　交（まじり）の軽ル岩」が霰（あられ）のように夥しく降り積った．一尺四方にたまった石砂を升で測ったところ一升三～四合（堆積層厚換算2．7㎝）あった．

「従（より）二辰ノ中刻（08時）一、南-西ノ方戸障-子動テ不レ止、恰モ如二地震ノ一」（東京『富士山焼記』）

「同二十三日朝五つ（08時）過より、夥敷（おびただしき）鳴り物四つ過迄ひやうどう（ママ）（動）やまず、家毎の戸障子すさましく鳴渡、大地震かと相待所ニ四つ半過より雷もしきり也、然所ニ霰（あられ）のことく降り来ル物有、すわや霰と見ル所ニ、黒石交の軽ル岩夥敷ふりつもり、壱尺四方升ニ而　様（ため）候へ者、壱升三四合有、則八つ過迄降積リ申候、鳴物雷電ハ猶止まず、（略）」（小田原市小船『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』）

「朝五ツ半之比（09時頃）、地震有之、其後打続震動不絶有之、戸障子鳴リ及暮止不申（止み申さず）、」（文京区大塚『護國寺日記』）

「（十一月廿三日）巳刻（10時）時分ゟ南西之方ニ青黒き山之ことく之雲多く出申候は、地は震不申候へ而、震動間もなくいたし、家震、戸障子強鳴申候、風少も吹不申候」（『伊東志摩守日記』）

「廿三日　巳刻時分（10時）より地しん（地震）のやう（様）二戸しやうし（障子）なとひゞき（響）申候、地しん（地震）にては御さなくゆら（御座なく）くといたし、きミわろく（気味悪く）候て度々庭へ出申候やうニ御座候、夜へかけさやうに御さ（御座）候て空の色も何とやらん打くもりあしく（悪しく）御座候、そのうへにかやうニはい（灰）砂のやう（様）なるものふり申候、つゝみて書かき付御めにかけまいらせ候、いつかた（何方）ぞ山なとやけ申候やと申候へとも空のけしき一めんニて何ともみわけ（見分け難く）かたく御座候、ひる七つ（16時）時分よりさしき（座敷）のうちにてもひ（灯）をともしまいらせ候やうに御座候、廿三日そとをとをり（通り）候者とも目口へはいなと入候てありきかね（歩き兼ね）申候よし、ひゝき申候ハにし南のかたよりにて御座候、廿三日夜中たえすひゝき候て廿四日にもおなし通にて御座候、さりなから朝ハそらはれ申候、それゆへにおもて庭の山よりたしかに遠山のやけ申候よく見え申候、それにて地しん（地震）にてハ御（御座）さなきとあん（安堵）といたしまいらせ候、大納言（徳川家宣：夫）様も御らんせられ、わたくしもミまいらせ候、さてくすさましくおそろしき事にて御座候、いつかた（何方）のともいまたしれ（知れ）申さす候、やかて注進御座候ハんまゝ、しれ（知れ）次第さうくく申上候へとまつくここもとのやうす（様子）、さこそとりくにさたいたして御きつかひ（気遣い）あそはし候ハんまま此とをり申上候やうにとの事にて御座候、さてもいまたひゝき御座候てやけ申候煙空ニみち（満）申候て打くもりもふくしき天気にておはしまし、北の方少はれやかに御座候のミにて、はいすなふり（灰砂降り）候てさしき（座敷）のうちもけふり（烟り）申候やうに御座候、何ともさうくしき天気相にて御座候、夕くれ（夕暮）にハ神なり（雷）さへそひまいらせ候てすさましく御座候、いつぞや下され候たき物（焚）なとたき吉来香をもたき（焚）まいらせ候てすいふん（随分）くつゝしミゐまいらせ候　かしく　廿五日（十一月）夜」（『基熙公記』大納言（徳川家宣）の正室　熙子（ひろこ）から十一月二十五日付で京都に住む父近衛基熙に出した書状（宝永四年十一月））

「一、廿三日、曇、（略）○今朝ゟ地震少ゝ四五度有之候也、其間地ハ不震どろくく鳴候て、戸なとがたくく鳴候事三時計也、強クも無之候也、其後少々雷有之候也、替候天気合也、（略）」（台東区台東『岡本元朝日記』）

「（宝永四年亥十一月廿三日）四ツ時（10時）ゟ俄ニ空曇リ、如雷震動、（略）」（木更津市大成『富士山辰巳方焼出シ候事』）

（十一月二十三日）12月16日　宝永火口東方神奈川県―千葉県への軽石・礫の降下（図3-1（a））

藤沢市，鎌倉市，横浜市，木更津市，君津市，勝浦市には午前から灰よりも粗い石・砂，小石交じりの砂が降ったと記録されている．

宝永火口のほぼ真東にあたる神奈川県藤沢市の様子が，伊勢の神宮使 中西木工大夫 度會弘乗の江戸から伊勢への帰途の記録にあり『外宮子良館日記』十二月二日条に収録されている．一行は十一月二十二日（12月15日）に江戸を発ち戸塚に宿泊した．二十三日朝に彼らが戸塚宿を出発して東海道を約8㎞西へ進んで藤沢宿に着く頃に震動が始まり，次第に強く鳴り出した．間もなく軽い石が降り出したため茶店に入って暫く様子をうかがった．宿泊地の戸塚を，当時の一般の旅行者と同様明六つ（精度の高い時刻では，横浜の12月16日（12月16日）の日の出時刻6時43分頃の約30分前）に出発し，時速4㎞で移動したとすると，震動が始まったのは，約2時間後の08時過ぎ頃，09時前には軽石の降下に遭遇したと推定できる．小山（2009）は噴火開始時刻を10時ころと推定しているが，史料の時刻精度を考えても，それよりもおよそ1～1・5時間早い09時前には噴火が開始したと考えられる．

「十一月二十二日江府ヲ出テ戸塚ニ一宿、翌日（二十三日）藤澤ニ至ル比震動シ、次第ニ強ク鳴リテ石ヲ降ス（フラ）其石焼テ甚タ軽シ、茶店ニ入テ暫ク窺ヒ見ルニ往還ノ旅人其邊ノ男女驚キ噪ク丁（こと）甚シ、漸ク小田原ニ着、人民等資材雑具ヲ土蔵穴蔵ニ入レテ逃去リ其ノ家ニ纔（わずか）ニ二人ヲ留メ置ク、震動ノ響ニ戸ハヅレ、灯ヒ消（キユ）、電光モ亦甚シ、沙降（スナ）ル丁五寸許（15㎝）、」（『外宮子良館日記』十二月二日条）

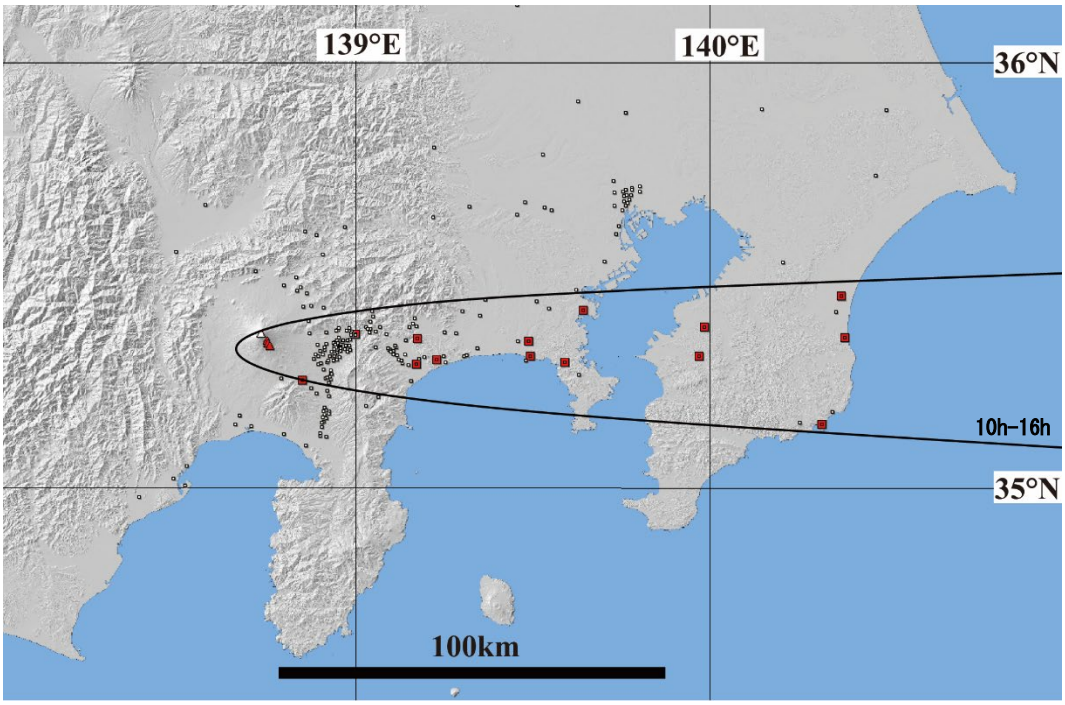


図 3-1（a）　富士山宝永噴火　降礫・降砂分布

1 日目　宝永四年十一月二十三日（1707 年 12 月 16 日）10 － 16 時

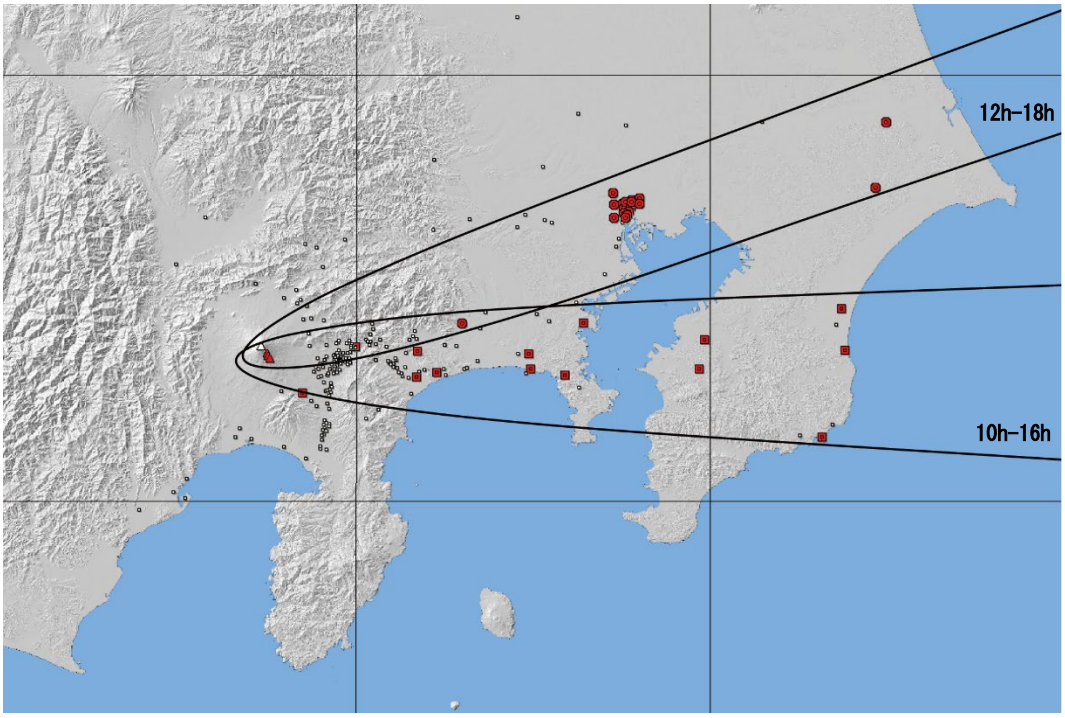


図 3-1（b）　富士山宝永噴火　降砂・降礫分布

1 日目　宝永四年十一月二十三日（1707 年 12 月 16 日）10 － 16 時の降礫と 12 － 18 時の降砂・降灰

◎：降砂・降灰，▣：降礫・降砂

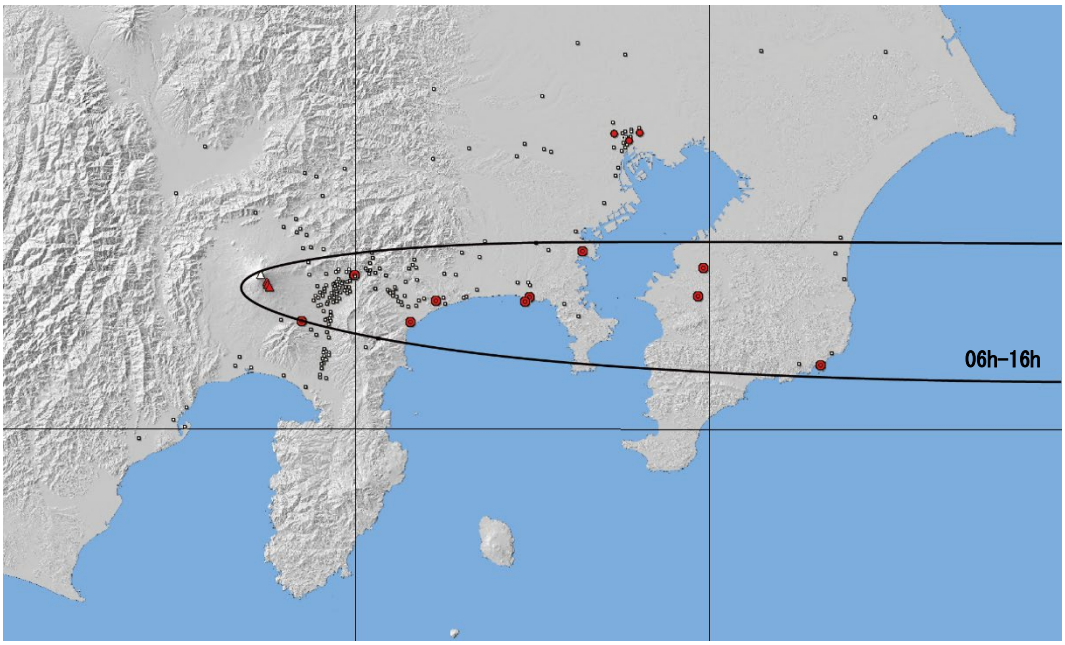


図 3-2（a）　富士山宝永噴火　降砂分布

2 日目　宝永四年十一月二十四日（1707 年 12 月 17 日）06 － 16 時 ● ：時刻不明

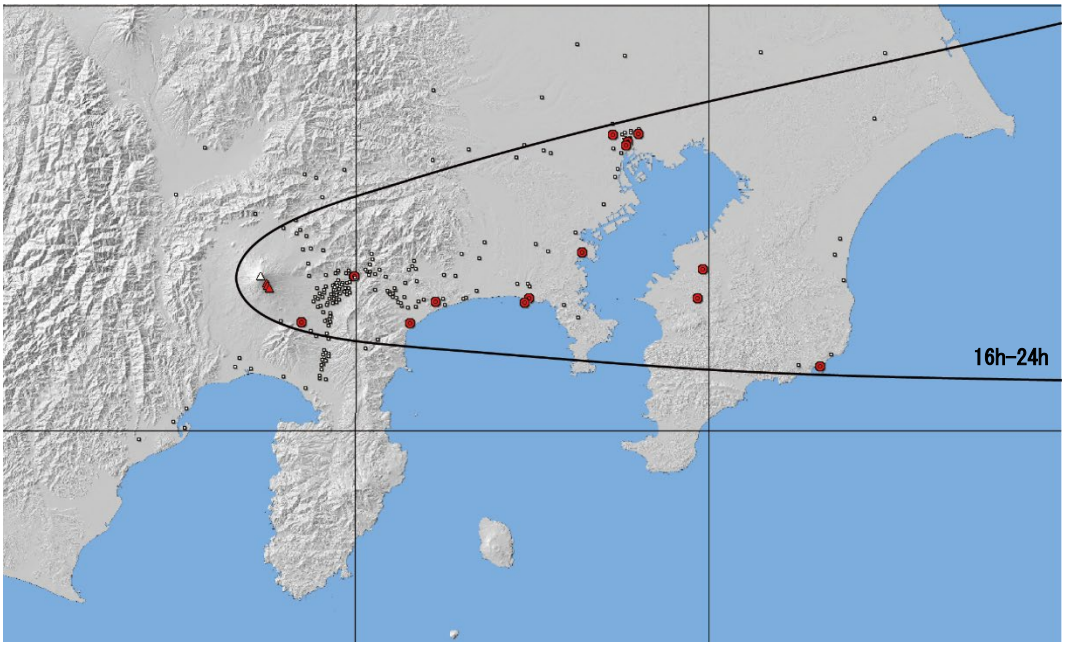


図 3-2（b）　富士山宝永噴火　降砂分布

2 日目　宝永四年十一月二十四日（1707 年 12 月 17 日）16 － 24 時

［参考　東海道　日本橋 - 戸塚 十里十八町（41．2㎞），戸塚 - 藤沢 二里（7．9㎞），藤沢 - 小田原 八里九町（32．4㎞），小田原 - 三島 八里（31．4㎞），三島 - 駿府（静岡） 十五里三十四町十五間（63．6㎞）］

鎌倉市腰越では12時過（九ツ過）に暗夜のようになって岩石が降り出した後，（夕方以降に）砂が降った（『津村腰越旧志』）．逗子市桜山では「昼」から石が降り，「夜」からは砂が降った（『富士山噴火救助金桜山村割合帳』）．横浜市根岸では，降り初めには色の白い，4．2～4．5㎝（一寸四、五分）～9，12，15㎜（三、四、五分）程の岩石が10時（巳刻）から16時（申刻）まで降った（高橋家文書『覚書』）．

千葉県木更津市犬成では同日（二十三日）10時（四ツ時）から，にわかに空が曇り，雷のように震動があり，暗くなったので灯しをたてた．西の方から白い軽石が14時（八ツ時）まで降り（『富士山辰巳方焼出シ候事』），君津市大井では，12時（九つ時）に岩石が降り始めた．14時（八ツ時）（木更津市）ないし16時頃（君津市）から暮れ（暮六ツ時）頃にかけて軽石・砂に代わって雪・雨が降り，雷が鳴った（『富士山辰巳方焼出シ候事』・『石出茂雄氏史料』）．少しのうち晴天になったものの，18時（六ツ時）からまた空が曇り，雷，稲光りもして，黒砂が降った．同夜24時（九ツ時）からは細かな黒砂が降った．ことのほか雷が鳴った．同12月17日03時（八ツ半時）以降北の方から晴れ，曇（噴煙）は南の方へ移った（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．千葉県長生（ちょうせい）郡一宮町東浪見（とらみ）では14時（晝八ツ）に小石交じりの砂が降り始めた．長生郡白子（しらこまち）町では12時（午ノ刻）に雷が鳴り，空は焼くすぶるように砂石が降り，すぐに人の顔が見えない程に暗くなった．初めは軽石の砕けたものであった（『一代記附リ津波ノ吏』）．勝浦市には16時（昼申之刻）頃に石が降った（『高照寺過去帳』）．

降下域にある観測者の目撃記録に，「噴火時の降灰域は富士山から帯のように東に連なる黒雲の下にのみにある．黒雲がどちらの方向であっても同様で，箱根よりも南西側一円には降砂がなかった」旨，記されている．現在の知識からは当然の事実であるが興味深い記述である（小田原市小船『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』）．

「九ツ（12時）過暗夜に成て岩石降出し，後砂降」（『津村腰越旧志』）

「宝永四亥ノ十一月廿三日昼ニ石降リ、砂降夜ゟ砂降、十二月八日迄降積リ田畑ニ三寸余麦作荒田方砂除普請仕候依之」（逗子市桜山『富士山噴火救助金桜山村割合帳』）

「一一月二三日昼巳刻（10時）より申刻（16時）関東震動、雷電にて暗きこと除夜のごとく、砂大分降申し候、雷・震動ならびに地震・小砂ふり候義七日、それより少しつつ二時（4時間）三時（6時間）程つつふる、一六日ふる、一一月二三日より一二月八日までふる、初めふり出し、一寸四、五分より（4．2～4．5㎝）三、四、五分程の岩石、二三日巳刻（10時）より申刻（16時）迄降申候、但し色白き岩石にて候、同日申刻（16時）よりねずみ色の小砂ふり候義三日、それより後はくらき小砂ふり申候、雪のごとく積り候義、厚さ七、八寸程、所々により一尺、二尺程積り申候、砂ふり候元はふじ山なり、（略）」（横浜市中区根岸（旧久良岐郡根岸村）高橋家文書『覚書』）

「同日（二十三日）四ツ時（10時）ゟ俄ニ空曇リ、如雷震動、此時クラクシテトモシヒ立ル、西方ゟ白カル石八ツ時（14時）迄フリ、夫（それ）ゟ暮六ツ時迄雪ニ雨フリ雷鳴ル、少シノ内チ青天ニ成テ又六ツ時ゟ空曇リ雷鳴リ稲光リ有テ黒砂降（フリ）、同夜九ツ時ゟ細カナル黒砂フリ、雷殊外鳴リ、同八ツ半時ゟ北ノ方ゟ晴レ南ノ方へ曇リ行、」（木更津市犬成『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「九つ時（12時）岩石ふり、又さる（申16時）、石ゟゆき（雪）成、くれ六つ（18時）ニやみ、又それより、くろすな（黒砂）廿四日の夜よの九つ時（24時）分迄ふり、其内かみなり（雷）、しんとう（震動は）者、同廿六日迄致候、又其内ちしん（地震）も入候」（君津市大井『石出茂雄氏史料』）

「霜月　廿一日（日付二十三日の誤り）　晝八つ（14時）過より俄に國土くらく成り、小石まじり（交じり）の砂ふり、段々くらがり、日中に火をとほし物を見る躰なり、夜に入て鐵砂のことく成る砂三寸計降り積り、其より廿四日ま

て方々くらく成り、」（長生郡一宮町東浪見『萬覚書写』）

「同年霜月廿三日午ノ刻（12時）雷鳴空ノケシキ焼ホコリフスボル如クシテ砂石降ル、俄ニ闇ト成、人ノ面ミヘズ、初ハカル石ノクダケタルモノ降、後ハ黒キ砂フル、皆人前後ヲ忘却シテ動□（にんべん）（転）スル斗（ばかり）也、申ノ刻（16時）雪降リ天晴皆人安諸ノ思ヲナス、又夜ニ入黒砂降、極深闇ト成、晝ナレバ則闇（クラ）ヤミ也、此砂石フル叉同十二月八日迄也、富士山ニ大成穴出、大地ノ底ヨリ火出山土焼飛来也、此後風ヲ引煩事無限一人も風引ぬ者ハナシ、」（長生郡白子町『一代記附リ津波ノ叉』）.

「寶永四亥（い）十一月廿三日大震動昼申之刻（16時）石フル」（勝浦市『高照寺過去帳』）

「砂降内ハ黒雲富士山より出、帯の如ク真東へつらなり、その下耳降（のみ）、何方ニ而も其下に見え申候、箱根山より西南は一円降不レ申候、」（小田原市小船『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』）

（十一月二十三日）

12月16日午後　宝永火口東北東　東京の砂・灰の降下　（図3-1（b））

宝永火口の東北東にあたる東京には，軽石・砂礫の降下よりおよそ2時間遅れて，（十一月二十三日）12月16日昼過ぎから灰・砂が降り始めた（『伊東志摩守日記』，『新井白石日記』ほか多数，図3-1（b））．降下物の色は，「ねずみ色」（『伊東志摩守日記』），「そば粉のよう」（『鸚鵡籠中記』），「はい色のふりもの」（港区六本木『直堅（鹿島藩主 鍋島直堅）公御在府日記』）など灰白色であったと考えられ，「はい」・「あくの様成（ようなる）もの」の語を使って表現されていることから，細粒であったと推定できる．細粒の粒子は空中をゆっくり降下するため，滞空時間が長く，下層の南成分をもった風の影響を強く受けて，より北側に降下した可能性が高い（宮地，1984）．江戸の上空は厚い噴煙に覆われ，陽光が遮られて日暮れのようになり，雷（火山雷）が激しく鳴り響いた．

「午之中刻（12時）ねすミ色乃はいのことくの砂多く降申候、南西之黒雲少は薄成申候、未之刻（14時）時分ゟ震動少止申候、空は厚白曇ニ成、南之方ニて時々鳴、稲光夜中いたし、雷鳴可申前ニハ動揺いたし候、遠天ニて鳴雷之ひゝき強、地震き戸障子なり申候、雷聲ことの外長ク有之候、夜に入候へ而降候砂色黒く、常之川砂成、昼夜降候砂、凡二三分程つもり申候、四ツ時（22時）ゟ空少々晴、星出、砂降申候、夜半ゟ常之如月出候、北東は晴西南は黒雲退不申候、七ツ半時（12月17日05時）震動強いたし、西南ノ方稲光いたし、雷鳴申候、七ツ半過ゟ西風吹出シ、明六ツ前（06時）迄吹申候、風出候はゝ震動和申候、六ツ前風止申、少ツゝ吹申候、」（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』）

「廿三日　九時（12時）雷數聲也、昨夜ハ地震もしたり、九半時（13時）出仕、道より灰ふる、天くらし、今日ハ御城へ被爲入（補入）、八時還御、進講之節ハ乗燭也、たゝし七つ時（16時）也、それより灰ふる事夜の五つ（20時）過に至る、「昨」夜中より地ひゝきする事絶す、」（『新井白石日記 下』）

「十一月廿三日午後參るへき由を仰下さる、よへ地震（ふる）ひ此日乃午時（12時）雷の聲す、家を出るに及ひて雪乃降り下るかことくなるをよく見るに、白灰の下（ふ）れる也、西南の方を望むに黒き雲起りて雷乃こへしきりにす、西城に參りつきしにおよひてハ白灰地を埋みて草木もまた皆白くなりぬ、此日ハ大城に參らせ給ひ、未の半（17時）に還らせ給ひ　此日吉保朝臣の男二人叙爵のありし故なり　やかて御前に參るに天甚た暗かりければ燭を挙て講に侍る、戌の時（20時）はかりに灰下る事はやみしかと、或は地鳴り或ハ地震ふ事ハ絶す、」（千代田区一ツ橋『折たく柴の記』）

「（十一月二十三日条）〇廿三日、（略）今朝坤（南西の方向）の方に黒雲起り、南へなびき、雲色煙の如く、雲端に薄紅の色を現す、雲気次第に厚くなる、辰前刻（七時過）ゟ何方共なく鳴動して午の刻（12時）には石臼を牽立、臼を転ばすやうに、ごろごろとろとろと鳴響き、戸障子ぐはたぐはたと鳴りひゝき、南方にてすさましくごろつき、未の過刻雪起しの如くに鳴り、夫ゟ空中雪の如きもの降る、外へ出て見るに雪にはあらで灰也、色蕎麦粉の如し、次第に厚くなり霧の降るか如く也、申の刻ゟ灰と黒き

砂と交り降、及レ暮鳴動強く、雲珅ゟ南へ行事早シ、黒雲の内に時々光あり、酉刻ゟ黒き砂斗

〔割注：コンコンシヤウ鎌倉砂の如し〕降る、とをしにて揮ひ箕にて篩るが如し、戌の刻過に降止、子刻、天晴けれ共、西南の黒雲はうすろがす、鳴動終夜絶間なし、子の半刻月出明也、丑刻北西風吹き、砂を吹立申候、八つ過ゟ少宛両度地震、今夜諸人皆不眠、○昼之内往来する輩、傘或は笠を冠り往来す」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』）

「（廿三日）（略）昼九つ（12時）時より白き灰ふり人々肝をつぶし居申候処に次第に強くふり中々そとにて目口あかれ不申、行先も確と見え不申、夫故皆々甲頭巾革羽織を着、又はから傘合羽を着歩行申候、七つ（16時）過より又々変り黒き砂が降申候夜に入弥震動強く雷鼓光夏のごとく鳴り申候、西ノ御城の方に壱丈弐丈斗ほど宛の火柱何本共なく立申し候故人々肝を潰し申候、依之御本丸之諸大名様方御機嫌御窺諸旗本皆火事装束にて御詰方々御一家様方への御見廻火消盗賊方町中御廻り扨々軍の様に相見え候、人々驚騒斗にて候、然る所夜九つ（24時）過より大風出右の砂を吹散申候故世上騒動夥敷義御推察可被遊候、夫より漸廿四日朝六つ（06時）過に降やみ世上少々静り申候、」（日本橋　村山弥兵衛『宝永四年富士焼一件』）

「（十一月二十三日）昼八時ゟ南ニむら雲さかり、其様子何そ出左右成雲ニ而、暫有而都合之雲、うす赤白クくもり虫損（雷も時々）之有、間もなく、あく虫損（の様）成ル、はい色之ふりもの虫損（余程カ）つもり、夜四半時（23時）までふり、夜中ニ両度、よほどこの地震之有、（略）」（『直堅公御在府日記』）

「二十三日　及レ晝（ひる）半ニ晴時ニ々震ニ動如レ雷、灰降ニ如レ雪ノ、有レ暫變ニ沙降ニ不レ止、及ニ三寸ニ及レ晩ニ四方曇ル、夜沙濕（シメリ）降夜中戸障子動不レ止、一人トシテ無レ不レ云レ為ニ奇異ノ思ヲ一、右是者富士山因（より）ニ炎上ニ如レ斯云々、」（『富士山焼記』）

「十一月廿三日（略）午上刻（11時過）より半時（およそ1時間）計震働（動）、俄方（カ）曇り雷有之、午下刻（13時前）ゟ子ノ刻（24時）迄砂降三四分（9～12㎜）程積ル、（以下略）」（東京都台東区下谷　對馬藩『江戸藩邸毎日記』）

「廿三日（略）八ツ時（14時）分ゟはいのやう（灰様）成ごみすな（塵砂）降り、是又及暮止不申（止み申さず）、色はねずミいろ（鼠色）ニ而候、扨々怪異成物降、人々不審（思儀）致何とも難得其意、無心元□（者）計ニ御座候、雷も餘程鳴、終日曇り懸りたる天氣相ニ而、無心元義計ニ而候、（略）

一、震動止不申（止み申さず）、夜中も大分さわかしく（騒）鳴候故、五ツ時（20時）ゟ於護广（摩）堂御祈禱初、大僧正御出堂ニ而、不動法御執行、寺中并衆中誦慈救咒鬼致精誠修法※■、天氣晴星出候而砂はい降リ止申候、（文京区大塚『護國寺日記』（※■（「己」の下に「十」：「畢」の異体字：おわり））

「一、廿三日、（略）未ノ刻ニ至而ほこりの様成物ふり候、硯箱之ふたへ市郎右衛門・善左衛門ため候て見せ候、指ニていろい候へハあくのことくニ候也、降始ハ午ノ中刻比よりふり候申、其時ハ細雪かと氣も不付候なり、震動ハそれゟ不止有之候、

○今晩御納戸ニて御相伴いたし申ノ刻御暇ニ而退出、降候物いよ〳〵不止候、から笠さし候てあるき候也、屋根・道地ニもあくをしき候様ニたまり、足跡付候也、しんどう不止候、強も無之候、雷其間ニ有り、稲ひかり有り、扨昼過より暗候て暮近ク之ことく二て候、申ノ中刻ゟあかしともし候也、めつらしき事ニて候、」（台東区台東『岡本元朝日記』）

「（同廿三日）昼八ツ時比（14時頃）ゟ南ニむら雲下リ、其様子何そ出そふ成ル雲ニて、暫有テ都合の雲うす赤白ク曇リ雷も時々之有、間もなくあくの様成物ふり、余程積、夜四半時（23時）迄降リ、夜中ニ両度、余餘（ママ程カ）之地震有之候、」（東京都港区六本木『鹿島藩日記』）

（十一月二十三日）

12月16日夕方からの降下物の粒径と色の変化　（図3－1（c））

（十一月二十三日）12月16日夕方，降下する火砕物の色と粒径が変化した．東京では「申の刻より、灰と黒き砂と交じり降、（略）酉刻（16時）ゟ黒き砂斗（ばかり）コンコンシヤウ鎌倉砂の如し降る、」（『鸚鵡籠中記』），16時（七つ）過から「黒き砂」に変わった（日本橋村山弥兵衛『宝永四年富士

焼一件』，「夜に入り、降り候砂色黒く」（『伊東志摩守日記』）などである．噴火開始日夕方に砂・灰の色が変わった事実はよく知られている．横浜市根岸では，

10時（巳刻）より16時（申刻）まで白色の岩石，16時（申刻）からはねずみ色の小砂が三日降った（高橋家文書『覚書』）．木更津市では白い軽石が14時（八ツ時）まで降り，18時（暮六ツ時）までは雪・雨が降り，少しの間晴天になり，18時（六ツ時）から黒砂，24時（夜九ツ時）から細かな黒砂が降ったのち，12月17日03時（八ツ半時）から，北から晴れ，噴煙は南へ去っていった（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．長生郡一宮町東浪見では「夜に入て鐵砂のことく成る砂三寸 斗（ばかり）降り積り、」（長生郡一宮町東浪見『萬覚書写』）と記されている．

「申の刻（16頃）ゟ灰と黒き砂と交り降、及レ暮鳴動強く、雲 坤（コン 南西）ゟ南へ行事早シ、黒雲の内に時々光あり、酉刻（18時）ゟ黒き砂斗（コンコンシヤウ 鎌倉砂の如し）降る、とをしにて揮ひ箕にて篩るが如し、戌の刻過に降止、」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』）

「七（16時）つ過より又々変り黒き砂が降申候、夜に入弥震動強く雷稲光夏のごとく鳴り申候、」日本橋村山弥兵衛『宝永四年富士焼一件』

「夜に入り、降り候砂色黒く」『伊東志摩守日記』、

「二三日 巳刻（10時）より 申刻（16時）迄降申候、但し色白き岩石にて候、同日 申刻（16時）よりねずみ色の小砂ふり候義三日、」（横浜市中区根岸高橋家文書『覚書』）

「西方ゟ白カル（軽）石八ツ時（14時）迄フリ、夫ゟ暮ハツ時（18時）迄雪ニ雨フリ雷鳴ル、少シノ内チ青天ニ成テ又六ツ時（18時）ゟ空曇リ雷鳴リ稲光リ有テ黒砂降（フリ）、同夜九ツ時（24時）ゟ細カナル黒砂フリ、雷殊外鳴リ、同八ツ半時（27時）ゟ北ノ方ゟ晴レ南ノ方へ曇リ行、」（木更津市『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「夜に入て鐵砂のことく成る砂三寸（9㎝）斗降り積り、其より廿四日まて方々くらく成り、」（長生郡一宮町東浪見『萬覚書写』）

12月16日夜（十一月二十三日）　東京における降砂の中断　（図3－1（d））

東京の降砂は二十三日夜20時（戌ノ中刻）（『岡本元朝日記』）ないし20時過（戌ノ刻過）（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』），24時（子ノ刻）（台東区下谷 對馬藩『江戸藩邸毎日記』）に止んで，月が出た（『伊東志摩守日記』，『鸚鵡籠中記』，『鹿島藩日記』）が，東京の南西方向の黒雲は引き続き目撃されており（『伊東志摩守日記』，『鸚鵡籠中記』），宝永噴火の火口から東（東京の南側）にあたる神奈川県藤沢市江の島，鎌倉市腰越，小田原市小船，足柄下郡箱根町，千葉県木更津市，君津市，勝浦市，夷隅郡御宿町，長生郡一宮町東浪見，長生郡白子町，白里では降砂が続いていた．東京でも震動・鳴動・地震は続いていた．箱根関所では12月16日夜（十一月二十三日）に入ってから黒い砂が少し降ったが，16時頃（申ノ刻）には富士山が噴火して，黒い噴煙，火の手が番所から見えていたという（『箱根御関所日記書抜 上』ただし，番所からは宝永火口そのものは箱根外輪山の三国山（みくにやま）に遮られて直接見ることはできない（口絵写真2））．翌の明け方（12月17日04時（十二十三日七つ））には沼津市原でも降灰があった（土屋氏文書『夜ル乃景気』絵図中の説明文）ことから，噴火そのものは継続しており，風向が変わり東京よりも南に降砂域が移っていったことを反映している．

二十三日に 御油（ごゆ 愛知県豊川市） 宿 から東へ向かい 見附（みつけ 静岡県磐田市） 宿 に泊まった旅行者 近江屋文左衛門子息平八の報告が『伊能勘解由日記』にある．見附宿では夜中，ことのほか明るく昼中のようで書物等も読める程で，富士山の方に火が見えたという．

「一、廿三日、曇、（略）○今朝ゟ地震少ツヽ四五度有之候也、其間地ハ不震どろくゝ鳴候て、戸なとがたくゝ鳴候事三時計也、強クも無之候也、其後少々雷有之候也、替候天氣合也、未ノ刻ニ至而ほこりの様成物ふり候、硯箱之ふたへ市郎右衛門・善左衛門ため候て見せ候、指ニていろい候へ

ハあくのことくニ候也、降始ハ午ノ中刻比よりふり候由、其時ハ細雪かと氣も不付候なり、震動ハそれゟ不止有之候、

○今晩御納戸ニて御相伴いたし申ノ刻御暇ニ而退出、降候物いよ〳〵不止候、から笠さし候てあるき候也、屋根・道地ニもあくをしき候様ニたまり、足跡付候也、しんどう不止候、強も無之候、雷其間ニ有り、稲ひかり有り、扨昼過より暗候て暮近ク之ことくニて候、申ノ中刻ゟあかしともし候也、めつらしき事ニて候、

○暮比御殿へ罷出候、降物不止候、震動不止候、屋形様御機嫌よし、未御風氣残候故御納戸ニ被成御座候、御夜食御相伴いたし戌ノ下刻比屋形様御寝被成候、然とも震不止候間先々御座ノ間ニ罷在候、降物ハ戌ノ中刻比止候へとも震動有之候、子ノ刻迄罷在候へ共、不相替候間御番衆も可休と与左衛門同前ニ退出いたし候、しんどうハ夜中不止候也、」（台東区台東『岡本元朝日記』）

「申の刻（16頃）ゟ灰と黒き砂と交り降、及ル暮鳴動強く、雲坤（コン 南西）ゟ南へ行事早シ、黒雲の内に時々光あり、酉刻ゟ黒き砂斗（コンコンシヤウ 鎌倉砂の如し）降る、とをしにて揮ひ箕にて篩るが如し、戌の刻過に降止、」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』）

「十一月廿三日、（略）夜に入候へ而降候砂色黒く、常之川砂成、昼夜降候砂、凡二三分（6・9㎜）程つもり申候、四ツ時（22時）ゟ空少々晴、星出、砂降申候、夜半ゟ常之如月出候、北東は晴西南は黒雲退不申候、七ツ半時（05時）震動強いたし、西南ノ方稲光いたし、雷鳴申候、七ツ半過ゟ西風吹出シ、明六ツ（06時）前迄吹申候、風出候はゝ震動和申候、六ツ前風止申、少ツゝ吹申候、」（『伊東忠摩守日記』）

「（同廿三日）夜四半時（23時）迄降リ、夜中ニ両度、余（ママ 程カ）餘之地震有之候、」（『鹿島藩日記』）

「十一月廿三日午上刻（11時過）より半時計（ばかり）震働（動）、俄方（カ）□（日偏に雲 曇カ）り雷有之、午下刻（13時前）ゟ子ノ刻（24時）迄砂降三四分程積ル、」（台東区下谷 對馬藩『江戸藩邸毎日記』）

「二十三日之暮ゟ大雷石降、同夜夥敷雷鳴、砂降、震動戸障子響、翌廿四日朝少晴、」（『伊東忠摩守日記』（十一月二十七日条 江ノ島 岩本院（藤沢市江の島）からの書簡））

「宝永四 十一月廿三日昼四ッ過大地震雷鳴、九ツ（12時）過暗夜に成て岩石降出し後砂降、」（鎌倉市腰越『津村腰越旧志』）

「（二十三日）同夜の五つ（20時）過より砂降初メ、二十四日ニハ降砂大雨之ことく、雷電鳴物ハ殊ニ夥敷、砂煙ニ而闇夜の如ク昼中燈を用ユ、」（小田原小船『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』）

「同夜（二十三日）、夜ニ入黒キ砂少し降、尤同日申ノ刻（16時）頃富士山焼、黒煙御番所より見候、火之手も見申候、」（『箱根御関所日記書抜 上』）

「（宝永四年亥十一月廿三日）（略）西方ゟ白カル石八ツ時（14時）迄フリ、夫ゟ暮六ツ時（18時）迄雪ニ雨フリ雷鳴ル、少シノ内チ青天ニ成テ又六ツ時（18時）ゟ空曇リ雷鳴リ稲光リ有テ黒砂降（フリ）、同夜九ツ時（24時）ゟ細カナル黒砂フリ、雷殊外鳴リ、同八ツ半時（12月17日03時）ゟ北ノ方ゟ晴レ南ノ方へ曇リ行、」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「○廿三日辛未、午上刻（11時過）ヨリ西南ノ方曇リ雷ノ如ク鳴動不絶、戸障子鳴響キ、折々地震、未上刻（13時過）ヨリ天曇リ、灰降ル、酉刻（18時）ヨリ丑刻（12月17日02時）マテ度々鳴響キ砂降ル、寅上刻（03時過）ヨリ風吹キ明發ニ止ム、」（君津市大井『石出茂雄氏史料』）

「十一月廿三日大震動昼申（16時）之刻石フル、同夜八丑（12月17日02時）刻砂フル、」（勝浦市『高照寺過去帳』）

「二十三日ニ度々ゆり、昼九ツ（12時）午ノ上刻（11時過）ニ富士山東之ひら□□（樹立）とけなし之境と見へ里（黒）き ばんぢゃく（盤石）雲夥敷涌キ出、女（如）雷ニなりひびき、諸人是ヲ見テ何事歟（か）不審也、世滅ル相歟（か）ト老若男女肝ヲケシ驚入、扨晩方大火上ル、火見エル事御山一倍高シ、夜モ九ツゟ廿四日之朝迄弥々（いよいよ）なり都よく（強く）大がみな里（雷）のごとく、夥敷大地にひびき家うごきて、はめなり渡りすさまじき事、」（静岡県沼津市原土屋家文書『覚書』）

「但シ廿三日焼初ノ夜別而大きに當所人家之戸はめをならす、同ク明ヶ七ツ時ニ當宿へ焼灰降ル事唯

壱度ナリ、」（静岡県沼津市原士屋家文書『覚書』夜ル乃景氣　絵図中の説明文）

「（十二月四日条）此夕飯貞徳〳〵被呼参近江屋文左衛門子息平八今朝生國近江国日野ヨリ下り候由、去ル廿三日御油宿ヨリ本坂越致シ見付宿ニ泊り候處ニ夜中事之外あかるく昼中のことくニ而書物等も相見〳〵候由、冨士山之方火見〳〵候由、」（『伊能勘解由日記』）

2日目　十一月二十四日（12月17日）

12月17日の天候・震動・空振

（十一月二十四日）
12月17日朝，東京・千葉県木更津市では北の方は晴れたが，南西から東に向かう噴煙が目撃され，昨日に続き震動があった（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』，中央区日本橋本町　村山弥兵衛『宝永四年富士焼一件』，木更津市犬成『富士山辰巳方焼出シ候事』）．空振と雷鳴も感じられた（『伊東志摩守日記』・江戸城西の丸『基熙公記』）．木更津では07時（六ツ半）から曇り，少し砂が降った．この時，降灰量を測定したところ（二十三日に降った分も含めてか）一坪（堆積層厚換算1．6㎝）に弐斗八升八合あった（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．静岡県駿東郡小山町生土，東京，木更津市，藤沢市江の島とその北方は一旦晴れた（『降砂記』，村山弥兵衛『宝永四年富士焼一件』，『富士山焼記』（ふじやまやけき），『富士山辰巳方焼出シ候事』，岩本院（藤沢市江の島）からの報告『伊東志摩守日記』）．「終日震動止まず、昨日より鳴ること大なり」（『鸚鵡籠中記』），とする記録がある一方で，09時（四ツ前）頃から雷声・動，戸・障子の鳴りも間遠になった（『伊東志摩守日記』，『隆光僧正日記』），あるいは「震動之残今日も時々有之候」（『岡本元朝日記』）という観測もある．この日，栃木県芳賀郡小貫でも西の方向から地震があったのを感じた（小﨑耕作家『日記』）．

「翌二十四日、朝六ツ時（06時）之天色、北之方ハ晴、西南黒青き雲厚出、東之方江も少々右雲廻り申候、昨日の通り震動いたし、西南之方ニて雷鳴稲光いたし候、西の方ハ北の方次第ニ黒雲退晴候、五ツ時（08時）より日天中晴候処へ登候故、日光出申候、四ツ（10時）前ゟ雷聲止、動揺もやミ申候、南之方黒雲は晴不申、」（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』）

「廿四日朝六（06時）つ過に降やみ世上少々静り申候、然る所又昼時より富士の方より黒雲次第次第に南東の方へ覆来候故一切商事相止皆々空を眺め居申候、然に昼の内は震動斗にて無何事少々安堵いたし罷在候所、又々夜五（20時）つ時より震動強く成、雷稲光不絶、地震も夜中三度ゆり只々舟中のごとくに存罷在候、併大風無御座候故悦申候」（中央区日本橋　村山弥兵衛『宝永四年富士焼一件』）

「（廿三日夜中たえすひゝき候て）廿四日にもおなし通にて御座候、さりなから朝ハそらはれ申候、それゆへにおもて庭の山よりたしかに遠山のやけ申候よく見え申候、それにて地しん（地震）にてハ御さ（御座）なきとあん（安堵）といたしまいらせ候、大納言（徳川家宣：夫）様も御らんせられ、わたくしもミまいらせ候、さてくすさましくおそろしき事にて御座候、いつかた（何方）のともいまたし（知）れ申さす候、やかて注進御座候ハんまゝ、しれ（知れ）次第さうくく申上候へとまつくここもとのやうす（様子）、さこそとりくに（沙汰）さたいたして御きつかひ（気遣い）あそはし候ハんまゝ此とをり申上候やうにとの事にて御座候、さてもいまたひゝき御座候てやけ申候煙空ニみち（満）申候て打くもりもふくしき天気にておはしまし、北の方少はれやかに御座候のミにて、はいすなふり（灰砂降り）候てさしき（座敷）のうちもけふり（烟り）申候やうに御座候、何ともさうくしき天気相にて御座候、夕くれ（夕暮）にハ神（雷）なりさへそひまいらせ候てすさましく御座候、いつぞや下され候たき物（焚）なとたき吉来香をもたき（焚）まいらせ候てすいふん（随分）くつゝしミゐまいらせ候　かしく　廿五日（十一月）夜」（江戸城西の丸『基熙公記』）

「二十四日朝北ノ方晴レ南ハ曇リ、同六ツ半時（07時）ゟ又曇リ少シ砂降、此時一坪計見ルニ弐斗八升八合有リ、」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「廿四日に至って微明（ビメイ）有り、燭（トモシビ）を捨てて始（ハジ）めて親子（オヤコ）の面（カオ）を見る、雨砂微少（ウシャビセウ）にして桃李（スモモ）の如く、」（駿東郡小山町生土『降砂記』）

「十一月廿四日　寅刻（04時）北風揚レ沙、天眼快晴震-動強〻、戸障子時-々動〻、酉ノ中刻（20時）地震、」（『富士山焼記』）

「翌廿四日朝少晴、巳之刻（10時）過夥敷雷鳴砂降震動、月夜ゟ昏、燈用申候、終日砂降、雷電強響、夜入迨止不申候（止み申さす）、今廿五日止候得共、于今（今に）雷鳴響動止不申（止み申さす）、落付不申候、併上下無（つつがなく）恙罷

在候、（略）十一月廿五日夜　伊志摩守様人々御中　岩本院（藤沢市江の島）　書判」（藤沢市江の島岩本院からの書簡『伊東志摩守日記』）

「一、廿四日、晴候て辰ノ刻（08時）日出候也、併震動残不止候也、○今日ハ天氣よく候へ共少風有り、昨日之砂吹立候也、窓へ吹當候ハ秋田之雪を風之吹あて候ニ似候也、震動之残今日も時々有之候、（略）○暮ニ御殿へ罷出候、いまた震動之残有之候、酉ノ下刻（19時前）地震有之候、それ程強クハ無之候へ共、御庭へ　御出被成候様ニ申上候而御ゑん迚御出候処止候也、雷少ツヽ時々有之候、○御しんノ間ニてうとん御相伴いたし候、亥ノ中刻（22時）退出、○今夜もしんどうのきミ有之候、○子ノ刻（24時）又地震有之候、可罷出存候処止候也、」（台東区台東『岡本元朝日記』）

「○廿四日朝、日光顕ル、昨日ゟ暖也、昨日南方海上、巳刻ゟ午ノ刻迄大キニ鳴動スル事三度、其以後極メテ赤キ氣、南ノ海上一面に浮、暫アリテ赤気変而黒雲トナリ、黒雲上リテ砂降ル、（略）・今日終日震動不止、昨日ゟ鳴ル　丁（こと）　大也、申ノ刻ゟ黒雲南方一面ニシテ、雲東へナビク、夜中砂降ル、夜中余程ノ地震両度、震動大ニ鳴丁三度、或人地一坪之内ノ降ル砂ヲ計量スルニ、三升五合と云々　冨士山見ユル山ノ半腹ゟ煙起ル、諸人於是冨士焼テ如此灰降ル丁ヲ知ル、原吉原ハ石降リ島ナト死ス、廿四五、年以前浅間山焼テ、郷中灰降ト云々」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』）（一坪に三升五合は，堆積層厚換算で０．２㎝）

「廿四日、不動法・千手法始行之、五つ時（08時）迄戸障子鳴、折々震動、天曇・四つ時（10時）ゟ天晴、戸・障子之鳴も間遠ニ成、」（千代田区神田駿河台『隆光僧正日記』）

「廿四日　天氣吉、地震西方度々成、」（栃木県芳賀郡小貫　小﨑耕作家『日記』）

（十一月二十四日）

１２月１７日　宝永火口東方神奈川県―千葉県の日中の降砂　（図３－２（ａ））

神奈川県藤沢市江の島でも，朝のうちは少し晴れ，火砕物の降下が一時止んだが，１０時過（巳之刻）から小田原市小船―藤沢市江の島・鎌倉市腰越で雷鳴・震動が始まるとともに，石・砂が激しく降って日中でも，明かりを点ける程暗くなった．江の島では砂は終日降り，雷鳴・響動は二十五日朝の時点まで止まずに続いていた．鎌倉市腰越の記録にも１２月１６日（十一月二十三日）から降り続き，太陽が見られたのは１２月１８日（十一月二十五日）だったという（藤沢市江の島　岩本院（藤沢市江の島）からの報告『伊東志摩守日記』収録，鎌倉市『津村腰越旧志』（二十七日条に収録），小田原市小船『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』）．千葉県勝浦市でも，日中闇のようで燈行をともして往来したという（勝浦市『高照寺過去帳』）．

東京では昼過ぎから夕暮れまで西風が吹き，薄青い噴煙が南西から南東，東へ次第に向かうのが目撃された（『伊東志摩守日記』，『鸚鵡籠中記』，中央区日本橋　村山弥兵衛『宝永四年富士焼一件』）．前日に降った砂が風により吹きあげられた（『岡本元朝日記』）．香取市佐原でも昼時に西風で砂が吹き散り目に入ったという（『入目録』）．

「（二十四日）巳之刻（10時）過夥敷雷鳴砂降震動、月夜ゟ昏、燈用申候、終日砂降、雷電強響、夜入迄止不（止み申さず）申候、今廿五日止候得共、于今（今に）雷鳴響動止不（止み申さず）申、（略）十一月廿五日夜　伊志摩守様人々御中　岩本院（藤沢市江の島）　書判」（『伊東志摩守日記』）

「十一月廿三日昼四ツ（10時）過大地震雷鳴、九ツ（12時）過暗夜に成て岩石降出し後砂降、廿五日漸々朝日輪を拝す、田畑へ五寸（15㎝）程焼砂、麦作ハ不見へ願書畧之」、（鎌倉市腰越『津村腰越旧志』）

「二十四日ニハ降砂大雨之ごとく、雷電鳴物ハ殊ニ夥敷、砂煙ニ而闇夜の如ク昼中燈を用ユ、（略）」

神奈川県小田原市小船『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』

「同十一月廿四日ノ日中如闇、往来燈行ヲトボス、」（勝浦市『高照寺過去帳』）

「（二十四日）九ツ（12時）過より西風少々吹、午之刻（12時）過ゟ西南之方薄青雲東之方江次第廻り、天中迄白薄

雲候、西風少々吹、北之方西半分は晴申候、七ツ時（16時）ゟ又震動少々いたし候、西風日入前より止申候」（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』）

「巳刻ゟ午ノ刻迄大キニ鳴動スル事二度）其以後極メテ赤キ氣、南ノ海上一面に浮、暫アリテ赤気変而黒雲トナリ、黒雲上リテ砂降ル、（略）・今日終日震動不止、昨日ゟ鳴ル丁（こと）大也、申ノ刻ゟ黒雲南方一面ニシテ、雲東へナビク」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』）

「（廿四日）昼時より富士の方より黒雲次第次第に南東の方へ覆来候故一切商事相止皆々空を眺め居申候、然に昼の内は震動斗にて無何事少々安堵いたし罷在候所（略）」（中央区日本橋 村山弥兵衛『宝永四年富士焼一件』）

「（廿四日）○今日ハ天氣よく候へ共少風有り、昨日之砂吹立候也、窓へ吹當候ハ秋田之雪を風之吹あて候ニ似候也、震動之残今日も時々有之候、（略）○暮ニ御殿へ罷出候、いまた震動之残有之候」（台東区台東『岡本元朝日記』）

「同廿四日　晴天　朝夥敷霜降、昨夜降候砂草木ノ葉へ取付候而ぬれ色黒ク成煤なとのやうニ有之、昼時西風吹候而焼砂吹散目へ入」（『入目録』）

12月17日（十一月二十四日）夕方・夜の降砂　（図3‐2（b））

夕方から小田原市―勝浦方面の降砂の分布が北に広がり，君津市・木更津にも砂が降り始めた．木更津市では，石砂が16時（七ツ時）から夜中12月18日03時（八ツ半時）まで降り（『富士山辰巳方焼出シ候事』），君津市でも黒砂が12月17日（十一月二十四日）の24時（夜九つ時分）まで降った（『石出茂雄氏史料』）．夜間も東京の南西方向に噴煙が目撃された．空振と雷鳴もあった（『伊東志摩守日記』，『鸚鵡籠中記』）．東京に「砂が降った」とする記録は「夜中砂降る」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』）にみられるが，墨田区東駒形『伊東志摩守日記』，文京区大塚『護國寺日記』，台東区台東『岡本元朝日記』などの史料にはこの日の降砂の記述はない．17日夜に東京にわずかに降った可能性は高いが，「砂も時々降申候」（墨田区亀沢『弘前藩庁日記』），「終日砂降事甚也」（千代田区丸の内『津山藩日記』）などの記述は，昼間，風により吹き上げられた灰・砂（『岡本元朝日記』）を砂が降ったものと判断したのではないかと思われる．

『富士山辰巳方焼出シ候事』

「（十一月廿三日）九ツ時（12時）岩石ふり、又さる（申16時）、石ゟゆき（雪）成、くれ六つ（18時）ニやみ）又それより、くろすな（黒砂）廿四日のよの九つ時（24時）分迄ふり、其内かみなり（雷）、しんとう（震動）者（は）、同廿六日迄致候、又其内ちしん（地震）も入候、」（君津市大井『石出茂雄氏史料』）

「（二十四日）夜入五ツ（20時）前少々強地震ゆり申候、地震いたし震動少々やミ、時々少々つゝいたし候、風少も不吹、星出候得共、南西（光無之候）之方黒雲登、半天ニおゝい有之候、南之方ニて稲光強雷聲時々いたし候、九ツ（24時）前ニ少々地震いたし候、震動時々少々つゝいたし候、南之方ニ而雷聲、時夜中いたし候、稲光いたし候、西之方半分程、南は一面ニ、東之方江も黒雲かゝり申候、」（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』）

「（○廿四日）夜中砂降ル、夜中余程ノ地震両度、震動大ニ鳴丁三度、或人地一坪之内ノ降ル砂ヲ計量ヘルニ、三升五合と云々、冨士山見ユル山ノ半腹ゟ煙起ル、諸人於是冨士焼テ如此灰降ル丁ヲ知ル、原吉原ハ石降リ鳥ナト死ス、廿四五年以前浅間山焼テ、郷中灰降ト云々」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』）（一坪に三升五合は，堆積層厚換算で0．2㎝）

「（廿四日）、又々夜五つ時（20時）より震動強く成、雷稲光不絶、地震も夜中三度ゆり只々舟中のごとくに存罷在候、併大風無御座候故悦申候、」（中央区日本橋 村山弥兵衛『宝永四年富士焼一件』）

「（廿四日、）○今日ハ天氣よく候へ共少風有り、昨日之砂吹立候也、窓へ吹當候ハ秋田之雪を風之吹

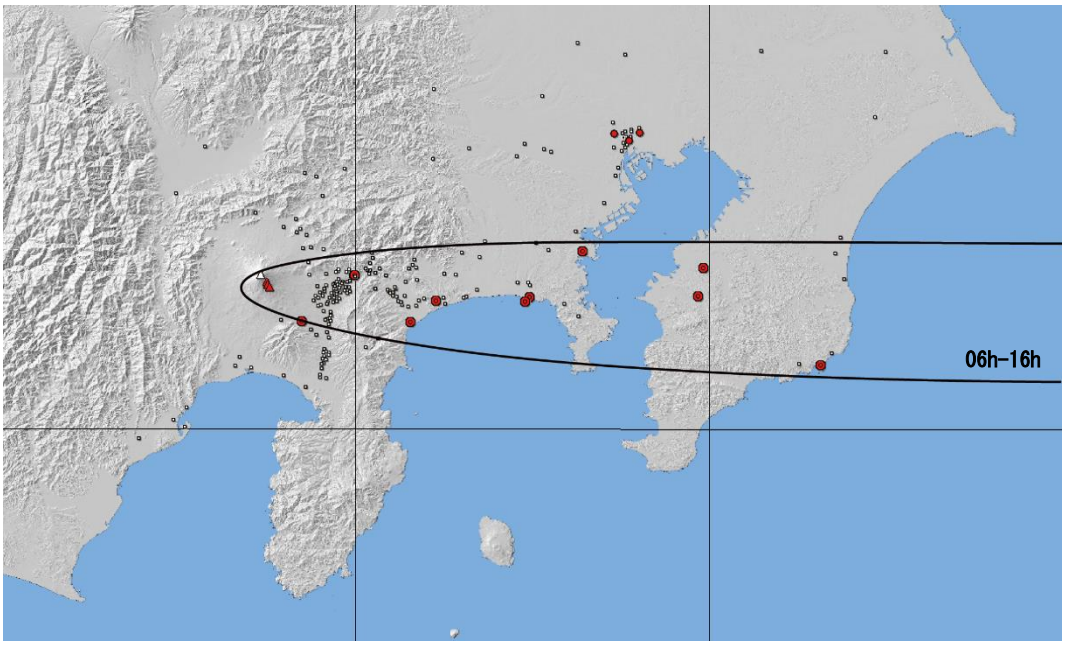


図 3-2（a）　富士山宝永噴火　降砂分布

2 日目　宝永四年十一月二十四日（1707 年 12 月 17 日）06 － 16 時　○：時刻不明

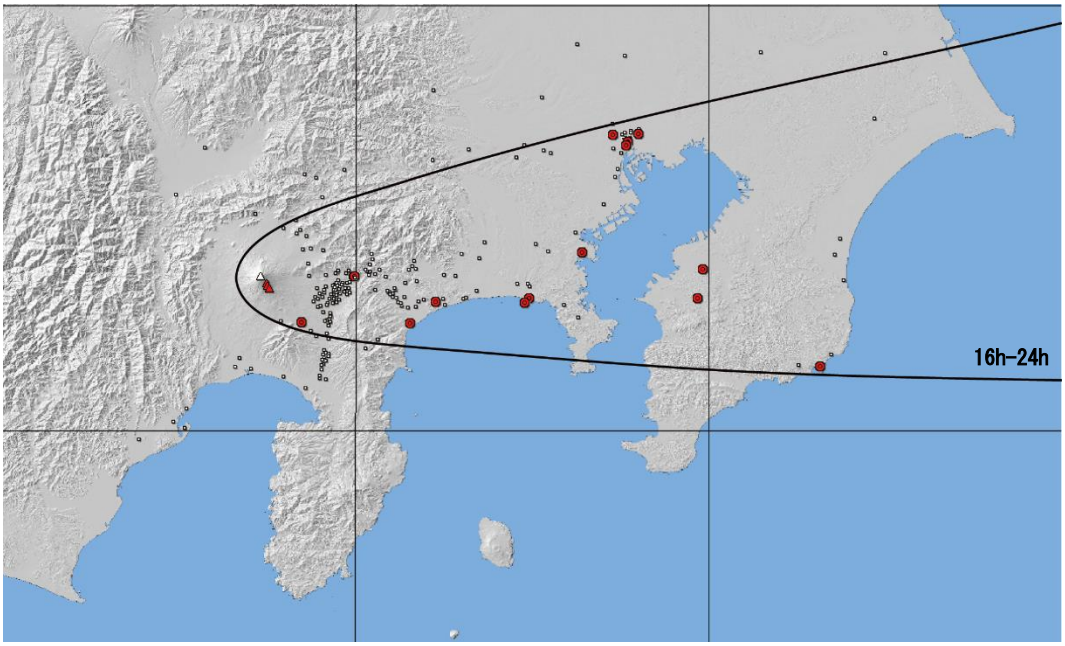


図 3-2（b）　富士山宝永噴火　降砂分布

2 日目　宝永四年十一月二十四日（1707 年 12 月 17 日）16 － 24 時

あて候ニ似候也、震動之残今日も時々有之候、（略）○暮ニ御殿へ罷出候、いまた震動之残有之候、酉ノ下刻（19時前）地震有之候、それ程強クハ無之候へ共、御庭へ　御出被成候様ニ申上候而御ゑん迫御出候処止候也、雷少ツヽ時々有之候、○御しんノ間ニてうとん御相伴いたし候、亥ノ中刻（22時）退出、○今夜もしんどうのきミ有之候、○子ノ刻（24時）又地震有之候、可罷出存候処止候也、」（台東区台東『岡本元朝日記』）

「同廿四日　南東少曇、震動、砂も時々ふり申候、」（墨田区亀沢『弘前藩庁日記（江戸）』）

「（十一月廿四日）終日砂降事甚也、震働（動）稲妻折節雷も有之、戸障子鳴事甚也、」（千代田区丸の内『津山藩江戸日記』）

12月17日（十一月二十四日）夜・深夜の二度の地震

夜に入って19時頃と24時頃の2回，広い範囲で地震を感じた．19時頃の地震は，文京区大塚（『護國寺日記』），中央区日本橋本町（『宝永四年富士焼一件』），神奈川県箱根町（『箱根御関所日記』），静岡県沼津市原（土屋家文書『覚書』県史別編 p350），三島市（『外宮子良館日記』）などでは強震，墨田区東駒形（『伊東志摩守日記』），千代田区一ツ橋（『新井白石日記』），台東区台東（對馬藩『江戸藩邸毎日記』），『富士山焼記』では少し強い地震として感じられた，長野県下伊那郡高森町（『歳中行事』），名古屋市（『鸚鵡籠中記』），滋賀県長浜市（『日記』），栃木県日光市（『御番所日記』）でも有感であった．

24時頃の地震は東京（『伊東志摩守日記』，港区東新橋『伊達氏治家記録 肯山公續編 一』，『富士山焼記』（十一月二十五日条），台東区台東『岡本元朝日記』，肥前島原藩『江戸幕府日記』），静岡県沼津市原（土屋家文書『覚書』静岡県史 別編2，p350），三島（『外宮子良館日記』），長野県下伊那郡高森町（『歳中行事』），名古屋市（『鸚鵡籠中記』），滋賀県長浜市宮川親良（『日記』）に有感の記録がある．

なお，甲府市からの注進状（『富士山自焼記』）に「廿三日夜五時（20時）、同九時（24時）両度大地震にて戸建具はつれ、敷居鴨居も離し候，」という記事がある．二つの地震を並記していることから二十三日夜ではなく，二十四日夜の地震を記した可能性がある．

「（二十四日）夜入五ツ（20時）前少々強地震ゆり申候、地震いたし震動少々やミ、時々少々つゝいたし候、風少も不吹、星出候得共、南西（光無之候）之方黒雲登、半天ニおゝい有之候、南之方ニて稲光強雷聲時々いたし候、九ツ（24時）前ニ少々地震いたし候、震動時々少々つゝいたし候、南之方ニ而雷聲、時夜中いたし候、稲光いたし候、西之方半分程、南は一面ニ、東之方江も黒雲かゝり申候、」（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』）

「（二十四日）夜に入六半時（19時）地震、今日終日、西南黒雲たなひき、なりおとたえず、」（千代田区一ツ橋『新井白石日記』）

「十一月廿四日　晴天　時々震働（動）有之、夜ニ入、五ツ半時少々地震有之、」（台東区下谷 對馬藩『江戸藩邸毎日記』）

「（十一月廿四日）酉ノ中刻（18時）地震、」（『富士山焼記』）

「廿四日　晴天（中略）夜五つ時地震する、（中略）夜九つ地震、」（下伊那郡高森町『歳中行事』）

「□廿四日　○戌半地震、○丑過地震、」（名古屋市『鸚鵡籠中記』）

「二十四日、晴、震動昨日よりは輕く、晝の内は少時止、申刻よりは朝より強く、戌半刻・子半刻地震、」（滋賀県長浜市『日記』）

「同廿四日　晴、戌刻過地震、」（栃木県日光市『御番所日記』）

「廿三日昼頃ゟ廿四日朝迄地震相止不申、其内廿三日（二十四日の誤記カ）夜五時（20時）同九時（24時）両度大地震にて戸建具

はつれ、敷居鴨居も離し候、」（甲府からの注進状『富士山自焼記』）

「○廿四日壬申卯刻ヨリ西南ノ方曇リ、辰刻ヨリ夜ニ入リ不絶鳴響、戌刻（20時）、子刻（24時）両度地震、」

（港区東新橋『伊達氏治家記録 肯山公 續編 一』）

「（二十四日）（略）○暮ニ御殿へ罷出候、いまた震動之残有之候、酉ノ下刻（19時）地震有之候、それ程強クハ無之候へ共、御庭へ　御出被成候様ニ申上候而御ゑん迄御出候処止候也、雷少ツヽ時々有之候、（略）○今夜もしんどうのきミ有之候、○）子ノ刻（24時）又地震有之候、可罷出存候処止候也、」

（台東区台東『岡本元朝日記』）

「（二十四日）（略）戌刻（20時）、子后刻（25時）頃余程地震、夜中時々動揺如前砂少宛降、」（千代田区有楽町 肥前島原藩『江戸幕府日記』）

「（二十四日）五ツ半過（21時過）ニ、餘程之地震有之、若（もし）強震出可申 欤（か）と 機（氣） 遣用心申内止申候、」（文京区大塚『護國寺日記』）

「（廿四日）又々夜五つ（20時）時より震動強く成、雷稲光不絶、地震も夜中ニ度ゆり只々舟中のごとくに存罷在候、併大風無御座候故悦申候、」（中央区日本橋本町 村山弥兵衛『宝永四年富士焼一件』）

「十一月二十四日　暮六つ半（19時）、同九ツ（24時）頃強き地震致両度候、夜迄ニ昼夜無間断致震動、暁（アカツキ）夜七ツ（28時）時強致震動、夫（それ）ゟ（より）震動も止ミ火消し候、」（『箱根御関所日記書抜 上』）

「二十四日 五ツ（20時）、八ツ（26時）時両度地震あり、」静岡県沼津市原（土屋家文書『覚書』静岡県史 別編ｐ３５０）

「（二十四日）日暮テ大地震、又子ノ刻（24時）許（ばかり）ニ大地震、依之直ニ旅店（三島市）ヲ出テ其日（二十五日）駿府ニ至リ宿ス、此所（静岡市）ニテモ震動甚シ前代未聞絶言語云云、」（三島『外宮子良館日記』）

（十一月二十四日）１２月１７日時点での噴火火山の推定

噴火が開始した二十三日の時点で，江戸城内では，降灰は（天和四年＝貞享元年）（１６８６年に噴火した）伊豆大島由来だと考えていた（『富士山變記』）．浅間山（『隆光僧正日記』二十三日付，盛岡藩二十四日付）や，富士山起源（『新井白石日記』）と推定した人もいた．

「一、廿三日、砂降る事、御殿にての沙汰ハ、伊豆の大嶋焼るなれハ、其地ならんかとて、先、芝浦表へ参り、見分可仕由ニて、御徒目付市野新八郎、馬場藤左衛門、安田藤兵衛、并御小人目付六人被仰付、芝浦表へ参り、詮儀いたすといへとも不分明、（略）」（『富士山變記』）

「廿四日　今朝（×日）中書殿より被仰下、富士山より赤氣たち、南の方より雲たなひくとミゆ、しからは富士やけしなるへし、夜に入六半時（19時）地震、今日終日、西南黒雲たなひき、なりおとたえず、」（『新井白石日記』）

近江屋文左衛門子息平八は二十四日江尻泊，二十五日沼津泊と移動した．廿三日から鳴動している富士山須走口は昼，黒煙が立ち，東の方へ吹上り，夜は赤熱して見えた．箱根から西は明るく，箱根より東は暗く，昼のうちも火をともす程であった．砂降候事も箱根 畑宿より西は降らず，それより東は降ったという．二十六日小田原に宿泊したところ，町中の男女と旅人は津波に襲われることを心配し，寝ずに過ごした．小田原から品川近くまでは軽石のような周囲三四寸ほどの石が降ったという．その後は黒砂が降った．小田原から品川までの間，旅人は合羽・笠を着，馬子などは古着などをかぶって通行したと聞いたという（『伊能勘解由日記』）．

「（十二月四日条）（略）近江屋文左衛門子息平八　廿四日夕江尻泊廿五日夕沼津泊ニ致候處ニ惣而廿三日ヨリ鳴有之富士山すは尻（須走）口ノ方昼ハ黒けむり立東ノ方へ吹寄ト候由、夜ハ火見へ候由道中原吉原

邊諸道具へ纏付致用心罷有候由、箱根ヨリ上ハあかるく有之箱根ヨリ下ハくらく昼之内も火をともし候程之事ニ而候由、砂降候事も箱根畑ヨリ上ハ不降畑ヨリ東國方降候由、廿六日夕小田原ニ泊候處ニ町中男女并旅人共ニ津浪入候事無心許存夜中ふせり不申候由、小田原ヨリ品川近所迄最前ハかる石のことく大キサ三四寸廻り有之石降候由、其後ハ黒砂降候由小田原ヨリ品川迄之内旅人合羽笠着馬子なとハ古あわせ（古着）なとかふり往還致候由咄申候、今日昼時御代官細田伊左衛門様御手代、〔略〕」

（『伊能勘解由日記』）

3日目　十一月二十五日（12月18日）

12月18日の噴煙・震動・空振（十一月二十五日）

神奈川県藤沢市・鎌倉市の降砂はこの日は止み，鎌倉市腰越では朝日が出た．

「（二十四日（略）終日砂降、雷電強響、夜入迄止不申候（止み申さず）、）今二十五日止候得共、于今（今に）雷鳴響動止不申（止み申さず）、落付不申候、併上下無恙（つつがなく）罷在候、（略）十一月廿五日夜　伊志摩守様人々御中岩本院（藤沢市江の島）　書判」（『伊東志摩守日記』十一月二十七日条）

「廿五日漸々朝日輪を拝す、田畑へ五寸（15㎝）程焼砂、麦作ハ不見へ願書畧之」（鎌倉市腰越『津村腰越旧志』）

東京ではこの日寒気が甚しく，凌ぎ難いほどであった（『鸚鵡籠中記』，肥前島原松平藩『江戸幕府日記』）．06時（卯刻），噴煙が西から東の方へ廻り広がっていた．噴煙は次第に天頂を覆い，日光をさえぎった．このとき北は晴れていた．雷は昨夜から時々南方で鳴り，地や，戸障子にも響いていた．10時（四ツ時・巳刻）に一旦震動が止んで晴れたが，12時（九ツ時・午刻）より黒雲が東の方へ廻るとともに雷が時々鳴った（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』，港区東新橋 伊達氏治家記録『肯山公 續編 一』）．同様の記述が『護國寺日記』にもある．

昼頃から次の火砕噴火が始まった．午後には噴煙に覆われて暗くなり，14時（八ツ）過ぎからは南東の方は霧のようになり，近所の家も見わけられないほどであった（『伊東志摩守日記』）．『鸚鵡籠中記』にも14時（未の刻）頃から暗くなり，奥の座敷・祐筆部屋では明りをともしたとある．

「〇廿五日　辰の刻（08時）日光少し見ゆ、天気朧々今日の寒難凌位也、大に響　震動時々聞ゆ、未刻（14時頃）比は天真暗になり奥深なる座敷には燈を点す、御祐筆部屋等未（この間に絵図あり）比ゟ火を点す、〇申の刻（16時）ゟ夥敷黒砂降る、皆焼石也、天甚暗し、今夜中降つゞけ厚く積る、（略）」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』二十三日条）

「廿五日　甲辰　陰、一天闇事如一昨日、日中採燭震動雷鳴、寒気甚、従黄昏黒砂降積及三寸、夜入闇事不知、同刻（ヵ）ニ動揺夜中同前也」（肥前島原松平藩『江戸幕府日記』）

「二十五日、朝天色西之方半分程、南一面、東之方江雲廻り黒く曇次第ニ天中ニおゝい、日光をおゝい申候、北は晴申有之候、雷夜中の通り時々南方ニて鳴り、地ニひゝきいたし候得て、戸障子ニひゝけ申候、雷聲長く鳴申候、四ツ時（10時）ニは次第ニ黒雲東江廻り、天中江南ゟ押出候、風少も無之、震動は止申候、九ツ時（12時）ゟ黒雲東之方江廻り候、雷時々如前ニ鳴申候、八ツ（14時）過時々天半余曇、東南之方如霧ニ有之、近家も見分無之候、七ツ時（16時）より黒き砂少つゝ降申候、雷も時々南之方ニ而鳴申候、日暮候はゝくらく有之、少之先も見江不申候、八ツ半（19日03時前）前ニ砂降止申候、北之方空晴申候、夜中時々南方ニて雷鳴候、おとニ遠近有之候、夜中風少も吹不申候、」（『伊東志摩守日記』）

「〇廿五日癸酉　卯刻（06時）ヨリ西南東曇リ、巳刻（10時）少晴、午刻（12時）東西南曇リ鳴響ク、未下刻（15時）ヨリ天曇リ砂降ル、申刻（16時）ヨリ雷鳴ノ如シ、入夜砂降リ鳴動、寅刻（04時）砂止ム、冨士山焼却スト云々、」（伊達氏治家記録『肯山公 續編 一』）

「廿五日、夜中も不絶震動有之黒雲天分此方へ曇リ懸候、

一、震動夜明ケ候而も止不申（止み申さず）、大分曇リ懸リ故欤、どことなく暗ク罷成、一圓晴不申候、震動と申も如雷電どろ〳〵〳〵と鳴り出申候、戸障子之ひゞき（響）者少止申候、何とも難得其意事とも二候、（略）

一、曇懸リ候雲、朝ゟ次第ニ北西之方へ廻リ、諸方晴夜之如ニ成、とろ〳〵〳〵と鳴事も及暮止不申（止み申さず）候、歡喜院へ居被申候中村平介殿、青山播磨（幸督）守殿へ被参候處、上方ゟ之飛脚致到着、其者見届ケ聞及旨慥之噂ニ者、冨士之平腹ゟ焼出、伊豆大嶋焼出不申由具ニ物語ニ候、

歡喜院傳説也、（略）

一、酉（20時）刻過、雷鳴震動有之、（略）

一、夜中も折々不絶どろ〳〵〳〵と鳴渡、曇リ懸リすさましき天氣相ニ而、燒砂餘程麁キあられ（霰）の降ことく（如）ニ降、夜中六七分計も留リ申候、」（文京区大塚『護國寺日記』）

千葉県香取市佐原では二十五日朝，天から毛が降った．朝から南東に黒い噴煙が現れて，昼間も暮合のように暗く，夜に入ると一層暗くなり周囲が見えなかった．砂が降った（『入目録』）．香取郡多古町でも十一月二十五日，二十六日は黒い砂が降って暗かったので昼夜ともあかりを燈した（平山静江家『過去帳』）．

「廿五日朝天ヨリ毛降、此日朝ヨリくらく辰巳（南東）東南方天ニ黒雲出くらく、西北之方ハ晴天ニ而、昼中も暮合のごとくくらく候而、夜ニ入、猶以くらく十方見へす、砂降右降候砂共前書之通日々之分包分ケ置候、」（香取市佐原『入目録』）

「廿五日、廿六日黒砂降暗しめ、日夜の分ち無、明を立候由」（香取郡多古町 平山静江家『過去帳』）

（十一月二十五日）

12月18日夕方からの降砂　（図3－3）

東京では16時（七ツ時・申の刻・申ノ下刻）～17時から黒い砂が少しずつ降り始めた．（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』，新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』，千代田区一ツ橋『折たく柴の記 上』，『冨士山燒記』）．酉（18時）刻過，雷鳴や震動が絶えずにどろどろどろと鳴り渡り，夜中に粗い燒砂が，あられ（霰）が降るように，1．8～2㎝（六七分）ほども溜まった（文京区大塚『護國寺日記』）．22時（亥刻）には笠をさして歩いたという『岡本元朝日記』．降砂は，12月19日（八ツ半前）03時前（『伊東志摩守日記』）ないし04時（寅刻）（伊達氏治家記録『肯山公續編 一』）に止んだ．朝まで降続き，6～9㎝（二寸三寸）程積もった，という史料（中央区日本橋『宝永四年富士燒一件』，千代田区有楽町 肥前島原松平藩『江戸幕府日記』）もある．北の空は晴れており，夜中時々南方で雷が鳴った．音に遠近があった．夜中は，風はなかった（『伊東志摩守日記』）．

「廿五日に罷成候へば世上月夜のごとく遠くの人は面體見え不申候、亦々空の気色すさましく人々案居申候所、又南西の方より黒雲段々覆来、昼七つ比（16時頃）より黒き砂降り申候、之より震動雷稲光共ニやみ不申、夜中降つゞき今朝（二十六日）迄不絶降申候故凡二寸三寸ほとづゝ溜申候、」（中央区日本橋『宝永四年富士燒一件』）

「〇暮時ゟ又砂降候、先日ゟ砂黒色ニ候、多降候也、（略）〇暮ニ御殿へ罷出候、さし笠ニてあるき候也、砂地へ溜り候也、亥ノ中刻（22時）退出、いまた砂降ル、」（『岡本元朝日記』）

「廿五日にまた天暗くして雷の震することくなる聲し、夜に入ぬれは灰また下る事甚し、此日冨士山に火出て燒ぬるによれりといふ事は聞へたりき、これよりのち黒灰下る事やますして十二月の初めおよひ九日の夜に至て雪降りぬ、此ほと世の人咳嗽をうれへすといふものあらす、」（『折たく柴の記 上』）

「（十一月二十五日）従（より）ニ南方ニ次第ニ陰、北方少霽冷、戸障子時々動、及レ晩四方曇ル、因（より）ニ申ノ下刻（17時）ニ黒沙降、此陰リ冨士山炎上之沙也云々、御徒目付三人、御小人目付六人、冨士山見分被レ遣、今夜亥刻迄之中可レ令ニ發足ニ云々、」（『冨士山燒記』）

（十一月二十五日）

12月18日　木更津市の震動・甲府市の地震

木更津市では，二十五日に震動がことのほか強く，20時（夜五ツ時）に少し地震があった．空は晴れていて，降砂の記事はない（『富士山辰巳方燒出シ候事』）．

甲府市では08時過ぎ（朝五ツ過）に強い地震を感じた（甲府からの注進状『富士山自燒記』）．

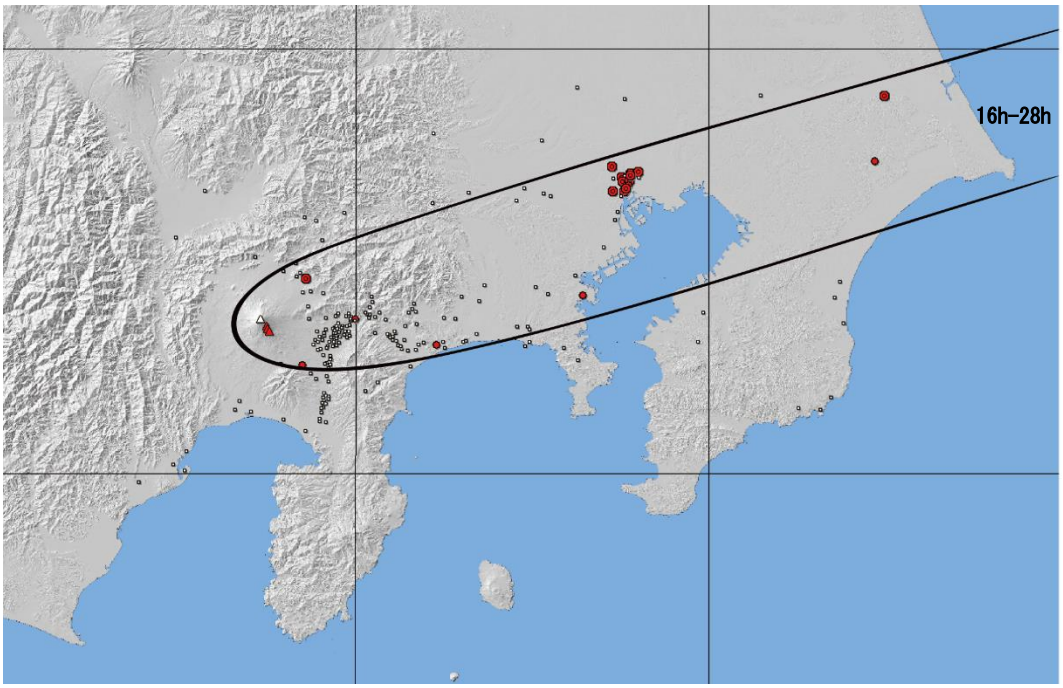


図 3-3　富士山宝永噴火　降砂分布

3 日目　宝永四年十一月二十五日（1707 年 12 月 18 日）16 - 28 時

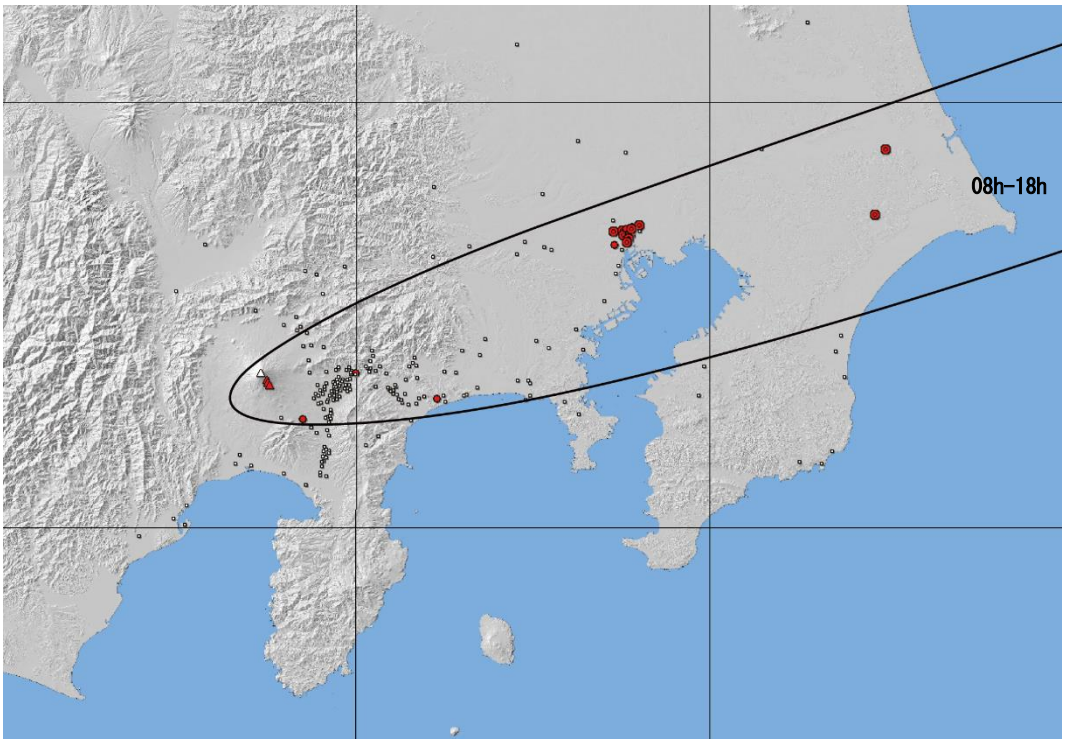


図 3-4(a)　富士山宝永噴火　降砂分布

4 日目　宝永四年十一月二十六日（1707 年 12 月 19 日）08 - 18 時

「廿五日震動殊外強ク、同夜入五ツ時少シ地震有ツテ空晴レ、日和中分ナリ、」（木更津市『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「廿五日朝五ツ過又地震強御座候、」（甲府からの注進状『富士山自焼記』）

12月18日（十一月二十五日）に降下した火砕物の色の変化

12月18日に降った砂の色がその前より黒くなった，と解釈できる記述が東京都台東区台東『岡本元朝日記』，千代田区一ツ橋 新井白石『折りたく柴の記』，横浜市中区根岸 高橋家文書『覚書』にある．

『岡本元朝日記』には，「二十五日（12月18日）暮時からまた砂が降った．先日より色の黒い砂が多く降った」，また，『折りたく柴の記』には「二十五日にまた空が暗くなり，雷の震するような音がした．夜に入るとまた灰が激しく降った．この日に富士山が噴火したことによる，ということを知った．これ以降黒灰が降ることが止まなかった」と記されている．横浜市中区根岸高橋家文書『覚書』には「十一月二十三日（12月16日）10時から16時まで色の白き岩石が降った．同日16時からねずみ色の小砂が三日間降った．それより後は暗い小砂が降った」と記されている．暗き小砂が降り出した「それより後」が「二十五日（12月18日）」以降を指すのか「二十六日（12月19日）」以降を指すのかはっきりしないが，少なくとも「二十四日（12月17日）」まではねずみ色の小砂であった，と読むことができる．これらの記述は宮地（1984）の区分による，安山岩質の発泡の悪い本質岩片からなるHo-Ⅱと玄武岩質のスコリアからなるHo-Ⅲの境界が「二十五日（12月18日）」にあることを示唆する記述に読める．

「（二十五日）○暮時ゟ又砂降候、先日ゟ砂黒色ニ候、多降候也、」（台東区台東『岡本元朝日記』）

「廿五日にまた天暗くして雷の震することくなる聲し、夜に入ぬれは灰また下る事甚し、此日富士山に火出て焼ぬるによれりといふ事は聞へたりき、これよりのち黒灰下る事やますして十二月の初めおよひ九日の夜に至て雪降りぬ、」（千代田区一ツ橋『折りたく柴の記』）

「（二十三日（12月16日10時）巳刻より申刻（16時）迄降申候、但し色白き岩石にて候）同日（12月16日16時）申刻よりねずみ色の小砂ふり候義三日、それより後はくらき小砂ふり申候、」（横浜市中区根岸高橋家文書『覚書』）

４日目　十一月二十六日（１２月１９日）

１２月１９日の天候・雷鳴・震動

東京では寒気が強かった，雷は障子には響かなかったが，障子はびりびりがたがた震動していた（『鸚鵡籠中記』）．朝，北の方は晴れ，南東で時々雷が鳴った（『伊東志摩守日記』）．栃木県芳賀郡小貫では晴れ，この時期には珍しく暖かかった．天が鳴った，という（小﨑耕作家『日記』）．

１２月１９日の東京の降砂の再開　（図３－４（ａ））

東京では，０９時前（辰下刻）（０７-０９時ないし０８時（辰中刻））から南風が少々吹き，南東に黒雲がみられ，黒い砂が降った．数日前よりは粗い粟粒大の黒い砂が多く，屋根に降って音をたてた．雷が時々南東で鳴った（『伊東志摩守日記』，肥前島原藩『江戸幕府日記』，『富士山焼記』）．昼過ぎ（ないし１０時（巳刻））から天中の雲は薄くなり，日光の影が見えるようになった（『伊東志摩守日記』，肥前島原藩『江戸幕府日記』）．１２時（午の刻）から灰が降り，約２㎝（六七分）積ったという記録（『鸚鵡籠中記』）もある．やがて黒い雲が東から北にまわっていった．１４時（八ツ時）から雷声がとだえた．

１２月１９日の千葉県における降砂

香取市佐原では朝から暗く，砂が降った．北西（戌亥）の方は晴れていた．夜に入っても砂は降ったが，２４時（九ツ時）からは星が見えた（『伊能勘解由日記』）．香取郡多古町でも（１２月１８日，１９日（十一月二十五日，二十六日））に黒い砂が降り，暗かった（平山静江家『過去帳』）．木更津市大成では朝は晴れ，１０時（四ツ時）から雲に覆われ陽が見えなくなり，１８時（暮れ六ツ時）からは砂がちらちら降ったが．２４時（九ツ時）には晴れた（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．

１２月１９日夕方　降砂域が東京の北へ移動　（図３－４（ｂ））

降灰域は江戸市中からその北側に移動し，清瀬市上清戸では二十六日暮れに砂が降りはじめ，１２月２０日１４時（十一月二十七日八ツ時）までに厚さ６㎝（二寸）ほど積った（村野家『年代記并過去帳』）．それとともに夕暮れから東京の小砂の降下は小降りになり，昨夜（十一月二十五日夜）程は暗くなかった（『伊東志摩守日記』）．ただし，「夜に入って砂の降下がますます激しく降り，四方は暗くなった」，とする観察記録（『富士山焼記』）もある．東京の市中では１２月１９日（十一月二十六日）２１時（五ツ半）-２２時（亥刻）（『護國寺日記』，『肥前松平藩江戸幕府日記』）ないし１２月２０日０１時（夜九ツ半時）（『伊東志摩守日記』）には降砂は止んだ．天頂は少し晴れ，雷が時々南東の方で鳴るが以前よりは雷声が遠くに聞こえ，間隔をおいて鳴るようになった．夜中から北西の風が少し吹いた．砂は６～９㎜（二三分）も積った（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』）．

近江屋文左衛門子息平八は二十六日（１２月１９日）小田原に宿泊した．町中の男女と旅人は津波に襲われることを心配し，寝ずに過ごしていた．小田原から品川近くまでは軽石のような周囲三四寸ほどの石が降ったという．その後は黒砂が降った．小田原から品川までの間，旅人は合羽・笠を着，馬子などは古着などをかぶって通行したと聞いたという（『伊能勘解由日記』）．小田原市小船の『村開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』にも津波を恐れていた記述がある．吉原からの注進でも相模で３７５ｇ（百目（もんめ））ほどの石が降ったと書かれている（『新井白石日記 下』）．

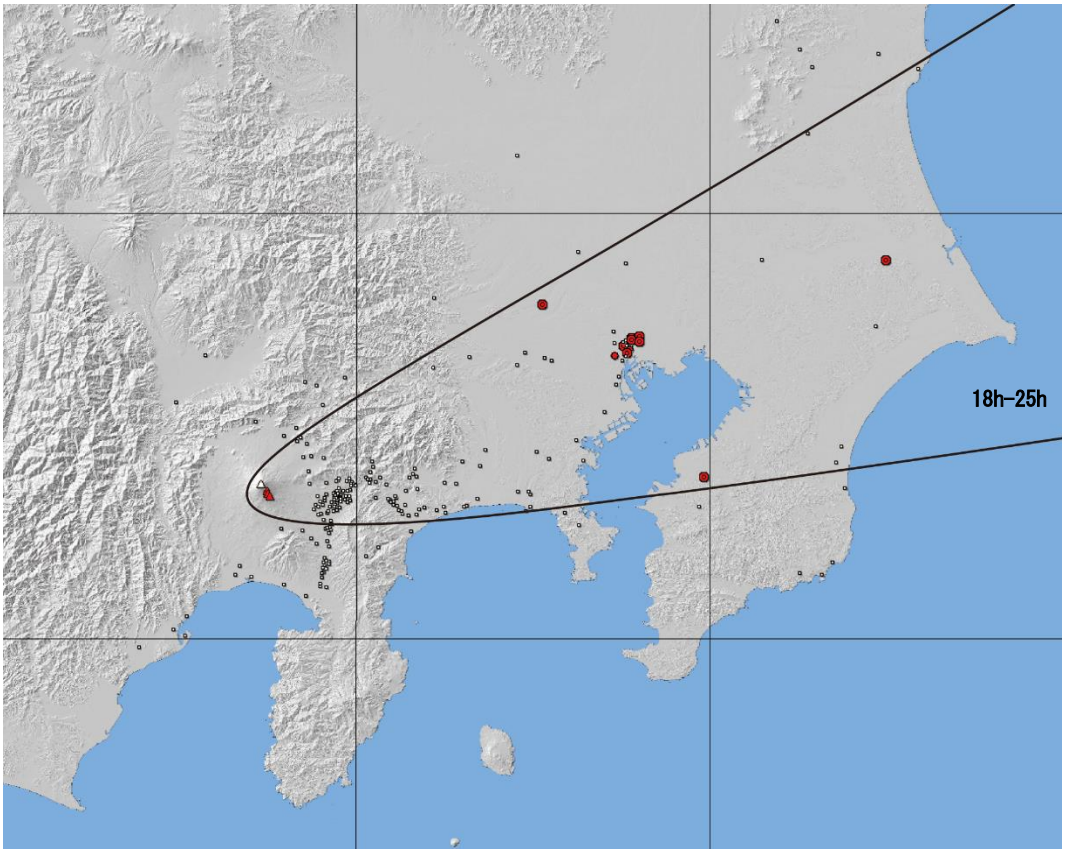


図 3-4(b)　富士山宝永噴火　降砂分布

4 日目　宝永四年十一月二十六日（1707 年 12 月 19 日）18 - 25 時

「〇廿六日　曇、寒氣甚時々雷鳴ル、雷ハ戸障子ニ響カズ、震動ハ障子ヒリ〳〵カタ〳〵イタス、震動も度々有之、風変シテ方角難レ定・午ノ刻（12時）ゟ灰降、地色黒クナル・・雲候御玄関前ノくリ石不レ見程積ル、六七分積ル、諸人笠ヲ着ス・午刻大ニ雷鳴、坤（コン：南西）ゟ艮（コン：北東）へ鳴行、ソレヨリ黒氣一面ニ散ス、」（新宿区市谷本村『鸚鵡籠中記』十一月二十三日条）

「廿六日、朝、東南ゟ黒雲天中半余おゝい、北之方計（ばかり）晴申候、辰下刻（09時前）ゟ南風少々吹、黒雲次第おゝい出、黒き砂頃日ゟは大きく粟つぶ程の多降、屋根へ落候ニ雨の叟（如）くにおといたし候、雷時々南東ニて鳴候、昼過ゟ天中之黒雲少々薄なり、日光のかけ見申候、東ゟ黒雲北之方廻り黒雲厚おゝい申候、雷聲は八ツ時（14時）ゟ鳴不申候、暮六ツ時前ゟ少砂小降に成申候、天中之黒雲薄有之、昨夜程ニくらく無之候、夜九ツ半時（25時）ゟ砂降止候、砂二三分（6～9㎜）もつもり申候、天中少晴申候、雷時々東南之方ニて鳴申候、頃日ゟは雷聲遠きこへ間遠ニ鳴申候、夜中ゟ西北之風少々吹申候、」（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』）

「廿六日　天氣吉、時ならずだんき、天なる、」（栃木県芳賀郡小貫　小﨑耕作家『日記』）

「廿六日　乙巳　陰、従辰（08時より）刻砂降終日南鳴時々有寒、従昨日（昨日より）薄、従巳（10時より）刻南方少雲薄ツキ日ノ出モ折々見、北方江段々黒雲一面成及亥刻頃降止、」（千代田区有楽町　肥前島原藩『江戸幕府日記』）

「寶永四丁亥年　十一月廿六日　陰、北方南方少霽、震動時々、従（より）二辰（08時）中刻沙降、晝少日影差ス、入レ夜沙彌（いよいよ）く降四方闇ク、子（24時）刻南方光リ移レ壁云々、」（『富士山焼記』）

「廿六日朝ヨリくらく砂降、戌亥の方天少晴レ見ゆる、其外者雨空のごとくニ而くらく有之、（略）今日夜ニ入候而別而闇ク砂降九ツ時ヨリ星少々見ゆル」（香取市佐原『伊能勘解由日記』）

「又廿五日、廿六日黒砂降暗しめ、日夜の分ち無明を立候由、」（香取郡多古町平山静江家『過去帳』）

「廿六日朝晴レ、同四ツ時（10時）ゟ日和ウヅム、暮六ツ時（16時）ゟ少曇リ砂チラ〳〵ニフリ夜九ツ時（24時）ゟ日和晴レ、」（木更津市大成『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「当地ゑも廿六日の暮より廿七日の八ツ時（14時）まで砂降る、あつさ弐寸（6㎝）程なり、」（清瀬市上清戸　村野家『年代記并過去帳』）

「廿六日、今朝も曇懸、五ツ半之頃漸々六時過□晴之様ニ見候、」（文京区大塚『護國寺日記』）

「（十二月四日条）（近江屋文左衛門子息平八）廿六日夕小田原ニ泊候處ニ町中男女并旅人共ニ津浪入候事無心許存夜中ふせり不申候由、小田原ヨリ品川近所迄最前ハかる石のことく大キサ三四寸廻り有之石降候由、其後ハ黒砂降候由小田原ヨリ品川迄之内旅人合羽笠着馬子なとハ古あわせ（古着）なとかふり往還致候由咄申候、今日昼時御代官細田伊左衛門様御手代、〔略〕」（『伊能勘解由日記』）

「十一月廿五日ゟ、与風（ふと）津浪と言いふらし、小田原西郡ハ不及申、中郡迄米穀高山へ運ビ、絶命を相待耳（のみ）ニ候、然所ニ小田原御奉行衆ゟ被一仰出一候ハ、津浪見へハ、のろしを立ン、大筒をはなさんと御觸ニ付、少シ静居申し候、不二一山（富士）焼ル折からハすさましき炎天ニかゝやきて、其上ニ黒雲を見ル時ニハ必大砂降來ル、猶富士山之焼出シ之穴ニハ黒雲三四ケ月は不絶小山一つ出來、則宝永山とやらん、」（小田原市小船『村開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』）

「廿六日　雷震、灰降りて夜に入、今日承ル、〔吉原からの注進写し引用〕相州のあたりへも百目ハかりの石ふりくたり、麥作ことく〳〵くやふれ（×る）うせたりといふ、」（千代田区一ツ橋『新井白石日記　下』）

（十一月二十三日～二十六日）

１７０７年１２月１６日～１９日に小山町生土（いきど）に降った火砕物の粒径の変化

『降砂記』には静岡県駿東郡小山町生土に降下した火砕物の経時変化が記されている．粒径に関する記述を抜粋すると，１２月１６日（二十三日）は蹴鞠（直径２０㎝弱）のような石・砂が降り，着地時に破砕して中心近くの高温部分が露出し，周囲の草木を焦がし，民家が焼けた．１２月１７日（二十四日）には粒径がやや小さく，すもも（直径４㎝）程度に，

（二十五日）
１２月１８日には粒径がさら小さく豆・麦（直径１㎝弱～数㎜）程度に，１２月１９日（二十六日）
には粒径がさらに小さく，豆・麦の大きさのものがわずかに含まれる程度になった．

「廿三日巳（ミ）の刻 計（ハカリ）りに頻りに石砂（セキシャ）を雨（フラ）す、大（オ）い蹴鞠の如し、地に落破裂而火焔（ヲチヤブケテクワエン）を出す、草木を焦（コガ）し民屋（ミン）を焼く、（略）

廿四日 雨砂微少（ウシヤビセウ）にして桃李（スモモ）の如く、（略）

廿五日 雨砂尚微少（チイソウ）して豆麦（マメムギ）の如し、間（アワイ）に桃李の如く有り、（略）

廿六日 雨砂微塵（ミジン）の如く間（マ）有り豆麦（マメムギ）の如くなり、（略）」（駿東郡小山町生土『降砂記』高橋敏編著（２０２０）地方人夷屋藤吉．p２１-２３．読み下し文から抜粋）

5日目　十一月二十七日（12月20日）

12月20日（十一月二十七日）の天候と噴煙の観察

東京・木更津では寒かった（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』，木更津市犬成『富士山辰巳方焼出シ候事』）．

夜明け前04時（寅刻），名古屋市で地震を感じた（『鸚鵡籠中記』十一月二十七日条）．04時（寅の刻）から06時（卯の刻）まで，名古屋市中区（鍛冶屋町の下）から富士山の噴煙，噴火に伴う明かりがよく見えた．朝のうち煙は黒雲のようであった．名古屋市東区（名古屋百人町）からは，日の出前に夥しく黒雲が大きな岩が重なるように立ちのぼり，日が映るためか，赤く見えた（頼の如シ）．雲は真東に見え，次第に少ずつ北の方へ寄っていった（『鸚鵡籠中記』十一月二十三日条）．山梨県西八代郡市川三郷町一宮浅間神社（いちみやあさまじんじゃ）における観察によれば，この日の噴煙の高さは十一月二十三日（12月16日）とならんで「極天に至る」ほど高かった（『一宮浅間宮帳』）．南都留郡忍野村からの観察でも噴煙高度が高かった（『富士山焼砂吹出乱剰』）．富士山南東麓にある静岡県裾野市須山では，二十七日朝は風下から外れたため降砂が止んだ（『土屋伊太夫文書』）．（口絵地図参照）

東京の市街地（江戸城下）は朝から晴れ，南西の黒雲は目撃されなかった（『伊東志摩守日記』）．また，空振もなかった（『隆光僧正日記』）．しかし『護國寺日記』には，08時頃（五ツ前後），噴煙は（南西ではなく）北の方へ廻ったため，少々雷など鳴り渡っていたものの，降砂は降り止んだ，という観察が記されている．昼前から再び東京の南東（マヽ）に噴煙が目撃されるようになった（『伊東志摩守日記』）．

小田原市小船『村開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』にはこの日から活動が活発化したように記されている．

12月20日午前（十一月二十七日）　宝永噴火で最も北に降砂　（図3-5（a））

東京都北部の清瀬市では前日12月19日（十一月二十六日）夕暮れからの降砂が引き続き，それに加えて12月20日（十一月二十七日）午前には茨城県笠間市，石岡市，ひたちなか市にも砂が降った（清瀬市『年代記并過去帳』・小﨑耕作家『日記』，『湊村古記雑書』）．栃木県芳賀郡小貫では曇り，その南方15kmにある茨城県笠間市平町（たいらまち）（旧宍戸（ししど）：史料では完戸と表記）と，さらに南は砂が大分降り，3cm程（老寸程）たまった．石岡（常陸府中）周辺では明かりをともして朝食を食べたという．小貫では16時（七ツ時）から少しずつ晴れた（栃木県芳賀郡小貫小﨑耕作家『日記』）．ひたちなか市（旧湊村）では，12月20日（十一月二十七日）に灰のような砂が降って暗くなり，皆，燈をともして過ごした（『湊村古記雑書』）．日付は不明だが栃木県芳賀郡茂木町・茨城県水戸市周辺にも降砂があった記録がある（茂木『富士山自焼記』・水戸『護国寺日記』）．清瀬市上清戸の降砂は14時（八ツ時）まで続き6cm程（弐寸）積った（『年代記并過去帳』）．

12月20日夕方（十一月二十七日）　降砂域が東京の中心部へ南下　（図3-5（b））

清瀬市の降砂は14時（八ツ時）頃に止んだ（清瀬市『年代記并過去帳』）．16時頃（七ツ頃）（16時・17時（申ノ刻）（七ツ半頃））以降，静岡県裾野市須山，東京都文京区・台東区・墨田区で降砂が始まり（『土屋伊太夫文書』・『護国寺日記』・『岡本元朝日記』・『伊東志摩守日記』・『富士山焼記』），22時頃（23時（四ツ半）・20時（戌ノ刻）・22時（亥ノ刻））まで続いた（『岡本元朝日記』・『伊東志摩守日記』・『富士山焼記』）．夜の降砂の記録は港区六本木『鹿島藩日記』・『直堅公御在府日記』，台東区下谷 對馬藩『江戸藩邸毎日記』，千代田区有楽町 肥前島原藩『江戸幕府日記』，『鸚鵡籠中記』，千代田区一ツ橋『新井白

石日記 下』にもある．東京では夜中に時々震動があり，遠くの雷声が時々少し聞こえた（『伊東志摩守日記』）．千葉県木更津市犬成でも１２月２０日１８時頃から降砂が始まり，翌２１日（二十八日）にも断続した．香取郡多古町では少し降り，香取市佐原では晴天であった（平山静江家『過去帳』，『伊能勘解由日記』）．２０日（二十七日）午後に風向きが変わり，降灰の分布軸が富士山の北東方向から東北東・東へ南下したことを反映していると考えられる．

「（十一月二十三日条）○廿七日、日光雲間に少し時々見ゆ、寒気甚、未刻ゟ天曇り、申刻（16時）ゟ又砂降る、戌（20時）の前に止む、」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』）

「廿七日朝空ウツム、寒クシテ同暮六ツ時ゟ四方クラクシテ又砂フリ、夫ゟ廿八日モフリ少シ晴テモ砂ハフリ、」（木更津市犬成『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「（廿七日条）○寅（04時）刻少地震」（愛知県名古屋市『鸚鵡籠中記』）

「（十一月二十三日条（富士山噴火　廿七日の江戸の記事に続き）

○尾州名古屋にても、鍛冶屋町（名古屋市中区）の下などにては富士の焼る煙よく見ゆ、寅（04時）刻ゟ卯（06時）の刻過迄火気能見ゆ、朝の内は煙り黒雲の如く見ゆ、昼の内も時により見ゆ、予か辺（名古屋百人町・名古屋市東区）にては、日の出前に夥敷黒雲大磐石の重りたるか如く、立雲有り、端々日の映するにや、頼の如シ、真東に見へ次第に少宛北の方へ寄ると、是則、富士の煙也、其外所々にて見ゆる、世俗立雲と号す、毎朝見ゆ、但シ曇は不見、」

（愛知県名古屋市『鸚鵡籠中記』）

「（二十三日四日は、江戸ところによりて闇のごとくにて見えず）二十七八日もかくのごとし、燈火を昼も立て、物の色を見る、一尺先の見えざる時あり、東の国は所によりて不同あり、（略）煙の高き事、二十三日と七日とは極天に至る、そのほかは天の半ばなり、」（『一宮浅間宮帳』）

「廿七日は煙も高く見へけれハ昼の頃ゟ日かけさす、」（『富士山焼砂吹出乱剰』）

「廿七日ニ者（は）朝砂止、空（ソラ）も晴（ハレ）候得者、晩（バンノ）七ツ時（16時）分ゟ又砂降り夜ニ入候而も止（止み申さず）不申」、（『土屋伊太夫文書』）

「一、廿七日、東南黒雲退、四方一面ニ白雲ニなり、雪降空の叟くに有之、西北之風少々吹申候、頃日ゟ天色静ニ見江申候、昼前ゟ東南之方ニ薄黒雲出候へ而、次第ニ北之方江黒雲東ゟおゝい申候、風少も吹不申候、七ツ時（16時）ゟ北風少々吹、北之方江おゝい候黒雲、南之方江廻り、北之かた晴、右黒雲天中ニおゝい七ツ半時（17時）ゟおゝい、黒き砂降申候、次第ニ黒雲南江行、夜四ツ半（23時）時ゟ砂降止、空少々晴、星出候、夜中時々震動いたし候、雷聲遠少々きこへ申候、時々ニ、」（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』）

「廿七日、登城、今朝ゟ鳴動無之、折々晦明也、夜ニ入砂降ル、」（千代田区神田駿河台『隆光僧正日記』）

「廿七日、漸天氣、南之方ゟ晴曇縣北へ廻り申候、

一、夜明テ巳後（以後）五ツ（08時）前後、曇北之方へ廻リ、少々雷なと鳴リ渡リ申候、焼砂も随而降止申候、

（略）

一、七ツ（15・17時）前ゟ焼砂降リ、餘程澤山ニ降留リ申候、常州水戸當（邊）り迄も、少々宛降り申沙汰有之候、」（文京区大塚『護國寺日記』）

「二十七ゟ又砂夥敷降、雷平等（同じ）、二十九（日）迄鳴申候、其内度々地震も仕候、二十九（日）ゟ段々雷も静ニ、砂又同シ、十二月八日迄日数十五六日降續候、鳴物も何つとなく静申候、砂降内ハ黒雲富士山ゟ出、帯の如ク真東へつらなり、其下耳（のみ）降、何方ニ而も其下ニ見へ申候、箱根山ゟ西南は一圓降不申候、十一月廿五日ゟ、与（ふと）風津浪と言いふらし、小田原西郡ハ不及申、中郡迄米穀高山へ運ビ、絶命を相待耳（のみ）ニ候、然所ニ小田原御奉行衆ゟ被」仰出」候ハ、津浪見へハ、のろしを

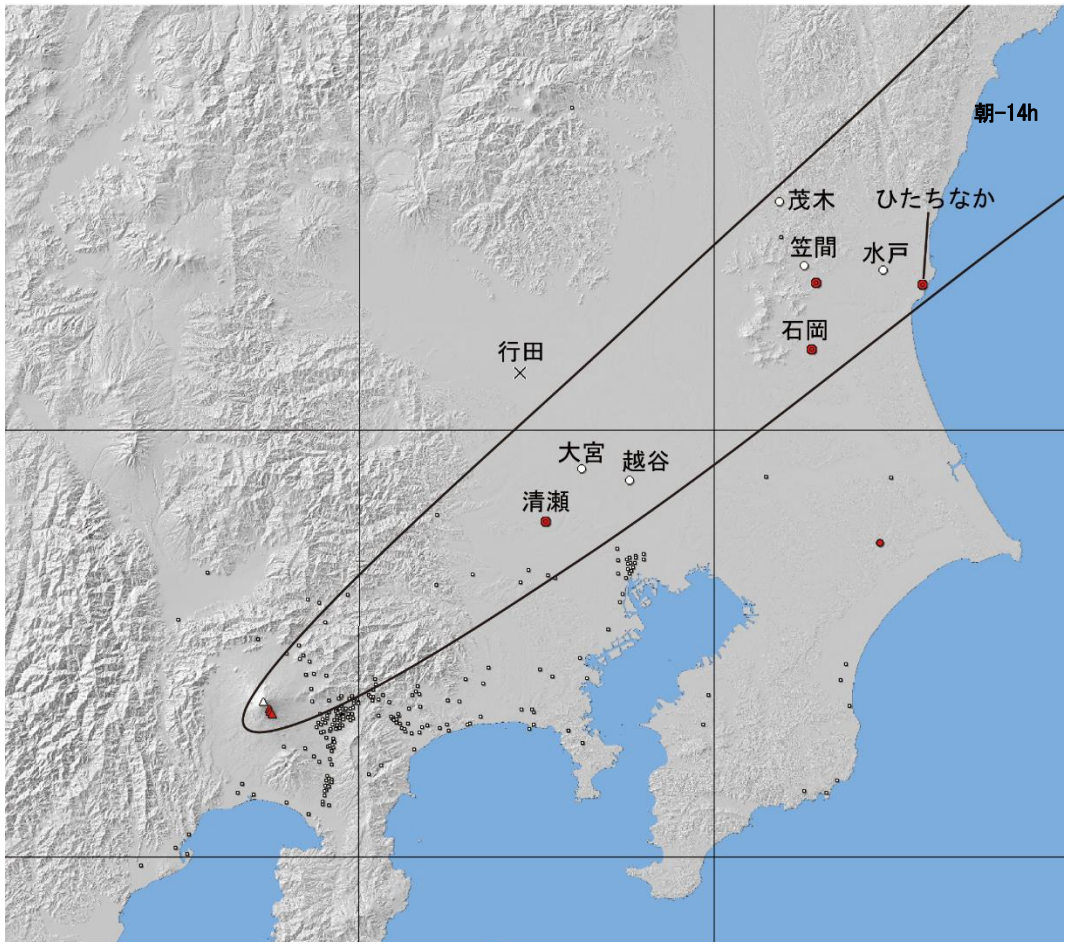


図 3-5(a)　富士山宝永噴火　降砂分布

5 日目　宝永四年十一月二十七日（1707 年 12 月 20 日）朝 - 14 時

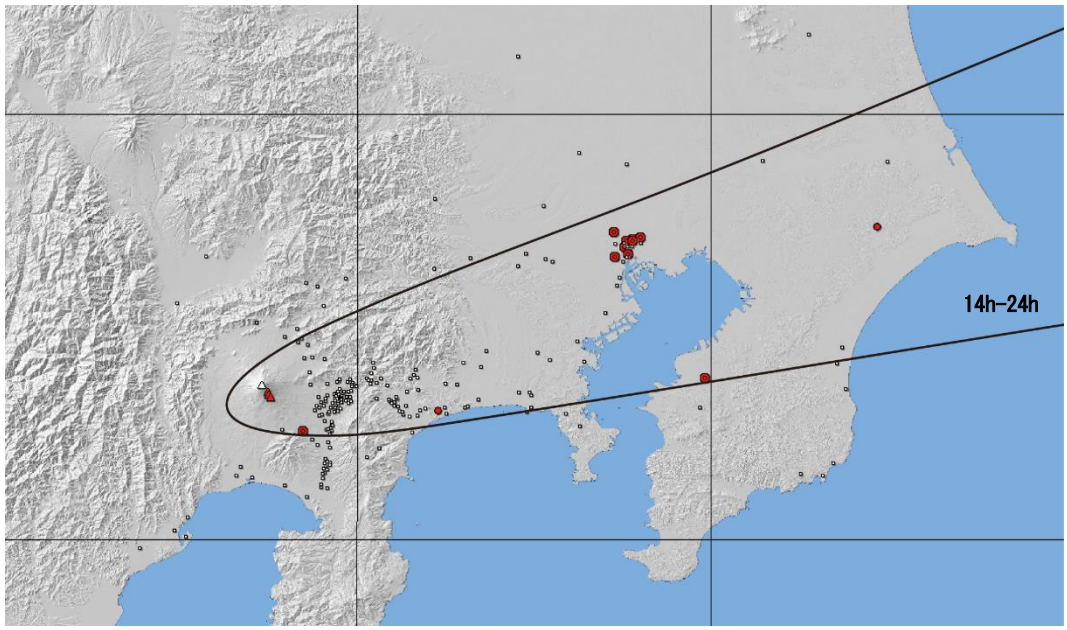


図 3-5(b)　富士山宝永噴火　降砂分布

5 日目　宝永四年十一月二十七日（1707 年 12 月 20 日）14 - 24 時

立ン、大筒をはなさんと御觸ニ付、少シ静居申し候、不二山（富士）焼ル折からハすさまし き炎天ニかゝやきて、其上ニ黒雲を見ル時ニハ必大砂降來ル、猶富士山之焼出シ之穴ニハ黒雲三四ケ月は不絶小山一つ出來、則宝永山とやらん」（小田原市小船『村開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』）

「但当地ゑも廿六日の暮より廿七日の八ツ時（14時）まで砂降る、あつさ弐寸程なり」（清瀬市上清戸『年代記并過去帳』）

「廿七日　曇、　完（ししど：笠間市宍戸）戸　ゟさき（南方）ハ砂大分ふり壱寸程たまる、　府（常陸府中　石岡）中　邊ニてハ朝食をあかしニて給候由、七ツ時ゟ少ツゝ晴ル、」（栃木県芳賀郡小貫　小﨑耕作家文書『日記』）

「寶永四年亥　同廿七日迄やみ入はいの様成砂ふり申候、皆々人々廿七日迄ハ燈を立て罷在候、湊村之義ハ廿七日斗也闇ニ相成皆々燈をともして罷在候、」（『湊村古記雑書』）

「右之大変江戸中ハ不及申、江戸奥細川玄蕃頭殿御在所茂テ木と申所灰砂降候由注進有之、行程江戸ゟ三十六里、（降灰日付無し）」（『富士山自焼記』）

「廿七日、曇候、（略）○巳ノ刻御殿へ罷出候（略）○御勘定衆ゟ様躰書写来候、去廿三日駿河地震、朝ゟ三十度計有之、冨士山鳴出煙り立候処へ雪流かゝり煙巻上り震動、近郡之者共男女氣を失候者多候へ共、死人ハ無之由、昼ゟ晩迄黒煙ニて不見分候、暮ゟ煙りと見得候處火災ニ候由、駿州吉原村名主・老百姓御代官へ申上候由也、然ハ御當地へ砂降り候ハ右冨士山之巻上候砂灰等ちり降り候と相見得候、震動も右之ひゞき（響）ニ御座候、大山ニ右之通り候ハヽ関八州へひゞき（響）可有之事ニ候也、震動ハ廿二日ゟ有之候とも申候、○今晩御納戸ニて御相伴いたし申ノ刻退出、（略）○暮ニ御殿へ罷出、亥ノ中刻退出、○今晩も申ノ下刻ゟ砂ふり戌ノ刻止候也、○冨士山近郷家も潰候由也、」（台東区台東『岡本元朝日記』）

「廿七日　東南西晴、北大ニ曇、　従（より）二申ノ刻沙降及黄昏ニ東南西大ニ陰、北方少霽及亥刻ニ屬晴、此間世上咳氣甚盛、一人無免者、是冨士山炎上之含毒氣故云々、」（『冨士山焼記』）

「同月廿七日　昨夜も余程砂降曇、今日も同前、（略）」（港区六本木『鹿島藩日記』）

「同　二十七日　此夜も、すなふりくもり申候、今日も曇り申候、（略）」（港区六本木『直堅公御在府日記』）

「十一月廿七日　曇天　**砂石**夜ニ入候迄も降ル、冨士山焼候故、右之通砂落」（台東区　對馬藩『江戸藩邸毎日記』）

「廿七日　丙午　少曇従申半刻西北之方響成、従酉刻小砂降、鳴動は無之」（千代田区有楽町　肥前島原藩『江戸幕府日記』）

「廿七日　書之内ハくもる、日暮より又灰降」（千代田区一ツ橋『新井白石日記 下』）

「廿七日は少々宛降」（香取郡多古町　平山静江家『過去帳』）

「廿七日晴天」（香取市佐原『伊能勘解由日記』）

埼玉県南部の降砂記録

三井文庫『宝永四年丁亥十月四日大地震之由来』には宝永地震と宝永噴火を記録した史料があり，武蔵国忍（おし：埼玉県行田市）では宝永噴火を通じて降灰がなかったこと，忍と江戸と中間にある大宮市では砂が降り，９㎝（三寸）積ったことが記されている．また越谷市に砂が９㎝（三寸）積った記録（『産社（ウブシヤ）祭礼帳』）がある．これらの史料には日付がないが，江戸市街地よりも北方で降砂が記録された１２月２０日（十一月二十七日）であった可能性が高い．

「十一月廿二日、富士山之續足高（愛鷹）山と申候処焼申候、忍ゟも江戸ゟも三拾里程も有之候、廿三日昼

ゟ南海之方震動、江戸、忍邊も地車など引候様ニ響キ、戸障子等もびり〳〵と響キ折々雷之様成音聞へ申候、地震ニ可有之歟（か）と気遣ひ候処、廿三日夜、富士山之近所大分焼、煙、稲光り之様ニ火玉見へ申候、忍は富士ゟ艮之方ニ而、江戸ハ西より卯ノ方ニ当リ可申候、廿三日ゟ砂降、浮石之様なる石も交りふり申候、砂之色黒ク鉄（クロカネ）之粉之様ニ候、忍ハ降不申候、（略）忍ゟ江戸迄半分道大宮町と申処迄は砂ふり申候、三寸程降、昼時迄行燈立指置候」（三井文庫『宝永四年丁亥十月四日大地震之由来』）

6日目　十一月二十八日（12月21日）

降砂の休止

（十一月二十八日）
12月21日朝には噴火が止み，降砂が止んで，ほとんどの地域で晴れた．

静岡県裾野市須山では，前日の12月20日（十一月二十七日16時頃）16時頃から12月21日（十一月二十八日）明け方まで砂が降り続いたが，朝に晴れた．12月21日（十一月二十八日），12月22日（二十九日），12月23日（三十日），12月24日（十二月一日）の四日は，昼間は砂が降らず晴天であったが，山鳴り，地震は絶えなかった（『土屋伊太夫文書』）．

東京では，前日12月20日（十一月二十七日）夜から薄雪が降った（台東区台東『岡本元朝日記』）という記述と，霜が降った（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』，千代田区有楽町 肥前島原藩『江戸幕府日記』，『富士山焼記』）という記述がある．朝から南に雲が見られたが，北は晴れ，寒かった（『岡本元朝日記』『富士山焼記』）．09時前（五ツ半前）に「余程」の震動があった（『伊東志摩守日記』）．『護國寺日記』には10時（四ツ前）に地震が少しあり，響も少々あったと記されている．その地震に続いて，全天に薄く白い曇が広がったが，薄雲であったため日光は見られた．東南の薄く黒い雲はそのままあり，天の半分は終日曇っていた．北西は晴れ，夜中も雲は南東にあった．雷声が遠くから時々聞こえた．この日，「砂降らず」とする史料『伊東志摩守日記』，肥前島原藩『江戸幕府日記』，千代田区一ツ橋『新井白石日記 下』，山梨県南都留郡忍野村『富士山焼砂吹出乱剰』と，降ったとする史料　東京都港区六本木（鹿島藩）『直堅公御在府日記』・台東区下谷 對馬藩『江戸藩邸毎日記』，新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』がともにある．少量の降灰があったことを示していると考えられる．

（十一月二十八日）12月21日 木更津の降灰と名古屋の有感地震　（図3－6）

木更津市では12月21日（十一月二十八日）は少し晴れたが，砂は降った．10時（四ツ時）に一坪（堆積層厚換算0．3㎜）に積った砂を計ったところ五升四合（昼九ツ時）あった．12時頃から降砂があり，夜中も降った（『富士山辰巳方焼出シ候事』）と，降灰が断続していたようである．

愛知県名古屋市では19時頃（酉半）と，21時頃（亥前）に地震があった（『鸚鵡籠中記』）．

「（廿七日ニ者（注）アサスナヤミ朝砂止、空（ソラ）も晴（ハレ）候得者、晩（バンソ）七ツ時（16時）分ゟ又砂降り夜ニ入候而も止不申（止み申さず））廿八日明方迄降、朝晴（ハレ）、同二十九日、晦日（ミソカ）、朔日（ツイタチ）右四日者昼之間ハ砂降不申晴天（セイテン）ニ而、然共、山之鳴、地震者絶（タイ）不申、」（『土屋伊太夫文書』）

「廿八日、昨夜中薄雪少降候、今朝天氣晴候なり、○（略）今日寒候也、（略）　○今日ハ晴候てよく候、いまた南ノ方雲有之候（共時々雲切有之能候也、」（『岡本元朝日記』）

「廿八日薄晴天、」（香取市佐原『伊能勘解由日記』）

「廿八日に止、諸人安堵、」（香取郡多古町『平山静江家過去帳』）

「廿八日、朝霜多降申候、北之方晴、南之方曇申候、五ツ半前（09時）震動余程致、四ツ時（10時）ゟ惣天白薄曇候、雲薄故日光は有之候、東南薄黒雲少も不退つかへ、終日天半分内ニ有之候、北西は晴申候、夜中雲右之通ニて東南の方ニて雷聲遠く時々いたし候、」（『伊東志摩守日記』）

「廿八日　丁未　晴、朝霜厚、砂不降震動相止」（『肥前島原藩『江戸幕府日記』）

「廿八日、四ツ前地震少有之、響なとも少々有之候、」（文京区大塚『護國寺日記』）

「廿八日　今日は灰降す、後聞、駿府の邊よりハ富士足高の間より煙みえて、山やくると見えたり、地震もかろかりしよし、今日大納言様（家宣）御風氣にて、御本丸へ不被爲入之由、」（『新井白石日記 下』）

「廿八日ハ鳴も煙和て日陰てり鎮給ふ、其日ニ当り当村之者共申様ハ最早他国ニハ石砂大分降積人民こ

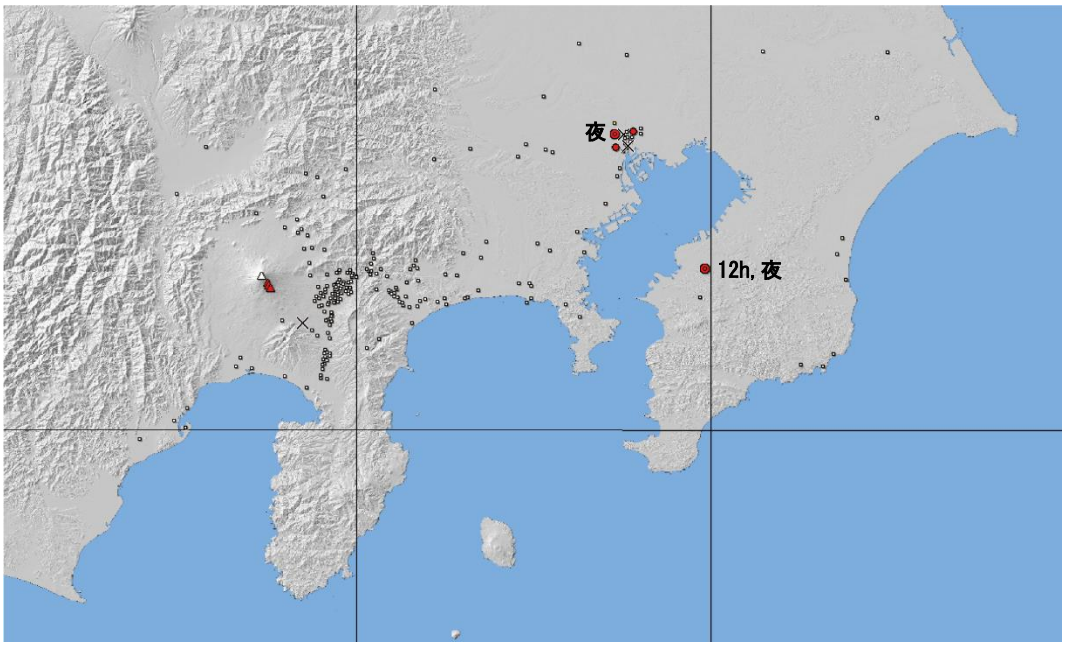


図 3-6　富士山宝永噴火　降砂分布

6 日目　宝永四年十一月二十八日（1707 年 12 月 21 日）

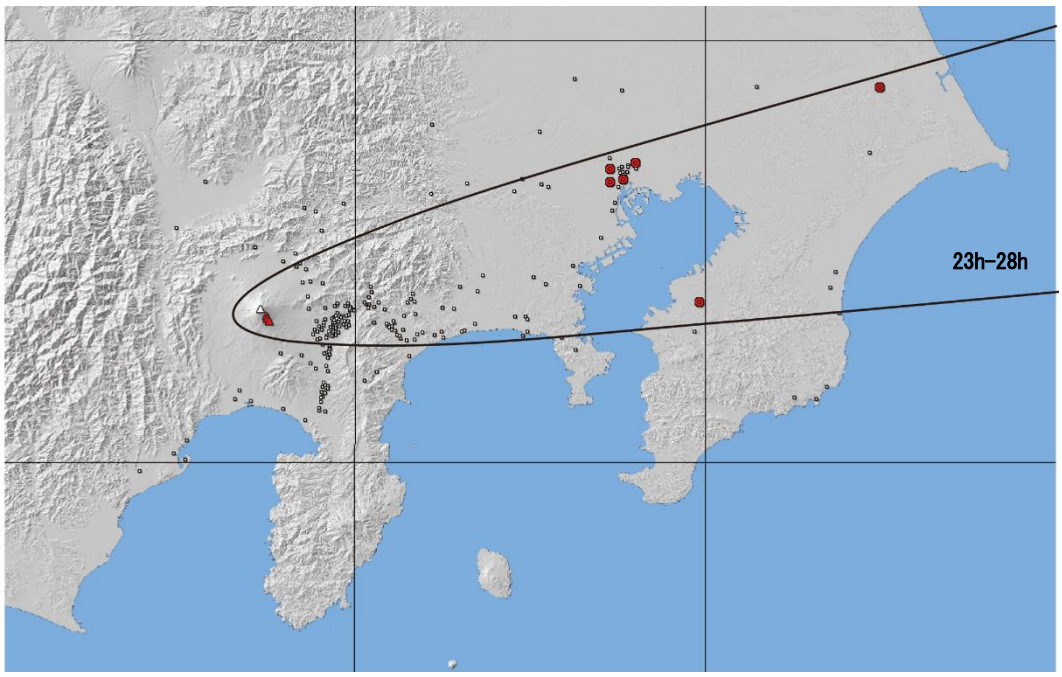


図 3-7　富士山宝永噴火　降砂分布

7 日目　宝永四年十一月二十九日（1707 年 12 月 22 日）23 － 28 時

とごとく退転と承及心細キ折節に当村にをいてハきのふ迄も其日迄も其砂ニても石ニてもふりをち申さぬにより最早此ほとの乱剰日柄も程久敷候、唯偏諸神の御無僧かと皆人同音に被レ申いつつより御悦ハ限なし、」（『富士山焼砂吹出乱剰』）

「十一月廿八日　陰天　時々少砂降、」（對馬藩『江戸藩邸毎日記』）

「同廿八日　今日もすな降申候」（『直堅公御在府日記』）

「（□廿八日　○於江戸、略）○今夜も砂降る、」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』）

「廿八日、昨夜中薄雪少降候、今朝天氣晴候なり、○（略）今日寒候也、○今晩御相伴いたし申ノ刻退出、○暮に御殿へ罷出、御納戸ニて御相手いたし、亥ノ中刻（22時）致退出候、○今日ハ晴候てよく候、いまた南ノ方雲有之候へ共時々雲切有之能候也、」（『岡本元朝日記』）

「廿八日　丁未　晴、朝霜厚、砂不降震動相止」（肥前島原藩『江戸幕府日記』）

「廿八日モフリ少シ晴テモ砂ハフリ、同四ツ時（10時）一坪計見ルニ五升四合有リ、亦昼九ツ時（12時）ゟ又砂夜中フリ、」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「□廿八日　○酉（19時）半地震、○亥（22時）前少しゆる、（略）」（愛知県名古屋市『鸚鵡籠中記』）

将軍・諸大名の体調不良による月次（つきなみ）御礼欠席

毎月一日，十五日，二十八日は「月次（つきなみ）御礼」とよばれる諸侯の定例の登城日であった．十一月二十八日（12月21日）は，風邪気のため，公（将軍 徳川綱吉），大納言（徳川家宣）（江戸幕府第6代将軍（在職：宝永六年（1709年）- 正徳二年（1712年）），尾張殿（徳川吉通），紀伊殿（徳川吉宗），水戸中将殿（徳川吉孚：水戸藩世嗣）ら，大名六十人程が欠席し，出仕者は例月の3分の1ほどであったという（『鸚鵡籠中記』，『隆光僧正日記』，『富士山焼記』）．将軍が欠席したとする史料は『鸚鵡籠中記』のみ．『富士山焼記』では大名四十六人が欠席）．十二月一日（12月24日）の登城日にも大納言（徳川家宣）（『岡本元朝日記』）はじめ八十二人が欠席した（『基熙公記』）．

「（□廿八日）○於江戸、公（将軍 綱吉）御風気故御登城無之、惣而諸大名大方風引、今日の出仕例月の三分一ばかりなり、其外朝市一篇に咳気甚流行、貴賤悉感冒、」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』）

「廿八日　天眼快霽、霜大降太冷、大納言家御風氣、尾張殿（徳川吉通）、紀伊殿（徳川吉宗）、水戸中將殿（徳川吉孚：水戸藩世嗣）-風-氣云々、今日大名四十六人依風氣不出仕、」（『富士山焼記』）

「一、廿八日、登城、月次之御礼如常、但シ大納言（徳川家宣：江戸幕府第6代将軍）様御風氣ニ付御出仕不被遊、尾張殿（徳川吉通）・水戸中將殿（徳川吉孚：水戸藩世嗣）御風氣、御出仕無之、其外大名六拾人程風氣之御断、出仕無之、殊之外風はやる、今日は天晴ル、七つ時ゟ天曇ル、」（『隆光僧正日記』）

「朔日（十二月一日）、曇ル、（略）○西ノ丸大納言（徳川家宣）様御風氣ニて去廿八日（十一月二十八日）・今日（十二月一日）共ニ御本丸へ御出無之ニ付、明日御大名様方西丸へ為窺御機嫌御　登城可然旨、御手寄之御老中様ゟ被　仰渡候、此方様へも秋元但馬守（十二月番老中）様ゟ下山田新五郎被為呼、御書付を以被　仰越候也、」（『岡本元朝日記』）

「去ル朔日（十二月一日）之御礼ニも尾張殿紀州殿ヲ始八十二人之病気断ニ而登城無之候、其以下家々事之外病人多ク別而難義仕候、併損シ申様成病気ニ而無之候、五七日之内得快気申事候」（『基熙公記』）

7日目　十一月二十九日（12月22日）　冬至

12月22日（十一月二十九日）　静岡県・神奈川県内の噴火活動の観察状況

静岡県裾野市須山では，（12月21日（十一月二十八日），）12月22日（十一月二十九日），（12月23日（十一月三十日），12月24日（十二月一日））は昼の間は，砂は降らず晴天であったが，山鳴り，地震は絶えなかった（『土屋伊太夫文書』）．

神奈川県小田原市小船では，二十九日まで山鳴りがあり，たびたび地震もあったが，二十九日からだんだん雷も静かになり，砂の降下もおさまってきた（『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』）．

12月22日（十一月二十九日）　東京の噴火活動の観察状況　（図3－7）

12月22日（十一月二十九日）朝，東京では，霜が多く降った．北西方向は晴れ，南東方向には薄黒雲があった．昼間は晴天で砂は降らなかったが，山鳴り，地震は絶えなかった．昼時から風向きが変わって薄雲が東京の上空を覆った．16時（七ツ時）には黒い雲が天中を覆った．18時（暮れ六ツ時），東南の方から薄黒い雲が天頂へひろがったため，星も見えなかった．夜になり，23時（四ツ半時）から12月23日04時過ぎ（七ツ過）まで砂が少し降った（『伊東志摩守日記』）．夜中に砂が降った記録は肥前島原藩『江戸幕府日記』，對馬藩『江戸藩邸毎日記』，『富士山焼記』にもある．夜半後，一，二度震動があった（肥前島原藩『江戸幕府日記』）．12月23日03時（八ツ半）に震動が時々あり，稲光がたびたびあり，雷が南東方向遠くで時々鳴った．12月23日05時（七ツ半）から雨が降り出し，震動・雷は止んだ（『伊東志摩守日記』）．

12月22日（十一月二十九日）　千葉県内の天候・降砂　栃木県内の観察

香取市佐原では，22日（二十九日）は晴れたが，14時（八ツ時）に，南東方向から青い雲が出た．夜に入ると暗くて見えなくなり，雨が少し降り，砂も降った（『伊能勘解由日記』）．

木更津市犬成では，22日（二十九日）朝は晴れていたが，砂は降った．10時（四ツ時）に一坪あたりに積もった砂・灰の体積を計ったところ一斗四升四合（堆積層厚換算0．8㎝）あった．同日夜に入っても砂が降った（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．

栃木県芳賀郡茂木町小貫では，この日天気はよかった．16時（昼七ツ時）から南の方で太鼓のような音がたびたびあり，夜中まで鳴った．22時（夜ノ四ツ時）から南方で稲光がたびたびあり，空が明るかった．

「廿八日明方迄降、朝晴（ハレ）、同二十九日、晦日（ミソカ）、朔日（ツイタチ）右四日者昼之間ハ砂降不申晴天（セイテン）ニ而、然共、山之鳴、地震者絶（タイ）不申、」（『土屋伊太夫文書』）

「二十九（日）迄鳴申候、其内度々地震も仕候、二十九（日）より段々雷も静ニ、砂又同シ、」（『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』）

「廿九日、冬至、朝霜余程降候、東南ニ薄黒雲出不退有之候、西北は晴申候、昼時より次第東南之薄雲天中江おゝい、日光を覆申候、北風少々吹申候、七ツ時ニは黒雲天中ニおゝい、西北も白雲ニなり申候、暮れ六ツ時、東南之方ゟ薄黒き雲、天中江押おゝい、星も見江不申候、西北之方は白雲ニ成候、風、よい之内は少も吹不申候、四ツ半時より砂少々降、七ツ過時迄降候へ而止候、八ツ半時、震動時々いたし、稲光度々致候、雷時々東南之方遠天ニ而鳴申候、七ツ半時ゟ雨降出し候得て、震動雷止申候、」（『伊東志摩守日記』）

「廿九日　戊申　晴、従未刻曇、少響成、夜入砂少宛降、夜半後二両度震動　但今日天気之曇ニ而は無

之、従富士山之方相陰、」（肥前島原藩『江戸幕府日記』）

「十一月廿九日　陰天　夜ニ入少雨降、」（對馬藩『江戸藩邸毎日記』）

「廿九日　晴天、夜中沙降、従午中刻陰、此間於　御本丸、毎日御触有之云々、」（『富士山焼記』）

「廿九日晴天八ツ時（14時）辰巳（南東）之方ヨリ青雲出夜ニ入くらく候而不見へ、（略）夜ニ入雨少し降砂降、」（『伊能勘解由日記』）

「廿九日朝晴レ砂ハフル、同四ツ時（10時）一坪見ルニ壱斗四升四合有リ、同日夜ニ入テモフリ、」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「廿九日　天氣吉、世間はい砂ふり天なる故神事、昼七ツ時（16時）より南ノ方ニて太鼓ノ叟く度々、夜中迫なる、夜ノ四ツ時（22時）ゟ南ニていな光度々、空、あかし、」（栃木県芳賀郡茂木町小貫『小﨑耕作家　日記』）

８日目　十一月三十日（晦日）（１２月２３日）

１２月２３日朝の降雨と降砂　（図３－８）

（十一月三十日）
１２月２３日未明から東京・木更津市，雨まじりの砂が少し降った（『鹿島藩日記』）．名古屋市でも昼前後にしばらく小雨が降り（『鸚鵡籠中記』），千葉県香取市，栃木県芳賀郡茂木町でも雨・雪が降った（『伊能勘解由日記』，小﨑耕作家『日記』）．東京では１２時（昼九ツ）過に雨が止み，薄曇りになった（『伊東志摩守日記』）．『護國寺日記』には，１２月２４日（二十九日　夜七ツ半）０５時頃から雨天になり，０６時（六ツ）過には「余程」小雨が降り，その後１４時（八ツ時）には晴れた，とある（『富士山焼記』）にも同様の記述がある）．広域で雨が降っていることから，富士山近傍でも砂交じりの雨が降ったとすれば，単独では降下しないはずの砂サイズの火砕物に富む特徴的な層，あるいは水で浸食された構造が残されている可能性がある．

木更津市大成では０８時（五ツ時）から石・砂が降った（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．木更津で「石」が降った，とする記述は十一月二十四日以来である．

山梨県南都留郡忍野村からの観察では，三十日は地震も火煙も激しく，灼熱した噴出物も以前のように放出されてすさまじかった，とある（『富士山焼砂吹出乱剰』）．しかし，静岡県裾野市の『士屋伊太夫文書』に山鳴り，地震は絶えなかった，とあるものの，激しい噴出を支持する観察記録はない．

「廿八日明方迄降、朝晴（ハレ）、同二十九日、晦日（ミソカ）、朔日（ツイタチ）右四日者昼之間ハ砂降不申晴天（セイテン）ニ而、然共、山之鳴、地震者絶（タイ）不申、」（『士屋伊太夫文書』）

「卅日、夜七ツ半之頃（０５時頃）ゟ雨天懸リニ罷成、六ツ過（０６時）ニ者餘程小雨降、後八ツ時（１４時）ニ者晴」（『護國寺日記』）

「同晦日、今暁又砂降リ、夜明而ゟ雨ましりすな少しふり候也、」（港区六本木『鹿島藩日記』）

「同晦日　（略）○朝之内薄曇、昼前後須臾微雨シテ止、　未（１４時）より晴（略）」（名古屋市『鸚鵡籠中記』）

「晦日、くもり空小雨少降、」（香取市佐原『伊能勘解由日記』）

「晦日　天氣悪敷、雨雪少ふる、」（栃木県芳賀郡茂木町小貫　小﨑耕作家『日記』）

「一、卅日、朝南東黒雲退、四方白雲ニ成、雨降申候、少々之間止候得ては又小降ニ雨降申候、北風少々つゝ吹申候、昼九ツ過ゟ雨止薄曇りニなり雲中ゟ日光差出申候、」（『伊東志摩守日記』）

「晦日　曇、戸障子時々動、辰刻過雨降書ル、沙少降、及申刻晴、大納言家御小験云々、富士山見分ニ被レ遣御徒目付（カチ）御小人目付帰参メ申メ云、去廿五日丑刻着ニ箱根ニ自レ夫（それ）弥（いよいよ）飛（ク）レ駕ヲ駿河ノ國着ニ淺間ノ宮ニ自淺間到ニ富士山ニ行程三里因リレ是レ遥ニ富士山之方ヲ望ニ見候ニ頂上ニ者（は）雪如常ニ住、東方従ニ中央ニ○火柱立ニ高サ一間廻リ三尺程ニ見ユ、烟リ東方江靡（なびき）、沙ヲ巻ニ上、根ニ方甚ニ闇メ如レ夜、小ニ石降ルニ如レ雨ク、自レ是先ギ不レ能レ行ケ、中ニ々非ンハ二御ニ威ニ光ニ是レ迄茂（も）不レ能レ来ルニ之由、以ニ繪圖ヲ一言上云々、」（『富士山焼記』）

「三十日朝七ツ時（０４時）ゟ雨ニ成、又三十日五ツ時ゟ石砂フル、同夜ニ入テモチラチラニフル、」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「晦日は其日当り何ゟも地震も火煙も繁り相見へ候、扨又火玉之事ハ本のことく天地へ燃上り焼出ルこと右のごとく冷鋪（すさまじ）さは限なし、」（山梨県南都留郡忍野村『富士山焼砂吹出乱剰』）

「廿八日明方迄降、朝晴（ハレ）、同二十九日、晦日（ミソカ）、朔日（ツイタチ）右四日者昼之間ハ砂降不申晴天（セイテン）ニ而、然共、山之鳴、地震者絶（タイ）不申、」（『士屋伊太夫文書』）

１２月２３日夜の東京の降砂（十一月三十日）

東京では夕方に噴煙が現れたが，色は以前のようには黒くなかった．２２時（四ツ）から

23時（四ツ半）過ぎまで砂が降った．一旦明るくなった後，また12月24日02時（八ツ）から04時（七ツ）までは多く，06時（六ツ）までは少しずつ降り，夜が明けた後（十二月一日朝）に止んだ（『伊東志摩守日記』）．東京に12月23日（十一月三十日）夜に砂が降った記録に『鹿島藩日記』（十二月朔日条）・『直堅公御在府日記』（十二月朔日条），『鸚鵡籠中記』（十一月二十八日条），肥前島原藩『江戸幕府日記』，對馬藩『江戸藩邸毎日記』，『岡本元朝日記』がある．『護國寺日記』（十二月朔日条）には，夜のうちから大分強く降り，黒砂など0．6～0．9㎝（二三分）ほど降り積った，と記されている．

木更津市犬成でも，夜に入ってからも，ちらちらと砂が降った（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．香取市佐原では，12月23日（十一月三十日）夜に砂と毛が降り，翌12月24日（十二月一日）に人々がそれを拾ったという（十二月一日付『伊能勘解由日記』）．

「（卅日）夕方ニ成西北晴申候、東南ゟ薄黒き雲、天半内ニおゝい有之候、薄黒き雲之内ニ白雲引はへ、黒雲之内ときれ有之候、頃日之（如く）叟く根黒き雲は無之候、暮候へ而四ツ（22時過ぎ）過ゟ砂少々降出シ四ツ半（23時過ぎ）過迄ふり申候へ而止申候、夫（それより）ゟあかるくなり申候、又八（12月24日02時）ツ ゟくらく黒おゝい出、砂多く七（24日04時）ツ 迄降、六ツ（06時前）前迄ニ少々つゝ降、夜明候へ而止申候、夜中風吹不申候」

（『伊東志摩守日記』）

「（十二月朔日）曇、昨（十一月三十日夜）夜 も砂ふり申候、（略）」（『鹿島藩日記』十二月朔日条）

「（十二月朔日） くもり、昨（十一月三十日夜）夜 もすなふり申候、（略）」（『直堅公御在府日記』十二月朔日条）

「○十二月朔日 昨（十一月三十日）夜 砂多降、」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』十一月二十八日条）

「（十二月朔日）朝之内曇懸、夜（十一月三十日夜）之 内ゟ大分強降、黒砂など二三分（6～9㎜）計降リ積候、」（『護國寺日記』十二月朔日条）

「晦日 己酉 微雨、昼夜折々砂少宛降、」（肥前島原藩『江戸幕府日記』）

「十一月晦日 陰天 夜ニ入砂降、」（對馬藩『江戸藩邸毎日記』）

「晦日、昨（二十九日夜）夜 中ゟ少雨降ル、（略）○今夜中も又砂降り候也、震動ハ廿七日ゟ無之候、いまた富士山焼候と相見得候也、」（『岡本元朝日記』）

「三十日朝七ツ（04時）時ゟ雨ニ成、又三十日五ツ（08時）時ゟ石砂フル、同夜ニ入テモチラチラニフル、」（木更津『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「（晦日）夜ニ入別而闇ク砂降、今日夜ニ入毛降、」（香取市佐原『伊能勘解由日記』）

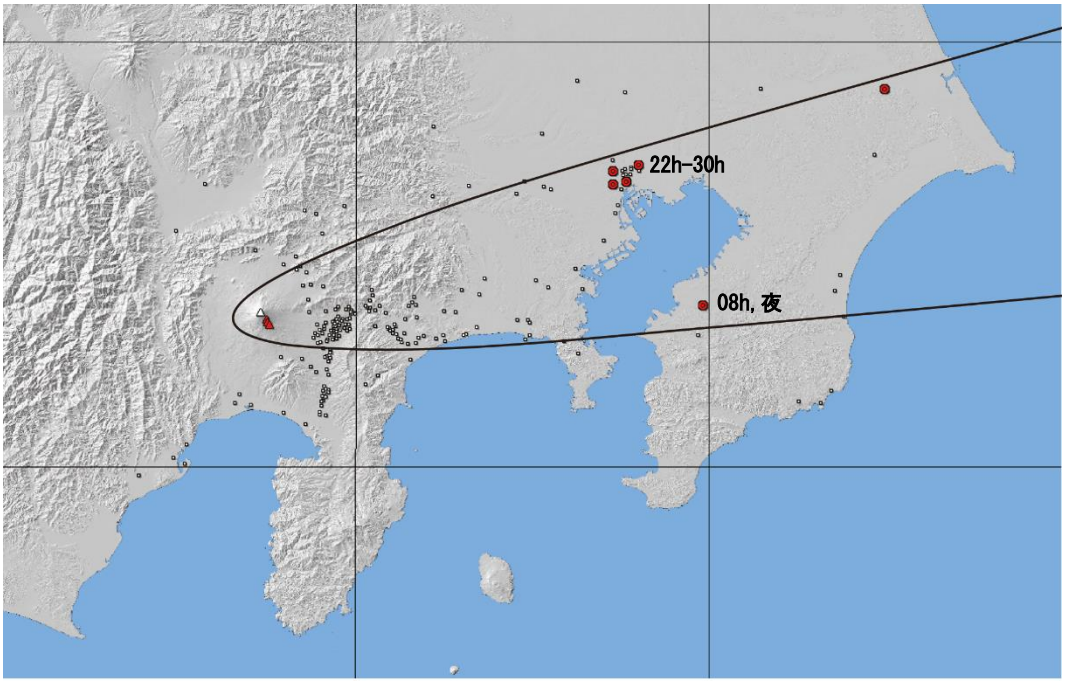


図 3-8　富士山宝永噴火　降砂分布

8 日目　宝永四年十一月三十日（1707 年 12 月 23 日）木更津 08 時，東京 22h-30 時（24 日 06 時）

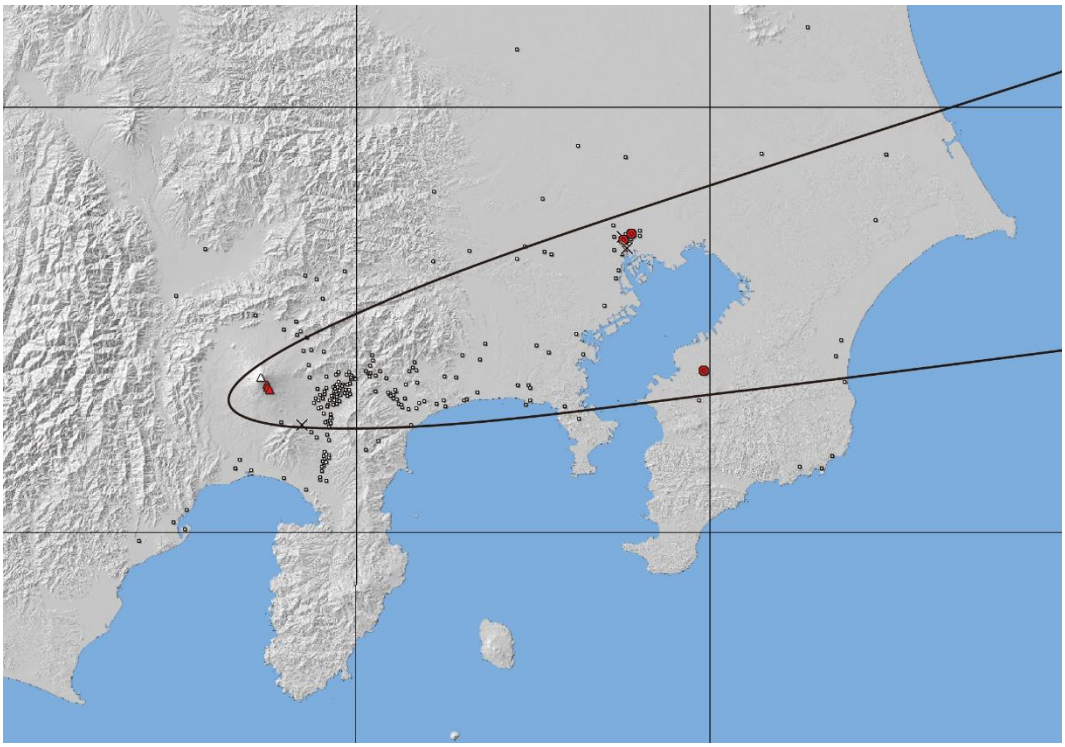


図 3-9　富士山宝永噴火　降砂分布

9 日目　宝永四年十二月一日（1707 年 12 月 24 日）

9日目　十二月一日（朔日）（12月24日）

12月24日の天候，地震，噴煙の観察　（図3－9）

静岡県裾野市須山では，12月24日（十二月一日）も，12月21日（十一月二十八日），12月22日（十一月二十九日），12月23日（十一月三十日）と同様に昼の間は砂が降らず，晴天であったが，山鳴り，地震は絶えなかった（『土屋伊太夫文書』）．山梨県南都留郡忍野村では，12月24日（十二月一日），12月25日（十二月二日）は朝から日が見えた（『富士山焼砂吹出乱剰』）．山梨県西八代郡市川三郷町からは12月24日（十二月一日），12月25日（十二月二日）に噴煙が江戸（東）へ向かうのが望見されている（『一宮浅間宮帳』）．

「廿八日明方迄降、朝晴（ハレ）、同二十九日、晦日（ミソカ）、朔日（ツイタチ）右四日者昼之間ハ砂降不申晴天（セイテン）ニ而、然共、山之鳴、地震者絶（タイ）不申、」（静岡県裾野市須山『土屋伊太夫文書』）

「師走の朔日ニハ日神朝より奉拝ス、二日ハ同様成、三日の日ハ日雲宛、四日のあさハ雪降白ク見へけれは、」（山梨県南都留郡忍野村『富士山焼砂吹出乱剰』）

「十二月大己卯朔日、二日庚辰日未だ神火鎮まらず、煙は常に江戸へ行く」（西八代郡市川三郷町『一宮浅間宮帳』）

東京では，12月24日（十二月一日）朝，薄黒い雲が東南になびくのが目撃されたが，黒い雲が立ち上るのは見られなかった．北西は晴れていた．10時（四ツ時）には全天白雲になり，東から黒雲が天中へ登り，日光を覆った．西から東へ薄黒い雲が太く立曇り，霧が降るようになった．夕方から北西の方が少々晴れ，西から東へ黒雲がなびき，少し薄くなり霧のようになり，隣家も見えなくなった．18時（六ツ時）に北西は晴れ，星が出たが，南東は曇っていた．北風が少々吹いた．21時（夜五ツ半時）には北西は晴れ，星が出ていた．南西の角から薄黒い雲が東へなびいていた．夜中，北西は晴れ，南東は薄曇りであった（『伊東志摩守日記』，『鸚鵡籠中記』）．この日，東京では砂は降らなかったとする史料（『新井白石日記』（十二月二日条）・肥前島原藩『江戸幕府日記』）と，時々降った（對馬藩『江戸藩邸毎日記』），夜中に砂が降った（『富士山焼記』），とする史料がともにある．

「一、十二月朔日、朝薄黒き雲東南ニ引はへ候、根黒き雲不出候、西北は晴候、四ツ時（10時）ニは惣天白曇ニ成、東之方ゟ黒雲天中江登り、日光をおゝい、西ゟ東へ薄黒き雲大筋立曇り、霧降候様ニ成候、夕方ゟ西北之方少々晴、西ゟ東へ黒雲引はへ申候て、少薄くなり霧の叟くに有之、隣家も見へ不分候、六ツ時（18時）西北は晴、星出、東南は曇り申候、北風少々吹申候、夜五ツ半時（21時）西北晴、星出候、西南之角ゟ薄黒き雲東之方江引はへ有之候、夜中西北は晴、東南は薄曇り有之候、」（『伊東志摩守日記』）

「〇十二月の初、相州佐川（酒匂川カ）へ人の首又は手足など多く流れ来るも、富士の山下の村々、石にうたれ形くだけて、かゝるものも流れ出けるにや、運上を取あけられて下部いたみ療治するがの富士三里焼く、〇富士焼候処、為見分、御歩行衆被遣候と云々、〇みくりや十里木村、檜木平と申所、駿河表ゟ富士詣之道東郡内駿州の内、檜木平と申所ゟ焼る、富士より高く煙上ると、云々、〇みくりや十里木村は、小田原領なり、伝法村は曽我播磨守・杉浦兵九郎・安藤内記領分也、伝法村ゟ焼出す所迄は、指渡し三里有之、〇焼穴大さ一里余り、〇杉浦兵九郎領分三千石の処永荒になる、〇右の辺大方永荒になり砂積て家を没す、〇右焼之所砂を除け申候に付、大名三人御手伝に被仰付、」（『鸚鵡籠中記』（十一月二十三日条））

「去比（ころ）より毎夜灰降、たゝし昨（十二月一日）夕ハふらす、」（『新井白石日記 下』（十二月二日条））

「（十二月）朔日　庚戌　甚陰　砂不降、」（東京都千代田区有楽町　肥前島原藩『江戸幕府日記』）

「十二月朔日　曇天　時々少宛砂降、」（東京都台東区下谷　對馬藩『江戸藩邸毎日記』）

「朔日　陰、夜中砂降、」（『富士山焼記』）

（十二月一日）

12月24日　千葉県内の降砂・噴煙の観察

木更津市犬成では，朝少し晴れ，また曇り砂が降った．夜に入り雨が降った（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．

香取市佐原では，一日は，朝から曇り，空は暗かった．北西（戌亥）の方は少し晴れていたが，そのほかは暗かった．夜は晴れ，星が出ていた（『伊能勘解由日記』）．

「十二月朔日朝少シ晴レ、マタ曇リ砂フル、夜入雨フリ、」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「朔日、朝ヨリくもり空闇ク有之、昨夜毛降候由ニ而人々拾ひ申候、戌亥（北西）の方少晴見ゆる、其外ハくらく有之、（略）夜晴レ星出ル、」（『伊能勘解由日記』）

１０日目　十二月二日（１２月２５日）

１２月２５日（十二月二日）　山梨県・静岡県からの活動状況観察

山梨県西八代郡市川三郷町からは，１２月２５日（十二月二日）も１２月２４日（十二月一日）と同様に噴煙が東へ向かうのが望見された（『一宮浅間宮帳』）．南都留郡忍野村は，風下からはずれており，二日も（朔日と同様に）朝から日が見られた（『富士山焼砂吹出乱剰』）．

静岡県裾野市南東山麓（須山）では，１２月２５日（十二月二日）から，１２月３１日（十二月八日）夜中～１７０８年１月１日（宝永四年十二月九日）の未明まで，昼夜とも砂が降り，雷・地震も強く，また山鳴り，響きも多く続いた，と記録されている（『土屋伊太夫文書』）ことから，噴火活動は継続していた．

「十二月大己卯朔日、二日庚辰日未だ神火鎮まらず、煙は常に江戸へ行く」（『一宮浅間宮帳』）

「（師走の朔日ニハ日神朝より奉拝ス）二日ハ同様成、三日の日ハ曇、宛四日のあさハ雪降白ク見へけれは、」（南都留郡忍野村『富士山焼砂吹出乱剰』）

「二日ゟ終（ヲワリ）迄者、又昼夜共砂も降、雷地震も強、山之鳴響も一倍ニ多ク打続、八日之夜中九日之明七時分迄ハ、山も焼（ヤケトドマル）止、雷地震響も静（シズカニ）、晴天ニ罷成候、然共、廿三日ゟ終迄、風透（スキ）と吹（フキ）不申候」（『土屋伊太夫文書』）

１２月２５日午前（十二月二日）　木更津市の降砂　（図３－１０）

千葉県木更津市では，朝少し晴れたのち，１０時（四ツ時）から曇り，砂が降った．夜に入り雨が少し降った．この日は東京と同じく風はなかった（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．

「二日朝少シ晴レ、又四ツ時（１０時）ゟ曇リ砂、同日夜ニ入雨少シ降リ、風此間一向ナシ、」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

１２月２５日夜（十二月二日）　東京・千葉県香取市の降砂，夷隅郡御宿町の降毛

東京では朝，四方が白曇になり，南東からは村雲が立ったが，雲は切れて，風は吹かなかった．０９時（四ツ前）～１０時前頃からは久しぶりの晴天になった（『伊東志摩守日記』，対馬藩『江戸藩邸毎日記』，『直堅公在府日記』，『岡本元朝日記』，肥前島原藩『江戸幕府日記』）．『伊東志摩守日記』によれば，夕方１６時（七ツ時）前から，南西方向から黒雲が出て東の方へたなびいて日光を覆った．次第に曇は南東にまわり，夜中には曇り，２３時過ぎから１２月２６日０４時（七ツ）前まで砂が降った，風はなかった．夜の降砂を記した史料には，台東区台東『岡本元朝日記』，千代田区有楽町 肥前島原藩『江戸幕府日記』，『富士山焼記』などがある．港区六本木『直堅公御在府日記』や台東区下谷 対馬藩『江戸藩邸毎日記』には天候の記述はあるが，降砂の記述はない．宝永火口から東京へ向かう延長方向に当たる千葉県香取市佐原においても１２月２５日（十二月二日）の夜，砂が降った．夷隅郡御宿町では，１２月２５日・２６日（十二月二日・三日）に長さ３～６㎝（一寸二寸）余りの白い毛が降った（『妙音寺過去帳』）．

「二日、朝四方白曇に成候、東南村雲立、雲切いたし候、風吹不申候、四ツ前（１０時前）ゟ四方雲晴、頃日ニ無之晴ニ而日光出候、北風少ツヽ吹候、七ツ時前（１６時前）ゟ西南之角ゟ黒雲、東之方江引はへ、日光をゝい次第ニ南東曇り候、夜中弥曇り、四ツ半過（２３時過）候時分ゟ七（２８時）ツ前（１２月２６日０４時）迄少ツヽ砂降申候、風は無之候、」（『伊東志摩守日記』）

「二日、天氣よし、（略）　○今日ハ天氣能あたゝかなり、○戌ノ刻（２０時）ゟ曇也、○今夜中も少砂降候也、」（『岡本元朝日記』）

「二日　霽曇、夜中黒沙降、」（『富士山焼記』）

「十二月二日　今朝ゟ晴天ニ而、近日一之日和也、（略）」（『直堅公御在府日記』）

「十二月二日　晴天」（對馬藩『江戸藩邸毎日記』）

「二日　辛亥　晴、至晩曇、砂少降、」（肥前島原藩『江戸幕府日記』）

「十二月二日ヨリ三日迄白キ毛降ル、長サ一寸二寸余リ、富士山焼ル吏月経テ不レ消、」（『妙音寺過去帳』）

「一、二日晴天昼過ヨリくもり夜ニ入闇ク有之今夜も砂降、」（『伊能勘解由日記』）

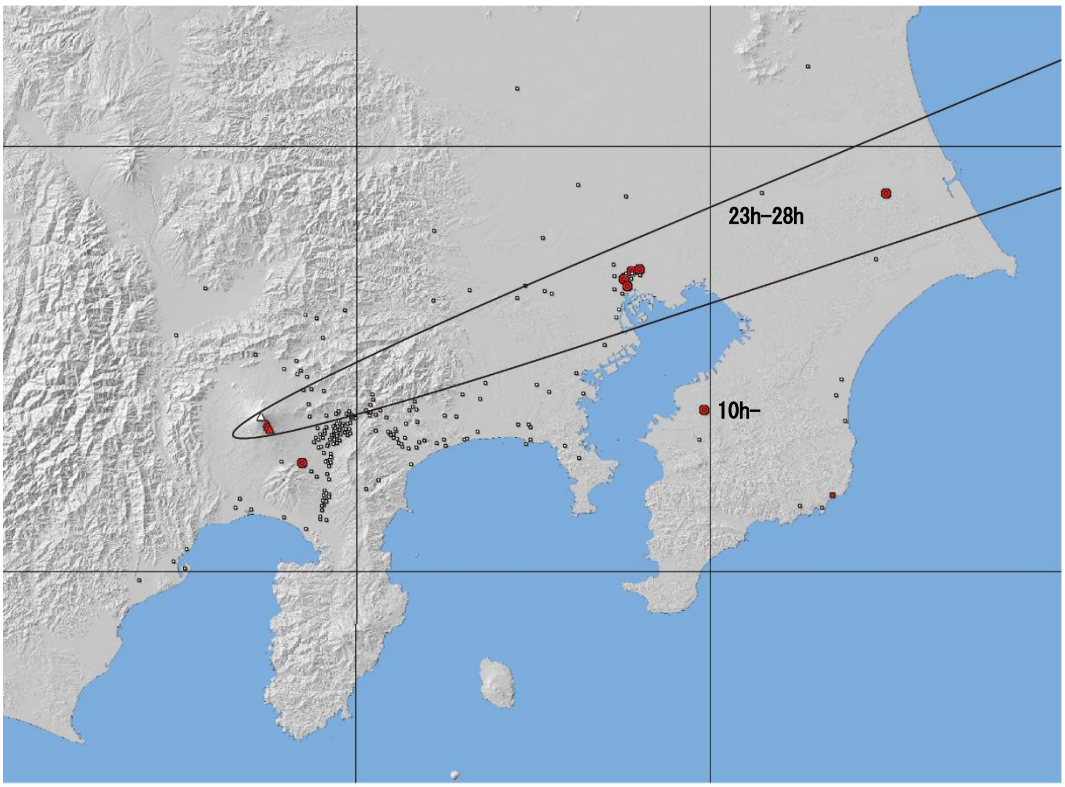


図 3-10　富士山宝永噴火　降砂分布

10 日目　宝永四年十二月二日（1707 年 12 月 25 日）木更津 10 時　東京・佐原 23-28 時

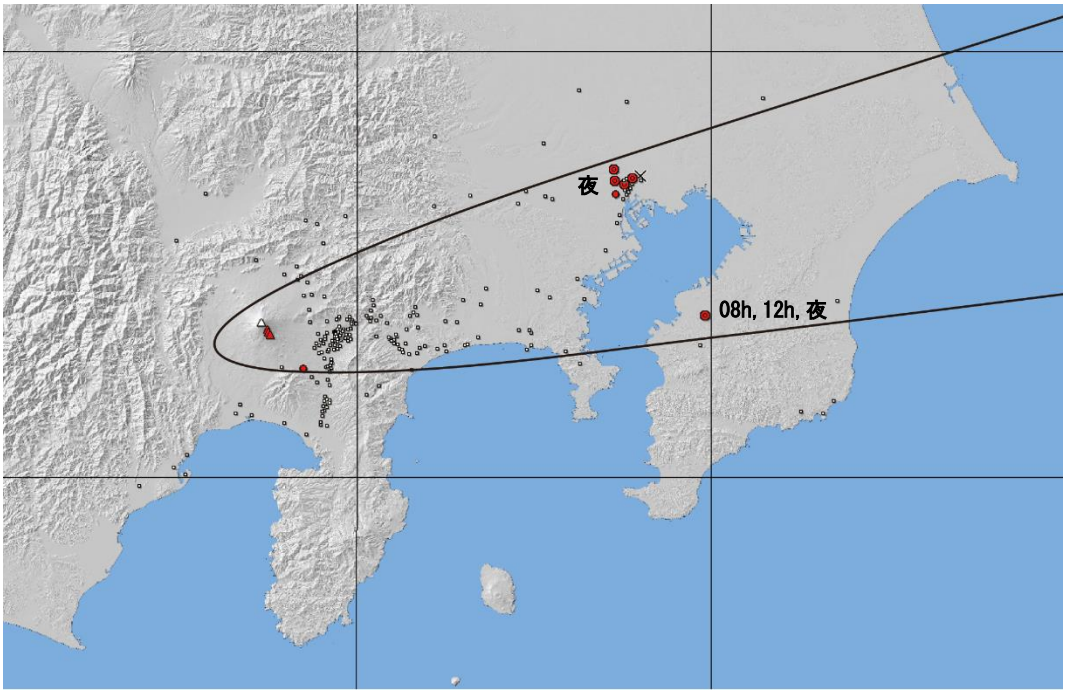


図 3-11　富士山宝永噴火　降砂分布

11 日目　宝永四年十二月三日（1707 年 12 月 26 日）

１１日目　十二月三日（１２月２６日）

１２月２６日（十二月三日） 木更津市の降砂　（図３－１１）

木更津市大成では，０８時（朝五ツ時分）から薄曇りとなって砂が降った．その後晴れて日が少し照った．やがて北方は曇り，１２時（九ツ時）には一面に曇り，かなり砂が降った（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．

「同三日朝日和中間ニシテ五ツ時（０８時）分ヲウスグモリニテ砂降、晴レ日少シ照ル、北方曇リ、同九ツ時（１２時）一面ニ曇り砂フリ余程七ツ時（１６時）ヲ少シ晴レ、東方曇ル、同夜ニ入砂フリ、富士見ユル、山ノ南ノ方クラクシテケブリ立見ル、」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

１２月２６日（十二月三日） 東京からの噴煙の観察　降砂

東京では，朝，北西は晴れていたが．南西から黒雲が南東へのび，黒雲が湧き立ち，終日雲が日光を覆っていた（『伊東志摩守日記』）．朝，砂が降り，終日曇りであった（『直堅公御在府日記』）．夕方は江戸の南東方向は霧煙のようであった（『伊東志摩守日記』）．『岡本元朝日記』には１６時（七ツ時）になり少し晴れ，東方が曇ったとある．夜中は，南東は曇り，北西は晴れ，星が出ていた．風は吹かず砂は降らなかった（『伊東志摩守日記』）．ただし，暮れから夜中に降灰があったとする記録が『護國寺日記』，對馬藩『江戸藩邸毎日記』，『富士山焼記』，『鸚鵡籠中記』，『岡本元朝日記』など複数あり，少量であったとしても砂は降ったらしい．夜には高霜が降った（『岡本元朝日記』）．

「三日、朝西北之方は晴、西南之角ヶ黒雲南東江引はへ、黒雲村々立有之候、日光を終日雲おゝい、夕方東南霧煙之如くニ有之候、夜中東南は曇り、西北は晴、星出申候、風吹不申候、砂降不申候、」（墨田区東駒形『伊東志摩守日記』）

「十二月三日　今朝、又すなふり、終日くもり申候、（略）」（港区六本木『直堅公御在府日記』）

「（十二月）〇三日　巳刻（１０時）地震及暮砂降」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』（十一月廿八日条）

「一、三日、曇ル、（略）今夜高霜降ル、」（台東区台東『岡本元朝日記』）

「三日、朝曇、夜中少々砂降リ申候、」（文京区大塚『護國寺日記』）

「十二月三日　曇天　夜ニ入砂降、」（台東区下谷　對馬藩『江戸藩邸毎日記』）

「三日　陰、夜中黒沙降、迚レ晩屬晴、富士山ノ方霽ル、火氣如レ雲東方靡ク、見レ之者ノ如レ堵ノ、」（『富士山焼記』）

１２月２６日（十二月三日） 東京・名古屋市の有感地震

東京で１０時（巳刻）に有感地震があった（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』十一月廿八日条）ほか，名古屋で０９時（辰半過）に有感の震動（巳刻（１０時）の江戸の地震と同じかもしれない）を感じた（名古屋『鸚鵡籠中記』）．また１３時４５分頃（午八刻）に大きな震動があり，（十月四日の）大地震以来の強い震動であった（名古屋『鸚鵡籠中記』十二月三日条）．

「（十二月）〇三日巳刻地震及暮砂降」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』十一月廿八日条）

「□三日　辰半（０９時頃）過震動少しゆる、〇午（１３時少し前）八刻大に震動少しゆる、大地震以来加程強き震動なし、午（１２時）刻、黒雲一筋　坤（こん　南西）より　艮（うしとら　北東）に至りて、橋を渡すが如くたなびきたりと、天野信景（あまの　さだかげ：江戸時代中期の国学者，尾張藩士）云へり、」（名古屋市『鸚鵡籠中記』）

１２日目　十二月四日（１２月２７日）

１２月２７日の天候　噴煙の終息　山梨県南都留郡忍野村からの火山活動の観察

（十二月四日）

１２月２７日，名古屋市からは東へ向かう黒雲は見られなかった．翌１２月２８日（五日）も同様で，これ以降名古屋市から黒雲は見えなくなった（『鸚鵡籠中記』）．

山梨県南都留郡忍野村では，朝に雪が降り，白く見えた．地震活動が活発化し，夜半まで鎮まらなかった．赤熱した火砕物が放出され，恐怖を感じた（『富士山焼砂吹出乱剰』）．

「□四日　今朝、薄曇、東方の黒雲みへず、五日も如此、夫ゟ後不見、○昼前少地震、○深更も同じ、○其後少鳴る、（略）暮比少雨して止、」（名古屋市『鸚鵡籠中記』）

「四日のあさハ雪降白ク見へけれは亦其日に当り地震大分大動し夜半之頃まてハしずまらず、其夜に限火玉燃出前度之ごとく恐しさは限なし、」（『富士山焼砂吹出乱剰』）

１２月２７日　東京の煙霧と夜の降砂　（図３－１２）

（十二月四日）

東京では，前日朝のように霧煙が深く下り，隣家も見わけ難かった．１０時ころ（四ツ時）からだんだん白い雲になり，全天を覆った．日光は見られなかった．１３時頃から（九ツ半時）砂が降った（『伊東志摩守日記』）．『岡本元朝日記』には「昼より砂又（またぞろ）候降り候，」と記されている．南西からの風が強く，砂を吹き上げ目や口が開けられなかった（『鹿島藩日記』・『直堅公御在府日記』）．１６時（申の刻）から砂が降り，２２時（亥中刻）には止んでいた（『岡本元朝日記』）．晩は北風との記録もある（『富士山焼記』）．２４時（九ツ時）にも少しの間砂が少々降った．その後晴れて星が見えた（『伊東志摩守日記』）．

「（十二月）○四日霜満砂上，」（新宿区市谷本村町『鸚鵡籠中記』十一月廿八日条）

「四日、昨朝之空之如くニて霧煙深く下り、隣家も見わけかたく候、四ツ時（１０時）ゟ段々白曇りニ成、四方一面ニ曇り、日光不出候、川吏の外鳴申候、九ツ過地震少々ゆり、黒雲少々薄なり、雲中ゟ日光薄出候、九ツ半時（１３時）ゟ砂少々降候、八時（１４時）は惣天白曇ニ成候、川鳴止不申（止み申さず）、八ツ半（１５時）前ゟ南風吹出シ候へ而川鳴少々止候、南風暮六ツ半時（０７時）ゟ段々止申候、薄曇り星所々ニ出候、九ツ時（２４時）少之間砂少々降申候、其後空晴星見へ候、七ツ（１２月２８日０４時）少前ニ地震少々ゆり候、夜中風吹不申候、」（『伊東志摩守日記』）

「四日、朝曇ル、時々晴ル、（略）○昼より砂又候降り候、風少々有之吹立候也、昼ノ内地震アリ、（略）○今晩御相伴いたし、それより部屋ニて与左衛門と壱岐守様御意之趣相談いたし、申ノ刻（１６時）退出いたし候、砂多ふり候て、から笠さし帰候也、○暮ゟ御殿へ罷出、亥ノ中刻（２２時）退出、其節砂晴候て夜よし、」（『岡本元朝日記』）

「同四日　終日曇、西南ゟ風吹、目口も明キ不申程ニ有之候、夜ニ入止ム、」（『鹿島藩日記』）

「（十二月四日）今日、終日曇リ、西南ゟ風吹、すな降、目・口も明不申候様ニ有之、夜ニ入止申候、（略）」（『直堅公御在府日記』）

「四日　及レ晩北風揚ク レ沙ヲ、一人トシテ無二面ヲ不レ覆ハ者一、」（『富士山焼記』）

「十二月四日　曇天　夜ニ入少宛砂降」（對馬藩『江戸藩邸毎日記』）

１２月２７日　千葉県内・栃木県内の天候と木更津市・香取市の降砂

（十二月四日）

木更津市犬成では，１２月２７日朝０８時（五ツ時）から「ケムクモリ」（煙霧か？），風が強く，砂を吹き上げたため夜のように暗くなった．夜に入って砂が降り，２４時（九ツ時）から晴れた（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．香取市佐原では，昼時から砂が降った，夜には降砂は止み，星がでた（『伊能勘解由日記』）．

栃木県芳賀郡茂木町で午後から霧がかかったように暗くなった（小崎耕作家『日記』）．

「四日朝［　］晴レ曇ナシ、富士ノケムリ計見ヘ五ツ時（08時）ヨリケムクモリ［　］風ヨホドフク、此時フリ砂フキ立夜ノゴトク夜ニ入テ空晴レ［　］計見ヘ砂フル、九ツ時（24時）ヨリ晴レ、」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「一、四日くもり空昼時ヨリ砂降、夜ニ入止星出ル、」（『伊能勘解由日記』）

「（十二月）四日　天氣吉、風有、昼過ヨリ風止、大分きりノことくくらし、伊豆・相模邊ニて先月中石ふり、上方へ之往来止候由、」（小崎耕作家『日記』）

12月27日（十二月四日）の東京・名古屋市の有感地震

東京では12月27日（十二月四日）11時（四ツ半）頃と12時（九ツ）過ぎに地震を感じた（文京区大塚『護國寺日記』）．「午中刻（12時）」（『富士山焼記』），「昼之内」（『岡本元朝日記』）に地震があったと記されている史料もある．名古屋市でも「昼前」（『鸚鵡籠中記』）に地震があった．12時ころの同じ地震を観測していた可能性が高い．また，東京で「七ツ少前（12月28日04時少し前）」（『伊東志摩守日記』）に，名古屋市では「深更」（『鸚鵡籠中記』）にゆれを感じた．これらも同じ地震を記録した可能性がある．

「四日、終日曇り晴、四ツ半（11時）之比地震、九ツ（12時）過地震餘程、」（文京区大塚『護國寺日記』）

「四日　曇、及レ晝黒沙降、午中刻（12時）地震及レ晩北風揚ケレ沙ヲ、一一人トメ無二面ヲ不レ覆ハ者一、」（『富士山焼記』）「（□四日）○昼前少地震、○深更も同じ、○其後少鳴る、」（名古屋『鸚鵡籠中記』）．

「（四日）七ツ少前ニ地震少々ゆり候、」（『伊東志摩守日記』）

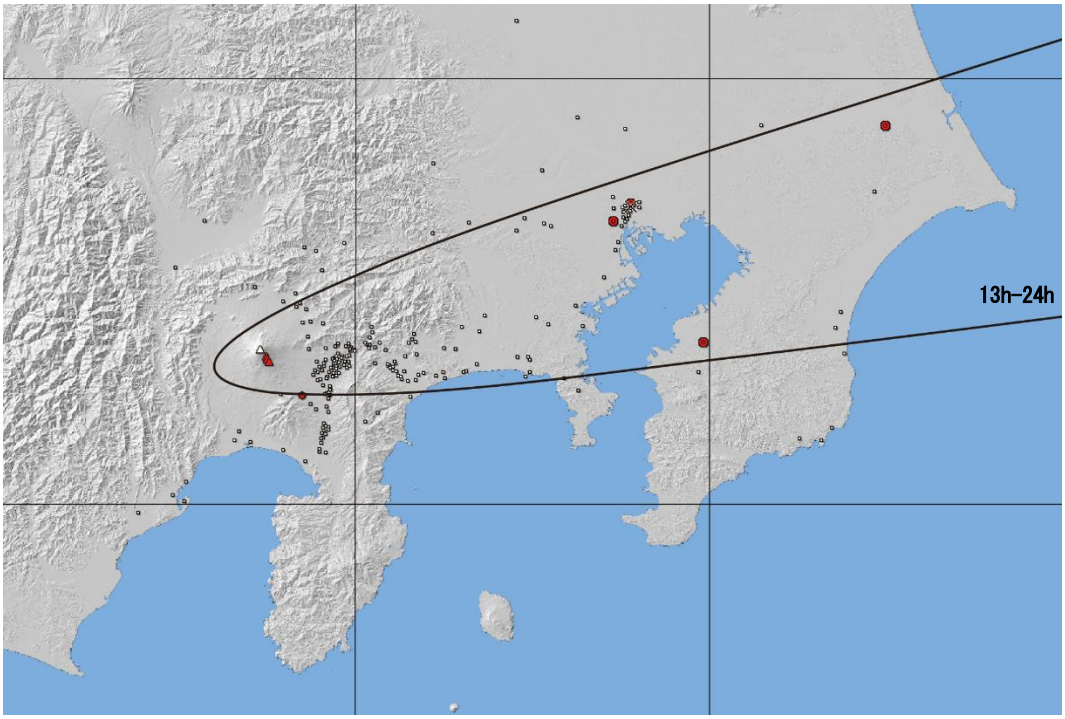


図 3-12　富士山宝永噴火　降砂分布

12 日目　宝永四年十二月四日（1707 年 12 月 27 日）13 - 24 時

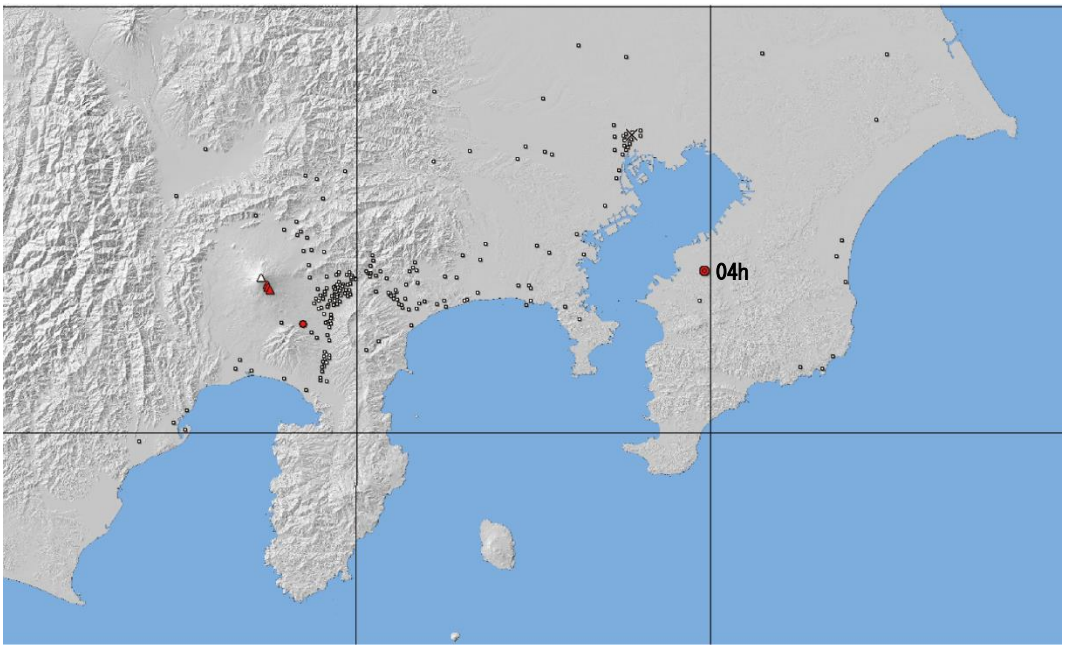


図 3-13　富士山宝永噴火　降砂分布

13 日目　宝永四年十二月五日（1707 年 12 月 28 日）木更津 04 時

１３日目　十二月五日（１２月２８日）

１２月２８日（十二月五日）　名古屋市と南都留郡忍野村からの観察　噴煙の終息

名古屋市からは（前日四日に続き）この日も東へ向かう黒雲は見られなかった．これ以降黒雲は見えなくなった（『鸚鵡籠中記』）．忍野ではこの日から煙も鳴りも静かになった（『富士山焼砂吹出乱剰』）．

「□四日　今朝、薄曇、東方の黒雲みへず、五日も如此、夫ゟ後不見、」（名古屋市『鸚鵡籠中記』）

「五日は南風吹鳴動き其日の内より煙も鳴もしつかにて、」（『富士山焼砂吹出乱剰』）

１２月２８日（十二月五日）　千葉県木更津市の降砂　（図３－１３）

木更津市では，夜明け前０４時（七ツ時）から四方暗く，砂が降ったが，木更津の南方は晴れていた（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．

「五日朝七ツ時（０４時）ゟ四方クラクシテ砂フル、南方ハ晴レ、」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

１２月２８日（十二月五日）　東京から噴煙の観察　降砂終息の記録

東京では，朝，南西から南東へ薄青黒い雲がたなびいていた．北西は晴れ，１２時過（九ツ過）から北西の風が吹き出した．南西から黒雲が押出してきて，日光を覆い，曇った．１４時過（八ツ過）からは，北西の風が少々出て，雲は晴れた．夕方からまた黒雲が立ち登り，一面に曇った．星は出ていた．２２時過（四ツ過）から北風が強く吹出し，夜明方まで吹いていた．黒雲南の方へ吹き入り，全天が白曇りになった（『伊東志摩守日記』）．東京ではこの日から砂が降らなくなった，とする記述が對馬藩『江戸藩邸毎日記』にみられる．ただし強い風により，降った砂が吹き上げられたという（『富士山焼記』，『岡本元朝日記』，『護國寺日記』）

「五日、朝西南角ゟ南東江薄青黒雲引はへ、西北は晴、九ツ過ゟ西北之風吹出、南西ゟ黒雲押出シ、日光おゝい曇候、八ツ過ゟ西北之風少々出雲晴、夕方ゟ又黒雲登り、一面ニ曇り、星出候、四ツ過ゟ北風強吹出、夜明方迄吹申候、黒雲南之方江吹入、白曇りニ惣天なり申候、」（『伊東志摩守日記』）

「十二月五日　晴天　今日ゟ砂降止、」（對馬藩『江戸藩邸毎日記』）

「十二月五日　晴天、南風揚クレ沙、」（『富士山焼記』）

「五日、曇ル、（略）○今日総泉寺（もと台東区橋場にあり秋田藩主墓所だった）へ　御佛参被遊候故御先へ参候、天氣能候へ共風少有之、町屋上之砂吹立申候也、未ノ刻（１４時）御歸　弥（いよいよ）　天氣よし、御馬にて御歸被成候　御相伴いたし申ノ刻退出いたし候、○暮ニ御殿へ罷出、亥ノ中刻（２２時）退出、」（『岡本元朝日記』）

「一、夜中餘程風吹、燒灰砂吹拂申候、」（文京区大塚『護國寺日記』）

「十二月五日　終日曇リ、（略）」（『直堅公御在府日記』）

１２月２８日（十二月五日）　長野県下伊那郡の鳴響・名古屋市の地震

下伊那郡下條では，昼時分に以前のような響きが少しあった（『大地震之記』）．

「同（十二月）月五日之昼時分ニ前度之やうに少ひゞき（響）日々一度程宛風にひゞき（響）聞申候」（『大地震之記』）

名古屋市で２２時（亥刻）に少し地震があった（『鸚鵡籠中記』）．

「□五日　亥刻（２２時）少地震」（名古屋市『鸚鵡籠中記』）

１４日目　十二月六日（１２月２９日）

１２月２９日（十二月六日）　南都留郡忍野村からの観察　地震と火砕物噴出

山梨県南都留郡忍野村では，１２月２９日（十二月六日）・１２月３０日（十二月七日）は朝から地震がたびたび起こり，夜半まで大きく動き，火砕物も噴出されたため住民は恐ろしく感じて動揺した．しかし，これ以降，火煙も墨雲も鎮まった（『富士山焼砂吹出乱剰』）．

「扨（さて）六日七日は朝よりも地震もたびくニて夜半の頃迄大動し火玉も猶恐しく出ければ皆人是らをみて最早只事ならぬことかなときも魂も消果て居たりけりさればにや其日より火煙も墨雲もみなしつまりて国土繁昌と成申に新不忠議や御山こんりんさいよりをい出給ふ人ハ見つけたもふ扨あら有難やと貴賤之人之吾もくと手合礼拝申事社（こそ）有難けれ其中にも南駿東郡足柄弓手妻手の村里ニは石砂大分降積さてまた人は通路の水絶て可レ及よふさらになし富士山本道吉田口治る御代之ためしとて太平閑の声そふて霾の郡の御代懸てつきせぬ恵ぞ有難」（『富士山焼砂吹出乱剰』）

１２月２９日（十二月六日）　千葉県木更津市の降砂　香取市の天候

木更津市犬成では寒く，砂がまた降った（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．香取市佐原では，曇り空で西風が吹き，寒かった（『伊能勘解由日記』）．

「六日寒クシテ又砂フリ」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「六日くもり空西風吹寒シ」（『伊能勘解由日記』）

１２月２９日（十二月六日）　東京の天候　降砂の終了

東京ではこの日降砂の記録はない．終日曇り，寒かった（『護國寺日記』，『岡本元朝日記』，『富士山焼記』）．『伊東志摩守日記』には，朝は北風が少し吹き，黒雲が南へ吹入り，南方の，根に黒雲が少々あった．その後全天が白曇りになった．日光は出ず，寒気が強かった．今夕は，近日のように黒雲が南東から東へたなびくことはなく，一面に白曇りとなり，風はなかった．夜中には晴れ，北風が少々吹いた，と記している．

「六日、終日曇懸リたる天氣ノ相」（『護國寺日記』）

「六日、曇ル、」（『岡本元朝日記』）

「六日　陰、」（『富士山焼記』）

「六日、朝北風少ツヽ吹候、黒雲南之方江吹入、南之方根ニ黒雲少々有之候、惣天白曇りニ成、日光不出寒氣強く有之候、如頃日之東南より黒雲東江今夕は引はへ不申候得て一面ニ白曇りニ成候、風吹不申候、夜中晴、北風少々吹候、」（『伊東志摩守日記』）

１２月２９日（十二月六日）　名古屋市の天候と　地震

名古屋市でも薄曇りで寒かった．昼前に少し地震があり，夜更に雪が降った．名古屋で風邪が流行していたことが記されている（『鸚鵡籠中記』）．

「□六日　薄曇寒、○昼前少地震、○夜更雪（略）○頃日、風気甚流行す、家を並べて或三人、或は五人、或家内不残風引、しかも平生の感冒にあらず、時疫の類也、天地不正の気によって、一面に感する故なるべし、木薬屋、来三四月比迄売るべき拵薬を、当時売り切と、云々、是にて病人の多き事知るべし、」（『鸚鵡籠中記』）

１５日目　十二月七日（１２月３０日）

１２月３０日（十二月七日）　南都留郡忍野村からの観察　地震と火砕物噴出

山梨県南都留郡忍野村では，１２月（２９日・十二月六日）３０日（十二月七日）は朝から地震がたびたび起こり，夜半まで大きく動き，火砕物も噴出されたため住民は恐ろしく感じた．しかし，これ以降，火煙も墨雲も鎮まった（『富士山焼砂吹出乱剰』再掲）．

「扨（さて）六日七日は朝よりも地震もたびくニて夜半の頃迄大動し火玉も猶恐しく出ければ皆人是らをみて最早只事ならぬことかなときも魂も消果て居たりけりさればにや其日より火煙も墨雲もみなしつまりて国土繁昌と成申に新不忠議や御山こんりんさいよりをい出給ふ人ハ見つけたもふ扨あら有難やと貴賤之人之吾もくと手合礼拝申事社（こそ）有難けれ其中にも南駿東郡足柄弓手妻手の村里ニは石砂大分降積さてまた人は通路の水絶て可レ及よふさらになし富士山本道吉田口治る御代之ためしとて太平閑の声そふて霾の郡の御代懸てつきせぬ恵ぞ有難」（『富士山焼砂吹出乱剰』）

１２月３０日（十二月七日）　天候と東京における噴煙の観察

名古屋では前日夜から降っていた雪が昼前後に降り止んだ．夜は晴れた．木更津・佐原・名古屋では寒かった（『鸚鵡籠中記』，『富士山辰巳方焼出シ候事』，『伊能勘解由日記』）．

東京から，朝，むら雲が目撃された．南東に黒雲が切れぎれに少し出た．北風が少々吹いていたところ，四ツ時（１０時）から北風が強くなり，むら雲は南方へ向かった（『伊東志摩守日記』）．強い北風のため，降った灰・砂が家上より吹落とされ，吹き立てられ，視界が悪く，また．目へ入り難義した（『護國寺日記』，『岡本元朝日記』，『隆光僧正日記』）．

「□七日雪止積、一寸ばかり、辰比晴、而又曇、昼前後雪降而止、曇、夜晴、（略）○終日寒、」（『鸚鵡籠中記』）

「七日サムク四ツ時（１０時）ヶ雪チラくとフル、晴ル、」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「七日薄晴天西大風吹寒シ夜ニ入晴天月星出ル、」（『伊能勘解由日記』）

「七日、朝村雲出、東南ニ黒雲少々切々ニ出、北風少々吹候所ニ四ツ時（１０時）より北風強立、村雲南方江吹入、七ツ半時（１７時）ヶ風少々止、夜入風無之、夜中晴、月星さへ出ル、」（『伊東志摩守日記』）

「七日、晴天、餘程有風、焼灰砂吹立難義」（文京区大塚『護國寺日記』）

「七日、天氣よし、併風少々有り、（略）風有之此中之砂を家上より吹落、世間ほこり立候て目へ入ことくく難儀いたし、午ノ下刻御屋敷へ歸候、」（『岡本元朝日記』）

「七日、（略）風強、冨士之降砂吹立、東西不見、（略）」（『隆光僧正日記』）

１２月３０日（十二月七日）　東京小石川の火災

１２月３０日午後，強い北風の中，東京都文京区小石川伝通院近く金剛寺坂そばで火災が発生した．北風のため水戸藩屋敷（文京区後楽）が一時危険な状態になったが，（東に当たる）秋田藩の屋敷（台東区台東）や・東叡山（台東区上野　寛永寺）には向かわず（『冨士山焼記』，『岡本元朝日記』），１６時（申刻）過ぎに鎮火した（『冨士山焼記』，『岡本元朝日記』，『新井白石日記』）．七ツ半時（１７時）から風は弱まり，夜に入り風はなくなった（『伊東志摩守日記』）．

「午剋自リ（より）傳通院近所金剛寺坂ニ出ル火、炎如レ飛定火消小出民部類ヶ焼餘焔　御本丸ノ方江向、因レ茲（ここに）稲垣對馬守重富来テ火事場ニ下ニ知メ火消ヲ防レ之、仍火先東方靡キ金ヶ杉村天神（俗ニ云フ丑天神）非也水ヶ戸殿御ヶ屋敷ヶ隣也、回禄水戸殿御ヶ屋ヶ敷甚危、依レ之八重姫君（御懐胎也）為ニ供奉ニ松平美濃守吉保、秋元但

馬守喬朝馳参回テ二重冨ヲ相圖ニ御駕候セント左右ニ各歩行立ニ成リ相ー待依レ及二大火ニ一大名十人被二仰付一各盡粉骨ヲ一申ー刻過火ー鎮ル、水戸殿御屋鋪免ル一其災一」（『富士山焼記』）

「七日、天氣よし、併風少々有り、（略）○巳ノ中刻御屋敷罷出鍛冶橋へ参候、老女中弥右衛門ニ御様子相尋候処、今日ハ御快候由也、未御食事御進ニ無之旨也、午ノ中刻あなたニて餅被下候而罷歸候、御裏御門出候時火事と申候、何方と承候処小石川と申候、風ハ御屋敷・東叡山ともに能候、北風ニ候也、しかし馬を早め罷歸候、（略）」（『岡本元朝日記』）

「七日　出仕、玉石御見せ、其外御尋、今日小石川筋火事、（略）」（『新井白石日記 下』）

（十二月七日）
12月30日　東京における噴火終了の風聞

『富士山焼記』によれば，12月30日（十二月七日）以降，東京に降砂はなく，富士山の噴火が終息したのかもしれない，と記している．『新井白石日記』は，富士山の噴火は，少し火勢が衰えたのではないかと聞くが，この二，三日江戸には灰が降っていないのは北よりの風が吹いているためであって，江戸の南西には今でも噴煙が広がり，日が遮られることもある，と記している．

「（十二月七日）自二今日一沙不レ降、是富士山火ー鎮歟云々、」（『富士山焼記』）

「今日承、富士の焼くる事、すこしく火勢衰へしやと云々、此二三日來灰降らす、但し風北より吹故なるへし、西南にハいまに雲ふかくして、やゝもすれハ日色くらし、」（『新井白石日記 下』十二月七日条）

（十二月七日）
12月30日　木更津市，香取市，名古屋市の天候

木更津市では，寒かった．四ツ時（10時）から雪がちらちらと降ったのち晴れた（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．香取市佐原では薄晴れ，西風が強く吹き，寒かった．夜に入り晴天となった（『伊能勘解由日記』）．名古屋市では昨夜から降っていた雪が昼前後に降り止み，夜は晴れた．

「七日サムク四ツ時（10時）ゟ雪チラ〳〵とフル、晴ル、」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「一、七日，薄晴天西大風吹寒シ夜ニ入晴天月星出ル、」（『伊能勘解由日記』）

「○終日寒、□七日雪止積、一寸ばかり、辰比晴、而又曇、昼前後雪降而止、曇、夜晴、（略）」（『鸚鵡籠中記』）

１６日目　十二月八日（１２月３１日）

１２月３１日（十二月八日）　東京，香取市，名古屋市の天候

東京での降砂の記録は１２月２７日（十二月四日）の『伊東志摩守日記』，『岡本元朝日記』が最後である．１７０８年１月１日（十二月九日）の朝以降は噴煙の目撃記録も途絶えた．

１２月３１日（十二月八日）朝は，全天晴れたが，南の根に青黒い薄雲が少々あった．１０時（四ツ時）からむら雲が出た．北風が少々吹き，１４時（八ツ時）に止んで全天白曇りになった．南方に青薄黒雲がたなびいた．根には隙があった．寒気が強かった（『伊東志摩守日記』）．

『岡本元朝日記』にも，天気は良く，風が少しあったこと，一昨日（１２月２９日）からことのほか寒く，硯の水も氷るほどであった，とある．香取市佐原では，薄曇りで寒かった（『伊能勘解由日記』）．名古屋市では，晴れて，甚だ寒く，硯の水が氷るほどであった（『鸚鵡籠中記』）．

「八日、朝惣天晴、南之根ニ青黒薄雲少々有之、四ツ時（１０時）ゟ村雲出、北風少々吹、八ツ時止、白曇りニ惣天なり、南之方ニ青薄黒雲引はへ申候、根はすき有之候、寒気強シ、」（『伊東志摩守日記』）

「八日、天氣よし、風少有り、（略）〇一昨日より殊之外氷寒候也、硯水も氷候也、」（『岡本元朝日記』）

「八日、晴天、」（文京区大塚『護國寺日記』）

「八日　晴天、」（『富士山焼記』）

「八日薄くもり空寒シ、」（『伊能勘解由日記』）

「□八日　晴、甚寒、硯水氷、（略）」（『鸚鵡籠中記』）

１２月３１日（十二月八日）　木更津市の降砂

木更津市では，１２月３１日は晴れ，１６時（七ツ時）から西の方が曇り砂がちらちら降った．夜に入って晴れた（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．

「八日晴レ、七ツ時ゟ西方曇リ砂チラくフル、夜入晴レ、」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

１７０７年１２月３１日・１７０８年１月１日（宝永四年十二月八日）（十二月九日）　噴火終息時の経過

宝永噴火は１７０７年１２月３１日（宝永四年十二月八日）の夜から１７０８年１月１日（十二月九日）朝にかけての活動で終息した．断片的ながら複数の史料が残されており，時間の経過の順に整理すると活動の概略が見えてくる．駿河の代官から公儀へ提出された報告によると数日前から富士山の噴火はまだ継続しているものの，穏やかになり，石などはもはや降らなくなってきた（『伊東志摩守日記』十二月九日条，『新井白石日記』十二月十三日条の越前殿（間部詮房 西城奥番頭カ）からの伝聞）．１７０８年１月１日（十二月九日）からは雪が降った．新たな山が二つできたとの注進があった（『新井白石日記』）．

『伊東志摩守日記』十二月九日条には，駿州代官から公儀への報告を引用して，（駿河で）１２月３１日２１時前（十二月八日夜五ツ半前）に夥しく震動があり，それから富士山の噴火が焼止まった，と記録している．名古屋市では１２月３１日２２時（十二月八日亥刻）に地震を感じ，夜中に北東方向で８，９度鳴動があった（『鸚鵡籠中記』）．駿河の夜五ツ半（２１時）の地震と名古屋の亥刻（２２時）の地震は同じ地震かもしれない．長野県下伊那郡下条村では，１７０８年１月１日０２時（十二月八日之晩八つ時分）に強く響き渡り，戸・壁等も鳴り，珍しいことであると思われた（『大地震之記』）

「九日（十二月）、（略）頃日、駿河ゟ注進ニ、冨士未焼候得共、和ニ有之候、石なとハ最早降不申候由也、并冨士焼申候繪圖、駿州御代官ゟ公儀到来候写シ也、九日朝六ツ半時（０７時）ゟも焼申候煙止申候、八日夜五ツ半前夥しく震動いたし、夫ゟ冨士焼止申候由也、」（『伊東志摩守日記』十二月九日条　駿州御代官ゟ公儀到来候写による）

「越前殿(間部詮房)申・富士の焚ル事も、八日迄にて消たり、只餘烟のミにて、九日より雪ふりしよし注進あり、山二つハかり出來しよし、吉原(駿河国)の邊よりみゆると也、」(『新井白石日記 下』(十二月十三日))

「八日之晩ニハ八つ時分ニ強クひゞき(響)わたり戸かべ抔もなり、扨々珍敷被存候」(長野県下伊那郡下条村『大地震之記』)

「□八日　晴、甚寒、硯水氷、○亥刻地震、○夜中東北の間ゟ、鳴動する事八九度、(略)」(名古屋市『鸚鵡籠中記』)

「○十二月八日の朝富士焼止る、○足高山とふじの間に新に山出来す、大さ尾州の小牧山程あり、小富士と称すべからす、宝永山と可称と、云々、○富士の麓、すばしり口一村、大地ぬけをちいり泥水に化す、大小民家人畜財に至るまで、皆没す、富士川へ人馬雞犬等死したる、多く流れ出づ、」(『鸚鵡籠中記』(十一月二十三日条))

「十二月初八日に至って雷鳴(ライセイツ)尽きて雨砂尚止む、」(駿東郡小山町生土『降砂記』)

『新井白石日記』(十二月十三日条)に越前殿(間部詮房 西城奥番頭カ)からの伝聞として，富士の噴火が，12月31日(十二月八日)までに鎮静化し，ただ余烟のみとなり，1708年1月1日(十二月九日)から雪が降った，との注進があったことが記されている．

『新井白石日記』(十二月十四日条)には，駿河の代官溝口源右(勝興)の報告として，駿府から帰る時に，富士山の噴火は1708年1月1日(十二月九日)にやけ止んだ．だんだんに止むのではなく，急に燃え残りが吹き散らされた．そのあとに新山(寶永山)が一つできた．箱根山の方からは富士山に大きな穴を開けたように見えた，と記されている．

「越前殿(間部詮房)申・富士の焚ル事も、八日迄にて消たり、只餘烟のミにて、九日より雪ふりしよし注進あり、山二つハかり出來しよし、吉原(駿河国)の邊よりみゆると也、」(『新井白石日記 下』(十二月十三日))

「○ 今　日(十二月十四日)　聞ク、富士は九日にやけ止ム、漸々にやむにハあらす、忽に火盡、烟散したり、そのあとに新山(寶永山)一つ出たり、箱根山のかたよりみれは、富士に大きなる穴開けてみゆる也、溝口源右(勝興)、駿府より帰ル時にみられしなり、」(『新井白石日記 下』(十二月十四日条))

沼津市原　土屋家文書『焼納り乃景氣』絵図中の説明文には，十六日間焼ヶ1708年1月1日(十二月九日明ケ七ツ時)04時頃，大きく一回鳴った．九日には山は晴れ渡り，宝永山ができているのが見えた」，とある(沼津市原　土屋家文書『焼納り乃景氣』絵図中の説明文静岡県史別編2，p349-355)．

「右十六日之間焼ヶ十二月九日之朝明ヶ七ツ時　比(ころ)　大キに壱つ鳴(ナ)ル、九日にて山晴渡り見ゆる如此宝永山出来ル、」(沼津市原　土屋家文書『焼納り乃景氣』絵図中の説明文静岡県史別編2，p349-355．)

１７日目　十二月九日（１７９８年１月１日）

東京では，終日曇り，寒気が甚しかった（『伊東志摩守日記』）．暮れ過ぎないし２２時頃から深夜まで雪が降り３～６㎝積った（『伊東志摩守日記』，『護國寺日記』，『岡本元朝日記』，『富士山焼記』，『鸚鵡籠中記』）．

木更津では，朝から薄曇り，寒かった．夜五ツ時（２０時）から雪になり，夜中に降った（『富士山辰巳方焼出シ候事』）．佐原では，薄くもり空で寒かった（『伊能勘解由日記』）．

「九日朝ゟウスクモリ、サムクシテ夜五ツ時（２０時）ゟ雪夜中降」（『富士山辰巳方焼出シ候事』）

「一、九日薄くもり空寒シ今、」（『伊能勘解由日記』）

「九日　今夕雪ふりたり、」（『新井白石日記 下』）

「九日、朝ゟ四方白曇りニ成、日光不出、東南ニ黒雲引はへ不申候、終日寒氣甚敷有之候、夜中四ツ前ゟミそれ降、夫ゟ雪ニ成、夜中降申候、北風吹候少々、頃日、駿河ゟ注進ニ、富士未焼候得共、和ニ有之候、石なとハ最早降不申候由也、并富士焼申候繪圖、駿州御代官ゟ公儀到来候写シ也、九日朝六ツ半時（０７時）ゟも焼申候煙止申候、［割注：八日夜五ツ半前（８時）より震動しく震動いたし、夫ゟ富士焼止申候由也、］」（『伊東志摩守日記』）

「九日、　終日曇、　九ツ過少晴テ後亦曇、

一、五ツ半之比ゟ少宛雪降リ出、夜九ツ過ニ者壹貳寸計も積リ候、」（文京区大塚『護國寺日記』）

「一、九日、曇ル、（略）

○暮過ゟ雪夜中降ル、（略）○殊之外氷候也、」（『岡本元朝日記』）

「○　今（十二月十四日）日　聞ク、富士は九日にやけ止ム、漸々にやむにハあらす、忽に火盡、烟散したり、そのあとに新山（寶永山）一つ出たり、箱根山のかたよりみれは、富士に大きなる穴開けてみゆる也、溝口源右（勝興）、駿府より帰ル時にみられしなり、」（『新井白石日記』（十二月十四日条））

「九日　陰、從亥刻雪降ル、」（『富士山焼記』）

「□九日　曇、戌過ゟ雪降、深更ゟ止、霤（あまだれ）となりて落、（略）

○今月切に富士山焼留り、側に小山新に出来、或八日までに焼留る共云、（略）」（『鸚鵡籠中記』）

３６０日目　宝永五年十月二十八日（１７０８年１２月９日）

（１７０８年１２月９日）

宝永五年十月二十八日の再噴火？

静岡県駿東郡小山町須走の記録に，「１７０８年１２月９日深夜２５時過（十月廿八日夜九ツ半過）に震動のような音がした．昨年冬にできた宝永山の方角であって，響いた．地元の者もよほどの音だと聞いた．砂・灰などは降っていない．例年だと積もる雪が宝永山の近くにはなかった」という記録がある（『口書』（富士山鳴動につき須走村届書控））．東京ではこの日，暮れ時に少し灰が降った．鳴動も少しあり，富士山も少々煙がたっていた，という記録（『鸚鵡籠中記』）もある．記録はこの日の２史料のみであるが，小規模な噴火があった可能性がある．

「当十月廿八日夜九ツ半過時分震動之様成音仕候、方角之儀は富士山去冬出来仕候宝永山之方ニ而ひゞき申候、所之者共も余程音と聞覚申候、砂灰抔ハ曾而降り不申候、冬ニ成申候得ハ富士山惣而雪深ク積り申候得共、宝永山近所ニハ雪積り不申候、此外可申上儀無御座候、」（静岡県駿東郡小山町須走『口書』（富士山鳴動につき須走村届書控））

「（宝永五年十月二十八日）江戸今日暮より少々灰降、鳴動も少々あり富士も少々煙立、」（東京都『鸚鵡籠中記』）

4．降下火砕物堆積層厚

降下堆積物のほとんどは現在すでに排除され，または2次的に移動してしまっているので，降下当時の堆積層厚を知るのには噴火直後の被災報告や，復興支援のための作業量・費用の見積りの史料を検討するのが有力な手段である．下鶴（1981）は収集した記録をもとに降下堆積物の等層厚線を描いている．また，内閣府（2005）の報告書でも史料を基にした堆積層厚を紹介している．これらの報告は多数の史料から層厚データを収録しているが，原史料と2次史料の整理や所在，原史料の成立ちに関する情報が充分ではない．今回は可能な限り原史料の所蔵者・寄託先，翻刻刊行物の関係が明確になるよう整理して収録した（表4-1・図4-1（駿河国駿東郡），表4-2・図4-2（相模国中西部），表4-3・図4-3（東方遠方））

降下火砕物層厚・砂除作業見積・砂除復旧（「開発」）実績報告史料を作成時期により整理すると，

a．宝永四年十二月史料
b．宝永四-五年小田原藩史料
c．宝永五年・六年史料
d．正徳二年九月
e．正徳三年史料
f．正徳五年史料
g．享保元年史料
h．その他・成立年不明史料

にわけられる．

a．宝永四年十二月十九日・二十日（1708年1月11日・12日）『此度富士山焼候ニ付石砂降見分帳』等

被災した相模国足柄上郡 矢倉沢村・谷ケ村・関本村・（壗下村（ますした））・千津島村（せんづ）・萱沼（かや）村，足柄下郡 曽我谷津村・永塚村（，駿東郡深沢村もか）名主から小田原藩江戸勤め役人の柳田九左衛門宛，村ごとに差出した堆積層厚と取除作業量見積書の控があり，市史，町史に個別に収録されている（宛先，日付が不完全なものもあるが内容とあわせてここに分類した）柳田九左衛門は宝永四年九月竈新田書上の裏書（御殿場市史第三巻p672-674）によれば小田原藩江戸役人吟味役であった．これらを表4-2（駿東郡深沢村は 表4-1）にまとめた．

b．宝永四年十二月から五年正月頃か？（1708年1月中旬・3月中旬頃）『小田原領砂降積シ見分ノ次第』

相模国足柄上郡・同下郡・駿河国駿東郡を知行していた老中大久保加賀守忠増領の65ヶ村の降砂堆積層厚をまとめた記録がある．宝永五年閏正月三日（1708年2月24日）に小田原藩領のうち降砂被害の大きい村々が上知（幕府領化）された．この史料はその前に，大久保加賀守が領内の降砂層厚を調査してまとめ，上知の判断資料にしたものと考えられる（表4-2，図4-2）．

『大久保忠増記』（坤巻）東京大学史料編纂所蔵（写本）（請求記号 2044-194）に「忠増御筆拝領并献上物并小田原領砂降シ事 小田原領砂降積シ見分ノ次第」として

神奈川県立歴史博物館（2006）富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川，出品リスト47，p44，p115-116．に収録されている．

この史料とほぼ同内容の

小田原有信会編（１９３１）近世小田原史稿本 下巻２（小田原市立中央図書館蔵 請求記号E-01-02）．

が次の資料に収録されている．

瀬戸崎雄（１９８２）金井島村の研究，p72-73（史料11）．

芹沢嘉博（１９７５）富士山噴火の被害とその再開発―小田原藩御厨領を中心に―，小田原地方史研究 7，p40-52．

中野敬治郎（１９７８）近世小田原ものがたり，40-41．小田原文庫 7．名著出版（一部）．

c．宝永五年八月と宝永六年四月・五月・六月見積り（１７０８年９月）（１７０９年５月－７月）

被災地域の駿東郡名主・組頭から幕府の復興役所にあたる酒匂会所あて，砂除け（復旧）の人足数と賃金の見積りが差出された．宝永六年，これらの書面が再度 関東郡代・砂取除且川筋浚普請奉行 伊奈半左衛門 忠順（ただのぶ）の巡見時に，徒目付伊谷茂右衛門・市野新八郎（市野は宝永四年十一月の公儀見分にも参加）宛，提出された．旧大久保加賀守領・旧大久保長門守 教寛（のりひろ）（教重）領の６ヶ村（用沢・棚頭（たながしら）・大堰（おおせぎ）・板妻（いたづま）・川柳新田・中畑村）の個別の記録が残っている（表４-１）．まとめた史料はない．

伊奈半左衛門の御厨（みくりや）巡見は五月とする史料（国立歴史民俗博物館，２００３，p68）と六月とする史料（永原慶二，２００２，p111-117）がある（いずれも小山町用沢 遠藤貴夫家文書）．その他に伴野（１９６２）が収録した五月から六月にかけて廻村した記録がある．

伴野京治（１９６２）p77-78 ⑫ 用沢村報告写 「用沢五月廿一日，六月四日竹之下へ御付、同五日六日二夜菅沼ニ御泊り其内与兵エ殿ニハ十一日ニ御帰りニ成り右ノ旦那方へ指上申候書物ノ覚、用沢御廻りハ六月七日ニテ御昼休ニ御座候 伊右衛門ノ所ニテ 宝永六年丑ノ六月十日」

d．正徳二年九月『砂場駿州駿東郡七ヶ村』（１７１２年１０月）

正徳二年（１７１２）に用沢村など七ヵ村の降砂層厚，開発（復旧）済・未開発（未復旧）の内訳，砂除け費用の見積り等村況の報告書控がある．

小山町棚頭 小野正信氏蔵文書 小山町史資料所在目録 第16集，p88-126，№．62）

小山町史編さん専門委員会（１９９１）小山町史 第二巻 近世資料編Ⅰ，p896-900（史料477）．

大角留吉（１９８７）自然災害と農山村の再興―宝永４亥年の富士山の大噴火と農山村の再興（１）．菊池万雄編日本の風土と災害．p273-288（表４）．

渡邊誠道（１９１７）伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録．31-45．（復刻版（１９８５））

e．正徳三年十二月『（高取帳）』（１７１４年１月）（宝永噴火の砂除工事見積）

駿河国駿東郡御厨村五十四ヶ村の「砂」堆積層厚と砂取除け（開発）実績の書上が残されている．原資料は表紙を欠く．「高取帳」は御殿場市史資料所在目録の表題．御殿場市教育委員会に解読文（手写），活字化された表が千葉徳爾（１９８１）にある（表４-１）．

御殿場新橋 鈴木茂价家文書 御殿場市史資料所在目録 第3集 近世史料編㈡，p75-98，2．土地・租税 №．9．原史料には表紙がなく，御殿場市史資料所在目録に「高取帳（宝永噴火の砂除工事見積）」と表題がある．御殿場市立図書館 解読原稿番号 21-22に解読文がある．

千葉徳爾（１９８１）宝永噴火による降砂と洪水．駿台史學，54，28-52．表１（p37-38）に層厚が引用されている．表中に誤字がある「中日向（正）→中島（誤）（村高116石4斗2升1合），阿多野

新田（正）←阻多野新田（誤），上野新田（正）←上村新田（誤）］

f．（1715年10月）**正徳五年九月『駿州駿東郡村々開発高亥積砂寸尺覚』**（駿東郡村々開発高及び砂積り書き上げ）（表4-1，図4-1（駿河国駿東郡）；）

駿河国駿東郡合わせて八十六ヶ村から伊奈半左衛門家臣小川平右衛門・井出斉右衛門・忍五郎右衛門へあてて降砂厚さ，開発（復旧）済・未開発（未復旧）の内訳を報告した覚がある．御殿場市史に収録されており，下鶴（1981），内閣府（2005）などに多く引用されている．（表4-1，図4-1（駿河国駿東郡））

小山町小山 室伏覚家文書 小山町史資料所在目録 第9集，p1-14，№．123）

御殿場市史編さん委員会（1978）御殿場市史 第四巻 近世史料編，p87-97（史料26）．

g．（1717年1月）**享保元年十二月『駿州駿東郡御厨拾五ヶ村証文』**

中嶋村名主太郎兵衛が認め，藤曲村など，旧大久保加賀守忠増領・旧大久保長門守教寛領・旧稲葉紀伊守正辰領，駿東郡十五ヶ村から伊奈半左衛門家臣長山平助へあてた，砂除け人足扶持米の受取証文．

小山町下古城 鈴木文吉氏所蔵文書 小山町史資料所在目録 第8集，p168-194，№．19．

小山町史編さん専門委員会編（1991）小山町史第二巻 近世資料編Ⅰ，p903-920（史料481）．

同内容 渡邊誠道氏所蔵

渡邊誠道（1917）伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録．81-109．（復刻版（1985））

伴野京治（1962）宝永噴火と北駿の文書．p154-190．（用沢勝又物蔵氏 写書）

矢島佳明（1977）富士山宝永噴火 各村々と須走．地方史研究 あずまえびす 第11号，188-198．

h．その他・成立年不明史料

大久保加賀守忠増領に含まれない相模国（秦野・平塚・厚木・藤沢・横浜・逗子・葉山村），武蔵国（蓮光寺村），上総国，下総国，常陸国の名主・個人の記録として残されている降灰層厚を収録した（表4-3，図4-3（東方遠方））．

宝永五年 酒匂会所宛報告史料		正徳二年九月 『砂場駿州駿東郡七ヵ村（七ヵ村砂退け見積り）』		正徳三年十二月 『（高取帳）』		正徳五年九月 『駿州駿東郡村々開発高亥積砂寸尺覚』		享保元年十二月 『駿州駿東郡御厨拾五ヶ村証文』		旧領主
尺	cm	尺	cm	尺	cm	尺	cm	尺	cm	
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
										大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸 茶畑ヶ	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸稲荷新田	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						二寸	6			大久保加賀守
						六寸	18			大久保加賀守
						六寸	18			大久保加賀守
						五寸	15			大久保加賀守
						五寸	15			大久保加賀守
						五寸	15			大久保加賀守
						五寸 駒門村	15			大久保加賀守
						六寸	18			大久保加賀守
						一尺	30			大久保加賀守
						六寸	18			大久保加賀守
ならし八寸五分	26					九寸	27			大久保加賀守
				一尺	30	一尺	30			大久保加賀守
				一尺二寸	36	一尺八寸	54			大久保加賀守
						一尺五寸	45			大久保加賀守
				二尺四寸	72	二尺	60			大久保加賀守
				二尺一寸	63	二尺	60			大久保加賀守
ならし四尺	120			三尺五寸	105	四尺五寸	135			大久保加賀守
ならし三尺	90			三尺	90	三尺五寸	105			大久保加賀守
						二尺	60			大久保加賀守
						四尺五寸	135			大久保加賀守
				四尺	120	四尺五寸	135			大久保加賀守
				二尺五寸	75	二尺五寸	75			大久保加賀守
				二尺三寸	69	二尺	60			大久保加賀守
				二尺二寸	66	記載なし	記載なし			大久保加賀守
				一尺五寸	45	一尺五寸	45			大久保加賀守
				三尺	90	二尺五寸	75			大久保加賀守
				二尺二寸	66	二尺	60			大久保加賀守
				二尺八寸	84	三尺	90			大久保加賀守
				二尺五寸	75	記載なし				大久保加賀守
				二尺三寸	69	二尺五寸	75			大久保加賀守
				二尺四寸	72	二尺五寸	75			大久保加賀守
				二尺五寸	75	二尺	60			稲葉紀伊守
				二尺四寸	72	二尺四寸	72			稲葉紀伊守
				二尺五寸	75	二尺五寸	75			大久保加賀守
				三尺六寸	108	三尺五寸	105			大久保加賀守
				三尺四寸	102	三尺二寸	96			大久保加賀守
				三尺二寸	96	三尺 六日市場預	90			稲葉紀伊守
ならし三尺	90			三尺	90	三尺一寸	93			大久保加賀守
				三尺	90	三尺二寸	96			大久保加賀守
				三尺二寸	96	三尺二寸	96			稲葉紀伊守
				三尺二寸	96	三尺一寸	93			大久保加賀守
				三尺二寸	96	三尺一寸	93			大久保加賀守
				三尺四寸	102	三尺五寸	105			大久保加賀守
				三尺五寸	105	三尺五寸	105			大久保加賀守
				三尺	90	三尺一寸	93			大久保加賀守
				三尺六寸	108	三尺六寸	108			大久保加賀守
				三尺六寸	108	三尺五寸	105	三尺五寸	105	大久保加賀守
				三尺五寸	105	三尺四寸	102	三尺五寸	105	大久保長門守
				三尺六寸	108	三尺六寸	108	三尺六寸	108	大久保加賀守
				三尺二寸	96	三尺四寸	102	三尺五寸	105	稲葉紀伊守
				三尺五寸	105	三尺六寸	108			大久保長門守
				三尺五寸	105	三尺五寸	105			大久保加賀守
				三尺六寸	108	三尺五寸	105			大久保長門守
		記載なし	記載なし	三尺六寸	108	三尺九寸	117	三尺六寸	108	大久保長門守
				三尺六寸	108	三尺六寸	108	三尺六寸	108	大久保加賀守
				三尺六寸	108	三尺六寸	108	三尺六寸	108	大久保加賀守
				三尺六寸	108	三尺五寸	105	三尺六寸	108	稲葉紀伊守

表4-1　宝永噴火降下堆積物層厚　駿河国駿東郡のまとめ

静岡県　　駿河国駿東郡

地点番号	現地名	旧地名	宝永四年十二月『此度富士山焼申、石砂降り申候儀書上ゲ申候御事』		宝永四年十二月ないし宝永五年一月『小田原領砂降積シ見分ノ次第』	
			尺	cm	尺	cm
1	駿東郡長泉町竹原（たけはら）	竹原村				
2	駿東郡長泉町上土狩（かみとがり）	上土狩村			砂少	+
3	駿東郡長泉町下土狩（しもとがり）	下土狩村			砂少し麦作構なし	+
4	裾野市水窪（みずくぼ）	水窪村				
5	裾野市須山（すやま）	深山（須山）村			砂少シ	+
6	裾野市十里木（じゅうりぎ）	十里木村（深山（須山）村之枝郷）			砂降ラズ	0
7	裾野市下和田（しもわだ）	下和田村			砂少シ	+
8	裾野市今里（いまざと）	今里村			砂少シ	+
9	裾野市伊豆島田（いずしまた）	伊豆嶋田村			砂少	+
10	裾野市二ツ屋（ふたつや）	二ツ屋新田村				
11	裾野市麦塚（むぎつか）	麦塚村			砂少	+
12	裾野市茶畑（ちゃばたけ）	茶畑村			砂少	+
13	裾野市公文名（くもみょう）	公文名村			砂少	+
14	裾野市稲荷（いなり）	稲荷村（古は松兵衛新田）				
15	裾野市平松（ひらまつ）	平松新田				
16	裾野市佐野（さの）	佐野村			砂少	+
17	裾野市石脇（いしわき）	石脇村			砂少	+
18	裾野市岩波（いわなみ）	岩波村			砂少	+
19	御殿場市神山（こうやま）	神山村			砂少	+
20	御殿場市二子（ふたご）	二子村			三寸計麦少シ見ユ	9
21	御殿場市沼田（ぬまた）	沼田村			四寸	12
22	御殿場市大坂（おおさか）	大坂村			二寸	6
23	御殿場市中山（なかやま）	中山村			三寸計麦少シ見ユ	9
24	御殿場市中清水（なかしみず）	中清水村				
25	御殿場市駒門（こまかど）	駒門新田			三寸計（駒郷村）	9
26	御殿場市萩蕪（はぎかぶ）	萩蕪村			四五寸	14
27	御殿場市竈（かまど）	竈新田			六七寸	20
28	御殿場市神場（じんば）	神場村			三四寸	11
29	御殿場市板妻（いたづま）	板妻村			四五寸（坂妻村）	14
30	御殿場市杉名沢（すぎなざわ）	杉名沢村			二尺計	60
31	御殿場市川島田（かわしまた）	川島田村			六七寸	20
32	御殿場市保土沢（ほどさわ）	保土沢新田				
33	御殿場市茱萸沢（ぐみさわ）	茱萸沢村			二尺計（茱萸村）	60
34	御殿場市永塚（ながつか）	永塚村			三四寸	11
35	御殿場市中畑（なかばた）	中畑村			七尺計	210
36	御殿場市川柳（かわやなぎ）	川柳新田			四五寸	14
37	御殿場市印野（いんの）	印野村			五六寸	17
38	御殿場市水土野（みどの）	水土野新田			七尺	210
39	御殿場市仁杉（ひとすぎ）	仁杉村			七尺溜リ	210
40	御殿場市西田中（にしたなか）	西田中村			三尺計（大久保忠増記） 二尺計（近世小田原市史稿）	90 60
41	御殿場市東田中（ひがしたなか）	東田中村			二尺五六寸計	77
42	御殿場市萩原（はぎわら）	萩原村			六七寸	20
43	御殿場市新橋（にいはし）	新橋村			壱尺九寸餘	57
44	御殿場市東山（ひがしやま）	東山新田			二尺五六寸計	77
45	御殿場市二枚橋（にまいばし）	二枚橋村			二尺	60
46	御殿場市北久原村（ほっくばら）	北久原村			三尺計	90
47	御殿場市御殿場（ごてんば）	御殿場村				
48	御殿場市深沢（ふかさわ）	深沢村	壱尺九寸 弐尺八寸 壱尺八寸 弐尺八寸	48～84	二尺五六寸計	77
49	御殿場市小倉野（おぐらの）	小倉野新田				
50	駿東郡小山町桑木（くわぎ）	桑木村				
51	駿東郡小山町新柴（あらしば）	新柴村				
52	駿東郡小山町竹之下（たけのした）	竹下村			五六尺計り	165
53	駿東郡小山町所領（しょりょう）	所領村			四尺五六寸計	137
54	駿東郡小山町下古城（しもふるしろ）	下古城村				
55						
56	御殿場市大堰（おおせぎ）	大堰村			五尺計	150
57	御殿場市中丸（なかまる）	中丸村			五尺計	150
58	駿東郡小山町大胡田（おおごだ）	大胡田村				
59	御殿場市清後（せいご）	清後村			五尺計	150
60	御殿場市山之尻（やまのしり）	山ノ尻村			五尺計（山尻村）	150
61	御殿場市山尾田（やまおだ）	山尾田村			五尺計（山小田村）	150
62	御殿場市六日市場（むいかいちば）	六日市場村			五尺計	150
63	御殿場市増田（ましだ）	増田村（古は清勝寺村）				
64	駿東郡小山町小山（おやま）	小山村			五尺計	150
65	駿東郡小山町生土（いきど）	生土村			五尺五六寸（生田村）	167
66	駿東郡小山町菅沼（すがぬま）	上菅沼（大脇・谷戸・新屋・下原・原 名主 重右衛門）				
67		下菅沼（本村・茅沼 名主 彦右衛門）			五尺計	150
68	駿東郡小山町吉久保（よしくぼ）	吉久保村				
69	御殿場市古沢（ふるさわ）	古沢村				
70	御殿場市塚原（つかばら）	塚原村				
71	駿東郡小山町上古城（かみふるしろ）	上古城村				
72	駿東郡小山町阿多野（あだの）	阿多野新田（安多野新田）				
73	駿東郡小山町藤曲（ふじまがり）	藤曲村			五尺計	150
74	駿東郡小山町中島（なかじま）	中嶋村			五尺六寸	168
75	駿東郡小山町柳島（やなぎしま）	柳嶋村				

宝永五年 酒匂会所宛報告史料		正徳二年九月 『砂場駿州駿東郡七ヵ村（七ヵ村砂退け見積り）』		正徳三年十二月 『（高取帳）』		正徳五年九月 『駿州駿東郡村々開発高亥積砂寸尺覚』		享保元年十二月 『駿州駿東郡御厨拾五ヶ村証文』		旧領主
尺	cm	尺	cm	尺	cm	尺	cm	尺	cm	
				三尺六寸	108	三尺六寸	108	三尺六寸	108	大久保加賀守
				四尺一寸	123	記載なし	記載なし			大久保加賀守
				四尺四寸	132	四尺	120			大久保加賀守
				三尺九寸	117	三尺八寸	114			大久保長門守
ならし四尺五寸	135	平四尺五寸	135	四尺五寸	135	四尺四寸	132	四尺五寸	135	大久保長門守
ならし四尺四寸	132	ならし四尺四寸	132	四尺四寸	132	四尺七寸	141	四尺五寸	135	大久保長門守
		ならし四尺壱寸	123	四尺三寸	129	四尺	120	四尺五寸	135	大久保長門守
		ならし四尺壱寸	123	四尺一二	125	四尺三寸	129	四尺一寸	123	大久保長門守
		ならし四尺五寸	135	四尺五寸	135	四尺五寸	135	四尺五寸	135	大久保長門守
		ならし五尺	150	五尺	150	五尺五寸	165	五尺五寸	165	大久保長門守
				四尺三寸	129	七尺	210			大久保長門守
						九尺	270			大久保加賀守

表4-1　宝永噴火降下堆積物層厚　駿河国駿東郡のまとめ（つづき）

地点番号	現地名	旧地名	宝永四年十二月『此度富士山焼申、石砂降り申候儀書上ゲ申候御事』		宝永四年十二月ないし宝永五年一月『小田原領砂降積シ見分ノ次第』	
			尺	cm	尺	cm
76	駿東郡小山町湯船（ゆぶね）	湯舟村				
77	駿東郡小山町一色村（いしき）	一色村				
78	御殿場市上小林（かみこばやし）	上小林村			五尺	150
79	駿東郡小山町下小林村（しもこばやし）	下小林村				
80	駿東郡小山町用沢（ようさわ）	用沢村				
81	駿東郡小山町棚頭（たながしら）	棚頭村				
82	駿東郡小山町上野（うえの）	上野村				
83	駿東郡小山町上野（うえの）	上野新田				
84	駿東郡小山町中日向（なかひなた）	中日向村				
85	駿東郡小山町大御神（おおみか）	大御神村				
86	御殿場市柴怒田（しばんた）	柴怒田村			六七尺	195
87	駿東郡駿東郡小山町須走（すばしり）	須走村			一丈	300

★国立国会図書館デジタルコレクション収録 登録して閲覧可

出典

宝永四年十二月報告史料

地点48　宝永四年『此度富士山焼申、石砂降り申候儀書上ゲ申候御事』
御殿場市史編さん委員会(1976)御殿場市史 第三巻 近世史料編，p298-299（深沢村史料7）．★

宝永四年十二月ないし宝永五年一月報告史料

『大久保忠増記』（坤巻）東京大学史料編纂所蔵（写本）（請求記号 2044-194）「忠増御筆拝領并献上物并小田原領砂降シ事 小田原領砂降積シ見分ノ次第」
神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川，出品リスト47，p44，p115-116.
小田原有信会編(1931)近世小田原史稿本 下巻2（小田原市立中央図書館蔵 請求記号E-01-02）
瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p72-73(史料11).
芹沢嘉博(1975)富士山噴火の被害とその再開発―小田原藩御厨領を中心に―，小田原地方史研究 7，p40-52.
中野敬治郎(1978)近世小田原ものがたり，40-41. 小田原文庫 7. 名著出版（一部）.

宝永五年酒匂会所宛報告（個別の記録のみ まとめた史料なし）

地点29 『覚』（宝永五年砂除け金見積り覚）板妻区有文書（御殿場市史資料所在目録 第9集 近世史料編㈥，p242-247，No.8　★）
御殿場市史編さん委員会(1975)御殿場市史 第二巻 近世史料編,p543-544（板妻村史料3）．★

地点35 （宝永五年八月　中畑村砂除見積）中畑区長保管文書
伴野京治(1962)宝永噴火と北駿の文書.68-70（4 再び北駿の文書⑨）.

地点36 『駿州御厨領川柳新田石砂畑砂退積帳』川柳区有文書（御殿場市史資料所在目録 第4集 近世史料編㈣，p81-142，No.19　★）
御殿場市史編さん委員会(1975)御殿場市史 第二巻 近世史料編,p630-631（川柳新田史料8）．★

地点56 『駿州駿東郡御厨大堰村田畑砂退川浚井堰積り帳』（宝永五年砂退け見積り）大堰区有文書
（御殿場市史資料所在目録 第9集 近世史料編㈥，p322-338，No.11）★
伴野京治(1962)宝永噴火と北駿の文書.p60-64（4 再び北駿の文書⑦）.
御殿場市史編さん委員会(1976)御殿場市史 第三巻 近世史料編，p149-151（大堰村史料6）．★

地点80 『覚』（用沢村砂除見積帳控）（被害地用沢村ニ於ル古文書）小山町用沢 遠藤貴夫氏蔵
（小山町史資料所在目録 第16集，p88-126，No.50）
渡邊誠道(1917)伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録.p46-60.★（復刻版(1985)）
伴野京治(1962)宝永噴火と北駿の文書.64-68（4 再び北駿の文書⑧　用沢　勝又惣蔵氏写書史料）.
矢島佳明(1977)宝永噴火と須走(一).地方史研究 あずまえびす 第十一号，179-185.
小山町史編さん専門委員会(1991)小山町史 第二巻 近世資料編Ⅰ，p856-858（史料461）.

地点81 『棚頭村田畑砂退並に御普請御願帳』（被害地棚頭村ニ於ル古文書）小山町棚頭 小野氏蔵文書
（小山町史資料所在目録 第16集，p88-126，No.57）
渡邊誠道(1917)伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録.p31-36.★（復刻版(1985)）
矢島佳明(1977)富士山宝永噴火 各村々と須走．地方史研究 あずまえびす 第11号,p174-179.

正徳二年九月報告史料

『砂場駿州駿東郡七ヵ村（七ヵ村砂退け見積り）』（「正徳二年 砂場用澤棚頭阿多野大御神上野上野新田中日向ノ七ヵ村ノ控」）小山町棚頭 小野正信氏蔵文書（小山町史資料所在目録 第16集，p88-126，No.62）
小山町史編さん専門委員会(1991)小山町史 第二巻 近世資料編Ⅰ，p896-900（史料477）.
大角留吉(1987)自然災害と農山村の再興―宝永4亥年の富士山の大噴火と農山村の再興(1).菊池万雄編日本の風土と災害．p273-288（表4）．★
渡邊誠道(1917)伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録.36-45.（復刻版(1985)）★

正徳三年十二月報告史料

正徳三年十二月『（高取帳）』御殿場市新橋 鈴木茂价家所蔵
御殿場市新橋 鈴木茂价家文書（御殿場市史資料所在目録 第3集 近世史料編㈢，p75-98，2.土地・租税 No.9. ★
御殿場市立図書館 解読原稿番号 21-22）
千葉徳爾(1981)宝永噴火による降砂と洪水.駿台史學,54,28-52.表1に層厚引用.［修正（中日向←中島（村高116.4. 2.1），阿多野新田←阻多野新田，上野新田←上村新田）］明治大学リポジトリweb公開

正徳五年九月報告史料

『駿州駿東郡村々開発高亥積砂寸尺覚』小山町小山 室伏覚家文書（小山町史資料所在目録 第9集，p1-14，No.123）
御殿場市史編さん委員会(1978)御殿場市史 第四巻 近世史料編，p87-97（史料26）．★

享保元年十二月報告史料

『駿州駿東郡御厨拾五ヶ村証文』小山町下古城 鈴木文吉家氏所蔵文書（小山町史資料所在目録 第8集，p168-194，No.19）
小山町史編さん専門委員会編(1991)小山町史第二巻 近世資料編Ⅰ,p903－920(史料481).
同内容 渡邊誠道氏所蔵
渡邊誠道(1917)伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録.81-109.（復刻版(1985)）．★
伴野京治(1962)宝永噴火と北駿の文書.p154-190.（用沢勝又惣蔵氏 写書）.
矢島佳明(1977)富士山宝永噴火 各村々と須走．地方史研究 あずまえびす 第11号,188-198.

旧領主名は　郷帳 第九 駿河国（元禄十五年十二月（1703年1月）提出）（国文学研究資料館蔵 史料番号37A-65）による
原史料中　大久保「隠岐守」（忠増）知行 とあるものは，宝永二年九月に大久保「加賀守」（忠増）へ改名したため，本表中には旧領主名 大久保「加賀守」としてある.

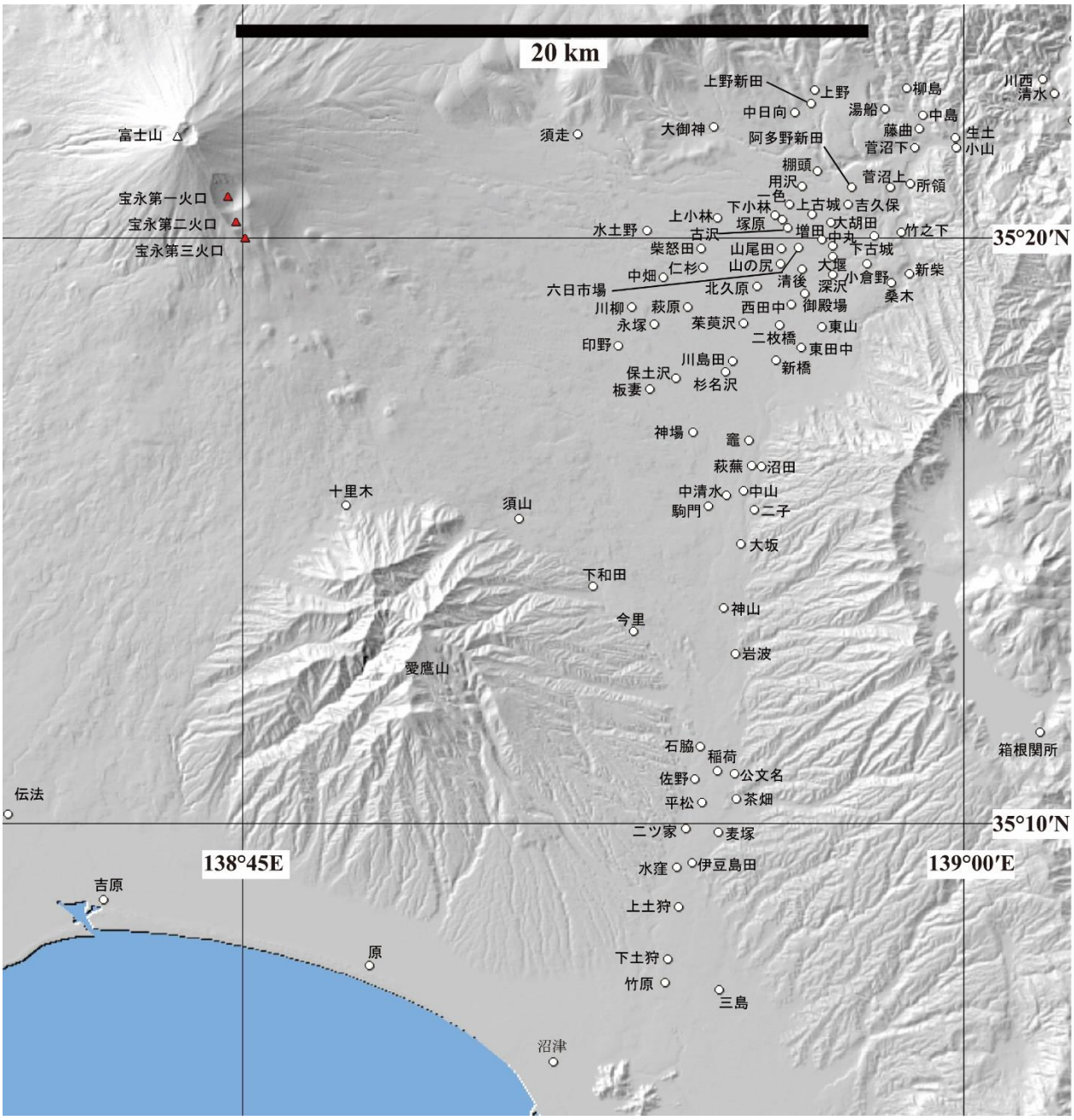


図 4-1（a）　富士山宝永噴火　駿河国駿東郡降砂層厚報告地点

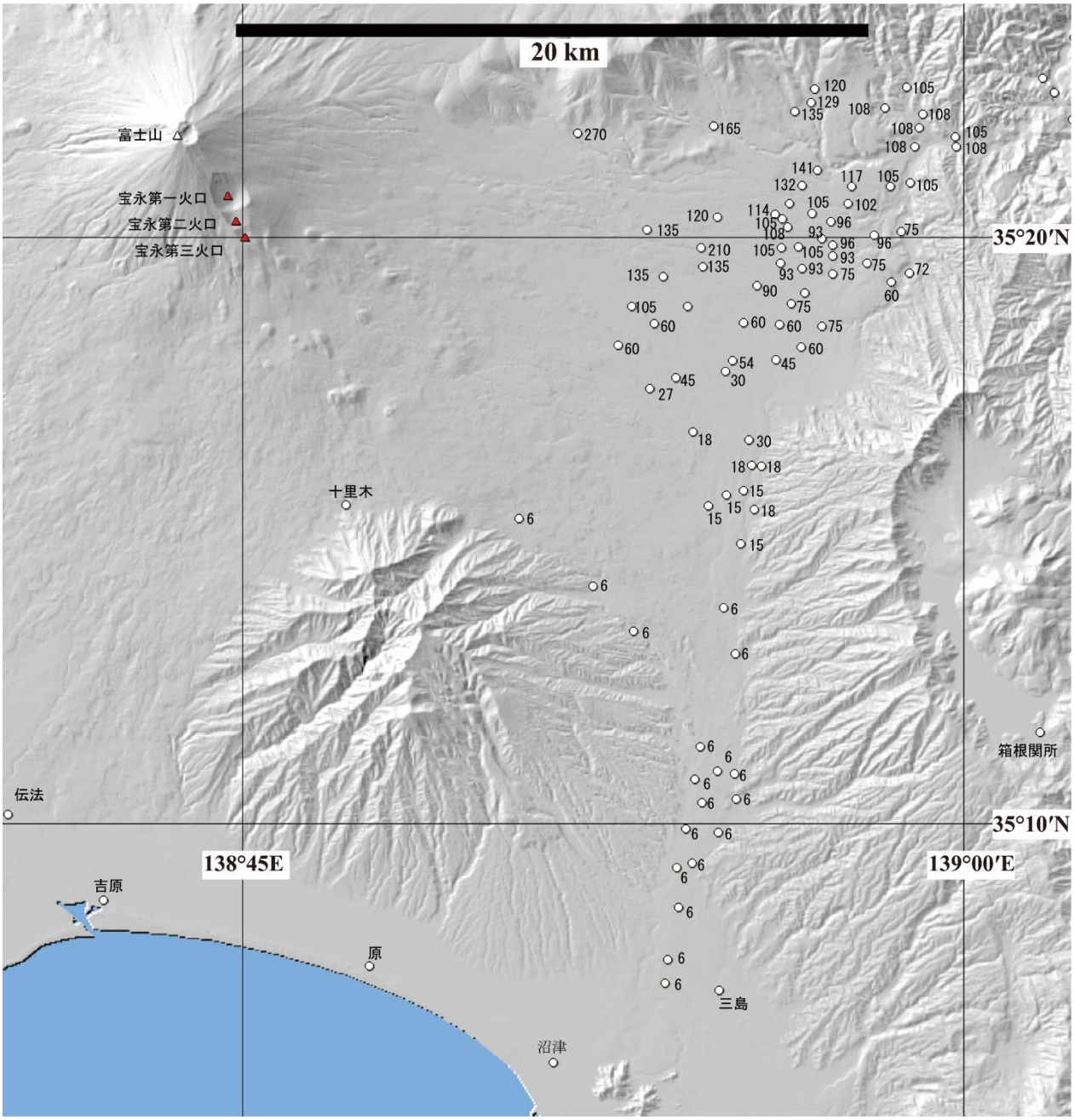


図 4-1（b）富士山宝永噴火　駿河国駿東郡降砂層厚（cm）

層厚は　正徳五年九月『駿州駿東郡村々開発高亥積砂寸尺覚』（表 4-1）による

その他		旧領主	出典
尺	cm		
白き石一二寸, 黒き砂一尺より 二尺餘	軽石 4.5 スコリア45	大久保加賀守	○『宝永四年富士山噴火砂石降リタル舊記録』 相州曾比村劒持定吉氏方蔵之寫 渡邊誠道(1917)伊奈氏 贈位欽仰録.p149-150.同記念誌刊行会.復刻版(1985).★ 矢島佳明(1977)宝永噴火と須走(一).地方史研究 あずまえびす 第十一号, p202. 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p71.
		大久保加賀守 大久保加賀守	○『小田原領砂降積シ見分ノ次第』
		大久保加賀守	○宝永四年十二月『矢倉沢村砂御見分帳』矢倉沢 田代克已氏（現 田代均氏）蔵 関口康弘(1993)市史研究あしがら, 5号, p37, 38, 47.に引用 南足柄市(2009)南足柄市史6 通史編, p433（市史研究あしがら, 5号　表を引用） ○『小田原領砂降積シ見分ノ次第』
		大久保加賀守	○宝永四年十二月『此度富士山焼候ニ付石砂降見分帳』相模国足柄上郡谷ケ村 武尾家文書 神奈川県立公文書館寄託（資料ID 2199950974） 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川, p45, p116-117.
三尺二寸ならし	96	大久保加賀守	○宝永六年『相模国西郡中山家六ヶ村願帳』山北町谷峨 水野勝弘氏蔵 小田原市史 史料編近世Ⅱ幕領1, p501－503（史料307）.
二尺九寸ならし	87	大久保加賀守	
二尺五寸ならし	75	大久保加賀守	
一尺六寸ならし	48	大久保加賀守	
二尺八寸ならし	84	大久保加賀守	
二尺五寸	75	大久保加賀守	
二尺五寸位	75	大久保加賀守	○『二階堂家伝来旧記書』般若院蔵（山北町所在史料目録 第四集, p66, 湯山家文書 No.1） 足柄乃文化13号（奥付『足柄之文化』）(1981),p1-56（影印全画像） 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p69-70.（抜粋翻刻） 中野敬治郎(1978)近世小田原ものがたり,p42.小田原文庫 7.名著出版（一部）.
松田村にて二尺位	60	大久保加賀守	
		大久保加賀守	○『小田原領砂降積シ見分ノ次第』
一尺五寸より二尺	58	大久保加賀守	○『大地震以来砂降大変覚書』（嘉永七年写 元禄一六年より享保二年までの災害記録） 広町 湯山厚氏蔵 南足柄市(1988)南足柄市史2 資料編近世(1),p484-490（史料195）.
		大久保加賀守 大久保加賀守	○『小田原領砂降積シ見分ノ次第』
		大久保加賀守	○宝永四年十二月『今度富士山焼申候石砂見分帳』 神奈川南足柄市関本自治会 蔵（南足柄市史資料所在目録 第2集, p207, No.8） 南足柄市(1993)南足柄市史3 資料編近世(2),p184-185（史料69）. 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1, p414-417（史料275）. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川,p45, p116. ○『小田原領砂降積シ見分ノ次第』
		大久保加賀守	○『小田原領砂降積シ見分ノ次第』
一尺五寸より二尺	58	大久保加賀守	○『杉本田造日記』 本多秀雄(1960)南足柄中沼名主杉本田造日記.足柄乃文化4号,p39-40,山北町地方史研究会. 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p70(史料3).
		大久保加賀守	○『小田原領砂降積シ見分ノ次第』
		大久保加賀守	○宝永四年十二月『富士山砂降田畑荒地ニ相成、開発ニ付高反別并人足書上写（後欠）（富士山噴火による降砂片付人足見積書）』壜下 加藤英雄氏蔵 （南足柄市史資料所在目録 第1集, p127-175,［村況・戸口］ No.3）. 南足柄市(1988)南足柄市史2 資料編 近世(1), p243-244（史料89）. 生沼清治(1990)富士山の噴火と酒匂川,開成町史研究,44-58.
		大久保加賀守	○宝永四年十二月『千津嶋村富士山焼申候石砂見分帳 宝永四年十二月 今度富士山焼申候ニ付石砂降御見分帳　亥十二月十九日』千津島村 瀬戸家文書 明治大学刑事博物館蔵 青木美智男(1968)宝永四年富士山噴火・翌五年酒匂川大口堤決壊とその修復をめぐる資料について―旧千津嶋村の場合を中心に―. 史談足柄, 6, 9-53（史料一）. 関口康弘(1993)宝永の砂降以後の酒匂川氾濫について－大口水下六か村農民たちの動向を中心に―. 市史研究あしがら, 5, p46, 47に引用.
		大久保加賀守	○宝永四年十二月『此度富士山焼申候ニ付石砂降見分帳』足柄上郡松田町 安藤家文書 神奈川県立公文書館寄託（資料ID 2199525673）
三・四寸	17	大久保長門守	○宝永七年四月『菖蒲・八沢・三廻部・柳川四か村田畑開発願い』 秦野市史第二巻, 近世史料１, p438-442.
三・四寸	17	大久保長門守	
三・四寸	17	大久保長門守	
三・四寸	17	大久保長門守	

		大久保加賀守	○宝永四年十二月『此度富士山焼岩砂降田畑目録』曽我谷津 長谷川範氏蔵 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1,p413-414（史料274）.
		（記載なし 大久保加賀守 領ヵ）	○宝永四年十二月『今度富士山焼申候ニ付石砂降見分帳』永塚 宇佐美勝朗氏蔵 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1,p411-413（史料273）.
二十三日八ツ過 までに一尺四方 に 一升三四合 総計 四五寸	12月16日 14時過ぎ までに 2.7 総計	大久保長門守	○『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』小船 船津常治氏蔵 船津家文書 （小田原の近世文書目録3, p89, No115） 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1,p408-409（史料270）. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川,p46, p114－115.

旧領主名は　郷帳 第十二 相模国（元禄十五年（1702年）提出）（国文学研究資料館蔵 史料番号37A-68）による
原史料中　大久保「隠岐守」（忠増）知行 とあるものは, 宝永二年九月に「加賀守」（忠増）へ改名したため,
本表中には旧領主名 大久保「加賀守」としてある.
関東近世史研究会(1988)関東甲豆郷帳.（元禄郷帳 相模国 足柄下郡・足柄上郡, p32-36.）に翻刻

表4-2　宝永噴火降下堆積物層厚　相模国足柄上郡・足柄下郡のまとめ

神奈川県　　相模国足柄上郡

地点番号	現地名	旧地名	宝永四年十二月 柳田九左衛門宛報告		宝永四年十二月・宝永五年一月『小田原領砂降積シ見分ノ次第』	
			尺	cm	尺	cm
1	小田原市曽比（そび）	曾比村				
2	南足柄市岩原（いわはら）	岩原村			二尺三寸	69
3	南足柄市沼田（ぬまた）	沼田村			二尺三寸	69
4	南足柄市矢倉沢（やぐらさわ）	矢倉沢村	一尺六寸	48	三尺	90
5	足柄上郡山北町谷ケ（やが）	谷ケ村	二尺八寸	84		
6	足柄上郡山北町川西（かわにし）	川西村				
7	足柄上郡山北町湯触（ゆぶれ）	川村　湯触村				
8	足柄上郡山北町山市場村（やまいちば）	川村　山市場村				
9	足柄上郡山北町神縄（かみなわ）	川村　神縄村				
10	足柄上郡山北町都夫良野（つぶらの）	川村　都夫良野村				
11	足柄上郡山北町皆瀬川（みなせがわ）	川村　皆瀬川村				
12	足柄上郡山北町山北（やまきた）	川村　山北				
13	足柄上郡山北町松田惣領（まつだそうりょう）	松田惣領				
14	南足柄市弘西寺（こうさいじ）	弘西寺村			一尺三寸（高西寺村）	39
15	南足柄市広（ひろ）町	猿山村				
16	南足柄市雨坪（あまつぼ）	雨坪村			一尺三寸	39
17	南足柄市福泉（ふくせん）	福泉村			一尺三寸	39
18	南足柄市関本（せきもと）	関本村	一尺九寸	57	一尺三寸（関元村）	39
19	南足柄市狩野（かの）	狩野村			一尺六七寸（狩野一色村	50
20	南足柄市中沼（なかぬま）	中沼村				
21	南足柄市塚原（つかはら）	塚原村			五六寸麦 作見ゆる	17
22	南足柄市壷下（まました）	壷下村	一尺六寸	48		
23	南足柄市千津島（せんづしま）	千津嶋村	一尺二寸	36		
24	足柄上郡松田町寄（やどりぎ）	萱沼（かやぬま）村	一尺五寸	45		
25	秦野市三廻部（みくるべ）	三廻部村				
26	秦野市柳川（やながわ）	柳川村				
27	秦野市八沢（はっさわ）	八沢村				
28	秦野市菖蒲（しょうぶ）	菖蒲村				

神奈川県　　相模国足柄下郡

1	小田原市曽我谷津（そがやつ）	曾我谷津村	六寸五分	20		
2	小田原市永塚（ながつか）	永塚村	五寸五分	17		
3	小船村	小船村				

宝永四年十二月・宝永五年一月『小田原領砂降積シ見分ノ次第』出典
『大久保忠増記』（坤巻）東京大学史料編纂所蔵（写本）（請求記号 2044-194）「忠増御筆拝領并献上物并小田原領砂降シ事 小田原領砂降積シ見分ノ次第」
神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川，出品リスト47，p44，p115-116.
小田原有信会編(1931)近世小田原史稿本 下巻2（小田原市立中央図書館蔵 請求記号E-01-02）
瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p72-73(史料11).
芹沢嘉博(1975)富士山噴火の被害とその再開発－小田原藩御厨領を中心に－，小田原地方史研究 7，p40-52.
中野敬治郎(1978)近世小田原ものがたり，40-41. 小田原文庫 7. 名著出版（一部）.

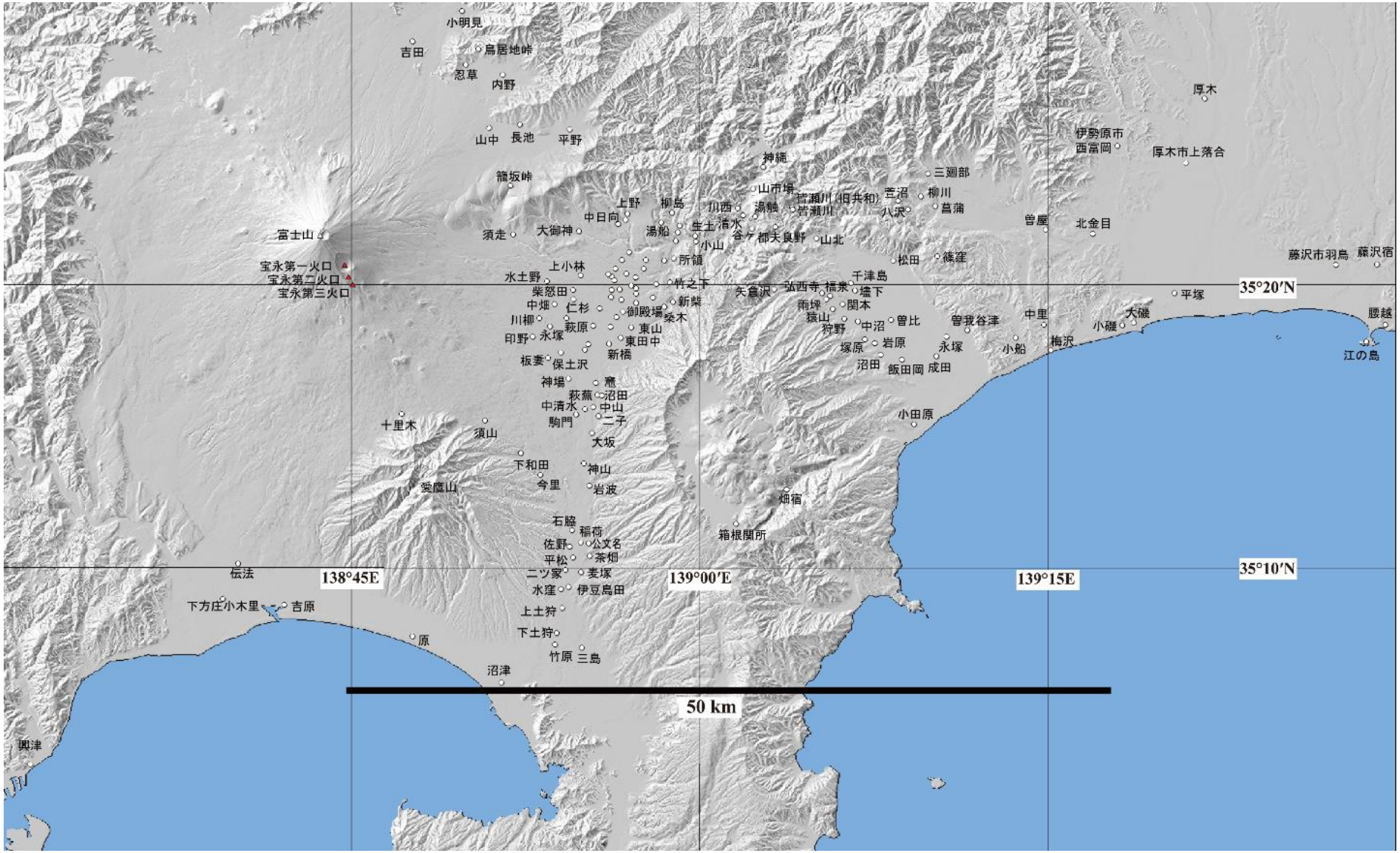


図 4-2（a）　富士山宝永噴火　駿河国駿東郡・相模国中・西部降砂層厚報告地点

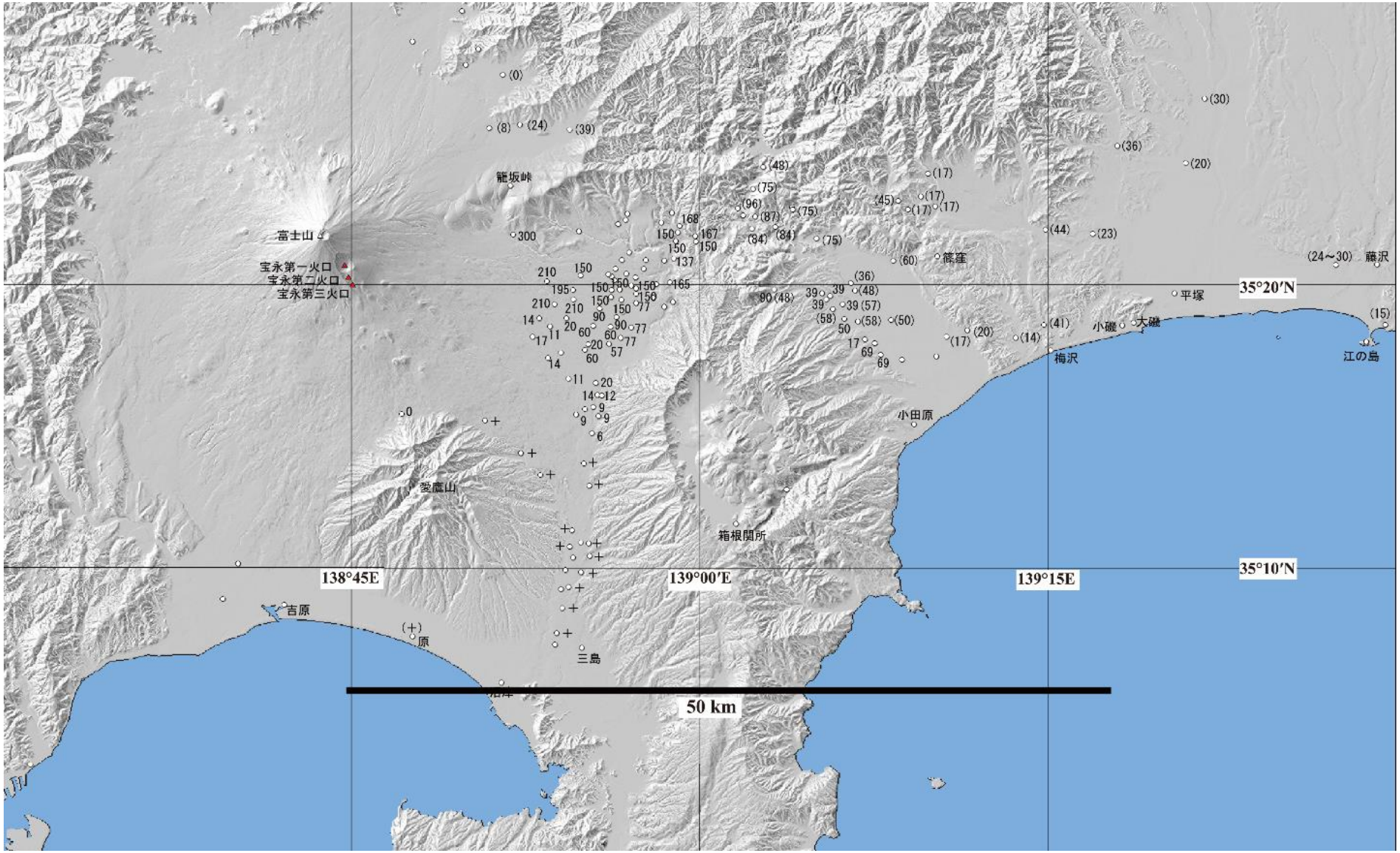


図 4-2（b）　富士山宝永噴火　駿河国駿東郡・相模国中・西部降砂層厚（cm）

層厚は『小田原領砂降積シ見分ノ次第』による　（ ）内は他史料に基づく値（表 4-2）

表4-3　宝永噴火降下堆積物層厚　遠方・周辺地域のまとめ

地点番号	現地名	旧地名	層厚		記録年月
			尺	cm	
1	神奈川県中郡二宮町中里	相模国淘綾（ゆるぎ）郡中里村	一尺三四寸	41	宝永四年十二月
	『富士山噴火につき中里村窮状報告等願書』二宮町中里 高橋実氏蔵 二宮町編(1990)資料編 1 原始 古代 中世 近世,p364（史料35）.				
2	神奈川県秦野市曽屋	相模国大住郡曽屋村	一尺四五寸	44	宝永四年十二月
	『乍恐以書付奉願候』中村家文書（横野区有文書） 秦野市(1988)秦野市史 通史 2 近世, p207.				
3	神奈川県厚木市上落合	相模国大住郡上落合村	厚サ六寸ゟ七寸	20	宝永五年閏正月
	『砂御見分御案内帳』厚木市落合 萩原宏氏蔵（厚木市史資料所在目録（その1）, p391,［土地］ No.16） 厚木市秘書部市史編さん室(1993)厚木市市史 近世資料編(2) 村落1, 27-30（史料7）.				
4	神奈川県厚木市		壱尺程ニ積ル	30	
	『覚』厚木市下萩野 難波武治氏蔵（厚木市史資料所在目録（その2）, p406,［村況］ No.137の2） 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p75.★				
5	神奈川県平塚市北金目	相模国大住郡北金目村	七寸 八寸	23	宝永五年閏正月十五日
	『覚』（宝永五年閏正月 富士山噴火砂降り後村柄書上）北金目 柳川力氏蔵（柳川正邦氏蔵 平塚市博物館寄託） 平塚市編(1983)平塚市史3 資料編 近世(2), p197-198（史料63）. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川.p110.（出品リスト67）				
6	神奈川県伊勢原市西富岡	相模国大住郡西冨岡村	十一月二十四日朝に四寸, 十二月八日に一尺二寸	1707年12月17日朝に12, 12月31日に36	宝永五年閏正月 または 宝永五年三月
	『砂降検分書上帳』伊勢原市板戸 堀江政邦氏蔵 堀江家文書 神奈川県企画調査部史編集室編(1976)神奈川県史資料編8 近世5上,p101-106(史料173).神奈川県. 神崎彰利編(1995)堀江文書 第2巻 中・近世(1),104-112（史料116）.小森書房. 伊勢原市史編集委員会(2010)伊勢原市史 通史編 近世,（末尾部分）p113-114. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川. p114（出品リスト44）.				
7	神奈川県藤沢市羽鳥	相模国高座（たかくら）郡羽鳥村	八九寸より一尺迄	24～30	宝永四年十二月
	『羽鳥村岩砂埋書上覚（下書）』三觜博氏蔵 藤沢市史編さん委員会編(1973)藤沢市史第二巻（資料編）,p286-287（史料五 画像あり）. 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p75-76.				
8	神奈川県鎌倉市腰越（こしごえ）	相模国鎌倉郡津村	五寸	15	
	『津村腰越旧志』 金子八右衛門編(1997)津村腰越旧志・中,p21-23に翻刻文,p83-84に画像,考える市民の会.				
9	神奈川県横浜市泉区	相模国鎌倉郡和泉村	十一月二十三日六時迄に四五寸、十二月八日迄に八九寸所により二尺	1707年12月16日夕までに14, 12月31日までに26～60	宝永四年十二月
	『乍恐以書付奉願候御事』 渡邊誠道(1917)伊奈氏 贈位欽仰録.同記念誌刊行会.140-143.復刻版(1985）.★ 矢島佳明(1977)宝永噴火と須走(一).地方史研究 あずまえびす 第十一号, 199-200. 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p71-72.				
10	神奈川県横浜市泉区新橋町		七寸	21	正徳四年六月
	『正徳四年六月観音寺当寺記』新橋町観音寺文書 戸塚区史刊行委員会編(1991)戸塚区史, p78-80.				
11	神奈川県逗子市桜山	相模国三浦郡桜山村	三寸余	9	宝永五年三月四日
	『富士山噴火御救金割合之覚 桜山村』逗子市桜山 石渡篤子氏蔵 6一－36 逗子市(1985)逗子市史 資料編 1 古代・中世・近世 1, p502-505（史料九四）.				
12	神奈川県三浦郡葉山町木古庭	相模国三浦郡木古庭（きこば）村	一寸	3	宝永五年
	『差上申上口上書之事』三浦郡葉山町木古庭 伊東家文書 神奈川県立公文書館寄託（資料ID2201041287）				
13	神奈川県横浜中区根岸	武蔵国久良岐郡根岸村	七八寸所により一尺二尺	23～45	
	『覚書』久良岐郡根岸村 高橋家文書 横浜市(1958)横浜市史 第1巻, p685-686.★				
14	東京都多摩市連光寺	武蔵国多摩郡蓮光寺村	三四寸	11	宝永五年閏正月十二日
	『砂積候ニ付御見分并救金一条』武蔵国多摩郡連光寺村富沢家文書 国文学研究資料館所蔵 請求番号 30J/01235.				
15	清瀬市上清戸（かみきよと）	多摩郡上清戸村	二寸	6	
	『年代記并過去帳』 清瀬市史編纂委員会(1973)清瀬市史, p259-266.				
16	東京都新宿区四谷,調布市布田・上石原・下石原,八王子市,小仏（八王子市裏高尾町）,山梨県大月市猿橋町・初狩町・笹子町白野	四谷,札,石原,八王子,古仏,猿橋,初狩,白野		＋	
	『(宝永山噴火記)』甲斐国山梨郡下井尻村 （山梨県山梨市下井尻）依田家文書 国文学研究資料館蔵 追補/18.雑（27D4697）				
17	埼玉県越谷市新川（しんかわ）町	埼玉郡越巻村	三寸余	9	
	『産社（ウブシャ）祭礼帳』 越谷市役所(1972)越谷市史四,p865（史料二）.★				
18	埼玉県大宮市	大宮	三寸程	9	宝永四年
	『宝永四丁亥年十月四日大地震之由来、同年十二月廿二日より富士山焼之由来 』京本店原蔵 三井家記録文書目録 No.10172 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p63-65.★				
19	埼玉県行田市	武蔵国埼玉郡忍（おし）	降らず	0	
	『公餘録 巻二』 児玉幸多校訂(1975)阿部家史料集一 公餘録（上）, p153-161. 吉川弘文館.★				
20	木更津市犬成（いんなり）	上総国望陀（もうだ）郡犬成村	一坪あたり十一月二十四日朝六ツ半 二斗八升八合 二十八日四ツ時 五升四合 二十九日四ツ時 一斗四升四合	12月 17日07時 1.6 21日10時 0.3 22日10時 0.8 3回合計 2.7	宝永四年
	『富士山辰巳方焼出シ候事』 橘田昭雄(2000)木更津で見た富士山宝永の噴火, 西上総文化会報 第六十号, p31-35. 本吉正宏（2015）内房における富士山宝永噴火の記録.千葉文華, p52-56.				

表4-3　宝永噴火降下堆積物層厚　遠方・周辺地域のまとめ（つづき）

地点番号	現地名	旧地名	層厚		記録年月
			尺	cm	
21	千葉県君津市大井	上総国周淮（すえ）郡大井村		＋	
	『覚　宝永四丁亥』 千葉県君津市(1992)君津市史資料集Ⅱ近世Ⅱ,p228,君津市市史編さん委員会. (久留里城址資料館平成25年度（2013）企画展「天災ときみつ～『未曾有』の災害をふり返る」パンフレット.☆				
22	千葉県勝浦市勝浦	上総国夷隅郡（いすみ）勝浦村	五寸	15	
	『高照寺過去帳』 関東地区災害科学資料センター 編(1977)房総半島南部の元禄地震料 関東地区災害科学資料センター資料, その9, p38（史料38）. 古山 豊(1983)第二集 元禄地震史料および分析.p29-30（史料27）. 千葉県郷土史研究連絡協議会編(1984)房総災害史―元禄の大地震と津波を中心に―. 郷土研叢書Ⅳ,p287-288（史料43）.				
23	千葉県勝浦市植野	上総国夷隅郡植野村		＋	
	『香取神社棟裏肘木銘文』 関東地区災害科学資料センター 編(1977)房総半島南部の元禄地震料 関東地区災害科学資料センター資料, その9,p38（史料39）. 古山 豊(1983)第二集 元禄地震史料および分析,p30-31（史料28）. 千葉県郷土史研究連絡協議会編(1984)房総災害史―元禄の大地震と津波を中心に―. 郷土研叢書Ⅳ, p288 （史料44）.				
24	千葉県夷隅郡御宿（おんじゅく）町浜	上総国夷隅郡御宿村	二寸ニ余リ	6	
	『妙音寺過去帳』 関東地区災害科学資料センター 編(1977)房総半島南部の元禄地震料 関東地区災害科学資料センター資料, その9, p38-39(史料40). 古山 豊(1983)第二集 元禄地震史料および分析,p28-29（史料26）. 千葉県郷土史研究連絡協議会編(1984)房総災害史―元禄の大地震と津波を中心に―. 郷土研叢書Ⅳ, p289（史料45）. 御宿町史編さん委員会編(1993)御宿町史,p222.御宿町.				
25	千葉県長生（ちょうせい）郡一宮町東浪見（とらみ）	上総国長柄郡東浪見村	三寸	9	
	『萬覚書』牧野春江氏蔵 長生郡一宮町社会教育課に写あり 関東地区災害科学資料センター 編(1977)房総半島南部の元禄地震料 関東地区災害科学資料センター資料, その9, p39-42(史料42). 古山 豊(1982)山武・長生郡における元禄地震調査,p31-36（史料28）.				
26	千葉県長生郡長生村本郷	上総国長柄郡本郷村		＋	
	『大沼家過去帳』大沼内蔵之助氏蔵 九十九里町誌編集委員会(1985)九十九里町誌資料集 第12輯.p110.に一部収録. 古山 豊(1987)第三集 元禄地震史料集,p1-3（史料1）.				
27	千葉県長生郡白子町（しらこまち）関	上総国長柄郡関村		＋	
	『一代記付リ津波ノ叟』池上誠家文書 関東地区災害科学資料センター 編(1977)房総半島南部の元禄地震料 関東地区災害科学資料センター資料, その9,p45-47(史料46). 古山 豊(1982)山武・長生郡における元禄地震調査,p13-17.史料13. 千葉県郷土史研究連絡協議会編(1984)房総災害史―元禄の大地震と津波を中心に―. 郷土研叢書Ⅳ,p300-304（史料52）				
28	千葉県香取郡多古町（たこまち）	下総国香取郡多古村		＋	
	『平山静江家過去帳』 多古町史編さん委員会編(1985) 多古町史下巻,p1050,多古町. 多古町デジタルアーカイブ 多古町史 災害年表で公開.				
29	千葉県香取市佐原（さわら）	下総国香取郡佐原村		＋	
	『宝永四丁亥年 日帳（『伊能勘解由日記』または『景利日記』）』伊能淳氏蔵 香取市伊能忠敬記念館管理 小山真人・西山昭仁・井上公夫・角谷ひとみ・冨田陽子(2003)富士山宝永噴火の降灰域縁辺における状況推移を記録する良質史料『伊能景利日記』と伊能景利採取標本.歴史地震,19,38-46.				
30	千葉県香取市佐原	下総国香取郡佐原村		＋	
	『入目録』伊能淳氏蔵 香取市伊能忠敬記念館管理 小山真人・西山昭仁・井上公夫・角谷ひとみ・冨田陽子(2003)富士山宝永噴火の降灰域縁辺における状況推移を記録する良質史料『伊能景利日記』と伊能景利採取標本.歴史地震,19,38-46.				
31	千葉県香取市佐原	下総国香取郡佐原村		＋	
	『入目録』伊能淳氏蔵 香取市伊能忠敬記念館管理 小山真人・西山昭仁・井上公夫・角谷ひとみ・冨田陽子(2003)富士山宝永噴火の降灰域縁辺における状況推移を記録する良質史料『伊能景利日記』と伊能景利採取標本.歴史地震,19,38-46.				
32	茨城県龍ヶ崎市豊田町	常陸国相馬郡豊田村	五六分	2	天明三年七月八日 浅間噴火記事中
	『天明三年卯日記』（七月八日浅間噴火記事中に宝永噴火 覚）山崎穣家文書 龍ヶ崎市歴史民俗資料館寄託. 龍ヶ崎市史 近世調査報告書Ⅱ,p216-217. に解読文				
33	茨城県石岡市	常陸国新治郡（常陸）府中		＋	宝永四年
	『日記（宝永四年）』栃木県芳賀郡茂木町　小崎耕作家文書 栃木県立文書館寄託				
34	茨城県笠間市	茨城郡完戸（宍戸）	一寸	3	宝永四年
	『日記（宝永四年）』栃木県芳賀郡茂木町　小崎耕作家文書 栃木県立文書館寄託				
35	茨城県笠間市・東茨城郡城里町	常陸国茨城郡十二郷	富士山砂降り	＋	
	『常州笠間拾弐郷并御地頭年代記』石井精家原蔵 笠間市教育委員会蔵 請求番号 A22 1				
36	茨城県ひたちなか市	常陸国那珂郡湊村		＋	
	『湊村古記雑書（海老澤川覚）』 那珂湊市史編さん委員会編(1975)那珂湊市史料 第一集,p45.★				
37	栃木県芳賀郡茂木（もてぎ）町	下野国芳賀郡茂木	灰砂降候由注進	＋	
	『富士山自焼記』（茂木から注進）横山治平原蔵 東京東京大学史料編纂所蔵 請求記号 2062-1 web公開. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川. p120-122, 出品リスト26.				
38	山梨県南都留郡忍野（おしの）村・山中湖村	甲斐国南都留郡 平野村, 長池村, 山中村, 内野村, 平野坂	平野村 壱尺三寸 長池村 八寸 山中村 二寸五分 内野村作場所 一粒も降らず 平野坂 峠まで少々ずつ降る	平野村 39 長池村 24 山中村 8 内野村 0 平野坂 峠まで＋	写(天明二年)
	『富士山焼砂吹出乱剰』（十一月二十五日条）忍野村内野 渡辺勝男家文書 忍野村(1989)忍野村誌 第一巻,p226-231, 旭日丘区史編纂委員会偏(2001)旭日丘のあゆみ(山中湖村旭日丘区政施行五十年史), p481-493. すその路郷土研究会(2009)富士山周辺の災害と対応, p40-53.				

☆国立国会図書館デジタルコレクション収録 登録なしで閲覧可
★国立国会図書館デジタルコレクション収録 登録して閲覧可

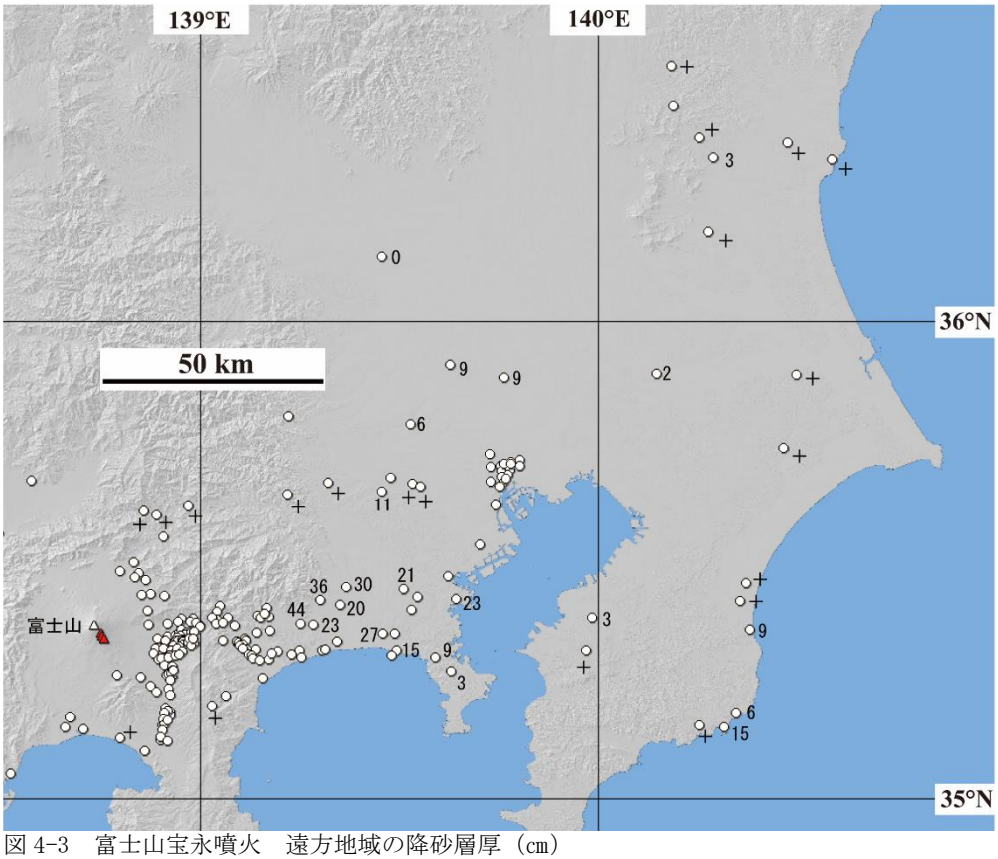


図 4-3　富士山宝永噴火　遠方地域の降砂層厚（cm）

層厚は，表4-2，4-3から抜粋

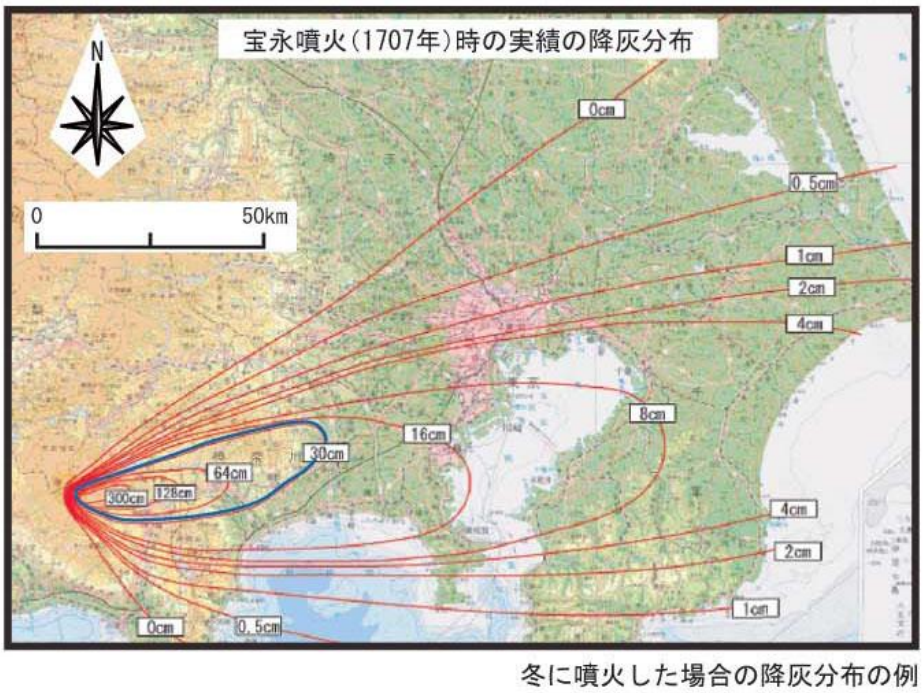


図 4-4　富士山火山防災協議会（2004）富士山火山防災マップに示された　宝永噴火降灰実績図

5. 注進記録

『富士山自焼記』に収録された江戸幕府への注進状を以下に収録する.

1.『富士山震動焼出候事、伊奈半左衛門殿ゟ被差上候沙汰有之寫』〇十一月廿六日付伊奈半左衛門

「伊奈半左衛門家来東海道ニ而旅人江承候所、書付指越申候趣、

一、当月廿三日吉原之宿通り掛り候旅人申候ハ、廿三日書九ツ時前と覚、彼宿通懸り候所、冨士山中段之程ゟ細き雲立ち候ニ付、往来之者共立留り見候而四五里行違候得者、右之雲廣ク焼出、大き成石小石交りに雨の降叟く降、夥敷鳴出、震動雷電たとへて可申樣無之、只今大地打かへすかと膽を消、荷物付透（ママ）り候馬透と荷物を下し何地へか逃走候故旅人ハ面々の荷物ニ取付罷有候得共、空ゟ降候大石小石可凌樣無之、皆々衣類を頭へかむり、往事も不成、止事も不叶、吉原宿中之男女何事を宛所もなく逃走、一切人ハなく成、往還之者共ハ皆々聲を上て念佛申ゟ外無之由、

一、当月廿二日府中致一宿候旅人申候ハ、廿三日昼前沖津迄参候処、冨士山中段ゟ黒雲立候而震動雷電夥敷、大地をゆり候事高浪ニ舟ニ乗たることくにて、興津中之者共ハ方々逃散申候、同日七ツ時前、吉原之宿へ着候所、此宿之者共何方へ逃候哉人無之候、漸人足大分賃銀出し雇、荷物歩行持に致候、夜五ツ時分ニ原宿へ参樣ニ致才覚、原宿ニ一宿仕候處、震動雷電の夥敷事とかふ不被申候、家内之人も旅人も一所にまとい一夜を明し兼候、富士川ハ泥水ニ成流申候由、箱根山ハ砂薄く有之候、小田原ゟ先、大磯、藤澤ハ大分小石降積り歩行ニ難儀仕候、吉原宿へ降候石よりハ小ク御座候、

一、今月廿三日沼津に泊り候旅人、廿三日昼九ツ時過沼津之先元市場と申所へ参懸り候所、時之聞ニ事々敷震動いたし間もなく富士山ノ中段より黒雲立上り石砂降出、一天一枚ニ闇になり、所之者旅人共に膽を消、漸々と沼津ノ宿ニ泊り申候、如何程の鳥目可出と申候而も一切宿を借不申候故、多ハ家々の軒下にかゞみ罷在候へとも食物曽而無之飢に及候、暮時ゟ火炎立揚り、震動之強事不大形候得共、扨ハ大火炎之所為と存、人心少々落付申候、焼上ル焔之躰、天にも届候樣ニ相見へ申候、箱根も砂薄く御座候、大磯より藤澤之邊迄ハ砂石多降、戸塚ゟ江戸迄ハ段々薄成申候由申候、右之通私支配ニ付候家来ゟ書出指越申候ニ付写指上申候、尤委細之義ハ相知不申候、以上、

十一月廿六日　　伊奈半左衛門（関東郡代）」

2.『松平美濃守（大老柳澤吉保甲斐藩主）殿ゟ御在所甲府注進覚』〇十一月廿六日卯上刻

「一、廿二日朝五ツ時ゟ昼夜翌廿三日昼時迄震動、雷電、地震甚、且又廿三日朝ゟ冨士山東南之方烟夥敷相見、火中ニ電光繁、火焔ハ東之方へ靡申候、今以勢ひ強相止不申候、

一、廿三日昼頃ゟ廿四日朝迄地震相止不申、其内廿三日夜五時同九時両度大地震にて戸建具はつれ、敷居鴨居も離し候、

一、廿五日朝五ツ過又地震強御座候、右注進申上候、以上、

十一月廿六日卯上刻出す」

3.「江戸奥細川玄蕃頭殿御在所茂デ木と申所灰砂降候由注進有之、行程江戸ゟ三十六里」

4.『為検分御徒目付御小人目付被遣候、右検使注進之趣』〇亥十一月晦日付　徒目付　市野新八郎・安田藤兵衛・馬場藤左衛門報告

「　覚

亥十一月廿八日駿州駿東郡冨士山之麓須走村邊へ罷越、冨士山焼候躰見分仕候処、冨士山南東之

角、山三分二程下ゟ焼上り申候、案内仕候所之者ニ相尋候ヘハ、大方木山と木なし山の間、せんすい洞之邊ニ而可有之由申候、今以強焼申候、時々山少見ヘ申候事も有之候得共、先ハ山の躰、火焔にて相見ヘ不申候、烟先ハ東北之方ヘ靡申候、

一、須走村迄参、見分仕候処、此所にハ冨士淺間之社有之候、只今焼立候所ゟ行程五里程有之由申候、右淺間之社、屋祢迄焼石にて降埋申候、并人家之高き家ハ棟迄降埋、低家ハ屋祢の棟も見ヘ不申候、依之人ハ立退申候や壱人も見ヘ不申候、大形一丈餘焼石積り申候、今以大小交り之石降申候、尤二三里之内之植木ハ木葉少も無御座候、谷川も降埋申候而有之在々水濁り申由ニ候、

一、降積り候石ハ軽石のことくにて大サ大圖壱寸四方弐寸四方程ニ相見ヘ申候、

一、道中筋之儀、段々注進申上候通ニ御座候、田畑之石砂大分積り麥作ハ勿論透と無之、百姓難儀仕候由ニ御座候、焼候近所ニ三里ハ火焔強、烟と相見ヘ候得とも悉石砂降、寄付レ不申候、右之通ニ而外替り申風聞承不申候、以上、

徒目付　　市野新八郎

亥十一月晦日　　安田藤兵衛

馬場藤左衛門　」

5.『駿府御目附　溝口源兵衛殿ヨリ以繪圖注進之寫　十一月廿五日飛脚到来之由』（図中書き込み）

「三くりや十里幾、檜たいらと申所駿河表ゟ富士詣之道ゟ

東郡内と駿河と之間檜たいらと申邊ゟ焼出申候、木立ハ無之所之由、

十一月廿二日ゟ廿三日四ツ時迄地震々動雷光夥敷百千ノ雷晝夜止時無之、廿三日巳之刻ヨリ大火發申候而地震々動ヨリ夥ク鳴申候、焔ノ勢イハ冨士之頂ヨリ遥ニ高ク冨士郡中ハ闇夜ノ如ク成申候

三くりや十里キ村ハ小田原領ノ由、傳法村ハ曽我播磨守殿安藤内記殿杉浦平九郎知行所之由、傳法村ゟ焼出候所ヘハ指渡してハ四里程有之由」

6.『大久保加賀守（老中 小田原藩主）殿ゟ松平美濃守（大老 甲斐藤主 柳澤吉保）殿ヘ被懸御目候書付之寫』

「亥十一月廿三日午下刻小田原ゟ飛脚ニ申越候趣

一、十一月廿二日暮時ゟ小田原城下夜不絶地震致、廿三日午下刻ニ至迄地震止不申何ヶ度と申震数相知不申候

（頭注）△一、廿三日巳下刻ゟ西之方夥△強ク鳴り北ノ方ニハ雷モ鳴リ申候、西ノ方之鳴音午下刻飛脚之者罷立候迄相止不申候、

一、地震之義は山の鳴候音にて有之候哉、廿三日巳ノ刻過ゟ午下刻迄震続ケ申候、桶ニ明置候水ハゆり候得共こほれ不申候、

一、海の様子ハ常之通ニて浪も静ニ御座候、其外天気相（ママ）更（かわる）義無御座候、右之通小田原ゟ申越候、別ニ一通右飛脚之者小田原ゟ江戸迄之内道中見及申趣、

一、小田原城下ゟ壱里江戸ノ方領分小幡村と申所ゟ梅澤と申所迄一里程之内大砂利中砂利ほとの石ちら〳〵と降申候、

一、梅澤ゟ大磯迄弐り程之内右大キ之石二三寸、所により四寸程も降積申候、

一、大磯ゟ戸塚迄六り程之内ハ小砂利程之石三四寸ほと降積申候、

一、川崎ゟ江戸迄四り半程之内、右之通成砂地隠レ申候ほと降積申候、江戸之方ヘ寄候程薄ク相ミヘ申候、

一、家居有之所ハ鍬にて砂利をかき除申候、

右之通飛脚之者見及之由申候、」

7.『駿州吉原宿ゟ以宿継注進』○十一月廿三日付　駿州冨士郡吉原宿問屋・年寄の注進を、道奉行（道中奉行）安藤筑後守（大目付　安藤筑後守重玄）殿、石丸安房守（勘定奉行　石尾阿波守氏信）殿より御老中（老中大久保加賀守忠増）へ被指出候書付之寫是又加賀守殿より美濃殿（大老　松平美濃守吉保）へ被遣候寫

「道奉行（道中奉行）安藤筑後守（大目付　安藤筑後守重玄）殿、石丸安房守（勘定奉行　石尾安房守氏信）殿より御老中へ被指出候書付之寫是又加賀守殿より美濃殿へ被遣候寫、

一、昨廿二日書八ツ時ゟ今廿三日五ツ半迄之内大地震間もなく三十餘度ゆり、先年之地震潰残之家此度ゆり潰申候、其上同日四ツ時、富士山おひたゝしく（夥し）鳴出、其響冨士郡申へ響渡り、大小の男女共絶入仕候もの多御座候、然所ニ同山雲流烟巻出、猶以山大地共ニ鳴渡り、冨士郡中一遍ノ烟、二時餘うつまき申候、如何様之義共不存、人々途方失ひ、罷有間、三間とも隔候而ハ一入顔も難見分ニて候、昼之内は烟計に相ミへ申候、暮六つ時ゟ右之烟火焔ニ相見□□此上如何様之義ニ可罷成も不存候、右之通乍恐先注進申上候以上、

十一月廿三日　駿州冨士郡

吉原宿問屋

年寄

右之通駿州吉原宿ゟ以宿継注進仕候間申上候、

尤御代官能勢孫兵衛ゟハ未何共不申来候以上、

石丸安房守（尾）

安藤筑後守　」（以上『富士山自焼記』）

6．被災地への見分の記録

江戸幕府と小田原藩の被災地の見分について以下に紹介する．

幕府見分使　十一月二十五日（12月18日）－三十日（12月23日）の行程

江戸における目撃情報，降砂・降灰と吉原驛問屋からの注進を受けて公儀（幕府）指示で，山焼け見分使のため，徒（かち）目付3人・小人目付（こびと）6人，計9人をを派遣した（『岡本元朝日記』，大井町篠窪『大地震噴火の一件』，『富士山焼記』，『富士山變記』，『柳営日次記』）．（二十三日の時点で「御殿」では降砂は貞享年間（1684年から）に噴火があった伊豆大島の山焼けと推定されていたので）江戸芝浦（大島への出帆港）で（見分先を大島にするか）詮議したものの判断し兼ねた（『富士山變記』）．富士郡吉原宿からの富士山の山焼けの注進を道中奉行の勘定奉行 石尾阿波守氏信・同大目付 安藤筑後守重玄が十一月二十四日（12月17日）に老中に報告している（『文露叢』）ので，9人はおそらくこの報告をもとに決断して二十五日（12月18日）に江戸を出発した．彼らは二十五日中に小田原を経て（大井町篠窪『大地震噴火の一件』），深夜（12月19日02時）に箱根まで達した（『富士山焼記』）．さらに注進のあった駿河国 原・吉原付近まで急行したが，噴火が激しく火口に近づいて見分することができなかった（『富士山變記』）．活動がやや落ち着いた十一月二十八日（12月21日）に，須走まで行き，噴火の状況と火砕物が厚く堆積した集落の被害状況を確認し，その日の深夜に箱根関所まで移動した（が，夜間のため通関できなかった（『箱根御関所日記書抜 下』））．十一月三十日（12月23日）昼に小田原を経て（『大地震噴火の一件』），江戸に戻り，報告した（『楽只堂年録211巻』，『富士山自焼記』，『富士山焼記』，滋賀県『山崎家文書』など）．十二月五日（12月28日）に，見分した徒目付3名に銀10枚ずつ，小人目付6名に銀3枚ずつの褒賞が与えられた（『柳営日次記』）．

『富士山焼記』には「廿五日、（略）此陰ノ冨士山炎上之沙也云々、御徒目付三人、御小人目付六人、冨士山見分被ㇾ遣、**今夜亥刻（22時）迄之中可ㇾ令ニ發足一**云々、」と書かれていて「今夜22時までに出発するよう」に指示をした日付は「二十五日の亥刻」と読めるが，原・吉原からの注進を老中に報告した日付と，一行が二十五日に小田原を通過し，二十五日丑刻（12月19日02時）に箱根に到着していること（『富士山焼記』）を考えると，公儀からの指示は「二十四日」が正しいと思われる．

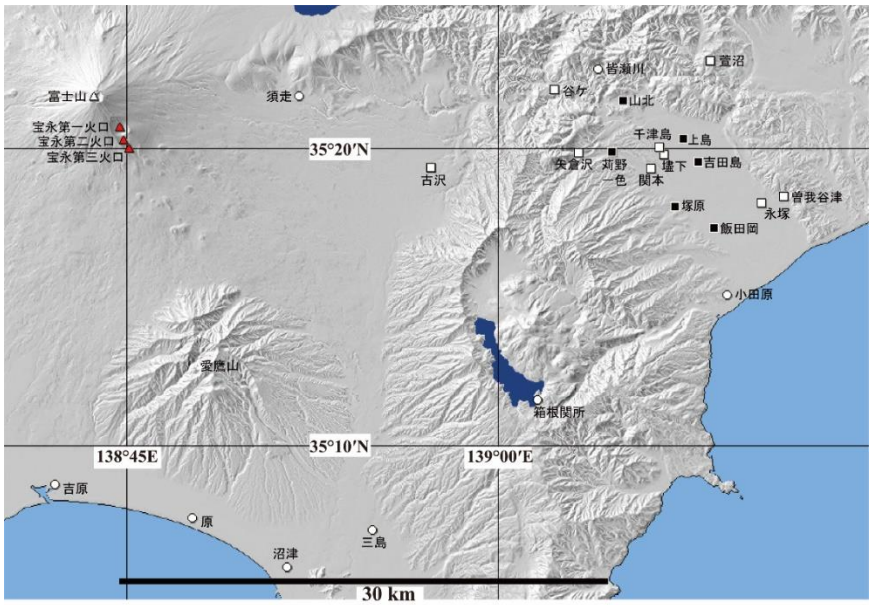


図6－1　宝永四年十一月幕府見分，同十二月小田原藩見分関連地点

○：主な地名

■：小田原藩柳田九左衛門が廻村した村

□：十二月付・柳田九左衛門宛　「砂降り見分帳」を提出した村

史料から推定される幕府徒目付　市野新八郎ら計９人の見分使の行程概要

十一月二十三日（1707年12月16日）午前噴火開始

二十五日　市野新八郎ら見分使が江戸を出発

二十五日晩　小田原を経て二十五日丑刻（12月16日26時）箱根着

噴火が収まらないため原・吉原で待機

二十八日　須走見分

二十八日夜　箱根関所（通行できず）

三十日　小田原昼休み通行

三十日　江戸帰参

三十日付　復命報告

十二月五日　徒目付3名銀十枚ずつ，小人目付6名銀3枚ずつ渡される

参加者は徒目付3名，小人目付6名，計9名

徒目付　市野新八郎・安田藤兵衛・馬場藤左衛門

小人目付　上河利助（黒川理助）、安原助八郎（田）、岡田四郎兵衛（次）、野村太兵衛、矢沢竹四郎（文）、中村兵助（小林）　都合九頭

（篠窪村　小島家文書『（大地震噴火の一件足柄上郡篠窪村名主の富士山噴火の記録）』・『岡本元朝日記』（宝永四年十一月二十九日条）

幕府見分関連史料

1. 『柳営日次記』（国立公文書館web公開　十一月二十五日・十二月五日条）
2. 『富士山自焼記』（東京大学史料編纂所蔵　請求記号２０６２－１web公開
   文部省震災予防評議会編（１９４１）増訂 大日本地震史料 第二巻，ｐ２３４－２３５．
   神奈川県立歴史博物館（２００６）富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川 出品リスト２６，ｐ２６－２７に一部画像，ｐ１２０－１２２に翻刻あり）
3. 『富士山變記』（東北大学 狩野文庫　請求記号３－５８１７－１）
4. 『（大地震噴火の一件 足柄上郡篠窪村名主の富士山噴火の記録』（大井町篠窪 小島睦男氏蔵 小島家文書
   神奈川県立公文書館寄託（資料ＩＤ ２２００４４６５６７）
   一部省略 瀬戸崎雄（１９８２）金井島村の研究，ｐ７０（史料４）．
   小田原市編（１９８９）小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領１，ｐ４０９－４１０（史料２７１）．
   大井町（１９９５）大井町史 資料編 近世２，ｐ３３９（史料１２６）．
   神奈川県立歴史博物館（２００６）富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川，出品リスト４３，ｐ４２に画像，ｐ１１４に翻刻文あり．
5. 『箱根御関所日記書抜 下』（箱根町郷土資料館　箱根古文書を学ぶ会編，１９７８）ｐ１９８．
6. 『富士山焼記（ふじやまやけき）』愛知県刈谷市中央図書館蔵（村上文庫 請求記号Ｗ６２１６）
7. 『富士山焼見分絵図および御徒目付衆見分書上』滋賀県愛知郡愛荘町 山崎途男氏蔵
   神奈川県立歴史博物館（２００６）富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川 出品リスト２７，ｐ２６－２７に画像，ｐ１１０に翻刻あり．
   裾野市富士山資料館（２００５）富士火山帯～活断層を見る～．特別展史料集，ｐ３２－３６に翻刻文と画像あり．（ｗｅｂ公開）

8.『岡本元朝日記』秋田県立公文書館蔵　岡本元朝著・秋田県公文書館編（２０２０）岡本元朝日記 第６巻，ｐ１４３－１５４．秋田県．

「〇富士山又ハ其外之大山も焼候由、為見分御徒目付市野新八郎・安田彦太夫・馬場藤左衛門、御小人目付安田助八郎・黒川理助・小林兵助・野村太兵衛・矢沢文四郎・岡田次郎兵衛、此衆廿五日被　仰付其日出足之由也、」（『岡本元朝日記』十一月二十九日条）

「（十一月二十三日）冨士山ノ木立焼境（カ）分へ出、夫ゟ石砂吹出し、依レ之江城ゟ　為（して）ニ御検使と、十一月廿五日、一、市野新八郎様、一、馬場藤左衛門様、安内茂兵衛様（安田藤兵衛カ）、上河利助様、一、安原助八郎様、岡田四郎兵衛様、野村太兵衛様、矢沢斉四郎様、中村兵助様、都合九頭、十一月廿五日ノ晩小田原御宿ニ而御（通）少シ、同晦日小田原昼休ニ而御通可レ被レ成候、（略）」（足柄上郡大井町篠窪『大地震噴火の一件』）

「十一月二十五日　御徒目付三人、御小人目付六人、冨士山見分被レ遣、今（二十四日夜カ）夜　亥刻迄之中可レ令ニ発足一云々、」（『冨士山焼記』）

「廿三日、砂降る事、御殿にての沙汰ハ、伊豆の大嶋焼るなれハ、其地ならんかとて、先、芝浦表へ参り、見分可仕由ニて、御徒目付市野新八郎、馬場藤左衛門、安田藤兵衛、并御小人目付六人被仰付、芝浦表へ参り、詮儀いたすといへとも不分明、然所に、あとより御小人目付を以、又被仰下ハ、しれかねるにをゐてハ、焼場所まて参り、見分可申との御事にて、品川より直に駿（州）劔へ、はや追ニ而吉原の宿まて参着申といへとも、砂并焼石降により、近邊の山江登る事不能して、原と吉原の間の在郷江引籠居けるよし、廿八日に江戸ニての沙汰なり、廿九日見分相済、御徒目付・御小人目付帰ル由、」（『冨士山變記』）

「今度冨士之根方焼震動砂灰降付而為見分被遣之

御徒目付　市野新八郎

安田藤兵衛

馬場藤左衛門」（『柳営日次記』十一月二十五日条）

「廿二日昼時ヨリ今廿三日五ツ半時（09時）迄之内、地震間もなく三十度程震、少々残候半潰之家、又は（々カ）震潰申候、其上同四時より冨士山夥敷鳴出、其響冨士郡中へ響渡り、大小之男女共絶入仕候者多御座候へ共、死人は無御座候、然処ニ同山雪之流、木立之境より夥敷煙巻出、夥敷鳴渡り、冨士郡中一篇之煙ニ時計うず巻、如何様之儀共不奉存、人々十方を失罷在候、昼之内ハ煙計ニ相見、暮六ツ（18時）より右之煙皆火焔に相見へ申候、此上如何様之義ニ可罷成不奉存候、右之段乍恐御注進申上候、以上、

十一月廿三日　駿河冨士郡　吉原宿　問屋　年寄

右之通只今注進仕候間申上候、御代官小長谷勘左衛門ヨリハ未申来候以上、

十一月廿四日　石尾阿波守　安藤筑後守　」（『文露叢』宝永四年十一月二十三日条　吉原驛問屋からの注進）（十一月二十二日噴火前日にあり　再掲）

「同（宝永四年）年十一月廿八日夜　冨士焼ニ付、御徒目付御小人目付被罷越、夜中難相通旨申達候夷、」

（『箱根御関所日記書抜 下』）

「晦日

一、冨士山のやくる(焼)所を見分せし、徒目付の書付を、御目付衆より來らすによりて、爰に記す、亥十一月廿八日、駿州駿東郡、冨士山麓、須走り村邊へ罷越、冨士山焼候様子、見分仕候處、冨士東、西南之角、山三分二程下ニ而焼上申候、案内仕候所之者江相尋候処、大方木山木なし、山之間、せんすい(泉水)洞邊ニ而可有之由申候、今以、餘程強焼申候、時ニ ゟ、山少相見へ候事茂有之、又者煙強立候得者、相見不申候、煙先ハ、東北之方江参候、

一、須走り村江罷越、様子見分仕候処、此所ニハ、冨士浅間社有之候、唯今焼立候所ゟ道法(程)、四五里茂可有之由申候、並焼殘之人家茂、軒際迄降埋申候、人者皆立退居不申候、降積候ハ、大方者九尺餘、壹丈餘茂積り候様ニ相見江申候、今以こまか(細)成焼石、又者大キ成茂交り降申候、拙者共、罷越候節茂、浅間社江半道程有之所ゟ、焼石大小共降申候、貳里程之内ハ、林之木葉(すき すつきりの意)透と無之、木茂焼相見申候、谷川茂透と降埋申候、夫故、近在之井之水茂透与拂底之由申候、

一、降候石、見分仕候所、かる(軽)石之様成茂有之、又ハ小田原石之こまか(細)成様ニ相見へ申候、大キ成分ハ、壹寸四方、或ハ二寸程茂御座候、

一、道中筋之儀、段々御注進申上候通御座候、田畑江砂大分ニ降積候故、麥作透与、無御座候付、百姓難儀仕候由、所々ニ而申候、右之外、替候風聞ハ不羊(詳)候、此外相替儀、無御座候、以上、

御徒目付

市野新八郎

十一月晦日　　安田藤兵衛

馬場藤左衛門」(『楽只堂年録211巻』)

「一、冨士山焼候事、於江戸火焔相見、日本橋、江戸橋には見物之郡(群カ)集橋ニ満況、御城中江直ニ相見へ候ニ付、為検分御徒目付御ハカり小人目付被遣候、右検使注進之趣

覚

亥十一月廿八日駿州駿東郡冨士山之麓須走村邊へ罷越、冨士山焼候躰見分仕候処、冨士山南東之角、山三分二程下ゟ焼上り申候、案内仕候所之者ニ相尋候へハ、大方木山と木なし山の間、せんすい洞之邊ニ而可有之由申候、今以強焼申候、時々山少見へ申候事も有之候得共、先ハ山の躰、火焔にて相見へ不申候、烟先ハ東北之方へ靡申候、

一、須走村迄参、見分仕候処、此所にハ冨士浅間之社有之候、只今焼立候所ゟ行程五里程有之由申候、右浅間之社、屋祢迄焼石にて降埋申候、并人家之高き家ハ棟迄降埋、低家ハ屋祢の棟も見へ不申候、依之人ハ立退申候や壱人も見へ不申候、大形一丈余焼石積り申候、今以大小交り之石降申候、尤二三里之内之植木ハ木葉少も無御座候、谷川も降埋申候而有之在々水濁り申由ニ候、

一、降積り候石ハ軽石のことくにて大サ大圖壱寸四方弐寸四方程ニ相見へ申候、

一、道中筋之儀、段々注進申上候通ニ御座候、田畑之石砂大分積り麥作ハ勿論透と無之、百姓難儀仕候由ニ御座候、焼候近所二三里ハ火焔強、烟と相見へ候得とも悉石砂降、寄付レ不申候、右之通ニ而外替り申風聞承不申候、以上、

御徒目付

市野新八郎

亥十一月晦日　　安田藤兵衛

馬場藤左衛門」(『富士山自焼記』十一月晦日付報告)

「晦日（略）冨士山見分ニ被レ遣御徒目付御小人目付帰参メ申メ云、去廿五日丑刻（26時）着箱根（より）自レ夫（それ）弥（いよいよ）〻飛シレ駕ヲ駿河ノ國着浅間ノ宮（自浅間到冨士山ニ行程三里）因リレ是レ遥ニ冨士山之方ヲ望見候ニ頂上ニ者（は）雪如レ常住、東方従ニ中央ニ〇火柱立ル高サ一間廻リ三尺程ニ見ユ、烟リ東方江靡（なびき）、沙ヲ巻ニ上、根ニ方甚ニ闇メ如レ夜、小ニ石降ル如レ雨〻、自レ是先ギ不レ能レ行ヿ、中ニ々非ンハ一御威ニ光ニ是レ迄茂（も）不レ能レ来ル之由、以ニ繪圖ヲ一言上云々、」（『冨士山焼記』）

「（十二月）五日

冨士近邊江見分帰候ニ付銀十枚ツヽ、被下

御徒目付

市野新八郎

安田藤兵衛

馬場藤左衛門

銀三枚ツヽ、御小人目付六人」（『柳営日次記』）

参考

静岡県駿東郡小山町須走の富士山東口本宮冨士浅間神社所蔵の史料に噴火前の家並を記録した『須走村家並建坪書上』と噴火による被災状況（焼失，倒潰）と被災に応じた支援状況をまとめた『須走村御救金銘々割渡シ判形帳』があり，御殿場市史 第四巻と．小山町史 第二巻に収録され，国立歴史民俗博物館（２００３），神奈川県立歴史博物館（２００６）でも紹介されている．焼失３７戸，潰家（倒潰）３８戸であった．噴火の前後を対照することで焼失・潰れた場所，居住者，被害に対して受けた支援額が明らかになる．

須走村の噴火前の家並の記録

『宝永四年須走村家並帳』御殿場市史編さん委員会（１９７８）御殿場市史 第四巻 近世史料編，ｐ７７－８０（史料番号２２）．

『（宝永五年）須走村家並書上』小山町史編さん専門委員会（１９９１）小山町史 第二巻 近世資料編Ⅰ，ｐ８６５－８６８．史料番号４６３．

噴火後の宝永五年八月の被害・支援状況

『宝永五年 子ノ八月 須走村 御厨領 家作御救金銘々割渡シ判形帳』御殿場市史編さん委員会（１９７８）御殿場市史 第四巻 近世史料編，ｐ８０－８４（史料番号２３）．

『須走村御救金銘々割渡シ判形帳』小山町史編さん専門委員会（１９９１）小山町史 第二巻 近世資料編Ⅰ，ｐ８５８－８６５．史料番号４６２．

被災前後を比較したまとめ

国立歴史民俗博物館（２００３）ドキュメント災害史 １７０３－２００３．ｐ６６．図２．１（小山町史編さん専門委員会（１９９１）を引用して．須走村の家並みと焼失・倒壊家屋を１枚の図にまとめてある）

神奈川県立歴史博物館（２００６）富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川．ｐ３８－３９に出品リスト３８に須走村家並建坪書上の画像，ｐ３９に焼失・潰家の配置イラスト図あり．

小田原藩　宝永四年十二月　小田原・江戸役人の見分

小田原藩では，十二月に入ってから，噴火活動は継続中ではあったがやや激しさを減じたことから，領内の見分を始めた（山北町史 史料編 近世 p582-585）．十二月四日付で小田原藩の地方（じかた）（地元）役人である大西角野右衛門から，被害状況を確認するため村々の名主・組頭に明後六日昼時に川村山北へ出頭するよう触書をまわした．十二月六日の廻村時に大西角野右衛門へ提出した被害状況の書上げが足柄上郡山北町皆瀬川井上安司家文書『乍恐以書付を御注進申上候御事』に残っている．それによれば降下した火砕物により，皆瀬川村内では合計十二軒の住居が潰れたという．なお，十二月六日の大西角野右衛門の廻村の際の宿泊代が村に割付られる文書もある．

十二月十日付で十二月十一日・十二日の小田原藩役人の廻村，見分予定を触れた書状がある．一つは皆瀬川井上安司家文書『亥年御用村次上下書留覚』十二月十日付の『覚』，もう一つは南足柄市矢倉沢田代家文書 十二月十日付の『覚』（谷津村等２２村へ殿様御意申渡に付出頭のこと）である．史料から，１０ヶ村前後の村を単位としてひとつの村に近村の名主・組頭を招集して，指示を出して廻ったことがわかる．皆瀬川村井上家文書では「右ハ××日△△時分村々〇〇村へ」まかり出らるべく候」の，「右」の村は近村ではないため村名を省略しているが，井上家文書・田代家文書から，柳田九左衛門の足柄下郡・足柄上郡廻村の日時と経路が判明した（図6-1）．

十二月十一日　飯田岡（いいだおか）村［昼以前］→塚原村［昼時分］→苅野一色（かりのいしき）村［八つ時（14時ころ）］→上嶋村［晩］→吉田島村［いつ半（21時ころ）］

十二月十二日　川村山北［昼時迄］

ただし，大久保加賀守領のうち駿河国駿東郡まで廻ったのか，手がかりになる史料は現時点では見つけられていない．

さらに十二月十四日五つ（10時）付で大西角之衛門から触書がまわされた．内容は，噴火が終息したので，十五日に皆瀬川村から廻村する．堆積層厚・降灰除去作業見積り，潰家・埋もれ家数を書出す旨の指示がされている．これを受けて十二月十九日，二十日付で名主から「富士山焼候ニ付石砂降見分帳」が提出された．

「　覚

我等共、明後日罷出候間、御用之儀共有レ之候間、山北へひる時分名主壱人・組頭壱人つゝ罷出可レ申候、以上、

十二月四日

大西角野右衛門　」（皆瀬川『亥年御用村次上下書留覚』十二月四日付『覚』）

「乍レ恐以二書付を一御注進申上候御事

一、先月廿三日ゟ尓レ今石砂大分ふり申ニ付、当村ニつぶれ家御座候間ニ付、何とそ為二迷惑と一御注進申上候

一、小百姓　惣右衛門　家つぶれ申候

一、無田　門右衛門　家右同断

一、無田　利右衛門　家右同断

一、小百姓　徳兵衛　家右同断

一、無田　半左衛門　家右同断

一、小百姓　六郎兵衛　家右同断

一、小百姓　小平次　家　右同断
一、小百姓　十兵衛　家　右同断
一、小百姓　仁兵衛　家　右同断
一、無田　与惣右衛門　家　右同断
一、無田　八兵衛　家　右同断
一、小百姓　弥次右衛門　家　右同断

家数〆拾弐軒　内　七軒小百姓　五軒無田

右之通書上ケ少も相違無御座候、以上、

亥十二月六日　皆瀬川村　」（皆瀬川『乍恐以書付を御注進申上候御事』）

「　覚

一、銭弐貫百五拾弐文

此割

二百拾六文皆瀬川村百七拾三文つふらの右者此度震動ニ付、去ル六日晩大西角之右衛門様御一宿被レ遊候持代如レ此ニ御座候、為レ其割付仕ロ申ロ被進ロ可レ被レ遣候、此旨被レ仰候間、早々頼入候、

以上、

十二月八日

山北

名主　」（皆瀬川『亥年御用村次上下書留覚』宝永四年十二月八日付『覚』）

「　覚

右ハ村々飯田岡村明日十一日昼以前罷出候可申候、

同十一日晩上嶋村ニ□□□

吉田嶋村

右ハ村々吉田嶋村へ同日いつ半比罷出可レ申候、以上、

川村岸、川村向原、川村山北村、皆瀬川、都夫良（野脱）村、湯触村、川西村、山市場村、神縄村、中川村、玄倉村

右ハ十二日村々川村山北江明後十二日昼時迄内罷出可レ申候、

右ハ此度江戸ゟ柳田九左衛門罷越、殿様御意窺可レ申由ニ而、

右村へ無相違相知可可（ママ）レ仕候、以上

大津善左衛門　」（皆瀬川『亥年御用村次上下書留覚』十二月十日付『覚』）

「　覚

谷津村、下久野村、上久野村、穴部村、穴部新田村、苻川村、北久保村、沼田村、三竹山村、岩原村

右九ケ村々明十一日昼時分塚原村へ罷出可レ被レ申候、可申次候、

駒形新宿炭焼所村、中沼村、狩野（かのう）村、飯沢村、猿山村、関本村、雨坪村、福泉村、弘西寺村、苅ノ岩村、苅ノ一色村、矢倉沢村

右十三ケ村々苅ノ一色（かりのいしき）村へ十一日八つ時罷出可レ被レ申候。可申渡候、

右者此度村々相廻リ、　殿様御意之趣申聞候間、右之通寄村へ無二相違一出合可レ申候、尤村下ニ致二印判一、先々へ相廻し、留り村より可二差戻一候、以上

亥十二月十日　　柳田九左衛門

右村々名主中　」（矢倉沢　田代家文書　宝永四年十二月『覚』）

「　覚

富士山焼留り砂降止候ニ付、山家筋村々砂之深サ其外禿家并ニ飢人等為二見分一明日其村々へ罷越し、

一、砂之深サ平地ハ何尺何寸有レ之段、枝郷共ニ吟味仕尺ノミとり書付召置可レ申候、つふれ家何軒、砂ニうずもれ家有レ之候ハヽ、何軒と書出し可レ申候、尤家あけ有レ之脇江罷出居申候者も有レ之候ハヽ、其段も書出し可レ申候、明日ハ皆瀬川村ハ相改可レ申候、我等泊り村之義ハ行懸り何れ村ニ成共一宿可レ致候、皆瀬川村名主・組頭、明日村境迄罷出可レ申候、以上、

大西角之右衛門

亥十二月十四日五つ

此符御用申遣し、村次無レ滞相届可レ申候、夜ニ入可レ申候間、山北村ニ留置、明早天ニ皆瀬川へ遣し可レ申候、かこ人足并ニ荷物持人足壱人村次ニ出し可レ申候、以上、」（皆瀬川井上安司家文書『亥年御用村次上下書留覚』十二月十四日付『覚』）

7. 触書・申渡の記録

宝永五年にはいり，幕府の発令した担当者の指名，触書，申渡等を収録した．

a. 宝永五年正月十六日付で，稲垣對馬守重富（若年寄）が，被災地の領民に自力で砂取除けするよう指示するとともに調査の上支援をする用意がある旨を申渡した．（1708年2月7日）

（『柳営日次記』正月十七日条，『文露叢』・『常憲院殿御実紀』正月二十一日条）

b. 閏正月三日（2月24日），大久保加賀守忠増の拝領地のうち降砂によって大きな被害を受けた駿河国駿東郡，相模国足柄上郡・足柄下郡の村が上知される（幕府領と引替えられる）．（『柳営日次記』・『文露叢』・『常憲院殿御実紀』閏正月三日条）

c. 閏正月七日（2月28日），高役の触（『柳営日次記』・『文露叢』，『常憲院殿御実紀』正月七日条）

d. 閏正月七日（2月28日），伊奈半左衛門が小田原領支配と砂取除且川筋浚普請奉行を命じられた（『柳営日次記』・『文露叢』，『常憲院殿御実紀』）

e. 閏正月九日（3月1日），相州筋砂積川埋ニ付御普請御手伝を，松平伊豫守綱政（岡山藩主 池田綱政），小笠原右近将監忠雄（小倉藩主 おがさわらただかつ），土井甲斐守利治（越前大野藩主），細川采女正利昌（熊本新田藩主），松平造酒正正尚（鳥取新田藩主 池田仲央）が命じられた．（『柳営日次記』（閏正月八日条にあり（「九日也」に加筆修正））・『文露叢』・『常憲院殿御実紀』閏正月九日）

f. 石高に応じて宝永五年閏正月七日付で課した高役金（c.『柳営日次記』）は，金48万8770両余，銀一貫870目余が取り立てられた．被災地救済には6万2500両余（従って被災地支援外に40万両以上）が支出されたことが『蠹余一得』（とよいっとく）の『富士山焼砂降積候村々御救金元拂』からわかる．

a.『柳営日次記』（宝永五年正月十七日条）

一、稲垣對馬守被相渡候書付

覚

武州・相州・駿州三ヶ所之内、去冬砂積り候村々、今に其侭ニ而差置候由相聞候、當春耕作前、砂取のけ候様ニ地頭ゟ可被申付候、大分砂積り村百性之、自分ニ而成かたき程之村々も先取かゝり、砂片付之儀可被申付候、重而吟味之上、御救可有之候、其内飢不申様可被入念候、委細萩原近江守可被相談候、以上、

正月十六日　」（御觸書寛保集成1397）

b.『柳営日次記』（宝永五年閏正月三日条）

一、稲垣對馬守被相渡候書付、

武州・相州・駿州三ヶ國之内、去冬砂積り候村々、所務難成程之私領者（は）村引替可被下候間、可被存其旨候、委細者萩原近江守可被相談候、以上、

閏正月　（御觸書寛保集成1398）

c.『柳営日次記』（宝永五年閏正月七日条）

稲垣對馬守被相渡候書付、

覚

近年御入用品々有之所、去冬武
州・相（州）劦・駿劦三ヶ國之内砂積り候村々
御救旁之儀ニ付、今度諸國高役金、御
料（領）・私領共ニ高百石ニ付金弐両宛之積り、
在々ゟ取立、可有上納候、且亦、領知遠近
有之故、在々ゟ取立迚者可為延ニ之候間、
壱万石以上之分者領主ゟ取替候而、當三月
を限り、江戸御金蔵江可有上納候、一万石
以下者六月を限り可被相納候、頭有
之分者、其組きりに受取之目録を以、
頭々ゟ上納可有之候、頭無之面々者、上
納之節、前廉可被相達候、五十石ゟ内之
端高者役金可有用捨候、寺社領者
相除候、以上、

閏正月　（御觸書寛保集成１３９９）

d.『柳営日次記』（宝永五年閏正月七日条）

関東御代官

伊奈半左衛門

右相劦小田原領砂積候村々當分御領ニ成候間、致支配砂取除之儀川筋浚御普請之
奉行可相勤旨

e.（3月1日）閏正月九日

（三十一万五千三百石）松平伊豫守
（四万石）土井甲斐守
（十五万石）小笠原右近将監
（三万五千石）細川采女正
（三万石）松平造酒之丞
相劦筋川浚
御手傳被仰付

（『柳営日次記』（閏正月八日条にあり（「九日也」に加筆修正））

f.『冨士山焼砂降積候村々御救金元拂』

冨士山焼砂降積候村々御救金
元方御金蔵御勘定帳相礼候処、左之通相紀
有之候
一、金四万八千八百七拾五両余 銀壱貫八百七拾目余
是者（は）宝永四亥年砂積候村々御救（かたがた）旁諸国
高役金御領私領百石付金弐両ツヽ之積
を以元方御金蔵江相納候分
同年元方拂金蔵拂之分

一、金六千弐百弐拾五両余

是者伊奈半左衛門江相渡候武蔵相模駿河

国砂積候村々江御救被下置候分

一、金千八百五拾両余

是者駿州須走村焼失ニ付被下候

一、金五万四千四百八拾両余

是者武蔵相模国村々砂除并川浚其外諸

役人諸入用之分

右之通書面有之候以上

（正徳）元年１７１１　　とよいつとく

卯　七　月　」（『蠹余一得』に収録）

参考文献（県・市・町・村史は省略）

阿部正信 編（天保壬寅年（十三年）１８４２）『駿国雑志』巻之八 火災 富士山炎上.（吉見書店 明治四十二年（１９０９），ｐ３０７-３０８.

安藤広太（２０１７）宝永四年（１７０７）富士山噴火 史料に基づいた噴火推移の再構築. 千葉大学理学研究科修士論文. ４７ｐ.

宇高良哲 編（２００２）増上寺日鑑第二巻，文化書院. ４２７ｐ.

生沼清治（１９９０）富士山の噴火と酒匂川，開成町史研究，ｐ４４-５８.

岡本元朝 著・秋田県公文書館 編（２０２０）岡本元朝日記 第６巻，ｐ１４３-１５４. 秋田県.

神奈川県立歴史博物館（２００６）富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川. １２７ｐ.

金子徹（２０１３）古記録を用いた富士山宝永噴火の研究. 千葉大学理学部卒業論文. ３０ｐ. ６表，１６図.

金子八右衛門 編（１９９７）津村腰越旧志・中，ｐ２１-２３に翻刻文，ｐ８３-８４に画像，考える市民の会.

関東近世史研究会 校訂（１９８８）関東甲豆郷帳. 近藤出版社. ６７５ｐ.

関東地区災害科学資料センター 編（１９７７）房総半島南部の元禄地震料（関東地区災害科学資料センター資料，その９），６２ｐ.

橘田昭雄（２０００）木更津で見た富士山宝永の噴火，西上総文化会報 第六十号，ｐ３１-３５.

君津市市史編さん委員会（１９９２）君津市史資料集Ⅱ近世Ⅱ，ｐ２２８，（久留里城址資料館平成２５年度（２０１３）企画展「天災ときみつ～『未曾有』の災害をふり返る」パンフレットに画像・翻刻・正誤表あり）.

黒板勝美 編（１９３１）国史大系 第４３巻 新訂増補. 徳川實紀第六篇.『常憲院殿御實紀』国史大系刊行会. ７５２ｐ.

黒板勝美 編（１９３２）国史大系 第４４巻 新訂増補. 徳川實紀第七篇.『文昭院殿御實紀』国史大系刊行会. ４７０ｐ.

国書刊行会（１９７５）新庄道雄著 足立鍬太郎修訂 修訂 駿河国新風土記（文化十三年-天保五年）下巻，富士山 上（ｐ８８９-８９０）.

国書刊行会 編（１９７７）折たく柴の記. 新井白石全集 第３巻，ｐ５０-５１.

国立歴史民俗博物館（２００３）ドキュメント災害史 １７０３-２００３ 地震・噴火・津波，そして復興. ｐ６０-７０.

児玉幸多 校訂（１９７５）阿部家史料集一 公餘録（上），吉川弘文館. ｐ１５３-１６１.

小林昭夫，弘瀬冬樹，堀川晴央，平田賢治，中西一郎（２０１７）１７０７年宝永地震と富士山宝永噴火に関する一史料. ―飯作家「大地震富士山焼之事覚書」の調査と翻刻 ―. 地震２，７０，ｐ２２１-２３１.

小山真人（２００９）富士山噴火とハザードマップ―宝永噴火の１６日間（シリーズ繰り返す自然災害を知る・防ぐ４）. 古今書院. １８８ｐ.

小山真人・西山昭仁・井上公夫・今村隆正・花岡正明（２００１）富士山宝永噴火の推移を記録する良質史料『伊東志摩守日記』. 歴史地震，１７，８０-８８.

小山真人・西山昭仁・井上公夫・角谷ひとみ・冨田陽子（２００３）富士山宝永噴火

の降灰域縁辺における状況推移を記録する良質史料『伊能景利日記』と伊能景利採取標本．歴史地震，19，38-46．
古山豊 編・著（1982）山武・長生郡における元禄地震調査．47p．
古山豊 編・著（1983）元禄地震史料および分析 第2集．182p．
古山豊 編・著（1987）元禄地震史料集 第3集．153p．
坂本正仁 編（2019）史料纂集 古記録編 202 護国寺日記 第5 八木書店古書出版部．370p．
佐藤常雄・徳永光俊・江藤彰彦 編（1994）富士山砂降り訴願記録．p31-82．富士山焼出し砂石降り之事．p83-133．日本農書全集66，災害と復興1．
静岡県（1992）静岡県史 資料編 9（近世 1）付録．元禄郷帳（駿河）p139-162．
下鶴大輔（1981）富士山の活動史，Disaster Mapと災害評価．自然災害特別研究成果 自然災害科学総合研究班．No．A-56-1．p86-97．
史料纂集期外古記録 編（1970）隆光僧正日記第三，続群書類従完成会．p168-171．
震災予防調査会 編（1904）大日本地震史料 甲巻，606p．（思文閣，1973）．
鈴木隆造（1960）富士宝永噴火の記録について．足柄乃文化（奥付『足柄の文化』）4，山北町地方史研究会．p4-12．
裾野市富士山資料館（2005）富士火山帯―活断層を見る―．特別展史料集，p32-36に翻刻文と画像あり．
関口康弘（1993）宝永の砂降以後の酒匂川叛乱について―大口水下六か村農民たちの動向を中心に―．市史研究あしがら，5，p37-47．
瀬戸崎雄（1982）金井島村の研究，180p．
芹沢嘉博（1975）富士山噴火の被害とその再開発―小田原藩御厨領を中心に―．小田原地方誌研究，7，p40-52．
浅間（せんげん）神社社務所編（1931）浅間文書纂，574p．浅間神社社務所．
大角留吉（1987）自然災害と農山村の再興―宝永4亥年の富士山の大噴火と農山村の再興（1）．菊池万雄編日本の風土と災害．p273-288．
高橋敏 編著（2020）地方人夷屋藤吉．地方人夷屋藤吉：大災害から復興した駿河御厨の近世農書シリーズ．447p．
高柳眞三・石井良助 編（1958）御觸書寛保集成，1397，1398・1399・1400．岩波書店．p745-746．
多摩郷土研究の会（1974）谷合氏見聞録．多摩郷土研究11・12号，p9-10．
千葉県郷土史研究連絡協議会 編（1984）房総災害史―元禄の大地震と津波を中心に―．郷土研叢書Ⅳ．312p．
千葉徳爾（1981）宝永噴火による降砂と洪水．駿台史學，54，28-52．表1に層厚引用．
中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会（2006）1707富士山宝永噴火 報告書．資料編 2 古文書より整理した堆積深．p176-183．
東京大学地震研究所（1983）新収日本地震史料 第三巻 別巻，597p．

東京大学地震研究所（１９９４）新収日本地震史料 補遺 別巻，９９７ｐ.
東京大学地震研究所（１９９４）新収日本地震史料 続補遺 別巻，１２３６ｐ.
東京大学史料編纂所 編 新井白石 著（１９５３） 新井白石日記 下．大日本古記録．
岩波書店．ｐ４２-４６.
東京都（１９６０）東京市史稿 市街篇 第四十九 ｐ３３２-１０１１（江戸藩邸沿革）.
東三文化研究會（１９３６）朝倉仁右衛門翁伝：附其一家 伊藤卯一 校，那賀山乙巳文
編，ｐ９３-９７.
内閣文庫所蔵史籍叢刊 ４８．改正甘露叢・文露叢 ２．（１９８５）汲古書院．３６４
ｐ.（浄書本の複製）（国立公文書館 内閣文庫 請求番号１５０-０１６６ デ
ジタルアーカイブで閲覧可）
中野敬次郎（１９７８）近世小田原ものがたり．小田原文庫 ７．名著出版．２８３ｐ.
中野義雄編（１９８５）小澤蘆庵の真面目．里のとぼそ 第五集，ｐ４２８-４２９.
永原慶二（２００２）富士山宝永大爆発．集英社新書，２６７ｐ.
名古屋市教育委員会（１９６８）名古屋叢書続編 第十一巻，鸚鵡籠中記(三)，６５７
ｐ.
西川広平（２０１６）富士山宝永噴火に関する資料の記録化について―山梨側の地域
資料を対象に―．山梨県立博物館紀要 第１０集，４８-５８.
日光東照宮（１９３３）日光叢書 御番所日記 第三巻，ｐ４０２-４０４.
沼津市史編集委員会 編（２０００）大平村古記録，１２４ｐ.
箱根古文書を学ぶ会 編，箱根町教育委員会(１９７６)箱根関所日記書抜 上，ｐ１９.
箱根古文書を学ぶ会 編，箱根町教育委員会（１９７８）箱根関所日記書抜 下，ｐ１
９８.
服部健太郎・中西一郎（２０１７）１７０７ 年宝永地震と富士山．宝永噴火に関す
る一史料 ―駿河湾北岸域における宝永地震翌朝に感じた大きな余震及び白鳥山
の崩壊を記した行方不明史料の発見と既刊史料集に掲載された翻刻文の検討―．
地震２，７０，ｐ４１-５５.
服部健太郎・中西一郎（２０１８ａ）１７０７年宝永地震と富士山宝永噴火に関する
一史料（２）―『浅間文書纂』に掲載された「大地震富士山焼出之事」の底本―．
地震２，７０，ｐ２１５-２２０.
服部健太郎・中西一郎（２０１８ｂ）１７０７年宝永地震と富士山宝永噴火に関する
一史料（３）―元禄地震・宝永地震・宝永富士山噴火を記した「当山本宮記」―．
地震２，７１，１３１-１３７.
服部健太郎・中西一郎（２０１８ｃ）１７０７年宝永地震と富士山宝永噴火に関する
一史料（３）一元禄地震・宝永地震・宝永富士山噴火を記した「当山本宮記」―
（訂正 ERRATA），地震２，７１，１５１-１５２.
服部健太郎・中西一郎（２０１９）１７０７年宝永地震と富士山宝永噴火に関する史
料：富士山宝永噴火に先行した地震活動に関する記述の検証．地震２，７１，
２１９-２２９.
伴野京治（１９６２）宝永噴火と北駿の文書．２８８ｐ.
深井雅海 監修，大滝敦士，嵩田紋子 編（２０１４）江戸幕府諸役人御用番名鑑．柊
風舎．３０９ｐ.
深井雅海・藤實久美子 編（１９９６）江戸幕府役職武鑑編年集成６ 元禄十五年-宝

永五年　東洋書林．５５７ｐ．
深井雅海・藤實久美子 編（１９９９）江戸幕府大名武鑑編年集成５ 元禄十五年 - 宝永五年　東洋書林．３９７ｐ．
堀田正敦ほか 編（１９６４～１９６７）寛政重修諸家譜 第一～第二十二（新訂）．同索引第一～第四，総索引，続群書類従完成会．
本多秀雄（１９６０）南足柄中沼名主杉本田造日記．足柄乃文化（奥付『足柄の文化』）４，山北町地方史研究会．ｐ３９ - ４０，
松尾美恵子（１９９６）小山町域における「宝永の砂降り」記録．小山町の歴史，９，ｐ１９９ - ２１４．
宮川葉子 編集・監修（２０１９）樂只堂年録 第八，史料纂集 ２０５，八木書店．２６２ｐ．
宮地直道（１９８４）富士火山１７０７年火砕物の降下に及ぼした風の影響．火山，２９，１７ - ３０．
宮地直道・小山真人（２００７）富士火山１７０７年噴火（宝永噴火）についての最近の研究成果．荒牧，藤井，中田，宮地 編，富士火山，山梨県環境科学研究所，ｐ３３９-３４８．
三好不二雄 編（１９８１）鹿島藩日記 第三巻，祐徳稲荷神社．ｐ３５６・３６１．
三好不二雄 編（１９８２）鹿島藩日記 第四巻，祐徳稲荷神社．ｐ２６２-３２１．
村沢武夫 編（１９８３）伊那谷の災害と凶作 増補，北原技術事務所．ｐ１３ - １４．
本吉正宏（２０１５）内房における富士山宝永噴火の記録．千葉文華，４３，ｐ５２ - ５６．
文部省震災予防評議会 編（１９４１）増訂 大日本地震史料 第二巻，７５６ｐ．
矢島佳明（１９７７）宝永噴火と須走（一）．地方史研究 あずまえびす 第十一号，ｐ１７２-２０２．
山北町地方史研究会（１９８１）二階堂家伝来旧記書．足柄乃文化，１３，ｐ１-５６（影印全画像）
渡邊誠道（１９１７）伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録．伊奈忠順公贈位記念誌刊行会．２０２ｐ．復刻版（１９８５）
Miyaji N., Kan'no A., Kanamaru T. and Mannen K. (2011) High-resolution reconstruction of the Hoei eruption (AD 1707) of Fuji volcano, Japan. Journal of Volcanology and Geothermal Research, 207, 113-129.
Tsuya, H. (1955) Geological and Petrological Studies of Volcano Fuji, V.5. On the 1707 eruption of Volcano Fuji. Bull. Earthq. Res. Inst., 33, 341-383.

附録史料１　『富士山自焼記』（東京大学史料編纂所謄写本）

（表紙）

「富士山自焼記　　完」

一、宝永四丁亥年十一月廿二日より厚曇、廿三日弥曇
廿三日晝過より天一枚に赤曇、白キ灰降事雪
の降ごとく、其後黒キ焼砂降事夜中六寸程
積ル、廿三日未刻より夥敷震動有之、夜中無不止
屋なり不軽、廿四日終日日之光を覆、一天闇、震
動雷光無止時、酉ノ刻地震甚敷、終日焼砂降、往
来之諸大名、旗本、雨天之時の叉く供廻りハ合
羽笠を着、乗物には桐油を懸、歩行人ハ笠菅笠
ならてハ通かたく、砂目に入、口に入、息を突かね
井水ニハ覆をして砂を防、風吹時は一間先も不
見、廿五日須輿も日不出、一天赤ク曇リ、震動雷電
無止時、黒砂之降事曽而不止、夜ニ入て震動甚強
く灰砂降事弥多し、屋祢に積りたる砂又は
往還之道、鍬を以かきよせ、俄江戸中大手をな
す、廿六日震動少間遠ニ成、雷も時々鳴、南の方ハ
薄く晴、北ノ方ハ黒雲墨のことし、砂降事前日同
し、往来之人雨具着事于今不止、是只事に非すと
萬人興を醒す、
廿六日往来の飛脚宿ゟ書付出す、書面如左、上方
より罷下候飛脚之者共申口上之覚、

一、廿二日未刻、豆州三嶋、駿州吉原へ着仕候處、致腹
痛、同道之者先へ通し、彼宿ニ滞留仕候處、申ノ刻ゟ
夥敷地震いたし、翌廿三日昼黒雲覆、家内之外ハ
不及申ニ、家之内迮闇に成、大地夥敷ふるひ、食物
を調候鍋も釜も踊上り、天地も只今打返すかと
宿中之男女暗さけび申候、腹痛やミ不申候得共、
家内之者共逃退候故、不及是非彼宿を出申候、

今壱人申口

一、廿二日夜中、足高山の方ゟ火之玉飛上る事数を
不知、又長刀の形なる長き火十飛上り、或十間
も有へき程の長き火直ニ立登り、人皆肝を消、見
物仕候、扨又震動之夥敷事無云尽候、廿三日富士
山焼出候以後火炎黒雲と成、山も不見、手頃の石
雨の降叉く、箱根ゟ上方之宿々騒動ハ詞に不及、旅
人に宿を借事ハ勿論、給物一切無之、海の面潮も
一丈も高くなり光渡り、震動強、歩行も難成程

ゆり、大津浪只今打懸候かと少も地高成高ミへ
逃退、宿々の馬屋に馬立かね、嘶聲又ハ万人さけ
ぶ聲にて音も聞えかね申候由、下り飛脚之者申
候以上、

一、右富士山震動焼出候事、伊奈半左衛門殿ゟ被差
上候沙汰有之寫

伊奈半左衛門家来東海道ニ而旅人江承候所、書
付指越申候趣、

一、当月廿三日吉原之宿通り掛り候旅人申候ハ、廿三日
晝九ツ時前と覚、彼宿通懸り候所、冨士山中段之程
ゟ細き雲立ち候ニ付、往来之者共立留り見候而四五
里行違候得者、右之雲廣ク焼出、大き成石小石交
りに雨の降叉く降、夥敷鳴出、震動雷電たとへて
可申様無之、只今大地打かへすかと膽を消、荷物
付透（ママ）り候馬透と荷物を下し何地へか逃走候故
旅人ハ面々の荷物ニ取付罷有候得共、空ゟ降候
大石小石可凌様無之、皆々衣類を頭へかむり、往
事も不成、止事も不叶、吉原宿中之男女何事を宛
所もなく逃走、一切人ハなく成、往還之者共ハ皆々
聲を上て念佛申ゟ外無之由、

一、当月廿二日府中致一宿候旅人申候ハ、廿三日昼前
沖津迄参候処、冨士山中段ゟ黒雲立候而震動
雷電夥敷、大地をゆり候事高浪ニ舟ニ乗たる
ことくにて、興津中之者共ハ方々逃散申候、同日七ツ
時前、吉原之宿へ着候所、此宿之者共何方へ逃候哉
人無之候、漸人足大分賃銀出し雇、荷物歩行持に
致候、夜五ツ時分ニ原宿へ参様ニ致才覚、原宿ニ一
宿仕候處、震動雷電の夥敷事とかふ不被申候、家
内之人も旅人も一所にまとい一夜を明し兼候、
富士川ハ泥水ニ成流申候由、箱根山ハ砂薄く有
之候、小田原ゟ先、大磯、藤澤ハ大分小石降積り歩
行ニ難儀仕候、吉原宿へ降候石よりハ小ク御座候、

一、今月廿三日沼津に泊り候旅人、廿三日昼九ツ時過沼
津之先元市場と申所へ参懸り候所、時之聞ニ事々敷
震動いたし間もなく富士山ノ中段より黒雲立上
り石砂降出、一天一枚ニ闇になり、所之者旅人共に
膽を消、漸々と沼津ノ宿ニ泊り申候、如何程の鳥目
可出と申候而も一切宿を借不申候故、多ハ家々
の軒下にかゞみ罷在候へとも食物曽而無之飢に
及候、暮時ゟ火炎立揚り、震動之強事不大形候
得共、扨ハ大火炎之所為と存、人心少々落付申候、

焼上ル焔之躰、天にも届候様ニ相見へ申候、箱根も砂
薄く御座候、大磯より藤澤之邊迄ハ砂石多降、戸
塚ゟ江戸迄ハ段々薄成申候由申候、右之通私支配ニ
付候家来ゟ書出指越申候ニ付写指上申候、尤委
細之義ハ相知不申候、以上、

十一月廿六日　　伊奈半左衛門（関東郡代）

松平美濃守（大老 柳澤吉保 甲斐藩主）殿ゟ御在所甲府注進覚

一、廿二日朝五ツ時ゟ昼夜翌廿三日昼時迄震動、雷
電、地震甚、且又廿三日朝ゟ富士山東南之方烟夥
敷相見、火中ニ電光繁、火焔ハ東之方へ靡申候、今
以勢ひ強相止不申候、

一、廿三日昼頃ゟ廿四日朝迄地震相止不申、其内廿三日
夜五時同九時両度大地震にて戸建具はつれ、敷
居鴨居も離し候、

一、廿五日朝五ツ過又地震強御座候、右注進申上候、以上、

十一月廿六日卯上刻出す、

一、右之大変江戸中ハ不及申、江戸奥細川玄蕃頭殿御
在所茂（茂木）テ木と申所灰砂降候由注進有之、行程江
戸ゟ三十六里、

一、富士山焼候事、於江戸火焔相見、日本橋、江戸橋
ニは見物之郡（群カ）集橋ニ満況、

御城中江直ニ相見へ候ニ付、為検分御徒目付御
小人目付被遣候、右検使注進之趣

覚

亥十一月廿八日駿州駿東郡富士山之麓須走村
邊へ罷越、富士山焼候躰見分仕候処、富士山南東
之角、山三分二程下ゟ焼上り申候、案内仕候所之
者ニ相尋候へハ、大方木山と木なし山の間、せん
すい洞之邊ニ而可有之由申候、今以強焼申候、時
々山少見へ申候事も有之候得共、先ハ山の躰、火
焔にて相見へ不申候、烟先ハ東北之方へ靡申候、

一、須走村迄参、見分仕候処、此所にハ富士淺間之社
有之候、只今焼立候所ゟ行程五里程有之由申
候、右淺間之社、屋祢迄焼石にて降埋申候、并人
家之高き家ハ棟迄降埋、低家ハ屋祢の棟も見
へ不申候、依之人ハ立退申候や壱人も見へ不申候、
大形一丈餘焼石積り申候、今以大小交り之石降
申候、尤二三里之内之植木ハ木葉少も無御座候、

谷川も降埋申候而有之在々水濁り申由ニ候、
一、降積り候石ハ軽石のことくにて大サ大圖壱寸四
方弐寸四方程ニ相見へ申候、
一、道中筋之儀、段々注進申上候通ニ御座候、田畑之
石砂大分積り麥作ハ勿論透と無之、百姓難儀
仕候由ニ御座候、焼候近所二三里ハ火焔強、烟と相
見へ候得とも悉石砂降、寄付レ不申候、
右之通ニ而外替り申風聞承不申候、以上、

徒目付
市野新八郎
安田藤兵衛
馬場藤左衛門

亥十一月晦日

[富士山南麓から見た図あり　図中の説明文]
駿府御目付
溝口源兵衛殿ヨリ以繪圖
注進の寫十一月廿五日飛脚
到来之由
三くりや十里幾，檜たいらと申
所駿河表ゟ富士詣之道ゟ
東郡内と駿河と之間
檜たいらと申邊ゟ焼出
申候、木立ハ無之所之由、

十一月廿二日ゟ廿三日四ツ時迄地震々動雷光
夥敷百千ノ雷晝夜止時無之、廿三日巳之
刻ヨリ大火發申候而地震々動ヨリ夥ク
鳴申候、焔ノ勢イハ冨士之頂ヨリ遥ニ高ク
冨士郡中ハ闇夜ノ如ク成申候

三くりや十里キ村ハ小田原領ノ由，傳法村ハ
曽我播磨守殿安藤内記殿杉浦平九郎
知行所之由、傳法村ゟ焼出候所ヘハ指
渡してハ四里程有之由

二度目之檢使注進之絵圖
如左
[富士山南麓から見た図　図中に村，街道，領主の記載あり]
[富士山南麓から見た図　図中に村，街道，領主の記載あり]

士峯焼入タル圖附新出山之圖

但此圖ハ或人吉原ノ驛ニ滞留シテ

焼タル處ニ行テ見分シ此圖ヲ

作ルト云々

［富士山南東麓（須山 - 御殿場間）から見た図（『古沢村より新山顕出之注進之寫』）

図中の説明］

宝永四年亥十一月廿三日午刻ゟ大地

震々動ト同時山焼出四五日ノ中闇夜ノ

叟く東南を不弁、廿八日初て日天を拝申し、

石砂ノ降事夥上ゟ下り下ゟ吹上口も

眼も不得開、積ル丁八九尺或壱丈餘、民

屋悉ク埋レ又ハ潰レ申し、火焔ハ十二月八日ゟ

焼止ル鎮タル後如圖ナル大山顕レ出申し

此山突出□時震動夥、近在ノ男女絶

入申候以上、

士峯自焼記

宝永丁亥之歳自辛未廿三日至甲戌廿六日日色晻曖

晝瞑冷氣慄烈如隆寒方至曀々旦雨不雨天地震

動雷聲轟々時起時止丁于城市之西南有黒雲之

氣横覆東海上重畳不散天涯朦朧日夜雨砂屋上

有聲如風雨注如落葉打開戸見之満地如鋪灰積

三寸計良久變黒色阡陌行人冒巾翳傘以避之從

風撲面入口為□穿眼為痛上下為之悚動人之言

日方今富士峯有焼猛火熾起大石燔沙石飛曽在

上世士峯有焼又日三十八年前城市有沙降未如

此多矣顧非必凶禍之兆矣時遐陬之地天時之所

致乎暫起之以備異日之譚云

右考年代記曰人王五十代桓武帝延暦十九年

富士山自焼山川水皆如紅聲如雷至宝永丁亥

九百八年

又人皇五十六代清和帝貞観六年五月山自焼

飛石壊民屋海填三十里

至宝永丁亥八百四十四年因運氣説思之今歳之

司天厥陰風木在泉少陽少火運者木運是為大過

之氣運醫書説曰風勝則地動火勝則地涸地震雷

鳴職此由乎而火起于士峯者蓋造化神秀之氣之

所鍾故天地大過之氣有竅于此乎不審

寶永丁亥黄鍾之日　　真杉成允記

一、大久保加賀守殿（老中 小田原藩主）どの より松平美濃守殿（大老 甲斐藩主 柳澤吉保）へ被懸御目候
書付之寫

亥十一月廿三日午下刻小田原ゟ飛脚ニ申越候趣

一、十一月廿二日暮時ゟ小田原城下夜不絶地震致、廿
三日午下刻ニ至迄地震止不申何ヶ度と申震数
相知不申候

（頭注）

「△一、廿三日巳下刻ゟ西之方夥△
強ク鳴り北ノ方ニハ雷モ鳴リ
申候、西ノ方之鳴音午下
刻飛脚之者罷立候迄相
止不申候、」

一、地震之義ハ山の鳴候音にて有之候哉、廿三日巳ノ刻
過ゟ午下刻迄震続ケ申候、桶ニ明置候水ハゆり候
得共こほれ不申候、

一、海の様子ハ常之通ニて浪も静ニ御座候、其外天
気相（ママ）更（かわる）　義無御座候、
右之通小田原ゟ申越候、別ニ一通右飛脚之者小
田原ゟ江戸迄之内道中見及申趣、

一、小田原城下ゟ壱里江戸ノ方領分小幡村と申所
ゟ梅澤と申所迄一里程之内大砂利中砂利ほと
の石ちら〳〵と降申候、

一、梅澤ゟ大磯迄弐り程之内右大キ之石ニ三寸、所
により四寸程も降積申候、

一、大磯ゟ戸塚迄六り程之内ハ小砂利程之石三
四寸ほと降積申候、

一、川崎ゟ江戸迄四り半程之内、右之通成砂地隠レ
申候ほと降積申候、江戸之方へ寄候程薄ク相ミ
へ申候、

一、家居有之所ハ鍬にて砂利をかき除申候、
右之通飛脚之者見及之由申候、
道奉行（道中奉行）安藤筑後守（大目付 安藤筑後守重友）殿、石丸安房守（勘定奉行 石尾安房守氏信）殿より御老中
へ被指出候書付之寫是又加賀守殿より美濃殿へ
被遣候寫、

一、昨廿二日晝八ツ時ゟ今廿三日五ツ半迄之内大地震
間もなく三十餘度ゆり、先年之地震潰残之家
此度ゆり潰申候、其上同日四ツ時、富士山おひたゝし（夥し）
く鳴出、其響富士郡申へ響渡り、大小の男女共絶
入仕候もの多御座候、然所ニ同山雪流烟巻出、猶
以山大地共ニ鳴渡り、富士郡中一遍ノ烟、二時餘う
つまき申候、如何様之義共不存、人々途方失ひ、罷

有間、三間とも隔候而ハ一入顔も難見分ニて候、
昼之内は烟計に相ミへ申候、暮六つ時ゟ右之烟火焔ニ相見□□此上如何様之義ニ可罷
成も不存候、右之通乍恐先注進申上候以上、

十一月廿三日　　駿州冨士郡
吉原宿問屋
年寄

右之通駿州吉原宿ゟ以宿継注進仕候間申上候、
尤御代官能勢孫兵衛ゟハ未何共不申来候以上、

石丸安房守尾
安藤筑後守

一、右富士山十一月廿三日ゟ焼出し十二月十日ゟ焼止
候、日数十八日焼之内駿州相州武州三ヶ国砂石
降積り候事夥敷、殊大磯にてハ男女之首或手
足、又ハ脇指或鍋釜抔降候由、是ハ大火發之時其
勢ひにて近郷の民屋共ニ刎揚候ニ付如此之由
於江戸冨士煙火之内、及暮候而ハ日本橋、江戸橋、
後藤橋抔ハ火烟見物之人、橋上ニ群集して往来
も成シ不得、万人興を醒し諸寺諸山に仰て安
鎮之御祈禱有之、

一、右焼抜候穴ハ大サ未知、但し穴ノ邊ニ砂山一ツ突出す、
其大サ足高山ニ同、江戸ゟ見及候ハ足高山より
高し、

一、駿武相三州田畑降埋、民屋亡所と成故、砂さらへ
又ハ國役出金等被　仰付候也、

國掛り役百石ニ弐両宛

一、子正月十八日、於　御城井上河内守殿被仰聞候由、
請合之面々へ以御書付大御目付仙石丹波守殿被（大目付　仙石久尚）
仰渡候趣、

覚

一、武州駿州相州三ヶ國之内、去冬砂積り候村々
于今其儘に被指置候由相聞候、当春耕作前、砂
除候様ニ地頭ゟ可被申付候、大分砂積り候て村中
百姓之自力ニて罷成程の村々も先取懸り、砂片付
候様ニ可被申付候、重而吟味之上御救も可有之候、
其内飢不申候やうに可被入念候、委細荻原近江（勘定奉行　荻原重秀）
守へ可被談候、以上、

子正月

閏正月七日　井上河内守殿ニ而御書付御渡し（老中　井上正岑　笠間藩主）

覚

近年御入用之品々有之所、去冬武州、相州、駿州、三ヶ國之内砂積り候村々御救旁之義ニ付、今度諸國高役金御料私領共に高百石ニ金弐両宛之積り在々より取高可致上納候、且又領地遠近有之在々より取立候迚ハ可為延引候間、三月を限、江戸御金蔵へ可有上納候、壱万石以下ハ六月を限可被相納候、頭々有之分ハ其組切ニ請取目録を以頭々ゟ可有上納候、頭無之面々ハ上納之節前廉可被相達候、五十石内之端高ハ役金可有用捨候、寺社領ハ相除申候、

閏正月

閏正月九日伊奈半左衛門殿被召候、小田原領砂降積候村々当分御料ニ被成候間、致支配砂取除、且又川除御普請被仰付候、是ハ大久保加賀守殿御領分砂積り亡所同然ニ成候故、加賀守殿御願にて村替被　仰付候旨此之よし、

一、今度相州川除御手傳丁場之割

大川通内山村枝川落合ゟ　　松平伊豫守（岡山藩主　池田綱政）殿

海手落口迚北之方枝川　　備前岡山城主

其外在方小川共ニ

川西之内透間村ゟ内山村

枝川落合迚本枝川共

狩川通大川落合枝川共

川音川通り大川落合枝川共

川西之内峰村大川ゟ地川

筋枝川共

小笠原右近将監（小倉藩主　小笠原忠雄（ただかつ））殿

土井甲斐守（越前大野藩主　土井利治）殿

細川采女正（熊本新田藩主　細川利昌）殿

松平造酒正（鳥取新田藩主　池田仲央）殿

右富士山自焼記

美作國西北北條郡津山町大字元魚町横山治平所蔵

明治廿九年三月採訪同三十年二月謄写了

附録史料２　『富士山變記』（東北大学　狩野文庫）

（表紙）

「富士山變記　　」

富士山變記

冨山變記

寶永四丁亥年十一月廿三日午下刻、俄に
天氣變、風もなく、空ハ薄霧のことく、鼡色
なる灰ふり、急積る事八九分、諸人言侍る
は、以前信州浅間山然し時、灰降しなり、
其事ならんかと思ひ侍るに、未の上刻より
黒砂に成り、寔（まことに）　真黒に深々とすさまし く、
震動たへす、一滴の雨もふらさるに、雷鳴も
たえす、電人の目を驚ぬるほとに、病人は
氣を失、甲斐なき男、やすらか成る女ハ打伏（臥）、
煩ひける、兎角する中に、砂積る事二三寸、
貴賤ともに菅笠・唐笠にて往来すると
いへとも、目口にハ砂入て、難儀にこそ覚し、主君の
用にて往来は格別、私の用としてハ出も
やらす、戸を立、窓をふさき、井戸を掩て閉籠
る、賣買の町人ハ見せ店を仕廻、肩商賣
の者共ハ裏店に蟄居ほとに、世間何となく
物淋こそ成りもてゆけ、猶砂ハ止むことなく、
終夜降けり、所により四五寸も積しとかや、
同廿四日の朝ハ少しハやミ、ちら〳〵とハ降りける、
此日沙汰しけるハ、駿州（州）冨士山然ぬるにや、
坤（ひつじさる：南西）の方より一片の黒煙、東に霞（たなびき）　靉靆たりと
言侍るゆへ、人々出て見ける成り、震動、雷ハ
いよ〳〵不止、砂ハ時々降に、強時も弱時も
ふりける、同廿五日ハ朝より昼過まて、ちら
〳〵と砂降しか、未の下刻より強降、家の
内、行燈をとほし侍りぬ、夜に入程ます〳〵
強かりける、同廿六日よりハ震動、雷ハそろ〳〵
遠退ぬるといへとも、十二月七日迄ハ或朝の
内砂ふり、或ハ昼時、或ハ暮方、或ハ夜中
ふり侍りぬ、同八日にハ快晴、砂もやミ、震
動、雷の沙汰も鎮也、
一、砂降事、駿州、相州より宿次にて
公儀江御住（注）進申上ルにより、冨士山の
然たるを諸人知る也、
一、廿三日にハ、金川・川崎邊ハ白昼に行燈
とほし、用事にて往来の時ハ挑灯
とほしけるよし、
一、冨士山、十一月廿三日に然出て、十二月八日

晩方焼留るよし、
但、冨士山の根方、焼砂ニ而埋し人居の村
十三ヶ村といへり、右の砂、高ク積り、山
となる、愛鷹山程に見ゆるとなり、是を
よんて寶永山といふよし、
一、廿三日、砂降る事、　御殿にての沙汰ハ、伊豆の
大嶋焼るなれハ、其地ならんかとて、先、芝
浦表へ参り、見分可仕由ニて、御徒目付市野
新八郎、馬場藤左衛門、安田藤兵衛、并御小人
目付六人被　仰付、芝浦表へ参り、詮儀
いたすといへとも不分明、然所に、あとより
御小人目付を以、又被仰下ハ、しれかねるにを
ゐてハ、焼場所まて参り、見分可申との
御事にて、品川より直に駿州へ、はや追ニ而
吉原の宿まて参着申といへとも、砂并焼
石降により、近邊の山江登る事不能して、
原と吉原の間の在郷江引籠居ける
よし、廿八日に江戸ニての沙汰なり、廿九日
見分相済、御徒目付・御小人目付帰ル由、
一、相州筋の百性より地頭へ注進のよし、
當廿三日四時分ゟ震動、雷鳴り、石灰
降申候、大磯ゟ藤沢筋迄、砂灰如此之
岩石交り候而降申候由、
○　○　○　○　［石の形状・大きさを示す丸］
此通之岩石焼候様ニ相見へ、殊外軽ク
候とて百性持参申候、
一、上総も武州と同前ニ砂降、雷電いた
し候由、地頭へ百性注進いたす、國
うちにても砂積る事一二寸、或六七寸
の所も在之由、
一、下総へも砂降、積る事一二寸のよし、
一、常州のうちも砂降る、所により積る事
軽重あるよし、
風説に曰、鹿嶋大明神ハ古来より被召
遣候女中壱人宛有り、此を名て御物見
といふ、伊勢の斎宮のたくいと云へり、神
勅の事、度々御物見よりふれ給、今又しかり、
此度砂の事、五三日前に御物見より鹿
嶋領江ふれられしハ、来ル廿三日、天地の
大變有り、今度のわさわひ、神力及
難といへとも、此上何とそ神慮をめて
され、御ふせきあるへきと成り、若(もし)廿三日、
砂降、くらやミと成る時、獣の毛、砂に交り
降るにおゐてハ、神軍の御利運と思ふ

へしと觸在之、鹿嶋領の貴賤、廿三日を
心元なく相待處に、神勅の通り、廿三日
昼時より砂降、其上鹿嶋の海端江山
中の鹿数百疋、頭を海表へならへ集り
居けるほとに、百性とも此よしを見て、
扨は神と鬼との御合戦とミへたり、御
味方可仕とて、老人・小児によらす、男たる
分ハ鑓、長刀、刀脇指ぬき持、弓に矢はけ、
彼鹿あつまり居ける邊へ押寄、たへす
鯨波をわけ、いよいよ祈願いたし侍るに、
一時計も過て、降砂の中に獣の毛交り
降る、長さハ七八寸も有しとかや、但、江戸にても砂に交り降りたる毛をひろいし者数多有之、色ハ薄赤も白きも有よし　右の毛降来時、数
百疋の鹿とも閑に山へ引入る、百性共此ヲ見
て、扨ハ神力加護を得たり、此うへ砂は幾
尺積るとも不苦、目出たしとて、神
哥・田舎哥を謡、己か家々に帰ると也、右
神勅の竒瑞、百性より地頭〳〵ゑ(江)住(注)進
し侍れハ、内々にてハ尊敬かきりなしと
いへと、世間を軽りてやありけん、隠密のよし、
一、廿五日、　公儀御役人衆へ駿(州)府の百性より
注進申上ル文言ハ、

昨廿二日昼八時ゟ今廿三日五ツ半時迄之内、
地震無間も、三十度程震、少々残候半
潰之家、又候震潰申候、其同日四時、冨士
山夥敷鳴出、其上雷、冨士郡中江鳴
渡り、大小之男女共絶入仕候者多御座候
得共、死人ハ無御座候、同山雪之流、煙巻
出、猶以、山・大地共に一遍之煙、二時計うす
まき申候、如何様之儀共奉存、人々十(途)方
失罷在候、昼之内ハ煙計相ミへ候、暮六時
より右之煙、皆火煙と相見へ候、此上如何
様之儀ニ可罷成も不奉存候、右之段、乍恐
御注進申上候、以上、

駿(州)府冨士郡
吉原　問屋
年寄

十一月廿三日

右之通、駿(州)府吉原宿ゟ、宿次を以、只今
注進仕候間申上候、尤御代官能勢
権兵衛方ゟ未何共不申来候、以上、

十一月廿五日　　安藤筑(重志)後守（大目付）
石尾阿波守（目付）

右、注進状文言之内、残候半潰之家も在之、
其半潰の家の事ハ、同年十月四日午
の下刻、武(州)邖邊地震どことなく静に
ゆら〳〵と長ク、地震とハ不覚、瞑眩(メマイ)する
かと人々おほへ、しはらくして地震たる
事を知り、立出れハ、足ふら〳〵と歩行、
心のまゝならすしてやミぬ、弥敷地震
と云あへり、同五日卯の上刻に、俄に
鳴渡り、地震しけり、其節ハ湯水入置
たる器より湯水ゆりこほす程なり、
昨四日の地震よりハミちかしといへとも、
鳴音ゆりよふハさわかしく侍りける、右
両度の地震、如何様にも遠国にて大
地震いたし、其あまりと諸人云あへり、
あんのことく三四日過て、国々より
公儀へ御注進申来ル、駿(州)邖大地震ニて
久野(能)御宮社家共大破、御城内も破
損　但、右之見分として稲垣對馬守重冨被遣　冨士山も北の方少々
崩よし、扨、東海道筋大坂迚ハ段々と大地
震、然共一国の中にも強と弱と在之よし、
五畿内のうち山城は江戸程震候由、地震
故、高潮にて人民・鳥獣・田畑等損候は、
勢(州)邖鳥羽　但、下宮領ハ在々町々大破のよし、内宮領ハ少も不損由　摂州大坂、土州
高知、右三ヶ所絶言語にたる高潮、人も物も夥
敷損したるよし、其外(カ)潮湧上り、田畑損たる国々
数多在之由、今度の地震、西国・四国不残ゆる、
強キ弱キハ一国之内にても差別在之由、
北国・奥州ハ少計地震のやうに其日をと
つれし處もあり、大方ハ不知所多となり、
同年十二月朔日、東海道筋御普請御手
傳被　仰付、酒井左衛門尉忠直(真)、十万二千石真田伊豆守
信房、十五万石本多吉十郎忠孝也、村上先達道中見分
に被遣候御目付、安部式部、坪内角左衛門、并
御徒目付、御小人目付今日帰ル、同十日、駿河
御普請御手傳被　仰付人々、十一万石松平越中守
定重、七万石松平伊豆守信輝、古河十五万石榊原式部大輔政辰、
右之様子に候故、今度冨士郡より砂の
御注進状に、少々残候半潰の家とハ書たる
也、
一、御老中江参候冨士山然候繪圖
［図］

一、冨士山焼、砂降り、諸人其不祥の氣に
当るゆへか、十二月中旬より貴賤共に咳氣
を煩ぬ、重きハ五七日、軽キハ三四日ニ而本服(復)す、
たとへハ、一家に上下十人あれハ九人ハ煩なり、
依之武士・寺社・百性・町人、家々にて前薬
を大鍋にてせんし、煩者ハ老・不病者にも
毎日是をのまする事せんしちやの
ことく、但し死ル者ハ無之、翌年の春
は、いつとなく咳氣煩しつまる也、

狂哥

是や此行もかへるも風ひきて
　しるもしらぬも大かたハせく
今度ハ脉取あへぬはやりかせ
　くすりのむ間もせきのまに〳〵

水鼻如シレ瀧膚(タキノハダヘ)如シレ火ノ　得ー變得(エヘン)ー變咳(ト)ー声(ヘヲヒタヽシ)　夥
本ー腹欲(シテス)レ　借(リント)薬ー代金ノ　當ー暮算(ノ)ー病夫(レ)奈(シ)レ我

風引は悪寒發熱立居にも
　よるひるとなく獨せくらん

漢和

鼻穴(ハナノアナハ)　風神洞(カセノカミノホラ)　痰(タン)の　雷(イカツチ)　ひゞく咳声(セキコヘ)

一、宝永五戊子年正月十八日、稲垣對馬守
重冨被申渡候御書付

覚

武刕(州)・駿刕・相刕三ヶ国之内、去冬砂積候
村々、尓今其侭ニ而差置候由相聞候、当春
耕作前、砂取のけ候様ニ地頭より可被申
付候、大分砂積村百性之、自分ニ而難成
程の村々も先取かゝり、砂片付之儀可被
申付候、重而吟味之上、御救も可在之候、
其内飢不申様ニ可被入念候、委細萩原
近江守可被相談候、已上、

正月十六日

右之通之御觸書也、

一、同年壬正月三日、稲垣對馬守重冨被相渡候
御書付、
武刕(州)・相刕・駿刕三ヶ国之内、去冬砂積候村々、
所務難成程之私領ハ村引替可被申候間、

可被存旨、委細は萩原近江守江可被相談候、以上、

閏正月

右之通之御觸書也、

一、同年同月七日、稲垣對馬守重富被相渡

御書付、

覚

近年御入用品々在之處ニ、去冬武刕(州)・

相州・駿州三ヶ国砂積候村々御救

方々之儀、今度諸国高役金、御領(料)・

私領共高百石付金弐両宛之積、在々ゟ

取立、可在上納候、且亦、領知遠近在之故、

在々より取立迚ハ可為延之候間、壱万石

以上之分ハ領主ゟ取立候而、当三月を限、

江戸御金蔵江可有上納候、壱万石以下ハ

六月を限可被相納候、頭在之分ハ、其組切ニ

請取之目録を以、頭々ゟ上納可在之候、

頭無之面々は、上納之節、前廉可被相

達候、五十石より内之端高ハ役金可有

用捨候、寺社領は除之候、以上、

閏正月

右之通之御觸書也、

一、同壬正月九日、武刕(州)・相州・駿刕川砂浚

被　仰付候人々、

松平伊豫守綱政(三十壱万五千弐百石)、小笠原右近将監忠雄(拾五万石)、土井(四万石)

甲斐守利治、細川采女正利昌(三万五千石)、松平造酒正正尚(三万石)

右五人被　仰付候、何も発足之由、但、家来計

差越とも云り、

狂哥

金ならはきたひ袖につゝまましし

灰の吹来は江戸のめいわく

雪ならは犬ハおばじやとよろこへと

すなのふるには人ハをぢ〳〵

墨髭鉢木(スミヒゲハチノキ)

あゝ降りたる砂かな。嘸道行人ハ難儀にて候

らん。それ砂ハ鉄砂にて飛て散乱し。

人ハ蓑衣笠(ミノカサ)をきて、たつて徘徊すと

いへり。されハ元見し浅間の灰にあらされハ。

目口へはゐる、たつて拂ふへき。肤も切て、

貧乏の薄錦ぬのこ墨髭か今日の

難儀をいかにせん、あらけしからすの砂の

降よふやな

武蔵野ハけふハおふりは黒砂の
　人もこまれり我もこまれり

武蔵野に弁慶色の砂ふりて
　浮世の人ハ九郎判官

天よりハすなをになりと砂降と
　人は大かたどろほうになる

冨山何事火災起　煙黒灰降両眼疼

宝永四年　霜月末　不レ嫌二田畠一都砂レ重

（図会）
くゑ日に灸を駿河のあし高は
　冨士三里まて焼ぬけにけり

風におひし冨士の焼砂ふり積り
　行末いかゝ我かおもひかな

砂やふる神代もきかすこのころは
　めから鼻から砂くくるとは

能知謂走前表事　不二一山邊砂破飜

皆見大砂東海道　旅人越度顧本尊

誂諧三物

冨士の火やあし高山の火達哉
　岩を團炭にまるめなす冬

天の篝震出す砂や降すらん
　降砂に能を駿河の神なりは

ふし太皷とも是を云ふらん
　百石に付金弐両宛、高役金六十余州に
　仰いたされけれハ、

冨士近き御領（料）・私領に砂降りて
　いまは弐両にかゝる国〳〵

砂やふる上にハ知らす萩原か
　からくりをして金をとるとハ

聯句　題冨士山之然

砂積雪疑レ黒　石飛霰得レ紅

杖レ杉天狗客　冠レ藻野狐翁

欲火臣迷レ國

大變迷惑序

大變之所古之大変所二以悩一レ人之

法世蓋自レ天　降レ灰砂則既莫三不二興一レ

之有二金銀米銭之救一矣　然　其簡略
之　出　或不レ能レ調　是　以不レ能下皆　有中以
知二其　救　之所一レ有而　戴　上レ之也

大欲　　冨士焼火

私欲　子　曰大欲江劦之秘所而諸
国出レ役之門也自レ今可レ見二役人　為
レ欲仕方一者獨　頼二此変之　損一而困窮
次レ之百姓必由レ是　而憂焉則　庶　乎其
不レ報矣

私　曰　膽二彼地砂一了簡　倠　如レ降　如レ鳴　如レ曇
如レ震　降兮鳴兮震兮曇兮　媚　有二籏本一終
云レ不レ覚兮、

箱根當番　曰日々闇又日闇

私曰　降　彼冨士山維砂眼　前　咳　咳
疼声　藪醫者　膽　虚　少　人　不可二以　不
レ愼一風　引　則　爲二鼻紙　費一矣

私欲三番三　　稲垣
　　萩原

物とるめし給ふ稲對州殿に、そつとげんざんもふ
そふ　てうと参りて候、たかひの事と思召候へ、
簡略の朋輩、喉しめの友立、御身相談の爲
に罷出候、今度のさんよふそろばんきり〳〵
はち〳〵とおゐて見せ候へ、欲の深勘定殿、
此欲深勘定か千両・万両取たそふする事、
對州殿の賄よりも何より以やすふ候、先つ
對州殿ハ、元〻の談合をおも〳〵と御出し候へ、
此對州か元〻をいたそふする事ハ、勘定殿
の積りよりハ猶やすふ候、まつ算用を
聞て、其後喉首をしめらするにて候、
あゝらよひ分別や、さらハ砂の割付を
まいらせふ、

此主　　ち賀女
　　知か名

此主

何方江参も
用可被下候、以上、
□□□□□

附録史料３　『富士山焼記』　（刈谷市中央図書館　村上文庫）

（表紙）

「

鷹繋圖　富士山焼記　眉圖　附

」

寶永四丁亥年

十一月

廿三日　寅刻地震、陰、従（より）辰ノ中刻、南ニ西ノ方

戸障ニ子動テ不レ止、恰モ如ニ地震ノ及レ晝（ひる）半ニ晴時ニ

々震ニ動如レ雷、灰ノ降ニ如レ雪ノ、有レ暫變沙降ニ不

レ止、及ニ三寸ニ及レ晩ニ四方曇ル、夜沙濕（シメリ）降夜

中戸障子動不レ止、一人トメ無レ不ト云ニ為ニ奇異ノ思ヲ、

右是者富士山　因（より）ニ炎上ニ如レ斯云々、

富士山炎上載ル舊（旧）記ニ所、

人王五十代　桓武天皇延暦十九庚

辰年　自（より）ニ三月十四日ニ四月十八日迄富

士山ノ頂キ無レ故自ラ燃テ晝ハ烟ニ闇メ藏レ山、夜ハ火ノ光

照スレ天ヲ、其音如レ雷ノ、灰之降ニ如レ雨ノ、山下ノ河水

如レ血云々、

人王五十六代　清和天皇貞觀六甲

申年五月富士山燃テ十日餘火不レ消、山

上ノ盤石崩テ埋ニ海三十里計也、始ハ自（より）ニ淺

間ノ之方ニ燃出、後ハ甲斐國之方、焼ニ移ト云々、

又砂降事

人王五十八代　光孝天皇仁和元乙

巳年自ニ七月ニ地震雷電星ニ落砂石降ト云

々、

富士山根ノ方大ナルハ一・二尺小ナルハ三・四寸ノ石降ニ

如レ雨、依レ之人民大ニ死ニ亡　適（たまたま）ク逃ル者不レ残ラ其

所明ケ退クニ云々、

甲斐國　因（より）レ響山ニ崩埋メレ谷ヲ人家滅ス、富士山ノ

之禽獸悉ク移ル餘ニ國ニ云々、

相模國中小ニ石降ニ三ニ寸、砂降ルニ六寸、梅澤ノ

之ニ驛沙降ルニ及ニ八寸ニ、從リレ所ニ二尺、箱ニ根・小ニ田ニ

原・戸ニ塚等恰モ如レ夜ノ晝ル用ユレ燈ヲ不レ能ハ出ニ傳馬ヲ

之由及ニ注進ニ云云、

上ニ総國沙ニ降二寸小キ焼ニ石降ルニ如レ雨ノ

土佐國津ニ浪打ニ入人ニ家大ニ潰云々、

一説御先○手杉浦兵九郎知ニ行ニ所富士

山根方ニ此度大ナル穴出ニ來入ニ藤葛雖レ及ト

五百尋（ヒロニ）ニ猶不レ知ニ其ノ奥ヲ、中ヨリ火ニ焔出云々、

今日　将軍冢被レ為レ入ニ地震之間ニ云々、

美濃吉保二男 松平伊織安通 十三歳 被任刑部少輔
同三男 松平左門信豊 十一歳 被任式部少輔

廿四日　寅刻北風揚レ沙、天眼快-晴震-動
強シ、戸障子時-々動ク、酉ノ中刻地震、
廿五日　子ノ刻過地震、従(より)二南方一次第ニ陰、北
方少-霽冷、戸障子時々動、及レ晩四方曇ル、
因二申ノ下刻一黒沙降、
因二申ノ下刻一黒沙降、（ママ）
　此陰リ冨士山炎上之沙也云々、
御徒目付三人、御小人目付六人、冨士
山見分被レ遣、今夜亥刻迄之中可レ令二發
足一云々、
廿六日　陰、北方南方少-霽、震-動時-々、従一
辰中刻一沙降、晝少シ日-影-差ス、入レ夜沙　彌(いよいよ)　く-降
四方闇シ、
子刻南方光リ移レ壁云々、
廿七日　東南西晴、北大ニ曇、従(より)二申ノ-刻一沙降
及一黄昏ニ一東南西大ニ-陰、北方少-霽及二亥刻一
屬晴、
此間世上咳氣甚盛、一人無免者、是冨
士山炎上之含一毒氣一故云々、

廿八日　天眼快霽、霜大降太冷、
　大納言家御風氣、尾張殿、紀伊殿、水
　戸中将殿御-風-氣云々、
　今日大名四十六人依一風氣一不二出仕一、
廿九日　晴天、夜中沙降、従午中刻陰、
　此間於　御本丸、毎日御触有之云々、
晦日　曇、戸障子時々動、辰刻過雨降晝ル、
沙少降、及申刻晴、
大納言家御小験云々、
冨士山見分ニ被レ遣御徒(カチ)目付御小人目
付帰参メ申メ云、去廿五日丑刻着一箱根一自
レ夫(それ)　弥(いよいよ)　く飛シレ駕ヲ駿河ノ國着一淺間ノ宮一自淺間一到二冨士山一行程三里　因リレ是レ遥ニ冨士山之方ヲ望-見候ニ頂上ニ
者(は)雪如レ常-住、東方従二中央一○火柱立「高サ一間
廻リ三尺程ニ見ユ、烟リ東方江(なびき)靡、沙ヲ巻-上、根-方甚-
闇メ如レ夜、小-石降ルト如レ雨ク、自レ是先キ不レ能レ行「、中-
々非ンハ二御-威-光ニ一是レ迄茂(も)不レ能レ来ルト之由、以一繪
圖ヲ一言上云々、

十二月

朔日　陰、夜中砂降、
二日　霽曇、夜中黒沙降、

東海道沙ー除御手ー傳被二仰付一

酒井左衛門尉（出羽庄内藩主　忠真）

真田伊豆守（信濃松代藩主　幸道）

本多吉十郎（越後村上藩主　忠孝　幼少）

三日　陰、夜中黒沙降、迚レ晩屬レ晴、　冨士

山ノ方霽ル、火氣如レ雲東方靡ク、見レ之者ノ如レ堵ノ、

四日　曇、及レ晝黒沙降、午中刻地震

及レ晩北風揚クレ沙ヲ、一ー人トメ無二面ヲ不レ覆（者一、

五日　晴天、南風揚クレ沙、

六日　陰、

七日　霽天、北風揚レ沙、甚冷、午剋自リ二傳通

院近所金剛寺坂一出ー火、炎如レ飛定火消

小出民部類ー焼餘焔　御本丸ノ方江向、因（より）

レ　茲（ここ）稲垣對馬守重富来テ二火事場一下ー二知メ火

消ヲ一防レ之仍火先東方靡キ金ー杉村天神（俗ニ云フ）

丑天神ー非也水ー戸殿御ー屋敷ー隣也　、回禄水戸殿御ー屋ー敷

甚危、依レ之八重姫君（御懐胎也）為二供奉一松平

美濃守吉保、秋元但馬守喬朝馳参因テ二

重富カ相圖ニ一御駕候セント左右ニ各歩行立ニ成リ相ー

待依レ及二大火ニ一大名十人被二仰付一各盡二粉

骨ヲ一申ー刻過火ー鎮ル、水戸殿御屋鋪免ル二其災一、

自二今日一沙不レ降、是冨士山火ー鎮歟云々、

八日　晴天、

九日　陰、從二亥刻一雪降ル、

十日　雪降積ル二一尺、巳刻雨降及二巳中刻ニ一

屬レ霽ニ、

十一日　晴天、北風甚冷、

十二日　天眼映霽酷冷、

凡昨今ノ寒氣八九年已来稀也云々、

十三日　晴天風吹、

十四日　天晴快霽、酉初刻小寒ニ入、隱居

家督被二一仰付一、

十五日　天眼快晴、

将軍家西丸江被レ為レ入、

松平大藏少輔（家千代主御守元御書院番頭号二豊前守一）

右者西丸御側衆被二一仰ー付一

家千代主ニ被レ為レ附面々各帰役被二仰付一、

十六日　天眼快晴暖、

先年水野監物忠之ニ御預被二一仰付一本

多出雲守政利令二病死一之由、依二注進一為二一

見分（御小性組八番壹岐守組）大久保源右衛門

来十八日彼地ニ可レ令二發足一之由被二一仰

付一、

十七日　天眼快晴、風静暖、

将軍家大納言家紅葉山江　御社參、

十八日　天眼快晴、暖氣、

東叡山御門主日光江御發駕為二御暇乞一御對顔、

紀伊宰相殿被レ任二中納言一、

久野御宮駿府御城御手傳被二　仰付一

榊原式部大輔政辰

松平越中守定重

松平伊豆守信輝

右者来春彼地二可令發足一云々、

（前欠）
如ナリ渡リ其コヱ日□（中カ）ヒヽキ煙ノ中ゟヒカリ
物無隙ヒラメキ渡、モエアカリ、西風ニ吹ナヒキ、
南ハ原、芦（吉カ）原ヨリ沼津、小田原、箱根ヲ越、
ヲウイソ（大磯）、トツカ（戸塚）、東ハ江戸、海面、御城中迄焼煙
タナヒキ、石砂降リ、江戸町人見せ棚ヲ開事モナク、
昼夜ヲワカタス、砂煙ノ中ヨリ刃ノヨウナル光物、イク
千萬ト謂ヿヲシラス、ヒラメキワタル、ソノアリサマスサマ
ジカリトモ、中々心語モ不及レス、北ハ四谷ヨリ札（布田）、石原、
八王子、古仏（小仏）、或は猿橋、初狩、白野邊迄、砂
煙、雪ノフリケルヤウニタマリケルトナン、スハシリヨリ（須走）
小池、ナカハマ、吉田、谷村邊迄、昼夜ノヘタテモナク、
昼ニテモ子共抔不見時は、タイマツニテタツネケルト
ナン、サテ、スハシリヨリ東相模（ハ伊豆）、武蔵領、石砂フ
ル事、或ハ一丈或ハ五尺、三尺、二尺、一尺、其遠近ニヨリ
砂ノ浅深アリ、去ルホトニ砂深、在處ノ人民ハ捨家ヲ、
捨財宝、命カラ々ノテイニテ莚（むしろ）抔ニテツムリツヽミ
砂無処へ逃ケリ、子共・老人抔は皆ウマリ死スルト
ナリ、砂降ケル所、西東十里・廿里、南北五里・六里ノ
アイタ、砂ノ浅深アリ、ヤウ々其トシ雪月（十二月）廿六、七日
ヨリ霧ナトノハけ候ヤウニ焼煙ハレ、見レハ、冨士半腹
ニワカニ山アラワレ出、人皆キイノ作人」岡、御公方様ヨリ
其山ヲ宝永山ト御付被遊候ナリ、其後、砂深
処ハ砂掃候事モ不叶、御公方様ゟ日本諸大名・
諸籏本ニ被仰付、應知行、百石弐両宛、各砂歩
被召上ケ砂御掃被遊候トカヤ、御年貢外之加役ナレ
ハ、民百姓愁カナシムハカリナリ、其比方々楽（落）書抔
多、其歌に、砂拂冨士乃高根は現金や
私領、御領ヲマケテ弐両に、又、世はからし民は
すりこきスル公儀砂は上から金は下から、
ナト、楽書シケルトナン、終砂掃成就せスト風聞ス、
其トシ伊勢山田不残煙焼、子ノトシ閏月十二日（三月八日）ニ
京都御内裏迄焼失ス、明ル丑正月十日、
公方様御他界被遊候、折（打）續天災有リ、代ナミ
悪敷、是ヨリ西ノ丸様ノ御代ニナリ、代モ薨年ニ
ナリ、民モクワンラクヲウタイ（歓楽）、目出タキ
事アラン珎重、

宝永六丑正月吉日

附表1　史料の記録地，史料名，所蔵，成立のまとめ

☆国立国会図書館デジタルコレクション収録 登録なしで閲覧可
★国立国会図書館デジタルコレクション収録 登録して閲覧可

史料番号	記録地		史料名	引用図書名(原典を参照したものに関しては所蔵を併記)	成立年(旧暦)	西暦	記録者・内容
1	静岡県	裾野市須山（すやま）	須山村土屋伊太夫富士噴火事情書	静岡県裾野市富士山資料館（休館中）保管 裾野市史編さん専門委員会編(1996)裾野市史 第3巻 資料編 近世，p440-442 （史料158）☆. 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p107-108.（タイトル「静岡県収集文書」）★	宝永四年	1707	富士講信仰登山の御師(登山の案内役）である土屋伊太夫による富士山南東～東麓の記録
2		御殿場市	宝永噴火之図(絵図)	静岡県(1996)静岡県史別編2,p357			御殿場市山之尻 旧家滝口家に所蔵される噴火の絵図
3		御殿場市印野（いんの）	富士山之やけた覚	印野村役場 編(1914)印野村誌 〔下〕〔駿東郡町村誌 14〕第四編 古事来歴,第五章，第五節 天災地変 寶永噴火. 静岡県立図書館デジタルライブラリー S213/5/14 web公開 芹沢嘉博(1975)小田原地方誌研究，7，p 40-52.			印野村 勝間田甚助氏の記録
4		御殿場市深沢	此度富士山焼申、石砂降り申候儀書上ゲ申候御事	御殿場市史編さん委員会(1976)御殿場市史 第三巻 近世史料編，p298-299（深沢村史料7）.★	宝永四年	1707	深沢村名主2名・組頭から□□□左衛門宛
5		御殿場市中畑（なかばた）	（宝永五年八月　中畑村砂除見積）	中畑区長保管文書 伴野京治(1962)宝永噴火と北駿の文書.68-70（4 再び北駿の文書⑨）.	宝永五年子八月	1708	宝永五年八月 中畑村の砂除見積書
6		御殿場市大堰（おおせぎ）	駿州駿東郡御厨大堰村田畑砂退川浚井堰積り帳（宝永五年砂退け見積り）	大堰区有文書（御殿場市史資料所在目録 第9集 近世史料編㈥，p322-338，No.11）★ 伴野京治(1962)宝永噴火と北駿の文書.p60-64（4 再び北駿の文書⑦）. 御殿場市史編さん委員会(1976)御殿場市史 第三巻 近世史料編，p149-151（大堰村史料6）.★	宝永五年子八月	1708	大堰村組頭2名から酒匂御会所宛の砂除見積書
7		御殿場市板妻（いたづま）	覚（宝永五年砂除け金見積り覚）	板妻区有文書（御殿場市史資料所在目録 第9集 近世史料編㈥，p242-247，No.8 ★） 御殿場市史編さん委員会(1975)御殿場市史 第二巻 近世史料編,p543-544（板妻村史料3）.★	宝永五年子八月	1708	板妻名主・組頭2名から酒匂御会所宛の砂除見積書
8		御殿場市川柳（川柳新田）	駿州御厨領川柳新田石砂畑砂退積帳	川柳区有文書（御殿場市史資料所在目録 第4集 近世史料編㈣，p81-142，No.19 ★） 御殿場市史編さん委員会(1975)御殿場市史 第二巻 近世史料編,p630-631（川柳新田史料8）.★	宝永五年子八月	1708	川柳新田名主・組頭2名から酒匂御会所宛の砂除見積書
9		御殿場市増田（ましだ）	駿州駿東郡御厨増田村田畑砂退并川浚井堰積帳	御殿場市増田 林秀造家文書 伴野京治(1962)宝永噴火と北駿の文書.p73-76（4 再び北駿の文書⑪）. 御殿場市史編さん委員会(1976)御殿場市史 第三巻 近世史料編，p108-110（増田村史料3）.★	宝永六年丑四月	1709	増田村名主・組頭から酒匂御会所宛の砂除見積書
10		御殿場市古沢	延享二年巡見使に差出たる文書「元禄宝永大変御定免御願差上帳　大地震砂降」	御殿場市古沢 林康平氏蔵 伴野京治(1962)宝永噴火と北駿の文書（謄写印刷）. p40-50. 御殿場市教育委員会.	延享二年	1745	延享二年に幕府巡見使に差出した願書
11			大地震並砂大之覚（写）	小山町湯船 池谷三郎氏蔵（小山町史資料所在目録 第9集，p154-197，No.1） 松尾美恵子(1996)小山町域における「宝永の砂降り」記録. 小山町の歴史,9，p199-214.（史料5).	天明二年書写	1782	延享二年に幕府巡見使に差出した願書を天明二年に書写
12		御殿場市新橋（にいはし）	（高取帳）（御厨村々の砂埋開発地、拝借金、砂置場、砂埋永引地、積砂の深さなど書上）	御殿場市新橋 鈴木茂价家文書（御殿場市史資料所在目録 第3集 近世史料編㈢，p75-98，2.土地・租税 No.9. ★　御殿場市立図書館 解読原稿番号 21-22） 千葉徳爾(1981)宝永噴火による降砂と洪水.駿台史學,54,28-52.表1に層厚引用.［誤植（中日向←中島（村高116石4斗2升1合），阿多野新田←阻多野新田，上野新田←上村新田）］明治大学リポジトリweb公開	正徳三年十二月	1714年1月	代々名主を勤めた鈴木家に伝来した史料　表紙を欠く
13		御殿場市	駿東郡玉穂村史誌	東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p156.★			弘賢筆記 翁草続王代一覧を引用
14		駿東郡小山町用沢	覚（用沢村砂除見積帳控）	小山町用沢 遠藤貴夫氏蔵（小山町史資料所在目録 第16集，p88-126，No.50） 渡邊誠道(1917)伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録.伊奈忠順公贈位記念誌刊行会.p46-60.★（復刻版(1985)） 伴野京治(1962)宝永噴火と北駿の文書.64-68（4 再び北駿の文書⑧ 用沢 勝又惣蔵氏写書史料）. 矢島佳明(1977)宝永噴火と須走(一).地方史研究 あずまえびす 第十一号，179-185. 小山町史編さん専門委員会(1991)小山町史 第二巻 近世資料編Ⅰ，p856-858（史料461）.	宝永五年子八月	1708	用沢村名主・組頭2名から酒匂御会所宛の砂除見積書
15			宝永六年伊奈忠順の御厨巡検記録	小山町用沢 遠藤貴夫氏蔵 永原慶二(2002)富士山宝永大爆発. 集英社新書,p115(画像あり).	宝永六年	1709	宝永六年伊奈忠順の御厨巡検記録

16	静岡県	駿東郡小山町棚頭（たながしら）	棚頭村田畑砂退並に御普請御願帳 （被害地棚頭村ニ於ル古文書）	小山町棚頭 小野氏蔵文書(小山町史資料所在目録 第16集, p88-126, No.57) 渡邊誠道(1917)伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録.伊奈忠順公贈位記念誌刊行会.p31-36.★（復刻版(1985)） 矢島佳明(1977)富士山宝永噴火 各村々と須走. 地方史研究 あずまえびす 第11号,p174-179.	宝永五年子八月	1708	棚頭村名主・組頭2名から酒匂御会所へ（宝永六年六月に提出した文書に添付）
17		駿東郡小山町（用沢・棚頭・阿多野新田・大御神・上野上野新田,中日向村）	砂場駿州駿東郡七ヵ村 （七ヵ村砂退け見積り） （「正徳二年 砂場用澤棚頭阿多野大御神上野上野新田中日向ノ七ヵ村ノ控」）	小山町棚頭 小野正信氏蔵文書（小山町史資料所在目録 第16集, p88-126, No.62） 小山町史編さん専門委員会(1991)小山町史 第二巻 近世資料編Ⅰ, p896-900（史料477）. 大角留吉(1987)自然災害と農山村の再興―宝永4亥年の富士山の大噴火と農山村の再興(1).菊池万雄編日本の風土と災害. p273-288（表4）.古今書院. ★ 渡邊誠道(1917)伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録.伊奈忠順公贈位記念誌刊行会.36-45.（復刻版(1985)）★	正徳二年九月	1712	用沢・棚頭・阿多野・大御神・上野・上野新田・中日向　7ヶ村の名主・組頭が差出した村況報告書
18		駿東郡小山町小山（おやま）	未九月 駿州駿東郡村々開発高亥積砂寸尺覚（駿東郡村々開発高及び砂積り書き上げ）	小山町小山 室伏覚家文書（小山町史資料所在目録 第9集, p1-14, No.123） 御殿場市史編さん委員会(1978)御殿場市史 第四巻 近世史料編, p87-97（史料26）.★	正徳五年九月	1715	駿州駿東郡村数合86ヶ村から伊奈半左衛門内小川平右衛門・井出斉右衛門・忍五郎右衛門宛（砂厚さ, 開発済み・未開発の内訳報告）
19			宝永四年降砂日記	小山町小山 室伏覚氏蔵（小山町史資料所在目録 第9集, p1, No.11）. 松尾美恵子(1996)小山町域における「宝永の砂降り」記録. 小山町の歴史, 9, 199-214（史料4）.			小山町生土『三災記』とほぼ同文
20		駿東郡小山町生土（いきど）	降砂記（漢文　宝永四年地震・噴火の記　軸装）	小山町藤曲（ふじまがり）　杉崎保長氏蔵（小山町史資料所在目録 第10集, p36-43, No.10） 震災予防調査会編(1904)大日本地震史料 甲巻,p339-340.思文閣刊.★ 文部省震災予防評議会編(1941)増訂 大日本地震史料 第二巻,p220-221（三好維堅筆記 大御神村天野氏の家の記）. ★ 新庄道雄著 足立鍬太郎修訂 修訂 駿河国新風土記（文化十三年-天保五年）下巻, 富士山 上.（国書刊行会(1975),p889-890）★ 松尾美恵子(1996)小山町域における「宝永の砂降り」記録. 小山町の歴史, 9, 199-214. 永原慶二(2002)富士山宝永大爆発. 集英社新書,p34-35(読み下し文). 高橋敏編著(2020)地方人夷屋藤吉. p21-23(読み下し文).	正徳六年二月	1716	「富東一禿翁」による宝永地震・宝永噴火の記録　富東一禿翁は生土乗光寺住職 第四世関叟明山か（高橋敏編著, 2020）
21			三災記（漢文）	小山町生土 室伏正克家文書（小山町史資料所在目録 第21集, p7-10, No.6） 御殿場市史編さん委員会(1978)御殿場市史 第四巻 近世史料編, p70-73. ★ 松尾美恵子(1996)小山町域における「宝永の砂降り」記録. 小山町の歴史, 9, 199-214.			義門著 元禄十六年の大地震, 宝永噴火, 享保八年(1722)の水害記事からなる
22		駿東郡小山町大御神（おおみか）	元禄宝永富嶽破裂ノ記	北郷村役場 編(1914)駿東郡北郷村誌.（請求記号)S213/5/17（静岡県立図書館 手記 ページなし デジタルライブラリー インターネット公開）.	正徳六年二月	1716	大御神天野氏の記録 原文漢文を訳したもの
23			北郷村天野氏の記録	静岡県駿東郡 編(1917)北郷村天野氏の記録. 静岡県駿東郡誌.第三編 第三章 口碑傳説及災異 第二節 災異. 富嶽の破裂. 正徳六年 丙申二月記. p1001-1004.請求記号GC128-20.★	正徳六年二月	1716	大御神天野氏の記録 原文漢文を訳したもの
24		駿東郡小山町下古城	駿州駿東郡御厨拾五ヶ村証文（田畑砂除普請扶持米請取りの請書）	下古城 鈴木文吉氏所蔵文書（小山町史資料所在目録 第8集, p168-194, No.19） 小山町史編さん専門委員会編(1991)小山町史第二巻 近世資料編Ⅰ,p903－920(史料481). 同内容 渡邊誠道氏所蔵 渡邊誠道(1917)伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録.伊奈忠順公贈位記念誌刊行会.81-109.（復刻版(1985)）.★ 伴野京治(1962)宝永噴火と北駿の文書.p154-190.（用沢勝又惣蔵氏 写書）. 矢島佳明(1977)富士山宝永噴火 各村々と須走. 地方史研究 あずまえびす 第11号,188-198.	享保元年十二月	1717 1月	中嶋村名主太郎兵衛が認め, 藤曲村など15ヶ村から伊奈半兵衛役人長山平助宛差出した砂除け人足扶持米の受取証文
25		駿東郡小山町須走	口書（富士山鳴動につき須走村届書控）	須走 米山豊彦氏蔵 小山町史編さん専門委員会編(1991)小山町史第二巻 近世資料編Ⅰ,p868(史料464).	宝永五戊子ノ年十月(ママ) 四日	1708	駿州駿東郡富士山東口須走村名主好太夫・甚太夫, 組頭 茂兵衛・助八から 伊藤新六・片岡政右衛門 宛
26		駿東郡	被害地五十八ヶ村名主連署ノ嘆願書写	渡邊誠道氏蔵 渡邊誠道(1917)伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録.伊奈忠順公贈位記念誌刊行会.p25-31.復刻版(1985)★ 矢島佳明(1977)宝永噴火と須走(一).地方史研究 あずまえびす 第十一号,p173-174.	宝永七年	1710	竹之下村など58ヶ村の名主が連署して支援を求めた嘆願書写
27		沼津市	覚書/昼乃景気/夜之景気/焼納り乃景気	静岡県(1996)静岡県史 別編2 自然災害誌, p351-356	宝永四年	1707	東海道宿場町であった原で役場の書役(記録係)を務めた土屋家に伝わる史料
28			大平年代記	沼津市大平地区片岡家 沼津市史編集委員会編(2000)大平村古記録, p49.			元暦元年(1184)～安永八年(1778)の沼津市大平地区を中心にした記録.
29			大平旧事記	沼津市大平地区月ヶ洞家 沼津市史編集委員会編(2000)大平村古記録, p49.			元暦元年(1184)～享保二十一年(1736)の沼津市大平地区を中心にした記録.

30	静岡県	富士宮市宮町	大地震富士山焼出之事（富士山噴火記）	浅間神社社務所編(1931)浅間文書纂，p76-79.浅間神社社務所.★ 文部省震災予防評議会編(1941)増訂 大日本地震史料 第二巻,p201-202（宝永地震記事）,p231-233（噴火記事）★ 服部健太郎・中西一郎(2017)1707 年宝永地震と富士山. 宝永噴火に関する一史料 ―駿河湾北岸域における宝永地震翌朝に感じた大きな余震及び白鳥山の崩壊を記した行方不明史料の発見と既刊史料集に掲載された翻刻文の検討―.地震2,70, p41-55. 服部健太郎・中西一郎(2018a)1707年宝永地震と富士山宝永噴火に関する一史料（2） ―『浅間文書纂』に掲載された「大地震富士山焼出之事」の底本―.地震2,70,p215-220. 服部健太郎・中西一郎（2018b）1707年宝永地震と富士山宝永噴火に関する一史料（3）―元禄地震・宝永地震・宝永富士山噴火を記した「当山本宮記」―, 地震2, 71, 131-137. 服部健太郎・中西一郎（2018c)1707年宝永地震と富士山宝永噴火に関する一史料（3）一元禄地震・宝永地震・宝永富士山噴火を記した「当山本宮記」―（訂正ERRATA),地震2, 71, 151-152. 服部健太郎・中西一郎（2019）1707年宝永地震と富士山宝永噴火に関する史料 ： 富士山宝永噴火に先行した地震活動に関する記述の検証.地震2,71, 219-229.	写(安政二年)	1855	富士本宮浅間神社社僧乗漣院隠居飽休庵による覚書
31			大地震富士山焼之事覚書 静岡 飯作家文書	小林 昭夫, 弘瀬 冬樹, 堀川 晴央, 平田 賢治, 中西 一郎(2017) 1707年宝永地震と富士山宝永噴火に関する一史料. ― 飯作家「大地震富士山焼之事覚書」の調査と翻刻 ―. 地震2,70, p221-231.			
32		富士市（富士郡下方庄小木里）	覚書（前文略）	富士市史編纂委員会(1982)富士市史 上巻（第3版）, 785-788. ★ 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p115-116.★	宝永六年	1709	横割村住人伊藤十郎兵衛尉正勝著といわれる 「石砂降り申さず」の記録あり
33		静岡市清水区袖師町（庵原郡袖師村）	富士山炎上	阿部正信編(1842:天保壬寅年（十三:)年)『駿国雑志』巻之八 火災 富士山炎上.（吉見書店 明治四十二年(1909), p307-308. ★） 袖師尋常小学校 編(1913) 誌 第2編.〔庵原郡町村誌〕 (S221/6/36) （静岡県立中央図書館デジタルライブラリーで公開）(『駿国雑誌』を引用) 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p169.★	天保壬寅年（十三年）編	1842	富士山宝亀十一年(780), 延暦十九年(800), 宝永四年(1707)噴火の概略についての記述がある.
34		吉原宿からの注進状		楽只堂年録 第二百十一巻（十一月二十三日条）・文露叢（大日本地震史料 甲巻, p339★, 増訂 大日本地震史料 第二巻,p220★.）・（島原松平藩）江戸幕府日記（十一月二十五日条）・護国寺日記（十一月二十六日条）・基熙公記・伊東志摩守日記（十一月二十九日条）・宝永四丁亥年 日帳（『伊能勘解由日記』または『景利日記』）・入目録（伊能景利）・富士山自焼記・富士山變記 など多数に収録			吉原宿 問屋・年寄からの十一月二十三日付注進状
35		1.御徒目付衆見分書付写 2.覚 3.口上之覚 4.覚	1.樂只堂（らくしどう）年録(巻二百十一 宝永四年十一月晦日条) 2.宝永四年亥十一月廿八日駿河国富士山焼出し候ニ付御徒目付衆見分書付写 覚 3.入目録 4.富士山自焼記	1.大和郡山市柳沢文庫 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p2-31.★ 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川. p106, 出品リスト21-2. 2.滋賀県愛知郡愛荘町 山崎途男氏蔵 裾野市富士山資料館(2005)冨士火山帯ー活断層を見るー.特別展史料集, p32-36に翻刻文と画像あり.（web公開） 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川.出品リスト27, p26-27に画像, p110に翻刻あり. 3.伊能淳氏蔵 香取市伊能忠敬記念館管理 小山真人・西山昭仁・井上公夫・角谷ひとみ・冨田陽子(2003)富士山宝永噴火の降灰域縁辺における状況推移を記録する良質史料『伊能景利日記』と伊能景利採取標本.歴史地震,19,38-46.（史料2 『勘解由日記抄』）（原史料表題は『入目録』） 4.東京大学史料編纂所蔵 請求記号2062-1 web公開 文部省震災予防評議会編(1941)増訂 大日本地震史料 第二巻,p234-235. ★ 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川.出品リスト26, p120-122.			幕府徒目付らによる宝永四年十一月の見分報告
36	申渡書	駿東郡小山町大胡田（おおごだ）	砂取除けにつき伊奈半左衛門申渡し請書	小山町大胡田 田代敦氏蔵（小山町史資料所在目録 第18集, p23-24, No.15） 小山町史 第二巻 近世資料編Ⅰ,p836-837（史料453）. 同文 武尾家文書神奈川県立公文書館寄託（資料ID 2200202385）発出日付違い	宝永五年二月二十九日	1708年4月19日	荻原重秀から伊奈半左衛門を経て申渡し（同文多数あり 他文書は正月付）
37		足柄上郡山北町谷ヶ（やが）		山北町谷餓 武尾家文書神奈川県立公文書館寄託（資料ID 2200202385） 高柳眞三, 石井良助編(1958)御觸書寛保集成, 1397(p745-746), 1398・1399・1400.（p746),岩波書店. 神奈川県企画調査部史編集室編(1973)神奈川県史 資料編6 近世3, p208・209-210（史料91,92,94,95）.神奈川県. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川, 出品リスト55, p48-49に画像, p118に翻刻文あり	宝永五年閏正月十八日	1708年3月10日	荻原近江守, 伊奈半左衛門からの申渡し（宝永五年正月・閏正月 荻原近江守重秀からの申渡しを含む）

38	申渡書	足柄上郡山北町都夫良野（つぶらの）	富士山噴火の砂とりのけを申渡す	山北町都夫良野 岩本正夫氏蔵(岩本宣夫家文書) （山北町所在史料目録 第三集, p20, No13 ★） 小田原市(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1, p434-435（史料279）. 山北町編(2003)山北町史 史料編 近世, p606-607（史料205）. 神奈川県企画調査部史編集室編(1973)神奈川県史 資料編6 近世3, p208（史料91）.神奈川県.(御触書寛保集成1397)	宝永五年正月	1708	宝永五年一月十六日付荻原近江守重秀からの申渡しを含む
39		小田原市鴨宮	（富士山噴火のため代官所への支配替え申渡覚）	小田原市鴨宮 酒井宏三氏蔵 大井町(1995)大井町史 資料編 近世2,p341-342（史料128）.	宝永五年閏正月十八日	1708年3月10日	伊奈半左衛門からの申渡し
40		神奈川県中郡二宮町	申渡ス之覚（積砂につき取除け方等申渡す）	二宮町中里 高橋実氏蔵（二宮町史資料所在目録 一色・中里地区, p126, 近世 0 特殊文書（富士噴火）607 010 二宮町編(1990)二宮町史 資料編 1 原始 古代 中世 近世, p364-365（史料36）.	宝永五年正月	1708	砂取除きにつき，伊奈半左衛門からの申渡し
41	山梨県	南都留（みなみつる）郡忍野（おしの）村内野	富士山焼砂吹出乱剰	忍野村内野 渡辺勝男家文書 忍野村(1989)忍野村誌 第一巻,p226-231, 旭日丘区史編纂委員会偏(2001)旭日丘のあゆみ(山中湖村旭日丘区政施行五十年史), p481-493. すその路郷土研究会(2009)富士山周辺の災害と対応, p40-53.	写(天明二年)	1782	山梨県忍野村渡辺家に伝わる,噴火を北東麓で記録した史料
42		南都留郡山中湖村平野	乍恐口上書を以奉願候御事	山中湖村天野勝巳家文書 名主 六左衛門 山梨県(2001)山梨県史, 資料編12, 近世5, p511-512. 資料268. 西川広平(2016)富士山宝永噴火に関する資料の記録化について－山梨側の地域資料を対象に－.山梨県立博物館紀要 第10集,48-58（資料2）.web公開	宝永四年十二月十二日	1708年1月4日	平野村名主2名・組頭から役所に宛てて救済を嘆願した文書
43			一札之事	山中湖村天野勝巳家文書 孫右衛門,理右衛門,七左衛門 山梨県(2001)山梨県史, 資料編12, 近世5, p512-513. 資料269. 西川広平(2016)富士山宝永噴火に関する資料の記録化について－山梨側の地域資料を対象に－.山梨県立博物館紀要 第10集,48-58（資料3）.web公開	宝永六丑年五月	1709	惣百姓42名から平野村役人宛文書 砂除け作業に請け負う旨記されている
44			覚（富士山噴火覚）	渡辺孝男家文書 富士吉田市史編さん委員会編(1994)富士吉田市史 史料編 第三巻 近世1, p408-409, 史料193. 富士吉田市. 西川広平(2016)富士山宝永噴火に関する資料の記録化について－山梨側の地域資料を対象に－. 山梨県立博物館紀要 第10集,48-58（資料4）.web公開	宝永六丑年八月八日（筆写）	1709	富士吉田市渡辺孝男家に所蔵されている記録 甲斐・相模・武蔵・常陸・下総で一時暗くなったことが略記されている
45		富士吉田市	富士山焼出之節之事	富士吉田市 山口由富家文書 富士吉田市史編さん委員会編(1994)富士吉田市史 史料編 第三巻 近世1, p407-408, 史料192. 西川広平(2016)富士山宝永噴火に関する資料の記録化について－山梨側の地域資料を対象に－.山梨県立博物館紀要 第10集,48-58（資料1）.web公開	宝永四年十二月	1707	伏見忠兵衛著 山口由富家に伝わる史料,富士鎗の関係者と考えられる人物の記録
46		富士吉田市上吉田	宝永四年山焼之事	江湖老人月所 隔掻録(文鳳堂雑纂十九 写本) 国立公文書館蔵 web公開 岩佐忠嬢(1967)北富士すそのものがたり,p28-30.	宝永四年	1707	田辺安豊（北口本宮冨士浅間神社の師職をつとめた）著
47		西八代郡市川三郷町（いちかわみさとちょう）	一宮浅間宮帳	市川大門町教育委員会(2000)市川大門町郷土資料集No.6, p123, 128.	宝永四年	1707	市川大門の一宮浅間神社に伝わる記録
48		山梨市下井尻	(宝永山噴火記)	国文学研究資料館蔵 甲斐国下井尻村 依田家文書 追補/18.雑 (27D4697)	宝永六年正月	1709	下井尻村 名主・長百姓を勤めた依田家の宝永噴火記録
49			『甲斐国志』（文化十一年）	『甲斐国志』（文化十一年）第2巻,107-125.巻之三十五 山川之部第十六ノ上, 雄山閣. 西川広平(2016)山梨県立博物館紀要 第10集,48-58（資料5）.web公開	文化十一年	1814	近世甲斐国の地誌『甲斐国志』に収録された宝永噴火の記事
50	東海道沿	藤沢・小田原・箱根・静岡	外宮子良館日記	神宮文庫 一門 4036 229 外宮子良館日記 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p281-283.★ 小山真人・小川聡美・西山昭仁(2007)西方遠隔地（三重県伊勢, 長野県下伊那）で書かれた1707年富士山宝永噴火の目撃記録.歴史地震22,61-83.	宝永四年	1707	三重県伊勢市の外宮の境内にあった「子良館」で書き継がれた日記 宝永四年十二月二日条に神宮使の東海道通行記録を収録
51		藤沢・小田原・箱根・静岡	蔵人日記	神宮文庫 浦田家旧蔵史料 一門 17310 347 日記 宝永四年七月 浦田蔵人著 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p303-306. 小山真人・小川聡美・西山昭仁(2007)西方遠隔地（三重県伊勢, 長野県下伊那）で書かれた1707年富士山宝永噴火の目撃記録.歴史地震22,61-83.	宝永四年	1707	伊勢神宮関係者による噴火時の東海道通行日録
52	神奈川県	足柄下郡箱根町	箱根御関所日記 地震之事	箱根町立郷土資料館所蔵. 箱根古文書を学ぶ会編,箱根町教育委員会(1976)箱根関所日記書抜上,p19.★ 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川. 出品リスト42, p114に一部画像, p113に一部翻刻（末尾省略）あり.	宝永四年	1707	小田原藩士角田惣右衛門久孝が箱根関所（芦ノ湖南縁）の貞享三年(1685)―天保十二年(1841)の記録から（業務関係部分を）書抜いたもの. 弘化二年（1846）秋に完成.

53	神奈川県	足柄下郡箱根町	箱根御関所日記呼出 上（二七）夕、為御用御通行被成候御方様之部	箱根町立郷土資料館所蔵. 箱根古文書を学ぶ会編,箱根町教育委員会(1978)箱根関所日記書抜下,p198.★	宝永四年一一月二十八日	1707年12月21日	幕府徒目付ら見分帰途到着，夜間のため通関できず
54		南足柄市矢倉沢	覚（谷津村等22村へ殿様御意申渡に付出頭のこと）	矢倉沢 田代克巳氏（現 田代均氏）蔵（南足柄市史資料所在目録 第1集，p328，［状］No.120） 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1,p410-411（史料272）.	宝永四年十二月十日	1708年１月2日	柳田九左衛門から右村々名主宛廻村の通知
55			宝永四年十二月 矢倉沢村砂御見分帳	矢倉沢 田代克巳氏（現 田代均氏）蔵（南足柄市史資料所在目録 第1集，p312，［冊］No.4） 関口康弘(1993)市史研究あしがら，5，p37，38，47.に引用 南足柄市(2009)南足柄市史6 通史編，p433（市史研究あしがら5号　表を引用）.	宝永四年十二月十九日	1708年１月11日	矢倉沢村名主・組頭から柳田九左衛門宛　降砂の書上
56		足柄上郡山北町谷ケ	此度富士山焼候ニ付石砂降見分帳	相模国足柄上郡谷ケ村 武尾家文書 神奈川県立公文書館寄託（資料ID 2199950974）神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川，出品リスト49，p45に一部画像，p116-117に翻刻文あり.	宝永四年十二月	1707	谷ケ村名主弥十郎・組頭3名・惣百姓代 外 から 柳田九左衛門・大津善右衛門 宛　降砂・人足見積り書上
57		足柄上郡山北町	相模国西郡中山家六ヶ村願帳（旧 川西村，山市場村，神縄村，都夫良野村，湯触村，皆瀬川村）	山北町谷峨 水野勝弘氏蔵（山北町所在史料目録 第四集，p70，No4） 小田原市史 史料編近世Ⅱ幕領1，p501－503（史料307）.	宝永六年	1709	砂除け（開発）実績・未開発地の書上と開発資金支援の願書
58		足柄上郡山北町山北	宝永四丁亥降砂ニ付小田原江（以下破れ）［（新表紙）差上ヶ申候文言］	山北町山北 鈴木隆造氏蔵（←鈴木友徳氏蔵）（山北町所在史料目録 第二集，p10，No26，神奈川県古文書資料所在目録 13集，p81 冊の部 正帳 No 27） 鈴木隆造(1960)富士宝永噴火の記録について．足柄乃文化（奥付『足柄の文化』）4,p4-12，山北町地方史研究会. （一部収録　瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p72(史料10).） 佐藤・徳永・江藤編(1994)日本農書全集66，災害と復興1.p31-82. 神奈川県企画調査部史編集室編(1972)神奈川県史資料編5,近世2,p608-621（史料180）．★ 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1,p418-433（史料277）. 山北町編(2003)山北町史 史料編 近世,p586-601（史料200）.	宝永五年正月十八日	1708年2月9日	山北村名主 鈴木理左衛門舎盈（イニミツ：後に五郎兵衛）著　小田原藩内山北の富士山噴火の経過，藩役人への提出書類，救済運動の詳細な記録.
59		足柄上郡山北町（川村山北・中山家）	二階堂家伝来旧記書	般若院蔵（山北町所在史料目録 第四集，p66，湯山家文書 No.1） 足柄乃文化13号（奥付『足柄之文化』）(1981),p1-56（影印全画像） 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p69-70(史料2).（抜粋翻刻）			「神奈川県地誌」調査に際して明治十七年六月「伝来之旧記」を筆写して「地誌御用掛」へ差出した文書の控.
60			乍恐以書付を御注進申上候御事（皆瀬川村が砂降りの被害を書上げる）	山北町皆瀬川 井上家文書 井上安司氏蔵 神奈川県立公文書館寄託（資料ID 2199402859） 山北町編(2003)山北町史 史料編 近世,p582-583（史料194）. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川，出品リスト46，p43に画像あり.	宝永四年十二月六日	1707年12月29日	十一月二十三日以降の降砂による皆瀬川村潰れ家12軒の報告
61			亥年御用村次上下書留覚(藩が柳田九左衛門の十二月十二日廻村について触れる)	山北町皆瀬川 井上家文書 井上安司氏蔵 神奈川県立公文書館寄託（資料ID 2199401991） 山北町編(2003)山北町史 史料編 近世,p584（史料196）.	宝永四年十二月十日	1708年1月2日	小田原藩地元役人大津善右衛門から名主宛 柳田九左衛門廻村の通知
62			亥年御用村次上下書留覚（の帳外れ文書）（藩が砂降り被害見分のための山家筋廻村と被害状況書付提出を触れる）	山北町皆瀬川 井上家文書 井上安司氏蔵 神奈川県立公文書館寄託（資料ID 2199401992） 井上良夫氏蔵 神奈川県立公文書館寄託 神奈川県企画調査部史編集室編(1972)神奈川県史 資料編5 近世2，p281-282（史料五一），神奈川県. ★ 山北町編(2003)山北町史 史料編 近世,p585（史料198） 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川，出品リスト52，p47に画像，p117-118に翻刻文あり.	宝永四年十二月十四日	1708年1月6日	大西角之右衛門から名主宛 被害見分のための山家筋廻村と被害状況報告の指示
63		足柄上郡松田町寄（やどりぎ）	此度富士山焼申候ニ付石砂降見分帳	足柄上郡松田町 安藤家文書 神奈川県立公文書館寄託（資料ID 2199525673）	宝永四年十二月	1707	名主角左衛門 他４名から柳田九左衛門他１名宛　降砂・砂除け人足見積り書上
64		足柄上郡大井町篠窪	（大地震噴火の一件 足柄上郡篠窪村名主の富士山噴火の記録）	大井町篠窪 小島睦男氏蔵 小島家文書 神奈川県立公文書館寄託（資料ID 2200446567） 一部省略 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p70(史料4). 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1,p409-410（史料271）. 大井町(1995)大井町史 資料編 近世2,p339（史料126）. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川，出品リスト43，p42に画像，p114に翻刻文あり.	年不祥（宝永四年）	(1707)	篠窪村名主の宝永噴火の記録
65			篠久保村砂降りにつき救済の願	大井町篠窪 小島睦男氏蔵 神奈川県立公文書館寄託（資料ID 2200446570） 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川，出品リスト85，p68に画像，p119-120に翻刻文あり.	宝永六年五月二十九日	1709年7月6日	篠久保村への支援の願書

66	神奈川県	南足柄市広町（旧猿山村 ）	大地震以来砂降大変覚書（元禄一六年より享保二年までの災害記録）	南足柄市広町 湯山厚氏蔵（南足柄市史資料所在目録 第2集, p206, No.1） 南足柄市(1988)南足柄市史2 資料編近世(1),p484-490（史料195）.	嘉永七年（写）	1854	元禄十六年（1703）の大地震から享保二年（1717）までの災害を中心とした記録を後年書写したもの
67		南足柄市関本村	今度冨士山焼申候石砂見分帳 （関本村の富士山噴火降砂片付人足見積控帳）	神奈川南足柄市関本自治会 蔵（南足柄市史資料所在目録 第2集, p207, No.8） 南足柄市(1993)南足柄市史3 資料編近世(2),p184-185（史料69）. 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1, p414-417（史料275）. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川, 出品リスト48, p45に画像, p116に翻刻文あり.	宝永四年十二月十九日	1708年1月11日	関本村名主2名・組頭6名・惣百姓代から柳田九左衛門・大津善左衛門宛降砂・砂除け人足見積り書上
68		南足柄市千津島（せんづしま）	千津嶋村富士山焼申候石砂見分帳 宝永四年十二月 今度富士山焼申候ニ付石砂降御見分帳　亥十二月十九日	千津島村 瀬戸家文書 明治大学刑事博物館蔵 （明治大学刑事博物館目録12, p53, D.村, No1）. 青木美智男(1968)宝永四年富士山噴火・翌五年酒匂川大口堤決壊とその修復をめぐる資料について―旧千津嶋村の場合を中心に―. 史談足柄, 6, 9-53（史料一）. 関口康弘(1993)宝永の砂降以後の酒匂川氾濫について－大口水下六か村農民たちの動向を中心に―. 市史研究あしがら, 5, p46, 47に引用. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川,出品リスト50, p46に一部画像, p117に翻刻文あり.	宝永四年十二月十九日	1708年1月11日	千津島村名主・組頭6名・惣百姓代から柳田九左衛門・大津善左衛門宛降砂・砂除け人足見積り書上
69		南足柄市壷下（まました）	先年大口大破旧記之写（大口文命堤付近の水害・地震等古記録写）	壷下 加藤英雄氏蔵（南足柄市史資料所在目録 第1集, p127-175,［支配・村政］ No.47）. 南足柄市(1993)南足柄市史3 資料編 近世(2), p267-282（史料93）. （『富士山焼出し砂石降り之事』とほぼ同内容）	延享三年二月四日 嘉永二年六月（写）	1849	旧壷下村名主 加藤与惣右衛門が近隣の領主の変遷や災害などの古記録をまとめたもの（表題に嘉永二年写とある）
70			小田原御代替り之事、洪水并地震之事、富士山焼出し砂石降り之事、郷中村々田畑開発歎願之事	壷下 加藤英雄氏蔵（南足柄市史資料所在目録 第1集, p127-175,［村況・戸口］ No.9） 佐藤・徳永・江藤編(1994)日本農書全集66,災害と復興1.p83-133.（加藤英雄氏蔵『先年大口大破旧記之写』とほぼ同内容）	延享三年二月四日	1849	旧壷下村名主 加藤与惣右衛門の降砂片付人足見積り書上
71		南足柄市壷下	富士山砂降田畑荒地ニ相成、開発ニ付高反別并人足書上写（後欠）（富士山噴火による降砂片付人足見積書）	壷下 加藤英雄氏蔵（南足柄市史資料所在目録 第1集, p127-175,［村況・戸口］ No.3）. 南足柄市(1988)南足柄市史2 資料編 近世(1), p243-244（史料89）. 生沼清治(1990)富士山の噴火と酒匂川,開成町史研究,44-58.	宝永四年	1707	旧壷下村名主 加藤与惣右衛門の降砂片付人足見積り書上
72		南足柄市中沼	南足柄中沼名主杉本田造日記（宝永年中のみ）	本多秀雄(1960)南足柄中沼名主杉本田造日記.足柄乃文化（奥付『足柄の文化』）4号,p39-40,山北町地方史研究会. 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p70(史料3).			旧中沼村名主 杉本田造の記録
73		小田原市成田（なるだ）	御用留（宝永二年～五年）	成田 村山公一氏蔵 小田原市立図書館寄託（小田原の近世文書目録2, p119, No10） 一部翻刻 神奈川県史 通史編3 近世2, p87.「御用留」★	宝永四年	1707	旧成田村名主 村山家の御用留文書
74		小田原市城山	元禄十六年十一月 大地震による領内被害状況書留	大久寺蔵 神奈川県企画調査部史編集室編(1972)神奈川県史資料編5 近世2,p602-607(史料178).神奈川県.★ 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p74.★			宝永噴火に関する部分は『配島伊信・伊盛覚書』（おそらく江戸の目撃記録）と同じ
75		小田原市曽比（そび）	宝永四年富士山噴火砂石降リタル舊記録 相州曾比村劔持定吉氏方蔵之寫	相州足柄上郡曾比村 劔持定吉氏蔵 渡邊誠道(1917)伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録.伊奈忠順公贈位記念誌刊行会.p149-150.復刻版(1985).★ 矢島佳明(1977)宝永噴火と須走(一).地方史研究 あずまえびす 第十一号, p202. 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p71(史料8).	延享五年三月 写	1748	延享五年三月曾比村劔持氏筆記控
76		小田原市曽我谷津（そがやつ）	此度富士山焼岩砂降田畑目録(曽我谷津村が富士山噴火について被害を書上げる)	曽我谷津 長谷川範氏蔵 （小田原の近世文書目録4, p37-40, No.9）. 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1,p413-414（史料274）.	宝永四年十二月	1708年1月	曽我谷津村名主・組頭4名から柳田九左衛門・大津善左衛門宛
77		小田原市永塚	今度富士山焼申候ニ付石砂降見分帳	永塚 宇佐美勝朗氏蔵 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1,p411-413（史料273）.	宝永四年十二月二十日	1708年1月12日	名主2名・組頭2名・百姓代から柳田九左衛門・大津善左衛門宛 控　降砂片付人足見積り書上
78		小田原市小船（おぶね）	開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳（宝永四年十一月 小船村名主が富士山噴火を記録する）	小船 船津常治氏蔵 船津家文書 小田原市立図書館寄託（小田原の近世文書目録3, p89, No115） 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1,p408-409（史料270）. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川, 出品リスト45, p46に画像, p114－115に翻刻文あり.	宝永五年三月	1708	名主 孫左衛門・組頭2名・百姓代が富士山噴火を記録
79			（宝永五年 富士山噴火による河川復旧工事の御手伝い役大名を書上げる）	小船 船津常治氏蔵 船津家文書 小田原市立図書館寄託（小田原の近世文書目録3, p89, №116）. 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1,p479（史料297）.	宝永五年	1708	宝永五年閏正月九日付で相州筋川浚御手伝を5大名に申渡した文書

80			相州川浚御普請記録 全（宝永五年閏一月～六月 岡山藩が酒匂川などの川浚を命ぜられて実施する）	岡山大学附属図書館蔵 小田原市(1988)小田原市史史料編 近世Ⅱ 藩領1, p446-460（史料287）. 山北町編(2003)山北町史 史料編 近世,p615-627（史料216）. 大井町(1995)大井町史 資料編 近世2,p342-347（史料129に一部収録）.	宝永五年	1708	川浚を行った岡山藩の施工の記録
81		小田原藩	大久保忠増記 忠増御筆拝領并献上物并小田原領砂降シ事 小田原領砂降積シ見分ノ次第（坤巻）	東京大学史料編纂所蔵（写本）（請求記号 2044-194） 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川, 出品リスト47,p44に一部画像, p115-116に翻刻文あり.	宝永四年十二月 - 宝永五年閏正月	1708年1月 - 2月	宝永噴火当時小田原藩主・老中であった大久保加賀守忠増の記録
82		小田原藩	富士山噴火し小田原領内砂降る被害見分の次第	小田原有信会編(1931)近世小田原史稿本 下巻2 小田原市立中央図書館蔵.(請求記号E-01-02) 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p72-73(史料11). 芹沢嘉博(1975)富士山噴火の被害とその再開発―小田原藩御厨領を中心に―, 小田原地方史研究 7, p40-52. 中野敬治郎(1978)近世小田原ものがたり,40-41.小田原文庫 7.名著出版（一部翻刻）.	宝永四年十二月 - 宝永五年閏正月	1708年1月 - 2月	小田原の代々の領主の事跡, 藩の重要事項を記したもの. 大久保家記からも引用
83		秦野市 菖蒲・八沢・三廻部（みくるべ）・柳川	四ヶ村乍恐書付を以御慈悲奉願上候御事（宝永七年四月 菖蒲・八沢・三廻部村・四か村田畑開発願い）	秦野市菖蒲 須藤米蔵氏蔵（秦野市史資料所在目録（第4集 個人・自治会等所蔵Ⅲ）, p144, ［村況］ No.5） 秦野市(1982)秦野市史 第二巻 近世史料(1), p438-442（史料144）.	宝永七年四月	1710	菖蒲村名主2名・組頭2名・八沢村名主2名・柳川村名主・組頭, 三廻部村組頭3名からの願書
84		秦野市曽屋	乍恐以書付奉願候	中村家文書（横野区有文書）（秦野市史資料所在目録（第2集 個人・自治会等所蔵Ⅰ）, p237, ［近世］［一般］ No.7） 秦野市(1988)秦野市史 通史 2 近世, p207.	宝永四年十二月	1707-1708	秦野市曽屋中村家の文書
85		中郡二宮町中里	乍恐以書付奉願上候御事（富士山噴火につき中里村窮状報告等願書）	二宮町中里 高橋実氏蔵（二宮町史資料所在目録 一色・中里地区, p126, 近世 0 特殊文書（富士噴火）59902 二宮町編(1990)二宮町史 資料編 1 原始 古代 中世 近世,p364（史料35）.	宝永四年十二月	1707-1708	降灰被害につき嘆願書
86	神奈川県	厚木市戸田（相模国大住郡戸田村）	覚	小塩家文書 神奈川県立公文書館所蔵（資料ID 2199441217） 海老名市(2006)海老名市史3 資料編Ⅲ, p244-246. 史料412.	宝永五年正月九日	1708年1月31日	中野村名主九郎右衛門から見分御役人衆中宛村の概況書上
87		厚木市上落合	相州大住郡上落合村砂御見分御案内帳（富士山噴火砂降り見分につき村方書上帳）	厚木市落合 萩原宏氏蔵（厚木市史資料所在目録（その1）, p391, ［土地］ No.16） 厚木市秘書部市史編さん室(1993)厚木市市史 近世資料編(2) 村落1, 27-30（史料7）.	宝永五年閏正月	1708	砂降り被害見分役人にあてた被害状況報告書 表紙に「名主郷左衛門下書」とある
88		厚木市	覚	厚木市下萩野 難波武治氏蔵（厚木市史資料所在目録（その2）, p406, ［村況］ No.137の2） 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p75.★	不詳		元禄十六年（1703）の大地震, 宝永四年(1707)の砂降りの件
89		伊勢原市西富岡	村砂検分書上ケ帳	伊勢原市板戸 堀江政邦氏蔵 堀江家文書 神奈川県企画調査部史編集室編(1976)神奈川県史資料編8 近世5上,p101-106(史料173).神奈川県. 神崎彰利編(1995)堀江文書 第2巻 中・近世(1),104-112（史料116）.小森書房. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川, （末尾部分）出品リスト44, p42に画像, p114に翻刻文あり. 伊勢原市史編集委員会(2010)伊勢原市史 通史編 近世,（末尾部分） p113-114.	宝永五年閏正月	1708	相模国大住郡西富岡戸田四郎右衛門領・水野清重郎領の名主・組頭から伊奈半左衛門, 古郡文右衛門の役人に宛てた書上帳,
90		平塚市北金目（きたかなめ）（相州大住郡北金目村）	宝永五年閏正月 富士山噴火砂降り後村柄書上	北金目 柳川力氏蔵（現 柳川正邦氏蔵 平塚市博物館寄託 平塚市博物館所蔵資料目録Ⅳ, p60. 21番） 平塚市編(1983)平塚市史3 資料編 近世(2), p197-198（史料63 画像掲載）. 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p84.★ 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川.p119, 出品リスト67.	宝永五年閏正月十五日	1708年3月7日	名主久右衛門 外4名が差出した村況書上
91		藤沢市羽鳥村	羽鳥村岩砂埋書上覚（下書）	三觜博氏蔵 藤沢市史編さん委員会編(1973)藤沢市史第二巻（資料編）, p286-287（史料五 画像・翻刻あり）. 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p75-76.★	宝永四年十二月	1707-1708	羽鳥村 名主・年寄から藤沢役所宛の降礫・降砂により埋まった田畑の書上
92		藤沢市江の島	乍恐以書付御訴訟申上候	岩本亮一郎氏(岩本泰明氏)蔵 藤沢市文書館寄託 藤沢市史編さん委員会編(1973)藤沢市史第二巻（資料編）, p287-288（史料六）. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川.出品リスト64,p52に画像,p118に翻刻文あり.	宝永五年閏正月	1708	田畑がない江の島で降礫・降砂で魚猟ができないため, 支援依頼
93		鎌倉市腰越（こしごえ）	津村腰越旧志	鎌倉市腰越中村善雄氏 旧蔵 昭和丁未(1967) 補修 金子八右衛門編(1997)津村腰越旧志・中,p21-23に翻刻文,p83-84に画像,考える市民の会.	補修(昭和四二年)	1967	腰越村名主による宝永四年時の噴火被害の記録・願書の写

94	神奈川県	逗子市桜山	富士山噴火救助金桜山村割合帳	逗子市桜山 石渡篤子氏蔵 6一－36 逗子市(1985)逗子市史 資料編 1 古代・中世・近世 1, p502-505（史料九四）.★	宝永五年三月四日	1708	名主3名・組頭2名による噴火被害と御救金配分の覚書
95		三浦郡葉山町木古庭（きこば）	差上申口上書之事	三浦郡葉山町木古庭 伊東家文書 神奈川県立公文書館寄託（資料ID2201041287）.	宝永五年	1708	木木庭村名主喜左衛門他2名から柳田伝右衛門他１名宛　田畑に積もった砂の状況を報告したもの
96		横浜市泉区	乍恐以書付奉願候御事	鎌倉郡中和田村和泉 清水七之丞氏蔵.（東海道御傳馬宿藤澤） 渡邊誠道(1917)伊奈半左衛門忠順公贈位欽仰録.伊奈忠順公贈位記念誌刊行会.140-143.復刻版(1985）.★ 矢島佳明(1977)宝永噴火と須走(一).地方史研究 あずまえびす 第十一号, 188-198. 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p71-72(史料9).	宝永四年十二月	1707-1708	伝馬宿藤沢町の問屋, 年寄, 定助, 大助, 村々名主から道中奉行, 地方奉行, 代官に宛てた願書
97		横浜市泉区新橋町（しんばしちょう）	正徳四年六月観音寺当寺記	新橋町観音寺文書 戸塚区史刊行委員会編(1991)戸塚区史, p78-80.	正徳四年六月	1714	新橋町観音寺における観察が正徳四年六月の記録に収録されている
98		横浜市戸塚区		中嶋富之助(1934)戸塚郷土誌, p253-260.☆			砂取除けの申渡の覚が収録されている
99		横浜市中区根岸町	覚書	久良岐郡根岸村 高橋家文書 横浜市(1958)横浜市史 第1巻, p685-686.★	正徳五年	1715	宝永四年十月～正徳五年の高橋家の覚書
100	東京都	青梅市二俣尾（ふたまたお）	谷合氏見聞録	多摩郷土研究の会(1974)多摩郷土研究11・12号, p9-10. 青梅市教育委員会(1974)青梅市史史料集19号, p9-10.	宝永四年	1707	二俣尾村の名主谷合七兵衛吉治による諸記録
101		清瀬市上清戸（かみきよと）	年代記并過去帳	清瀬市史編纂委員会(1973)清瀬市史, p259-266.	宝永四年	1707	上清戸村,村野善兵衛（1701年死去）,定右衛門が書き継いだ記録
102		多摩市連光寺	砂積候ニ付御見分并救金一条	武蔵国多摩郡連光寺村富沢家文書 国文学研究資料館所蔵 請求番号 30J/01235.	宝永五年子ノ閏正月十二日	1708年3月4日	代々連光寺村名主を勤めた富沢家に伝来した史料
103		町田市野津田（のづた）町	野津田村年代記	野津田 河井醇造家文書 町田市史編纂委員会(1972)町田市史史料集 第五巻 近世庶民史料編 II, p39（宝永四年）. 町田市史編纂委員会(1974)町田市史 上巻, p1135-1137.★			後年編纂の『野津田村年代記』に宝永噴火の記事が短くある（原文は(宝永)三丁亥）となっている
104		港区芝公園4丁目	増上寺月番日鑑	宇高良哲編(2002)増上寺日鑑第二巻,p42.	宝永四年	1707	現在の港区増上寺にて書き継がれてきた日誌
105		千代田区千代田（江戸城）	柳営日次記	国立公文書館内閣文庫所蔵　柳営日次記 年録　寶永四年十月十一月十二月　請求番号 164-0017 冊次 0016 国立公文書館デジタルアーカイブで公開 国立国会図書館デジタルコレクション『年録』(147, 148)★	宝永四年	1707	江戸幕府の各役所が日々の業務を記した公日記
106		港区東新橋（芝口海手）	伊達氏治家記録 肯山公（こうざんこう） 續編一	伊達宗基(東京府荏原郡大井村)原蔵　写本 東京大学史料編纂所蔵 請求記号 2075-800（135/137冊）續編 巻之一（元禄十六年八月～宝永四年十二月）web公開 217-219/222コマ.	享保八年八月序	1723	伊達家で編纂された仙台藩の正史肯山公は仙台藩四代藩主伊達綱村(1659～1719)
107		新宿区市谷本村町（ほんむらちょう） 名古屋市中区　名古屋城二之丸	鸚鵡籠中記(巻十七)	徳川林政史研究所蔵 史料番号 旧 蓬左 142-3(19) 名古屋市教育委員会(1968)名古屋叢書続編 第十一巻, 鸚鵡籠中記(三), p262-275.★ 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川.出品リスト23, p107-108.	宝永四年	1707	尾張藩家臣朝日定右衛門重章による日記, 名古屋での日常の他, 江戸藩邸での記録を含む
108		千代田区神田駿河台（駿河台成満院）	隆光僧正日記	史料纂集期外古記録編(1970)隆光僧正日記第三,p168-171,続群書類従完成会. 十一月以降噴火記事のみ〔成満院日記抄〕隆光大僧正日記 文部省震災予防評議会編(1941)増訂 大日本地震史料 第二巻,p237-238. 十月地震記事のみ新収日本地震史料三巻別巻,p66,1983	宝永四年	1707	護持院の僧, 隆光(1649-1724)による日記
109		千代田区皇居外苑（西ノ御丸下）	配島伊信・伊盛覚書	小田原市立図書館蔵（小田原の近世文書目録5, p21, No.54) 厚木市史編さん委員会(1975)厚木市史史料集(9)災害編. 二、近世の災害 p11. 中野敬治郎(1978)近世小田原ものがたり,40-41.小田原文庫 7.名著出版. 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究,p71(史料7).			小田原藩士（祐筆）　配島伊信・伊盛の覚書　おそらく江戸藩邸の記録にもとづく
110		台東区台東（下谷七軒丁）	岡本元朝日記	秋田県立公文書館蔵 岡本元朝著・秋田県公文書館編(2020)岡本元朝日記 第6巻,p143-154.秋田県.	宝永四年	1707	秋田藩佐竹家の家老であった岡本元朝（在江戸）の日記

111	東京都	墨田区東駒形（北本所）	伊東志摩守日記(写本)	宮崎県立高等学校蔵 宮崎県立図書館寄託 震災予防調査会編(1904)大日本地震史料 甲巻,p334-339,思文閣刊. ★ 文部省震災予防評議会編(1941)増訂 大日本地震史料 第二巻,p215-220. ★ 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川.出品リスト25, p108-109. 小山真人・西山昭仁・井上公夫・今村隆正・花岡正明(2001)富士山宝永噴火の推移を記録する良質史料『伊東志摩守日記』.歴史地震,17,80-88.	宝永四年	1707	江戸幕府の旗本の一人であった伊東祐賢（在江戸）の日記
112		千代田区一ツ橋（雉橋外飯田町）	折たく柴の記 新井白石上	国会図書館 https://dl.ndl.go.jp/pid/2582772 ★☆ 震災予防調査会編(1904)大日本地震史料 甲巻,p339,思文閣刊. ★ 文部省震災予防評議会編(1941)増訂 大日本地震史料 第二巻,p215-220. ★ 国書刊行会 編 (1977) 新井白石全集 第3巻,p50-51.★	宝永四年	1707	儒学者新井白石（当時徳川家宣に仕えていた）の随筆
113			新井白石日記	東京大学史料編纂所編 新井白石著(1953) 新井白石日記 下. 大日本古記録, p42-46. 岩波書店. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川.出品リスト31（十一月二十三日以降噴火記事のみ）, p30に一部画像, p111-112に翻刻文.	宝永四年	1707	儒学者新井白石の日記
114		千代田区	宝永地震之記	文部省震災予防評議会編(1941)増訂 大日本地震史料 第二巻,p151-152. ★	写(明治二十一年)	1888	土佐国佐川村外山氏蔵の宝永地震の記録末尾に江戸での降灰観測記録を含む
115		千代田区（大名小路中通り 神田橋ノ内）	鶏肋編（けいろくへん）	山形県鶴岡市　致道博物館蔵 山形県(1961)山形県史 資料篇六 雞肋編 下, 361-362. ★ 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻, p72-73.★			庄内藩史料を後年庄内藩士加藤正從が編集したもの
116		千代田区千代田（江戸城西の丸）	基熙（もとひろ）公記 第六十巻　宝永四年十二月三日・四日に関東より書状到来（4743-4749/6638コマ）	宮内庁書陵部所蔵 国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース 書誌ID：100249255でweb公開(4741コマ宝永地震-4749コマ宝永噴火関連/6638コマ) 震災予防調査会編(1904)大日本地震史料 甲巻, p331-334.思文閣刊.★ 文部省震災予防評議会編(1941)増訂 大日本地震史料 第二巻,p212-215.★ 京都陽明文庫蔵 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川.出品リスト32, p112-113.	宝永四年	1707	近衛基熙（元禄三年（1690年）～元禄十六年（1703年）関白）の記録.江戸城西の丸に住んでいた娘熙子（徳川家宣（1709-1712 第6代将軍）正室）が西の丸で見聞した噴火に関する書状がある
117		千代田区大手町（神田橋・鎌倉橋・常盤橋）	樂只堂年録 (巻二百十一 二百十二 寶永四年丁亥十一月・十二月)	大和郡山市柳沢文庫 宮川葉子編集・監修(2019)樂只堂年録 第八, 史料纂集 205, 八木書店. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川. 出品リスト21-3, p106-107.	宝永四年	1707	甲斐藩主 大老 松平美濃守（柳澤吉保）の記録 樂只堂は柳澤吉保の号
118		行田市（忍おし）・東京（江戸）	宝永四丁亥年十月四日大地震之由来、同年十二月廿二日より富士山焼之由来	京本店原蔵 三井家記録文書目録〔2016年3月31日改訂 web公開〕p461, No.10172 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p63-65.★	宝永四年	1707	忍（埼玉県行田市）では降灰なし,大宮では降灰あり, の記録あり
119		文京区大塚	護国寺日記	坂本正仁 編(2019)史料纂集 古記録編 202 護国寺日記 第5 八木書店古書出版部.370p. 大田区史編さん委員会 編(1987)大田区史 資料編 護国寺・薬王寺文書.p4-5に一部収録.★	宝永四年	1707	護国寺の役者が記した公用日記
120		江戸城鍛冶橋門内 東京駅付近	津山藩日記（江戸）	津山郷土博物館蔵 web公開. 地震記録のみ 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻, p63.★	宝永四年	1707	津山藩松平家文書のうち, 江戸屋敷で記録された日記.
121		墨田区亀沢（本所二ツ目）	弘前藩 御日記（江戸）	弘前市立図書館蔵	宝永四年	1707	弘前藩江戸屋敷で記録された日記
122		千代田区日比谷公園（外桜田）	南部藩家老席日誌（雑書）	盛岡市中央公民館所蔵 盛岡市教育委員会, 盛岡市中央公民館編集(1995)盛岡藩雑書 巻9, p209（十一月二十八日条）, 熊谷印刷出版部.★	宝永四年	1707	盛岡藩家老席の日記江戸藩邸の奥瀬内記が降灰を記録した御用状の記録がある.
123		港区六本木（麻布龍土）	鹿島藩日記（江戸藩邸日記抜粋）	佐賀県鹿島市 祐徳稲荷神社蔵 三好不二雄編(1981) 鹿島藩日記 第三巻,p356・361.祐徳稲荷神社.★ 東京大学地震研究所(1994)新収日本地震史料 補遺 別巻, p148-149.★	宝永四年	1707	肥前国鹿島藩の江戸藩邸における記録
124		港区六本木（麻布龍土）	直堅公御在府日記	佐賀県鹿島市 祐徳稲荷神社蔵 三好不二雄編(1982) 鹿島藩日記 第四巻, p262（宝永四年十月四日）-321（十二月九日）.祐徳稲荷神社.★	宝永四年	1707	鹿島藩主の江戸在府中の記録　鹿島藩日記と重なる記事も多い
125		千代田区有楽町	江戸幕府日記 写 肥前島原松平藩	肥前島原松平文庫蔵 56-1-92 東京大学地震研究所(1994)新収日本地震史料 補遺 別巻, p143-14.★	宝永四年	1707	肥前国島原藩の江戸藩邸における記録
126		台東区下谷	対馬藩　江戸藩邸毎日記	東京大学史料編纂所蔵. 対馬藩 江戸藩邸毎日記 請求記号 宗家史料-1-122 Web公開. 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p557.★	宝永四年	1707	対馬藩江戸藩邸における日記

127	東京都	中央区日本橋本町	宝永四年富士山焼一件	中野義雄編(1985)小澤蘆庵の真面目.里のとぼそ第五集, p428-429.★	宝永四年十一月二十六日付	1707年12月19日	日本橋呉服商伊豆蔵勤め村山弥兵衛が勢州関の父宛，富士山噴火と自身の無事を伝える書状
128			富士山自焼記（ふじさんじしょうき）	東京大学史料編纂所蔵 請求記号2062-1 web公開 文部省震災予防評議会編(1941)増訂 大日本地震史料 第二巻,p234-235.★ 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川.出品リスト26, p120-122.	宝永四年	1707	公儀への注進状を多数含む　著者は幕府関係者か
129			冨士山焼記（ふじやまやけき）	刈谷市中央図書館蔵（村上文庫 請求記号W6216）	宝永四年	1707	著者不明．日記調で記録され，内容から幕府要職の関係者か
130			富士山變記	東北大学狩野文庫　請求記号3-5817-1			著者不明．幕府関係者の記録を含む
131	千葉県	木更津市犬成（いんなり）	富士山辰巳方焼出シ候事	木更津市犬成 個人所蔵 橘田昭雄(2000)木更津で見た富士山宝永の噴火，西上総文化会報 第六十号，p31-35. 本吉正宏（2015）内房における富士山宝永噴火の記録.千葉文華,43,p52-56.	宝永四年	1707	三枝尹次著 木更津市犬成で詳細に噴火を観測した記録
132		君津市大井	覚宝永四丁亥	千葉県君津市(1992)君津市史資料集Ⅱ近世Ⅱ,p228,君津市市史編さん委員会. （久留里城址資料館平成25年度（2013）企画展「天災ときみつ～『未曾有』の災害をふり返る」パンフレットに画像・翻刻・正誤表あり）.☆	宝永四年	1707	君津市大井 石出家所蔵の覚書
133		勝浦市勝浦	高照寺過去帳	関東地区災害科学資料センター 編(1977)房総半島南部の元禄地震料（関東地区災害科学資料センター資料,その9）,p38（史料38）. 古山 豊(1983)第二集 元禄地震史料および分析.p29-30（史料27）. 千葉県郷土史研究連絡協議会編(1984)房総災害史―元禄の大地震と津波を中心に―．郷土研叢書Ⅳ,p287-288（史料43）.	宝永四年	1707	勝浦市高照寺に伝わる過去帳
134		勝浦市植野	香取神社棟裏肘木銘文	関東地区災害科学資料センター 編(1977)房総半島南部の元禄地震料（関東地区災害科学資料センター資料,その9）,p38（史料39）. 古山 豊(1983)第二集 元禄地震史料および分析.p30-31（史料28）. 千葉県郷土史研究連絡協議会編(1984)房総災害史―元禄の大地震と津波を中心に―．郷土研叢書Ⅳ,p288（史料44）.	宝永四年	1707	明治初年に香取神社を壊す際に発見した棟裏肘木の記録（上野村誌）
135		夷隅郡御宿（おんじゅく）町浜	妙音寺過去帳	関東地区災害科学資料センター 編(1977)房総半島南部の元禄地震料（関東地区災害科学資料センター資料,その9）,p38-39（史料40）. 古山 豊(1983)第二集 元禄地震史料および分析.p28-29（史料26）. 千葉県郷土史研究連絡協議会編(1984)房総災害史―元禄の大地震と津波を中心に―．郷土研叢書Ⅳ，p289（史料45）. 御宿町史編さん委員会編(1993)御宿町史,p222.御宿町.	宝永四年	1707	御宿町妙音寺に伝わる過去帳
136		長生郡一宮町東浪見（とらみ）	萬覚書	牧野春江氏蔵 長生郡一宮町社会教育課に写あり 関東地区災害科学資料センター 編(1977)房総半島南部の元禄地震料（関東地区災害科学資料センター資料,その9），p39-42(史料42). 古山 豊(1982)山武・長生郡における元禄地震調査.p31-36（史料28）.	享保四年三月写　を明和八年一二月に写す	1719	享保四年 児安惣次左衛門 写 明和八年 児安惣次左衛門 写 延宝地震・津波，元禄地震・津波，宝永噴火の記事あり
137		長生（ちょうせい）郡長生村本郷	大沼家過去帳	大沼内蔵之助氏蔵 九十九里町誌編集委員会(1985)九十九里町誌資料集 第12輯.p110.に一部収録. 古山 豊(1987)第三集 元禄地震史料集.p1-3（史料1）.			大沼家の過去帳　柳澤吉保の母方出身者が大沼家に嫁いだという
138		長生郡白子町（しらこまち）関	一代記付リ津波ノ叟	池上誠家文書 関東地区災害科学資料センター 編(1977)房総半島南部の元禄地震料（関東地区災害科学資料センター資料,その9）,p45-47(史料46). 古山 豊(1982)山武・長生郡における元禄地震調査.p13-17.史料13. 千葉県郷土史研究連絡協議会編(1984)房総災害史―元禄の大地震と津波を中心に―．郷土研叢書Ⅳ,p300-304（史料52 史料52が2史料重複）.	享保十年	1725	池上吉三郎（後に 春日諳松軒了伯安闊）の一代記　延宝地震・津波，元禄地震・津波，宝永地震・津波，宝永噴火の記事あり
139		香取郡多古町（たこまち）	平山静江家過去帳	多古町史編さん委員会編(1985) 多古町史下巻,p1050,多古町. 多古町デジタルアーカイブ 多古町史 災害年表で公開.	宝永四年	1707	香取郡多古町南方にて医者を営む平山家に伝わる過去帳
140		香取市佐原（さわら）	宝永四丁亥年 日帳（『伊能勘解由日記』または『景利日記』）	伊能淳氏蔵 香取市伊能忠敬記念館管理 小山真人・西山昭仁・井上公夫・角谷ひとみ・冨田陽子(2003)富士山宝永噴火の降灰域縁辺における状況推移を記録する良質史料『伊能景利日記』と伊能景利採取標本.歴史地震,19,38-46. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川．出品リスト30，p30に一部画像，p111に翻刻文.	宝永四年	1707	伊能景利氏がおよそ二十年にわたって記録し続けた日記
141			部冊帳第六巻	伊能淳氏蔵 香取市伊能忠敬記念館管理 佐原市史編さん委員会編(1996)佐原市史資料編別編一,p343-345.	正徳四年十二月	1715年1-2月	伊能三郎右衛門家三代目の伊能景利氏によって編集・記述された記録

142	千葉県	香取市佐原	入目録	伊能淳氏蔵 香取市伊能忠敬記念館管理 小山真人・西山昭仁・井上公夫・角谷ひとみ・冨田陽子(2003)富士山宝永噴火の降灰域縁辺における状況推移を記録する良質史料『伊能景利日記』と伊能景利採取標本.歴史地震,19,38-46.	宝永四年	1707	伊能景利氏が収集した標本・貴重品の目録 小山ほか（2007）では『勘解由日記抄』と題して紹介
143	埼玉県	行田市（忍）	公餘録巻二	児玉幸多校訂(1975)阿部家史料集一 公餘録（上），p153-161. 吉川弘文館. ★	宝永四年	1707	忍藩主阿部家の記録. 忍城内でのできごとが記録されている
144		越谷市新川（しんかわ）町	産社（ウブシャ）祭礼帳	越谷市役所(1972)越谷市史四,p865（史料二）.★	宝永四年	1707	旧越巻村（現埼玉県越谷市越谷町新川町）の越巻中新田に伝わる史料
145	茨城県	龍ヶ崎市豊田町	天明三年卯日記（豊田村名主日記）	山崎穣家文書 龍ヶ崎市歴史民俗資料館寄託. 龍ヶ崎市史 近世調査報告書Ⅱ,p216-217. に解読文	天明三年七月八日	1783年8月5日	旧豊田村名主山崎十左衛門吉明の日記 天明三年浅間山噴火の降灰記録に加えて，宝永四年の噴火の際13歳だった祖母からの伝聞がある
146		ひたちなか市	湊村古記雑書 海老澤川覚	那珂湊市史編さん委員会編(1975)那珂湊市史料 第一集,p45.★			湊村古記雑書中の覚書 現東茨城郡茨城町海老沢の覚書か
147		笠間市・東茨城郡城里町	常州笠間拾弐郷并御地頭年代記	石井精家原蔵 笠間市教育委員会蔵 請求番号 A22 1	享保十六年	1731	笠間近郷の歴代領主と主な出来事を享保十六年にまとめた年代記
148		笠間市・石岡市	日記（宝永四年）	栃木県芳賀郡茂木町小貫（おぬき） 小崎（おざき）耕作家文書 栃木県立文書館寄託（栃木県資料所在目録 芳賀郡 茂木町 p40-60,ロ34)	宝永四年	1707	旧小貫村（現栃木県芳賀郡茂木町小貫）名主小崎喜兵衛による日記
149	栃木県	芳賀郡茂木町	富士山自焼記	横山治平原蔵 東京東京大学史料編纂所蔵 請求記号 2062-1 web公開. 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川. p120-122, 出品リスト26.			茂木藩 細川玄蕃頭からの注進状
150		日光市山内	御番所日記	日光東照宮(1933)日光叢書 御番所日記 第三巻, p402-404.★ 文部省震災予防評議会編(1941)増訂 大日本地震史料 第二巻, p201, 211, 212.★	宝永四年	1707	日光東照宮で書き継がれた日記 日光では地震のみ観測，降灰記録なし.
151	長野県	下伊那郡高森町	歳中行事	飯田市立中央図書館所蔵 飯田文書 No.220. NPO長野県図書館等共同機構/信州地域史料アーカイブで公開 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p98.★ 小山真人・小川聡美・西山昭仁(2007)西方遠隔地（三重県伊勢，長野県下伊那）で書かれた1707年富士山宝永噴火の目撃記録.歴史地震,22,61-83. 村沢武夫編(1983)伊那谷の災害と凶作 増補,p13-14.北原技術事務所.★ (東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p99.に引用)★	宝永四年	1707	信濃国市田村の庄屋であった上原彦右衛門による記録
152		下伊那郡下条村	大地震之記	長野県下伊那郡下條村 鎮西家文書 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p100-101.★ 小山真人・小川聡美・西山昭仁(2007)西方遠隔地（三重県伊勢，長野県下伊那）で書かれた1707年富士山宝永噴火の目撃記録.歴史地震,22,61-83.	宝永四年	1707	下伊那郡下條村鎮西家に伝えられた記録
153	愛知県	豊橋市細谷町	上細谷村舊記	東三文化研究會(1936)朝倉仁右衛門翁伝:附其一家 伊藤卯一 校,那賀山乙巳文 編，p93-97.★ 中西一郎(1999)貞享二、三年（1685、1686）の三河地震；吉田藩内とその近傍で書かれた新発掘史料による考察.東京大学地震研究所彙報,74, p301-310.★ 富士山宝永噴火記事の収録あり			朝倉家に伝わる細谷村の記録
154		名古屋市東区	鸚鵡籠中記	徳川林政史研究所蔵 史料番号 旧 蓬左 142-3(19) 名古屋市教育委員会(1968)名古屋叢書続編 第十一巻，鸚鵡籠中記(三)，p262-275.★ 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p262-263.★	宝永四年	1707	尾張藩家臣朝日定右衛門重章による日記. 名古屋での日常の他，江戸藩邸での記録を含む
155		田原市	金五郎日記歳代覚書 大地震之事	東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p265-267.★			宝永地震の記録と十一月二十三日朝鳴動の記事あり
156	岐阜県	中津川市阿木	青野村年代覚書 鷹見家文書	中津川市 青野鷹見家文書 中津川市(1979)中津川市史 中巻 別編,p837-862（宝永四年はp844）.★ 東京大学地震研究所(1994)新収日本地震史料 続補遺 別巻,p55.★			青野村の成立以来江戸中期までの村の主な出来事，年貢関係，支配関係の記録
157		郡上市白鳥町長滝	長瀧寺文書 荘厳講執事帳 第八巻	長瀧寺文書 荘厳講執事帳 第八巻 宝永噴火鳴動記録あり 白鳥町教育委員会 編(1973)白鳥町史 資料編,p324-325. ★ 東京大学地震研究所(1983)新収日本地震史料 第三巻 別巻,p105-106.★			長瀧寺執事による記録 十一月二十三日鳴響あり
158	滋賀県	長浜市小室町	日記 宮川親良	滋賀県東浅井郡教育会(1927)東浅井郡志 巻三,p661-662.★ 宝永噴火鳴動記録・目撃記録あり	宝永四年	1707	近江国坂田郡小堀村の小掘家の家老であった宮川親良の日記
159			富士山焼砂降積候村々御救金元払	国立公文書館所蔵 蠹余一得 内閣文庫 請求番号 213-0031 冊次1 に収録 同館デジタルアーカイブで公開 内閣文庫所蔵史籍叢刊 3, 新令句解 蠹余一得 史籍研究會1981. p58-69.	宝永八年	1711	幕臣 向山誠斎 著 幕府関係文書を編集したもの 高役金の収支あり

附表2　史料に基づく富士山宝永四年噴火の推移

富士山宝永噴火を記録した史料における宝永四十月四日宝永地震前後以降の地震記録も含む
日数：噴火が開始した宝永四年十一月二十三日から数えた日数

和　暦 (グレゴリオ暦)	日 数	記　　事	出　典	記 録 地
宝永四年 九月二十九日 (10月24日)	53日前	二十九日　晴天、（略）一、五ツ過之比時、餘程地震有之候、	護國寺日記	東京都文京区大塚
十月三日 (10月27)	50日前	一、去十月三日昼(ヒル)八ツ時分大地震、同四日明六時過(スギ)大地震、然共家者不レ損(ソンゼ)、其已後(イゴ)打續(ウチツヾキ)少々之地震者絶(タイ)不(ズ)レ申(モウサ)、然共、富士山之中者九月時分已来(イライ)、毎日余(ヨ)程之地震者幾度も有之、別而十月三日已来強地震数多(アマタ)、一日之間十度廿度、少々之地震数(カズ)不レ知(シレ)、然共里ニ者地震も無之候、（十月四日昼過ぎ、十月五日早朝の地震の日付の誤りと思われる）	土屋伊太夫文書	静岡県裾野市須山
		□三日（略） ○夜、雲間甚光る、電の如にして勢弱し、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月四日 (10月28日)	49日前	一、頃ハ年号宝永四年丁亥暦十月四日未ノ剋大地震壱度余りして明五日ノ明ヶ六ツに大地震壱度余りして其節之地震南海四国迄山崩れ津浪夥敷致せしハ凡夫乃種も可レ絶と何にたとえん方もなし、扨此十月四日ノじしんニて甲斐国都留郡内野村と申郷は能キ家々ハ何事もなし是亦悪キ家ニハ破損出来惣て相潰し申候、然ハ当国井之村里平野村次ニ長池邑(むら)、扨山中村西隣忍草邑此五ヶ村ハ右同断相見へ申候、	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村内野
		頃者宝永四丁亥年十月四日昼(ヒル)之九ッニ大地震、冨士山麓表口駿州大宮町之民屋不残潰(ツフレ)、其後地震日々無止、	冨士山焼出之節之事	山梨県富士吉田市
		宝永四年十月四日(第三十五（35話という意味か）)之昼八ッ時未ノ刻ニ大地震、同五日之朝卯ノ刻ニ又ナリ夥敷事也、三十日、四、五十日の間少々ツツ毎日ゆる也、吉原宿大地志ん町中不残家禿(つぶれ)（ママ　頽ヵ）、並に神（蒲）原、由比、興津、江尻、府中宿、其外上方へ宿々禿家有（中略）、さて甲州河内大地震（富士川筋の事）、別テう都ぶさ（内房）白鳥山壊レ富士川東ニとび、長貫村うまり死人大分、依之富士川舟渡シ場ニ水一円無之、飛脚之者歩行ニ而渡ル由伝聞、(略)	土屋家文書『（覚書）』静岡県史別編２、ｐ３４９－３５５	静岡県沼津市原
		四日、　晴、 一、未刻大地震、依之、護持（快意）院迄早々御越候所、公方様窺御機嫌ニ護持院ニハ御上り、御退出ニて御座候故、（略） 一、未刻已後少々地震、夜中茂不斷、	護國寺日記	東京都文京区大塚
		一四日、八っ時大地震中ノ上程也、別而破損無之、早速登城、	隆光僧正日記	千代田区神田駿河台（駿河台成満院）
		四日（略） 一、今日八過天水之こほれ候程之地震ニ付、御機嫌御伺候、御用番御老中様江御聞役長尾六左衛門罷越御並承合両行を申様松平右京（右京大夫輝貞：側用人・高崎藩主）様、松平伊賀守（忠榮:側用人・上田藩主）様、間部越前守（詮房：老中次席）様江可相勤候、松平美濃守（柳澤吉保：大老　甲府藩主）様江は御機嫌お伺はなしニ地震ニ付御見廻之御使は御口上被繕可申上旨御聞役長尾六左衛門申遣之、人馬共ニ直ニ申付差遣し候、	弘前藩庁日記（江戸）	東京都墨田区亀沢（本所二ツ目）
		同四日(宝永四年十月) 今昼之八比地震有之、余程強候、 一、地震ニ付、丹劔様(鍋島丹後守吉茂：佐賀藩藩主)江為御見廻、御使者被指上候、 一、地震ニ付、諸大名様惣御　登城、此御方ゟは両御用番様、以御使者御勤有之候、御年寄故、井上河内守(正岑：老中　笠間藩主)様江ニも御見廻、御使者何も、原弥太右衛門勤、	鹿島藩日記	東京都港区六本木(麻布龍土町)
		十月四日 一、久志本（左京亮常勝：侍医）殿御出、奥江御通り儀、昼之八ツ頃より御通候砌、地震よほと強有之候得共、蓮清院様（鹿島藩主鍋島直堅の母：十月九日死去）御気分ニは、少も御別条不被成御座候 一、右之地震ニ付、松平新平殿ゟ（万次郎・正厚）、蓮清院様御気分ニ御障不被成御座候哉、御無心元奉存候由ニ而、使有之、御相応之御返答致置候、 一、地震ニ付、丹劔様江為御見舞、御使者御厨安右衛門被　仰付候、 （略） 一、地震ニ付、諸大名様惣御　登城、此御方ゟは両御用番様江、御使者を以御勤被成候、御手前様ニ而之御事故、井上河内守様江も御見舞、御使者有之、右何も、原弥太右衛門相勤候、	直堅公御在府日記	港区六本木(麻布龍土町)
		十月四日 一、未之上刻地震余程強付而為伺御機嫌、御城江御留守居罷出ル、	津山藩江戸日記	千代田区丸の内（鍛冶橋御門ノ内）
		十月四日　晴天 今未之刻、地震ニ而天水桶之水震こほれ候付、（略）	對馬藩　江戸藩邸毎日記	東京都台東区下谷

十月四日 (10月28日)	49日前	（四日）　〇江戸にて未刻地震す、夫程強くは無レ之、［割注：御城諸番人御番所をあけ庭へ出る位なりと、］	鸚鵡籠中記	東京都新宿区市谷本村町
		四日　晴、 一、未之刻地震　御宮中御安全諸役人参上、	御番所日記	栃木県日光市山内
		□四日　朝東北に薄赤き立雲多く見ゆ、夏の夕立雲の如し、 〇観誉理清五十回、昼前予高岳院へ詣、［割注：香奠　二百文、］兼て廻文にて法事過、直に暮迄可遊との事也、仍之参詣の外、鈴木藤入・曲淵源太来る、源右衛門・権内・治部右・源兵・勘八・七内有之、書院にて夕飯出、酒一返廻る時、東北ゟ鳴轟て地震(傍点)す　未の一点也、漸々強くして不鎮故、座中申合せ皆庭へ飛下る、大方跣なり、地震倍強く、書院の鳴動の事夥敷、大木ざはめき渡りて、大風の吹がごとく、大地動震て歩行する事を得ず、石塔の折れ倒るゝ音いふ斗なし、良須臾して漸鎮り、座敷へ上るに、三の丸に火事出来と云に付、予独酌三盃して、急き皈宅し、両親并家内の安否を見、而直に政右と御多門へ出、両御城代衆、其外阿部縫殿、并御側同心頭、御国御用人、御目付等、其外諸役人罷出、（略）	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
		寳永四年亥ノ十月四日之八つ時ニ何之方とも不知白雨之風ニ聞ルことくひゞき申かと存候処、追付事しづかにゆらゆらとゆり出テ段々とつよき地震、其時人々不残火をしめし（湿し）外江立出候得共、立こたゑられず漸々梯柱抔ニ取付立こたへ見候得共、風通之木ニ大風之當ことく梯抔もゆり落シ、只一時程ゆり申候、所々ゆりわれしを見候得共、われ口三四尺壱間程宛ゆりわれ、前方水けもなき道などのわれ口江水ゆり出候所も御座候、當村ニ而も龍岳寺くり之分不残つぶれ申候、其外之家も戸かべはなれ五寸壱尺程宛かたかり不申家は希ニ候、飯田ニ而も家数百五六拾間（軒）潰レ申候、其後も日々夜々ニ間もなく纔（わずか）之地震ハ同月廿六日迄ゆり申候、扨（さて）其以後も五七日ニ壱度程づゝゆり申候、	大地震之記	長野県下伊那郡下條村
		一、四日　晴天　朝庄右衛門ニ被頼、代かきニ行、次右衛門之門ニ而、伝兵衛、彦五郎ニ逢、孫右衛門行、午ノ下刻申酉方ゟ、大地震おひたゝしき事、近年希成事共也、我等家ノ下道動り破、長サ七間程、其外、川東山々ノなぎ一同ニ方々崩、土煙四方ニたち見ゆる、同時ニ動止候、飯田町屋、土蔵等方々動崩申候、夜ニ入久右衛門へ行、夜之内ニ二度、夜明ニ一度、昼七つ時迄七度、都合五日之夜明迄十度也、	寳永四年亥正月吉日歳中行事	長野県下伊那郡高森町
		（十一月朔日条） 一、御國状到着、御在所（佐賀県鹿島市）先月（十月）四日昼九時過、余程強キ地震、花木庭鯉池之石垣少々崩、其外ニも破損有之由、右地震後、刻限間もなく（佐賀県杵島郡）龍王ゟ南ニ当リ、加嶋ゟハ龍王ニ当リ、石火矢程之鳴物、四ツ五ツ仕候、佐賀ゟハ此鳴物西ニ当り聞申候、	鹿島藩日記	佐賀県鹿島市
		（十一月朔日条） 一、舎人（板部）ゟ九太夫（板部）江之書状、今日（十一月朔日）大坂より参着、先月（十月）六日之日付之書状、御在所先月（十月）四日昼九時頃、よほと地震ニ而候得共、上々様方御機嫌能被成御座候よし注進、花木庭桜之峯、鯉池之石垣、少々崩申候、其外ニも少々破損所御座候由、鹿嶋御屋敷御屋形、少も別条無之由、紹竜様其節は、広平ニ被成御座候処ニ、あなた茂よほと強地震之よし、然共、御破損所は無之由、 一、右四日地震後、刻限間もなく龍王ゟ南ニ当リ、加嶋ゟは龍王ニ当リ、四ツ・五ツほとのなり物、尤、石火矢ほと仕候由、佐嘉ゟは此なり物、西ニ当リ聞江申由、右之通、舎人ゟ九太夫江注進致候、	直堅公御在府日記	佐賀県鹿島市
十月五日 (10月29日)	48日前	五日、　晴、 一、地震止除之御祈禱、今日ゟ人別壹人ニ、一日ニ三座ツヽ不動法、寺内衆中不殘可相務之旨被仰付、巳刻已後開白、衆中修法、（略） 一、今朝卯刻過、大地震、	護國寺日記	文京区大塚
		一、五日、明六っ過大地震、昨日之程也、早速登城、	隆光僧正日記	千代田区神田駿河台（駿河台成満院）
		十月五日 今朝六ツ時、又々地震、昨日之通リ有之候、此節ハ昨日ゟも少シ早鎮り申候、 一、大地震ニ付為伺御機嫌、両御用番様江早速、小川勘兵衛被　仰付候、丹劔様江茂御見廻、右同人相勤候、 一、今朝之地震ニは惣御登　城無之、	鹿島藩日記	港区六本木(麻布龍土町)
		十月五日 一、今朝六時頃、又地震、大方、昨日之通リ有之、此節は、昨日ゟも早鎮り申候、 一、右地震ニ付、為伺　御機嫌、両御用番様江小川勘兵衛相勤候、 一、堤丈兵衛、先日罷出候ニ付、為御礼、御使者勘兵衛（小川）被遣候、 一、先刻之地震ニ付、甲劔（鍋島甲斐守直称　蓮池藩主）様ゟも早速、御使者を以、蓮清院様御気分ニ御障不被成御座候哉を、被　仰進候、 一、蓮清院様、今朝之地震ニ、少は御障様ニ被成御座候由、	直堅公御在府日記	港区六本木(麻布龍土町)
		十月五日 一、卯中刻地震強、自而高田江窺御機嫌如例年左衛門差越候、 一、昨今之地震付、高田ゟ為御見廻御歩行使酒寄只七・廣瀬半助方ゟ差遣候、則達　御聞候、 一、地震為御伺御機嫌左之御留主居罷出ル、 御本丸江□芦沢貞右衛門 西之御丸□小川忠右衛門	津山藩江戸日記	千代田区丸の内（鍛冶橋御門ノ内）
		十月五日朝曇、四ツ時ゟ晴 今卯上刻地震ニ而昨日程之震ニ付、（以下略）	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷

十月五日 (10月29日)	48日前	同五日　晴、 一、御宮御安全、卯刻過地震、山口図書参上、	御番所日記	栃木県日光市山内
		一、五日　晴天（中略）四つ時地震又夜五つ過地震、飯田町屋、五拾軒程、蔵八拾ケ所程動崩之由聞、	寳永四年亥正月吉日歳中行事	長野県下伊那郡高森町
		□五日　暑し、○卯の刻よ程強き地震、○於江戸も此刻よ程強き地震あり、○未比もゆる、惣而今日中今夜中少つゝゆる事不遑数、［割注：但夜ルは昨夜の半分度より少し、］	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市・東京都
十月六日 (10月30日)	47日前	一、六日、（略） 駿府ゟ住（注）進・大地震御城之石垣大分破損、久野（能）御宮・御寶塔無御別条、御拝殿少々破損之由申來、随分御祈禱可仕之旨被仰付、	隆光僧正日記	千代田区神田駿河台（駿河台成満院）
		同六日　半、 一、御宮御安全、午之後刻、兩火之番衆裏付上下ニ而参上、 一、巳之後刻少々地震兩度、御宮中御安全、	御番所日記	栃木県日光市山内
		一、六日　晴天（中略）今日も弐度、動申し候、少つゝ成、（中略）	寳永四年亥正月吉日歳中行事	長野県下伊那郡高森町
		□六日　晴、暖少し、西風、未比ゆり、其外少づゝ度々ゆる、夜少宛三四度ゆる、夜に入戌より曇、亥過ゟ雨、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月七日 (10月31日)	46日前	一、七日、駿府爲檢分稲垣對馬守（重富）今朝發駕、今日、覺王・護持・進休・護國・愚衲登城、御仕舞被遊、木工殿・備後殿被罷出、三州掛川大地震、城并ニ武士屋敷・町屋大分倒之由、又同吉田も城并ニ屋敷・町屋倒之由、備後殿へ申來、	隆光僧正日記	千代田区神田駿河台（駿河台成満院）
		□七日　雨止、日光出、又辰半ゟ曇、後晴、○今朝よりゆらず、巳過鳴音あれ共ゆらず、夜更時々鳴れ共、ゆらす、但少づゝ一二度ゆる、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月八日 (11月01日)	45日前	一、八日　朝ゟ少つゝ雨ふる（中略）夜七つ地震する、	寳永四年亥正月吉日歳中行事	長野県下伊那郡高森町
		□八日　辰過少ゆる、○昼の内鳴る事あり、（略） ○丑刻地震、夫ゟ暁迄鳴事度々、ゆる事も四五度斗、其内二つつよきあり、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月九日 (11月02日)	44日前	一、九日（中略）地震一度、今日晴天成、	寳永四年亥正月吉日歳中行事	長野県下伊那郡高森町
		□九日　玄猪、時々鳴、昼前一両度ゆる、未過ゟゆる、五日の朝のより少しよはし、暮て少しゆり、丑過少しゆり、寅過強く鳴音聞ゆ、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月十日 (11月03日)	43日前	□十日未過ゟ曇、暮ゟ雨、深更止、○酉過甚強鳴てゆらず、須臾過て少つゝ一両度ゆり、寅過少しゆる、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月十一日 (11月04日)	42日前	十一日、晴天、九ツ時ゟ風少有之、殊外温氣、（略） 一、先比地震ニ付松平攝津守様御在所高須破損之由故、御見舞使僧被仰付候、	護國寺日記	文京区大塚
		□十一日雨止、曇時々日光現す、戌ゟ雨、夜更止、○寅過少づゝ二度ゆる、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月十二日 (11月05日)	41日前	□十二日晴、酉過地震［割注：九日の未過の位］子過鳴事二三度、少づつゆる事暁迄之内に三度斗、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月十三日 (11月06日)	40日前	一、十三日　朝ゟ曇（中略）地震一度、	寳永四年亥正月吉日歳中行事	長野県下伊那郡高森町
		□十三日　曇、暮ゟ微雨、戌過ゟ雨、終夜降、○酉過地震、［割注： 昨晩のよりゆるし］○寅過地震、○外に夜中に少づつ二度斗ゆる、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月十四日 (11月06日)	39日前	一、十四日　雨ふる（中略）今日地震一度、	寳永四年亥正月吉日歳中行事	長野県下伊那郡高森町
		□十四日雨巳ゟ止、曇未前ゟ属晴、○子過一つ鳴る、○夜中に少づゝ一両度ゆる、 ○於江戸、頃日毎夜南方電光あり、〔割注：当地にても時々雲間光る南方にはあらず、乾艮の方なり、〕	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市・東京都
十月十六日 (11月09日)	37日前	十六日、　　終日小雨降、（略） 一、四ツ前地震少々、永ク有之、	護國寺日記	文京区大塚
十月十六日 (11月09日)	37日前	十月十六日 一、四時地震有之、（略）	津山藩江戸日記	千代田区丸の内（鍛冶橋御門ノ内）
		□十六日　晴、少西風吹・酉半過地震、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月十八日 (11月11日)	35日前	十八日、晴、明六ツ時前ニ少在地震、九ツ時分ニ者（は）ばらばら雨降、（略） 一、終日御在院ニ而有之候、夜五ツ半過ぎ震動、地震有之、右之他、無別條、	護國寺日記	文京区大塚
		□十八日　終日雨、戌過ゟ止、夜更晴、○寅過少し地震、（略）	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市

十月十九日 (11月12日)	34日前	□十九日　晴、風吹、○酉半過鳴、○寅半地震、○暁又少ゆる、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月二十日 (11月13日)	33日前	二十日、雨天懸リニ而、折々時雨有之、朝六つ時少地震、	護國寺日記	文京区大塚
		□廿日　薄曇、○卯過地震、○酉比強く鳴響く、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月二十二日 (11月15日)	31日前	二十二日、晴天、 一、御位牌（桂昌院）堂法事相濟、大僧正唱礼御務被成候、衆中御位牌堂へ致出仕候節、地震少有之、 一、（略）暮六ツ過ニ少有地震、右之外、無別條候、	護國寺日記	文京区大塚
十月二十三日 (11月16日)	30日前	二十三日、　晴天、（略） 一、御歸暮六ツ時、於御城御仕舞御座候由、御歸已後其儘餘程之地震在之、	護國寺日記	文京区大塚
		□廿三日　（略）○酉過地震、（略）	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月二十四日 (11月17日)	29日前	一、廿四日　晴天（中略）昨今地震する、	寳永四年亥正月吉日歳中行事	長野県下伊那郡高森町
		□廿四日　昼之間晴、暖、○午前地震、○夜乾の方光る、○深更少鳴り少ゆる、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月二十五日 (11月18日)	28日前	□廿五日　昼之内、別而暖晴、○深更鳴る、（略）亥ゟ時雨、時々降る、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月二十六日 (11月19日)	27日前	十月廿六日　雨、中丸修理 一、御宮御安全、 一、當月四日地震京都大阪久能山其外所々損申候由、西國は秋中□上候而家畑等損申候由也、	御番所日記	栃木県日光市山内
		○頃日、北国夥敷地雷(下線部ママ)にて、鍋などに水を入れて不レ置、 則ひゞき破ると、其強き事可知也、越後国等別而甚しと、信濃善光寺へ詣者の咄しなり、（略）按るに此方へ折々聞ゆる鳴動は此ひゞきなるべし、（十月二十六日条）	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月二十七日 (11月20日)	26日前	二十七日、夜中ゟ晴天ニ罷成候、夜之七ツ半過少地震有之、（略） 一、四ツ之時節、地震少有之、	護國寺日記	文京区大塚
		□廿七日　晴、西風吹強、寒し、○寅刻地震、（略）	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月二十八日 (11月21日)	25日前	□廿八日　夜一両度鳴る、○寅刻地震、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月二十九日 (11月22日)	24日前	二十九日、　晴天、今暮方ニ廻状貳通□候而懸御目候、（略） 一、暮六ツ過、地震餘程有之、次ニ五ツ過、（略）	護國寺日記	文京区大塚
		□二十九日　夜一両度鳴る、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十月三十日 (11月23日)	23日前	卅日、　晴天、（略） 一、地震未止申候ニ付、明日ゟ人別ニ壹座宛致修行候樣ニ申付候へとノ御意ニ而候、	護國寺日記	文京区大塚
		□晦日　曇、昼過ゟ雨降、○昼過強く鳴響く、○夜更雨止、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十一月一日 (11月24日)	22日前	十一月朔日　晴、午刻風吹也、 一、卯少刻過刻ト同中刻光物戌亥方ゟ辰巳之方に飛申候由、初光小鳥如ニて續候而、五つ後光物光物茶碗太サニ而壹つ飛候由、兩度共山林迄鳴物之樣ニきこへ申候也、	御番所日記	栃木県日光市山内
十一月二日 (11月25日)	21日前	十一月二日　晴、 一、辰刻前後兩度地震少々、御安全也、	御番所日記	栃木県日光市山内
十一月三日 (11月26日)	20日前	□三日　酉過鳴動、○寅比少しゆる、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十一月四日 (11月27日)	19日前	□四日　宵之内、東北雲間甚電光、○北美濃夥敷雷鳴る、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十一月五日 (11月28日)	18日前	□五日　夜時々時雨、○子半、轟鳴りひゞき、少しゆり、つゞけさまに二つ鳴ひゞく、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十一月十日 (12月03日)	13日前	霜月十日　雲、 一、御宮御安全也、午刻少々地震、	御番所日記	栃木県日光市山内
		霜月十日頃ゟ冨士山麓一日之内ニ三・四度ツヽ鳴動する事甚し、	冨士山焼出之節之事	山梨県富士吉田市
十一月十一日 (12月04日)	12日前	十一日、晴天、（略） 一、巳刻前地震、	護國寺日記	文京区大塚
		一、十一日　晴天（中略）夜九つ時地震する（中略）	寳永四年亥正月吉日歳中行事	長野県下伊那郡高森町

十一月十二日 （12月05日）	11日前	□十二日　昼過曇、須臾時して止、○申半地震、○寅刻地震、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十一月十四日 （12月07日）	9日前	□十四日　辰半霙降、昼比止、曇、屋上甚霜白水、○寅刻鳴、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十一月十五日 （12月08日）	8日前	□十五日　晴、○暁方鳴、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十一月十八日 （12月11日）	5日前	十八日、曇天、（略） 一、地震止除之御祈禱、今日ゟ相止候様ニと被仰付候事、	護國寺日記	文京区大塚
十一月二十日 （12月13日）	3日前	□廿日　申半大に鳴る、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十一月二十二日 （12月15日）	1日前	一、廿二日朝五ツ時ゟ昼夜翌廿三日昼時迄震動、雷電、地震甚、	富士山自焼記（松平美濃守在所）より注進）	山梨県甲府市丸の内(甲斐国府中)
		一、霜(シモ)月廿二日昼四時分已来及暮六時分迄ニ大地震者七八度十度程も有之、夜入候而之地震も度々　有之、其数不レ知(シレ)、	土屋伊太夫文書	静岡県裾野市須山
		（十一月二十三日条） ○富士郡中問屋ゟ注進状の写廿三日の日付 昨廿二日昼八つゟ、今廿三日五つ半迄之内、地震間もなくゆり、家など動潰申候、其上廿三日四ツ時ゟ富士山鳴出、其響富士郡中ひゞき渡り、大小男女絶入仕候得ども、死人は無之候、然る処に富士雪之流木立境より夥敷煙渦き出、弥大地ともに鳴り渡り、富士郡中一面に煙、二時斗渦き斗方を失ふ、昼の内は煙斗見へ、暮六つ時ゟ煙り、火炎に見ゆ、	鸚鵡籠中記 富士郡中問屋二十三日付注進状の写	静岡県富士郡中
		昨廿二日未之刻ゟ今廿三日五時迄之内、地震無間茂、三十度程震申候、少々充前方之地震、潰殘申候家、又ハ半潰之家、不殘潰申候、其上同四時より、冨士、大分鳴出申候、其音ニ冨士郷(郡)中鳴渡り、大小之男女絶入仕候者、數多御座候、然共、死人者、無御座候、然所々、冨士之雪流、木立境ゟ、夥鋪煙まき出し、猶以、山大地共ニ鳴渡、冨士郷中一邊之煙、二時計うすまき(渦巻)申候、如何様之儀者、不存付候、人々十方を失罷在候、晝之内者、煙計相見へ候所、暮れ六つより右之煙、皆火煙相見、此上如仕之義（儀）、可有之茂不奉存候付、御注進申上候、以上、 駿州富士郡 吉原宿 問屋 年寄 十一月廿三日 右之通、駿州吉原宿ゟ、只今宿次を以、注進仕候、尤御代官能勢權兵衛方ゟ者、未申来候、 安藤筑後守（道中奉行　大目付） 石尾阿波守（道中奉行　勘定奉行）	楽只堂年録（吉原問屋　注進状）	静岡県富士市吉原
		霜月廿二日の七ツの時刻より大地震、扨又地のしたまて只どろどろと只しんどふの了とく鳴ゆるききしハ恐しさは身のけもよだつ計（ばかり）也、	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村内野
		（宝永四年十一月二十二日） 一、暮六ツ時より夜中度々地震、	箱根御関所日記書抜	神奈川県足柄下郡箱根町
		又十一月廿二日之晩五つ時分ニ少シつよき地震致、八つ時分ニも又ゆり、	大地震之記	長野県下伊那郡下條村
		□廿二日　晴、西風少吹、○亥過少しゆり、○寅過少し地震、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
		同月廿二日夜地震之する事及三拾度、	冨士山焼出之節之事	山梨県富士吉田市
		十一月廿二日夜地震三度、	谷合氏見聞録	東京都青梅市二俣尾

十一月二十三日 （12月16日）	1日目	十一月二十二日夜九ツ時分に地志んゆり、又七ツ時、又二十三日ニ度々ゆり昼九ツ午ノ上刻ニ富士山東之ひら□□(樹立)とけなし之境と見へ里（黒）きばんぢゃく雲夥敷涌キ出、女(如)雷ニなりひびき、諸人是ヲ見テ何事歟（か）不審也、世滅ル相歟（か）ト老若男女肝ヲケシ驚入、扨晩方大火上ル、火見エル事御山一倍高シ、夜モ九ツ𠆢廿四日之朝迄弥々（いよいよ）なり都よく（強）大がみな里のごとく、夥敷大地にひびき家うごきて、はめなり渡りすさまじき事、二十四日五ツ、八ツ時両度地震あり、 扨みくりや（御厨）其外相模国江御山之焼砂降ル事如大雨、別而みくりやもかご（籠）坂より御殿之（御殿場）間石砂降八尺九尺都もり（積り）、富士山之御神火ニ而御厨みくりや之内すばし里(須走)村消失シ仕候上、三十人程死人有、火のごとくなる大石砂雨之ごとくふる故なり、依此田畑六万石程荒ニ成、さてふしん（不審）成事ハ風不吹時も、又ならひ風吹く時茂（も）富士山焼雲東箱根山之方へ行、西之風吹けハ猶行、昼ハ黒き雲夜ルハ雲火えんひかり物おとハ大雷のことく此事遠下総、上総国までも聞、江戸ニテハ二三日之間昼夜の無隔行燈挑灯とぼし（中略）、然ルニ駿河国別而原宿、吉原町、御山近所ニ候得共無何事、極月八日モ夜明ケ、九日朝七ツ過ニ御山大ニなり渡り焼納候、以上十六日目なり、富士山東ノ方ニ小山出ル、別御山之形也、天下大平□国土安穏□諸人極楽目出度、 歌ニいわく 御ふじ山　いつ能間にやら火がとまり 小ふしまふけて　民のよろこび 【昼乃景氣　絵図中の説明文】 宝永四年丁亥十一月廿三日午ノ上刻地震ユリ、冨士山雷乃如クナリ、焼出ル事如斯、右廿三日𠆢十二月八日迄十六日之間焼候昼之躰如此、此所江焼雲ノ内𠆢石砂下ルコト大星ノ如シ、積リテ宝永山ト成ル、但シ十一月廿三日計リ見ル、 【夜ル乃景氣　絵図中の説明文】 毎夜稲光りの叟く伊豆あまき山邊迄光り渡る事如此、 焼初十一月廿三日𠆢十二月八日ノ夜迄毎夜に如此見候、 但シ廿三日焼初ノ夜別而大きに當所人家之戸はめをならす、同ク明ヶ七ツ時ニ當宿へ焼灰降(フ)ル事唯壱度ナリ、 【焼納り乃景氣　絵図中の説明文】 右十六日之間焼ヶ十二月九日之朝明ヶ七ツ時比大キに壱つ鳴(ナ)ル九日にて山晴渡り見ゆる如此宝永山出来ル、	土屋家文書『（覚書）』静岡県史別編２、ｐ３４９－３５５	静岡県沼津市原
		同廿三日 昨夜中地震二度、今朝六ツ時𠆢少ツヽ之地震、昼之間九ツ時過迄不止、昼八ツ時比𠆢南ニむら雲下リ、其様子何そ出そふ成ル雲ニて、暫有テ都合の雲うす赤白ク曇リ雷も時々之有、間もなくあくの様成物ふり、余程積、夜四半時迄降リ、夜中ニ両度、余餘（ママ 程ヵ）之地震有之候、	鹿島藩日記	港区六本木(麻布龍土町)
		同(十一月)二十三日 一、昨夜中ニも地震弐度、明六時𠆢少々宛之地震昼之九半迄不止、昼八時𠆢南ニむら雲さかり、其様子何そ出左右成雲ニ而、暫有而都合之雲、うす赤白クくもり〔虫損〕之有、間もなく、あく〔虫損〕成ル、はい色之ふりもの〔虫損〕つもり、夜四半時まてふり、夜中ニ両度、よほとこの地震之有、（略）	直堅公御在府日記	港区六本木(麻布龍土町)
		廿三日　寅刻地震、陰、従（より）二辰ノ中刻一、南‐西ノ方戸障‐子動テ不レ止、恰モ如二地震ノ一及レ晝（ひる）半‐晴時‐々震‐動如レ雷、灰ノ降ㄱ（こと）如レ雪ノ、有レ暫變沙降ㄱ不レ止、及二二三寸ニ一及レ晩ニ四方曇ル、夜沙濕(シメリ)降夜中戸障子動不レ止、一人トメ（して）無レ不ト云ㄱレ為二奇異ノ思ヲ一右是者冨士山因（より）二炎上ニ一如レ斯云々、 （延暦十九年噴火、貞観六年噴火、仁和元年地震の記事） 冨士山根ノ方大ナルハ一・二尺、小ナルハ三・四寸ノ石降ㄱ如レ雨、依レ之人民大ニ死‐亡適々（たまたま）逃ル者不レ残ラ其所明ケ退ク云々、 甲斐國因レ響山‐崩埋メレ谷ヲ人家滅ス、冨士山ノ之禽獣悉ク移ル二餘‐國ニ一云々、 相模國中小‐石降ㄱ三‐寸、砂降ルㄱ六寸、梅澤ノ之‐驛沙降ルㄱ及二八寸ニ一、從リレ所ニ二尺、箱‐根・小‐田‐原・戸‐塚等恰モ如レ夜ノ晝ル用ユレ燈ヲ不レ能ハレ出ㄱ二傳馬ヲ一之由及二注進ニ一云云、 上‐総國沙‐降二寸小キ焼‐石降ルㄱ如レ雨ノ土佐國津‐浪打‐入人‐家大ニ‐潰云々、 一説御先手杉浦兵九郎知‐行‐所冨士山根方ニ此度大ナル穴出‐來入ㄱ藤葛雖レ及ト二五百尋(ヒロニ)一猶不レ知二其ノ奥ヲ一、中ヨリ火‐焔出云々、	冨士山焼記	東京都
		一、同年十一月二十二日夜一二度の小地震、同二十三日朝五つ過より、夥敷(おびただしき)鳴り物四つ過迄ひやう（ママ）どう（動）やまず、家毎の戸障子すさましく鳴渡、大地震かと相待所ニ四つ半過より雷もしきり也、然所ニ霰(あられ)のことく降り来ル物有、すわや霰と見ル所ニ、黒石交の軽ル岩夥敷ふりつもり、壱尺四方升ニ而様（ためし）候へ者、壱升三四合有、則八つ過迄降積リ申候、鳴物雷電ハ猶止まず、同夜の五つ過より砂降初メ、二十四日ニハ降砂大雨之ことく、雷電鳴物ハ殊ニ夥敷、砂煙ニ而闇夜の如ク昼中燈を用ユ、（略）十二月八日迄日数十五之日降続候、鳴物も何つとなく静申候、 一、砂降内ハ黒雲富士山より出、帯の如ク真東へつらなり、その下耳(のみ)降、何方ニ而も其下に見え申候、箱根山より西南は一円降不レ申候、十一月二十五日より、与風(ふと)津波と言いふらし、小田原西郡ハ不レ及申、中郡迄米穀高山へ運ビ、絶命を相待耳(まつのみ)ニ候、然所ニ小田原御奉行衆より被二仰出一候ハ、津浪見へハ、のろしを立ン、大筒をはなさんと御触ニ付、少シ静居申し候、 一、不二（富士）山焼ル折からハすさましき炎天ニかゝやきて、其上ニ黒雲と見ル時ニハ必大砂降来ル、猶富士山之焼出シ之穴ニハ黒雲三四ケ月は不レ絶、小山一つ出来、則宝永山とやらん、（略） 一、砂為御見分ト諸代官所御手代衆共改砂浅深之事、 冨士山之麓御厨大久保長門守知行所拾三ヶ村砂寸尺三尺七八寸𠆢壱丈弐三尺迄西郡弐尺五六寸壱尺迄中郡筋壱尺弐三寸𠆢六七寸迄、江戸弐寸、上総下総五六寸𠆢段々諸作一面ニ退轉、小竹村𠆢上八九寸𠆢壱尺迄大山續キハ壱尺五寸𠆢弐尺五六寸迄小竹𠆢下ハ五六寸𠆢四寸迄當所五寸𠆢四寸迄諸作退轉、（略）	開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳	神奈川県小田原市小船
		十一月廿三日　曇天 但、寅ノ上刻少々地震、午上刻より半時計震働（動）、俄方（ヵ）□（日偏に雲　曇ヵ）り雷有之、午下刻𠆢子ノ刻迄砂降三四分程積ル、（略）	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷

十一月二十三日 （12月16日）	1日目	一、宝永四丁亥年十一月廿三日之朝七ツ半時地震、同四つ時分迄地震三度、四つ半時より冨士山夥敷なりひゞき、いかつちなり渡り、追付西方ゟ岩小石ふり積り、其□昼八ツ半時分迄降り積、田畑共壱重ふり積申候、其節冨士山焼出ル、そらかきくもりいかつちなり渡り、常中冨士山やき出ル、日天の光も無之、きりふり申様世間くらみ、同廿四日之夜九つ時ゟ砂ふり、同廿五日之夜四半時迄降り申候、大目付江河内守（井上河内守正岑：老中）御目付江對馬守（稲垣對馬守重富：若年寄）渡之 覚 武州・相州・駿州三ヶ国之内、去冬砂積候村々、尓今其侭にて差置候由、相聞候、當春耕作、前砂取のけ候様ニ地頭より可被申付候、大分砂積村中百姓之自力ニ而成かたきほとの村々も、先取かゝり、砂片付之儀可被申付候、重而吟味之上御救茂可有之候、其内飢不申様ニ可被入念候、委細萩原近江守可被相談候、以上、 子ノ正月十六日 公儀からの申渡し回状の写し 一、去冬村々に積り候砂、（略）	村山公一家文書 御用留	神奈川県小田原市成田
		廿三日明方ヨリ五つ時分迄ニ少々之地震二三度致シ、同日九つ時分ニ東之方ニ而天とも不知地とも不知地迄ひゞく心ろニ而なり渡り申候得共、是ハ又地震かとこゝろへ人々飛出東之方を見候得共、せい天ニ而世上雲見江不申候ニむらさき色なる雲少シ出、其中ヨリ色しろきくも之様ニハ見へてよくよく見れハ雲とも不見右むらさき色なる雲ゟ三四間ながく出浪之やうに見、次第ニひゞきつよく候得共、なミのやうなる物もむらさき色成雲も段々大ニ見江申候、追付ひゞきも少宛止申ニ応（軈）而雲も浪之やうなる物もちりもせす初の方江暮時迄ニ引込申候得共、ひゞきも透と無御座候、又晩之五つ時ニ初之ことくひゞき段々つよくなり、少シづゝ間有てハひゞき、又間有てハなり出、地之ひゞき身ニ覚へ世間見候得共、山抔も働（動）キ申様ニ見へ候、山ハうこきハ不致候得共餘りひゞきつよきゆへうこく様ニ被存候、	大地震之記	長野県下伊那郡下條村
		一、廿三日　晴天（中略）夜明方ニも地震、四つ時迄三度動、五つ過ゟ未ノ刻迄、辰ノ方（東南東）何回ともなく山なり、雷のごとし、何之鳴共定がたく、皆人肝をつぶし候、夜五つ時ゟ又つよくなり出、夜明迄なり申し候、世人不安心終夜臥表惴也、夜七つゟ夜明ニいたり鳴止、夜ハ丸雪少つゝふる、	寳永四年亥正月吉日歳中行事	長野県下伊那郡高森町
		三日（二十三日）之明六ツニ大地震、女人子供周章顛倒(アハテタヲル)者其数夥敷、然共死ものハ壱人も無御座候、同朝五ッニ大地震鳴動する事車ノ輪(ハ)之如轟(トヽロク)して、冨士山之麓駿州平野村之上木山与（と）砂山との境より煙埋巻(ウツマキ)立登り、其音(ヲト)如雷(ライ)にして民屋も忽(タチマチ)潰ことくに動ク故、壱人も家ニ居住難成、夜ニ入右之煙(ケム)り火炎となり空(ソラ)に立のほり、其内ニ鞠(マリ)之ことき の白キ物と火玉天を突抜ク如にして、上ヵまこと夥敷而如昼輝(カヽヤキ)、吹出る煙東人押払へ雲の内ニて鳴動事如雷天地ニ響(ヒビキ)、忽(タチマチ)落事ヲ思ひ火元より雲先まて火気の行事稲妻のことくニして、夜者微塵(ミジン)も見之、其昼ゟ茂輝、	冨士山焼出之節之事	山梨県富士吉田市
		廿三日のあさより毎度の冂とくとたいもなくたゝとろとろと鳴動き候、扨亦其日の内諸人心ほそきことハ限なし、其日も暮方ニもなりけれハ、ふしきや御冨士山駿河郷御山七合過之通りにて俄に墨煙おひたゝしくおへ出、又もよも入會の鐘時分にも成ケれれ（ママ）ハ何にかの墨煙山の冂とくに成しに其煙の中よりさもをそろしき火煙燃出、其火玉は空へ打上リ見へにけり、扨火玉も恐しき世の中に地しんその夜の内五拾度余りして目もあてられぬ次第なり、最早其夜も夜半過にもなりしかば墨雲も火玉も冨士の御山江燃つくとて差懸小屋ニもたまりかねかの雲我々か身に打かかると思ひ我いとましな我すミかを打捨ならひの里、小明見村方へと老若男女子共迄皆引くし我も我もとにけたりけり、	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村内野
		（前欠）如ナリ渡リ其コヱ日□（中ヵ）ヒヽキ煙ノ中ゟヒカリ物無隙ヒラメキ渡、モエアカリ、西風ニ吹ナヒキ、南ハ原、芦（吉ヵ）原ヨリ沼津、小田原、箱根ヲ越、ヲウイソ（大磯）、トツカ（戸塚）、東ハ江戸、海面、御城中迄焼煙タナヒキ、石砂降リ、江戸町人見せ棚ヲ開事モナク、昼夜ヲワカタス、砂煙ノ中ヨリ刃ノヨウナル光物、イク千萬ト謂冂（こと）ヲシラス、ヒラメキワタル、ソノアリサマスサマジカリトモ、中々心語モ不及レス、北ハ四谷ヨリ札（布田）、石原、八王子、古仏（小仏）、或は猿橋、初狩、白野邊迄、砂煙、雪ノフリケルヤウニタマリケルトナン、スハシリ（須走）ヨリ小池、ナカハマ、吉田、谷村邊迄、昼夜ノヘタテモナク、昼ニテモ子共抔不見時は、タイマツニテタツネケルトナン、サテ、スハシリヨリ東相模(ハ伊豆)、武蔵領、石砂フル事、或ハ一丈或ハ五尺、三尺、二尺、一尺、其遠近ニヨリ砂ノ浅深アリ、去ルホトニ砂深、在處ノ人民ハ捨家ヲ、捨財宝、命カラ々ノテイニテ莚（むしろ）抔ニテツムリツヽミ砂無処へ逃ケリ、子共・老人抔は 皆ウマリ死スルトナリ、砂降ケル所、西東十里・廿里、南北五里・六里ノアイタ、砂ノ浅深アリ、ヤウ々其トシ雪月（十二月）廿六、七日ヨリ霧ナトノハけ候ヤウニ焼煙ハレ、見レハ、冨士半腹ニワカニ山アラワレ出、人皆キイノ作人ㄴ岡、御公方様ヨリ其山ヲ宝永山ト御付被遊候ナリ、其後、砂深処ハ砂掃候事モ不叶、御公方様ゟ日本諸大名・諸籏本ニ被仰付、應知行、百石弐両宛、各砂歩被召上ケ砂御掃被遊候トカヤ、御年貢外之加役ナレハ、民百姓愁カナシムハカリナリ、其比方々楽（落）書抔多、其歌に、砂拂冨士乃高根は現金や、私領、御領ヲマケテ弐両に、又、世はからし民はすりこきスル公儀、砂は上から金は下から、ナトヽ楽書シケルトナン、終砂掃成就せスト風聞ス、	甲斐国依田文書	山梨県山梨市下井尻
		同廿三日朝五時分過、大地震、同四時分是亦大地震、已後(イゴ)早速富士山鳴響キ、土石夥布(シク)山も崩(クズレル)歟(カ)欤(ト)と存候、跡(アト)ニ空(ソラ)すざま敷黒雲(クロクモ)出来、西之方江覆(ヲヽヲ)候得者、同時ニ火石降墜(オチ)候叟夥布、其石之大サ或者茶釜(チャガマ)、或者大天目程之火石車軸(シャジク)の(ノ)叟く降申、中ニ或ハ地墜(ヲチ)候石者三ツ四ツニくたけ散(チリ)候得者、中ゟ火炎出、かや抔積置(ナドツミヲキ)候上ニ落候得者、一時ニ燃付(モエツキ)焼(ヤケ)申候、依之莚(むシロ)ざるなとかぶり取消(ケシ)申候、家抔(ナド)一村ニ而五軒(ケン)三軒(ゲン)ツヽ焼申候、漸七時分ニ火石降止申候得者、人民少時、安堵(アンド)之心ニ罷(マカ)成候得者、夜(ヨ)入(イリ)ニ而者、又(また)夥敷(ヲビタヾシク)砂(スナ)降(フリ)申候叟、大サ或者大豆或者小豆程ニ而、明方(アケガタ)迄ニ者弐尺五寸程も降積軒下(ぬキシタ)ハ五尺余(ヨ)も積申候、尤夜(ヤ)中、雷(ライ)之(ノ)鳴(ナル)山之響(ヒヾキ)耳(キク)も潰(ツブレル)叟く、并数度(スど)地震山之鳴(ナル)、誠ニ言語(ゴンゴ)ニ難ㄴ尽シ大地ニ響候者、大地も山も崩(クズレル)程ニ存候、其響、戸(と)障子(シャウジ)之鳴動(メイドウ)、忽(タチマチ)ニ家も潰(ツブル)抔(ナド)と存ジ、東西(タウザイ)ニ馳走(ハセハシル)仕候得者、地響人民肝魂(キモタマシユ)茂(モ)消(キエル)叟く有之候、	土屋伊太夫文書	静岡県裾野市須山

十一月二十三日 （12月16日）	1日目	廿三日、　　曇懸りたる天氣　　夜中七ツ前餘程地震有之、（略） 一、五ツ半過之比、地震有之候、 （略） 一、朝五ツ半之比、地震有之、其後打續震動不絶有之、戸障子鳴リ及暮止不申、八ツ時分ゟはい（灰）のやう（様）成ごみすな（塵　砂）降り、是又及暮止不申、色はねずミいろ（鼠色）ニ而候、扨々恠異成物降、人々不審(思儀)致何とも難得其意、無心元□者計ニ御座候、雷餘程鳴、終日曇り懸りたる天氣相ニ而、無心元義計ニ而候、 一、御歸リ六ツ時、於茶間高尚院（護國寺寺中）へ御逢被成、今日降リ申候砂之沙汰、并振動之噂何とも難心得無心元間、火之元用心随分大切ニ申付候へとノ御事、寺中へも不殘同前申付候樣ニと御意ニ而、直ニ寺中衆へ不殘申渡候、右天氣相ニ付御能御延引之由、 一、恰春事、明日ゟ發足延引申樣ニと被仰渡候、重而護持院ゟ申來次第罷立候樣ニとノ御意旨、恰春房へ申遣候、 一、震動止不申、夜中も大分さわかし（騒）く鳴候故、五ツ時ゟ於護广堂御祈禱初、大刄僧正御出堂ニ而、不動法御執行、寺中并衆中誦慈救咒鬼致精誠修法*■（「己」の下に「十」：「畢」の異体字：おわり）、天氣晴星出候而砂はい降リ止申候、大僧正被仰出候者、如何樣今晩者休被申間敷間、於方丈廿三夜待致候樣ニとノ御事、夜食奈良茶なと被仰付、於茶之間寺中并衆中不殘罷出夜食給候而、九ツ時ゟ皆々引歸リ申候、 （十一月二十四日条） 一、暮六ツ半之比、下山次左衛門殿知行所ゟ被罷歸候、其子細者昨廿三日之朝ゟ知行所納所ニ被参候處、品川（武蔵）へ懸り候時分、八ツ比ゟ曇、雷電之如鳴渡震動不絶、燒ばい（灰）の樣成すな（砂）降り來、品川ゟ次第ニ六郷新宿（武蔵荏原郡）之方降リ樣大分ニ而曇懸リ、七ツ時分之比ゟ如晴夜ニ罷成候故、往來者とも灯燈ニ而行通申由、家内ニ者家こと（毎）に行燈之出置申旨委細物語被致候、昨八ツ比ゟ至于今右之通ニ而、降リ申燒砂田畑ニ積リ有之候、見候へ者品川ゟ鈴森邊新宿當〔邊〕リ迄者、稲かりかぶ（刈株）なと不見程ニ降リ、麥なとも漸々少々青ミ見へ申由、海道筋ニ積リ候燒砂、所ニゟ四五寸計も有之由、又者七八寸も有之所も御座候とノ義、兎角山之燒出申事と世間ニ風聞申由、箱根山ゟ西之沙汰者無之とノ物語、伊豆ノ大嶋燒欤、又者箱根山燒出ル事欤と、人々雑談申事餘リ不思議ニ存候故、知行所ニ罷在候而も不快、御當地之義も無心元、御前御機嫌之程爲奉窺と存、先此度此ノ分ニ而罷歸、追而罷越納所可申候間、其用意致置候へと申罷歸申候由、(今日晩七ツ時ゟ思立)具ニ御居間於御前御咄ニ而候、戸塚邊（相摸）へ者燒土ノ堅リ如何樣一拳程土降リ申由ニ而、上方ゟ御當地へ下リ申仁拾ひ被参候ヲ、壹ツ申請罷歸リ候とて、御前へ被懸御目候、随分能々燒たる土ニ而、降リ來候ばい砂と同色ニ而有之候、扨々希有成事とも于今止不申、人毎ニ不思議成事一圓合點不参儀と申計、	護國寺日記	文京区大塚
		一、十一月廿三日、夜中より空曇、夜明候得而も曇有之候二三日此方毎日曇候得共、少々晴候、丸雪少々降り候日茂有之候、雨者當月十日之晩ニ降候後降不申候、巳刻時分ゟ南西之方ニ青黒き山ことく之雲多く出申候は、地は震不申候へ而、震動間もなくいたし、家震、戸障子強鳴申候、風少も吹不申候、午之刻時分ゟ南之方ニ而雷鳴出、黒雲之内稲光強いたし候、雷鳴可申前ニは震動強いたし候、北之方江も白雲次第ニおゝい、惣天曇、午之中刻ゟねすミ色乃はいのことくの砂多く降申候、南西之黒雲少は薄成申候、未之刻時分ゟ震動少止申候、空は厚白曇ニ成、南之方ニて時々鳴、稲光夜中いたし、雷鳴可申前ニハ動揺いたし候、遠天ニて鳴雷之ひゝき強、地震き戸障子なり申候、雷聲ことの外長ク有之候、夜に入候へ而降候砂色黒く、常之川砂成、昼夜降候砂、凡二三分程つもり申候、四ツ時ゟ空少々晴、星出、砂降申候、夜半ゟ常之如月出候、北東は晴西南は黒雲退不申候、七ツ半時震動強いたし、西南ノ方稲光いたし、雷鳴申候、七ツ半過ゟ西風吹出シ、明六ツ前迠吹申候、風出候はゝ震動和申候、六ッ前風止申、少ツゝ吹申候、	伊東志摩守日記	墨田区東駒形（北本所）
		十一月廿三日四ッ時分ゟ砂利石壱尺三・四寸降り、麦作・菜・大根・苗代・草并野山・芝草降埋、田畑不残砂地罷成迷惑仕候御事、（宝永四年亥ノ十二月）	乍恐書付を以奉願上侯御事	神奈川県中郡二宮町中里
		一、廿三日、曇、（略）○今朝ゟ地震少ツゝ四五度有之候也、其間地ハ不震どろどろ鳴候て、戸なとがたがた鳴候事三時計也、強クも無之候也、其後少々雷有之候也、替候天氣合也、未ノ刻ニ至而ほこりの樣成物ふり候、硯箱之ふたへ市郎右衛門・善左衛門ため候て見せ候、指ニていろい候へハあくのことくニ候也、降始ハ午ノ中刻比よりふり候由、其時ハ細雪かと氣も不付候なり、震動ハそれゟ不止有之候、 ○今晩御納戸ニて御相伴いたし申ノ刻御暇ニ而退出、降候物いよいよ不止候、から笠さし候てあるき候也、屋根・道地ニもあくをしき候樣ニたまり、足跡付候也、しんどう不止候、強も無之候、雷其間ニ有り、稲ひかり有り、扨昼過より暗候て暮近ク之ことくニて候、申ノ中刻ゟあかしともし候也、めつらしき事ニて候、 ○暮比御殿へ罷出候、降物不止候、震動不止候、屋形樣御機嫌よし、未御風氣残候故御納戸ニ被成御座候、御夜食御相伴いたし戌ノ下刻比屋形樣御寝被成候、然とも震不止候間先々御座ノ間ニ罷在候、降物ハ戌ノ中刻比止候へとも震動有之候、子ノ刻迠罷在候へ共、不相替候間御番衆も可休と与左衛門同前ニ退出いたし候、しんどうハ夜中不止候也、	岡本元朝日記	台東区台東（下谷七軒丁）
		一、廿三日、早朝ゟ戸・障子鳴出、然共地はゆらす、定而夜日にも鳴候得共・風之樣ニ相心得氣遣無之、夜明、戸・障子鳴、しはらくも不止、依之、大地震可有之欤、諸人氣遣此事也、九っ時登城御仕舞遊筈ニ而、護持・金地・覺・進（王脱ヵ）休護國觀理・住心大護・四ケ寺・木工頭殿被罷出、然處、戸・障子鳴、折々震動有之、八っ時天曇・日暮之樣ニ相成、諸人不審ニ存候処、八っ半時ゟ砂降ル、屋ねの上二三分もたまり、依之、淺間嵩燒ルと推量ス、折々雷鳴、御仕舞之、随分御祈禱可仕旨被仰付、罷歸、則地天供始行之、	隆光僧正日記	千代田区神田駿河台（駿河台成満院）
		（十一月二十三日条） ○廿三日、江戸寒威凛々日光翳々風なし、頃日中、南の方に怪しき雲立つ、今朝坤(南西の方向)の方に黒雲起り、南へなびき、雲色煙の如く、雲端に薄紅の色を現す、雲気次第に厚くなる、辰前刻ゟ何方共なく鳴動して午の刻には石臼を牽立、臼を転ばすやうに、ごろごろとろとろと鳴響き、戸障子ぐはたぐはたと鳴りひゞき、南方にてすさましくごろつき、未の過刻雪起しの如くに鳴り、夫ゟ空中雪の如きもの降る、外へ出て見るに雪にはあらで灰也、色蕎麦粉の如し、次第に厚くなり霧の降るか如く也、申の刻ゟ灰と黒き砂と交り降、及ゟ暮鳴動強く、雲坤ゟ南へ行事早シ、黒雲の内に時々光あり、酉刻ゟ黒き砂斗〔割注：コンコンシヤウ鎌倉砂の如し〕降る、とをしにて揮ひ箕にて簸るが如し、戌の刻過に降止、子刻、天晴けれ共、西南の黒雲はうすろがす、鳴動終夜絶間なし、子の半刻月出明也、丑刻北西風吹き、砂を吹立申候、八つ過ゟ少宛両度地震、今夜諸人皆不眠、 ○昼之内往来する輩、傘或は笠を冠り往来す、	鸚鵡籠中記	新宿区市谷本村町

十一月二十三日 （12月16日）	1日目	宝永四年の冬(フユ)、士峰南(ジホウミナミ)の麓焼頽(フモトヤケクツレ)て冨東五十里を埋(ウズ)む、当郷(トウケウ)は殊(コト)に困窮に及べり、かかるが故に筆記して云く維時(コレトキ)宝永四丁亥年冬十一月廿三日の昼辰(タツ)の刻大地俄かに動揺して、須臾(シバラク)あって黒雲(クロクモ)出で西方より一天を蓋(オヽ)ふ、雲中に声有り、百千万の雷鳴(ライメイ)の如し、巳(ミ)の刻計(ハカリ)りに頻りに石砂(セキシヤ)を雨(フラ)す、大(オヽ)い蹴鞠の如し、地に落(ヲチ)破裂(ヤブケ)而(テ)火焔(クワエン)を出す、草木を焦(コガ)し民(ミン)屋を焼く、時に東西より雷声(ライセイ)の有りて、中途(ト)に至って亦(マタ)東西に別る、焉(コレ)ヲ聞く者数十里の中、己(ヲノレ)が屋上にあるが如し、火災無き所は日中猶(ナヲ)暗夜(アンヤ)の如し、燭(トモシビ)を点じこれを見るに、黄(キ)色にして塩味(シホノヤキアジ)あり、まさに三災(サイ)壊(エ)空(クウ)の時(トキ)至れりと思へり、男女老少佛前(ゼン)に座し、高声(タカコヘ)に仏の名(ミナ)を唱え，慇懃(ネンゴロ)に聖経を誦ず、唯(タヽ)□臨終(リンシウ)の速(スミヤカ)ならんことを、夜半に至って雲(クモ)の間(アワイ)に星光を見て天の未だ地に落ちずを識る、然りと雖も世界一般(ヒトツラ)石(セキ)砂(シヤ)、縦(タトヒ)天地有りとも生民何を以てか生命を存(ソン)せん、尚欲(ナヲホツ)す速やかに死なんことを、	降砂記	駿東郡小山町生土
		宝永四亥十一月廿三日五ツ時ヨリ砂降り始メ四ツ過ヨリ夥敷降り申候而昼夜共ニ大地震之様戸障子びりびりと致し十二月八日迄十六日之間降り候而昼夜わからず降り候、空崩るゝ抔と世の滅すると云居り候内八日五ツ頃□まり、砂降候方薄ク相成、日天子霧雨の様ニ相見江年寄子供ニ至迄、難□表江出伏□候處、段々夫ヨリ明るク相成相悦申□□□宇あるみ候處、御支配様□　御検分被成下置候□□□、	二階堂家伝来旧記書（般若院蔵）一部「近世小田原ものがたり」	足柄上郡川村山北
		同年一一月二三日昼巳刻(午前十時)より申刻(午後四時まで)関東震動、雷電にて暗きこと除夜のごとく、砂大分降申し候、雷・震動ならびに地震・小砂ふり候義七日、それより少しつつ二時三時程つつふる、一六日ふる、一一月二三日より一二月八日までふる、初めふり出し、一寸四、五分より三、四、五分程の岩石、二三日巳刻より申刻迄降申候、但し色白き岩石にて候、同日申刻よりねずみ色の小砂ふり候義三日、それより後はくらき小砂ふり申候、雪のごとく積り候義、厚さ七、八寸程、所々により一尺、二尺程積り申候、砂ふり候元はふじ山なり、右の山の近所の岩、人馬ともやける、其年は薪なし、仕付け候麦大分砂に埋り、くさり申候、惣じて砂ふり候国々は人馬とも大分わずらい申候、富士のねがた辺は、一丈四、五尺程つつつもり、申候、相州中郡辺は二三尺程つつ積り申候、	久良岐郡根岸村 高橋家文書（覚書）	横浜市中区（根岸村）
		一、江戸十一月廿三日朝ゟ曇、巳之刻ゟ地は震不申余程之地震之様、戸障子并天井計鳴申候由、同午ノ下刻ゟ白めなる炭、雪之様、夜五ツ時過迄降申由、段々暮頃より夜中黒め成砂降、時々雷之様鳴物仕、夜中も鳴物いなひかり昼之様、又々戸障子并天井計地震之様鳴候由、	盛岡藩　雑書　寶永四丁亥歳　正月	千代田区日比谷公園（外桜田）
		一、宝永四丁亥年十一月廿三日巳ノ上刻雲（空ヵ）雲り俄(にわか)ニ西方地震勤（動）夥敷(おびただしき)事大地ひゝ（響）け、老若男女肝(きも)ヲ消、地ニ伏シ、或ハ気ヲ失イ、或ハ前後ヲ忌（亡ヵ）事、未刻迄夫より石降リ重二三分より三四匁或ハ五十目の石降、暮六ツ時より砂降事大雨之如し、震動地震如ク成事十二月九日迄砂降砂積ル、深サ壱尺五寸六寸十一月廿三日巳ノ上刻より極月九日迄昼夜ノしゆ別無し、ともしびニ而給物(たべもの)等仕出し奉、隣家江も人ノ通イなし、	篠窪村名主（大地震噴火の一件）	足柄上郡大井町篠窪
		宝永四　十一月廿三日昼四ッ過大地震雷鳴、九ツ過暗夜に成て岩石降出し後砂降、（廿五日漸々朝日輪を拝す、田畑へ五寸程焼砂、麦作ハ不見へ願書畧（略）之、）	津村腰越旧志	鎌倉市腰越
		一、今日四時ゟ震動いたし然程雷も南東打曇九半時分ゟ灰降ふり、六時過迄も相止不申、二三分ほとも地ニ溜り申候、此外相替儀無候、	弘前藩庁日記（江戸）	墨田区亀沢（本所二ツ目）
		二十三日　〇寶永四年十一月　曇、巳刻過より、南東の方、雷鳴の如くにて震動不レ絶、立具びりびりと響く、	日記　宮川親良	滋賀県長浜市小室町
		十一月廿三日 一、巳下刻ゟ午中刻迄震働（動）甚雷少々致候、午下刻ゟ灰降候、	津山藩江戸日記	千代田区丸の内（鍛冶橋御門ノ内）
		二十三日辛未の日、巳の時ばかりに辰巳の方より、日向（ひなた）の方は白く、日かげの方は青く、雲に似て雲に似ず、烟（けむり）に似て烟に似ざる物、天の半（なかば）に立ちのぼる、見る者肝魂を失い、足を空にして四方に走り戸を失う、津波と言う者もあり、火の雨と言う者もあり、また八重雲と言う者もあり、また山が生（おい）たりと言う者もあり、あるいは女子供の啼喚を止めるため、ばんどう雲とも言っておる、恐ろしなんと言うばかりなし、おおよそ物にたとえる物なし、百重千重の雲に雲を重ねたるごとし、あるいは木綿（わたの）山のごときにもあり、あるいは雪の山、空にありて動かざるごとし、とかく絵に書くにも書けず、たとえる物はなし、所は冨士の方と言う者あり、二十三の夜に入りて、烟の中に火の気見えて光りわたる、（中略）扨、二十三夜に月を拝む者なし、その鳴り響くこと、夜に入りて火吹（ほど）百ちょう千ちょう一度に吹くがごとし、巨摩・八代・山梨郡には聞こえて、すうすうと響く、扨郡内・武蔵・下総・安房・上総・常陸・伊豆・相模・駿州より東は、百千の雷同時に鳴る如し、其の響き戸壁に当たり、毎日毎夜大地震の如し、亦富士の郡は二十二日より五日まで一日に七十度の地震ある所、富士のひの木丸尾と言う所也．其の日郡内の者、薬種掘りに彼の所に行きて掘る時に、俄に火出る、逃げて二人は三日目にかえりて死す、一人は行方知れず、 （略）東國に砂降る、始めは白く、後は黒く、郡内より江戸・伊豆・安房・上総・常陸・下総まで五寸・八寸・一尺・二尺あるいは一丈・二丈降る、火元三万石は家も人もなし、屋埋まりて見えず、村十七ヶ村都（すべ）て捨て、三万石砂にて諸作なし、人行方知れざる所有り、甲州八代山梨巨麻は烟も砂も降らず、其の砂の降る所は、後まで砂、食事に入りて苦しむ、	一宮浅間宮帳	山梨県西八代郡市川三郷町
		廿三日朝五つ時（午前八時）より殊外震動仕、西南の方より黒雲おゝひ来、雷も強くなり、段々一面に罷成候て昼九つ時（午後零時）より白き灰ふり人々肝をつぶし居申候処に次第に強くふり、中々そとにて目口あかれ不申、行先も確と見え不申、夫故皆々甲頭巾革羽織を着、又はから傘合羽を着歩行申候、七つ（午後四時）過より又々変り黒き砂が降申候夜に入弥震動強く雷稲光夏のごとく鳴り申候、西ノ御城の方に壱丈弐丈斗ほど宛の火柱何本共なく立申し候故人々肝を潰し申候、依之御本丸え諸大名様方御機嫌御窺諸旗本皆火事装束にて御詰方々御一家様方への御見廻火消盗賊方町中御廻り、扨々軍の様に相見え候、人々驚騒斗にて候、然る所夜九つ（午前零時）過より大風出右の砂を吹散申候故世上騒動夥敷義御推察可被遊候、夫より漸廿四日朝六つ（午前六時）過に降やみ世上少々静り申候、	宝永四年富士焼一件、小澤蘆庵の真面目．里のとぼそ第五集，p428-429.	中央区日本橋本町

十一月二十三日 （12月16日）	1日目	廿三日　壬寅　陰 従巳半刻震動、戸・障子鳴如地震、雷鳴南当時々鳴、一天闇如黄昏従未前刻如灰物降積如薄雪、及暮降物濃鼠色砂、夜入降物如鉄砂黒及亥刻頃天晴降物止、夜中当南鳴時々也、	肥前島原藩　江戸幕府日記	千代田区有楽町（すきや橋内）
		（十二月二日条） 神宮使中西木工大夫度會弘乗今日自_江戸_皈リ物語ニ曰、去ル廿二日江府ヲ出テ戸塚ニ一宿、翌日（二十三日）藤澤ニ至ル比（戸塚ー藤沢間　約8km）震動シ、次第ニ強ク鳴リテ石ヲ降ス[割注：其石焼テ甚タ軽シ]、茶店ニ入テ暫ク窺ヒ見ルニ往還ノ旅人其邊ノ男女驚キ噪クヿ（こと）甚シ、漸ク小田原ニ着、人民等資材雑具ヲ土蔵穴蔵ニ入レテ逃去リ其ノ家ニ纔（わずか）ニ一二人ヲ留メ置ク、震動ノ響ニ戸ハヅレ灯ヒ消、電光モ亦甚シ、沙降ルヿ五寸許、（二十四日）天明マデ震動不止、	外宮子良館日記	藤沢市・小田原市
		十一月廿三日四ッ時ヨリ終日丑寅ノ方大分ナリ申候ニ付き、船網共殘ラズ山ノ上へ運ビ申候、八ッ時ヨリ少しヅヽ間アリ夜ニ入り丑寅ノ方ニ高サ二三十丈廻リ二三十丈ノ火ノ山見エ人々驚キ申ス所ニ、十二月八日ノ夜雨降り火キユル、此日迄ハ毎夜焼ケ申候。後ニ承り候ヘバ富士山ノ東ノ方一里四方ノ穴焼出來原吉原ハカマヒナシ、三島ヨリ小田原戸塚其邊ノ在ニハ丈二丈ヅヽ焼ホコリニテウマリ申ス由、	上細谷村舊記	愛知県豊橋市細谷
		宝永四年子（亥の誤り）ノ十一月廿三日午ノ刻天気曇リ、地夥敷響キ、戸障子ビリビリ動キ、段々国土ヤミニナリ、昼カガリヲタキ、并ニアンドウナドツケ、コウヲタキ、気ヲ失フホドナクカミナリ殊外夥敷、八ツ時分トヲボシキトキ、砂白ク降下、其音スサマジク、外エ出、少ノ用足ス事モナラザリケリ、同廿四日之朝空晴タリ、然共、冨士山より丑子ノ方エスサマジキ雲有、其朝砂四寸ほともアラン、ホドナク降候、十二月八日マデ深サ壱尺弐寸降申候、	宝永五年閏正月砂降検分書上帳	伊勢原市西富岡
		一、宝永四亥年十一月廿三日晝時曇り、西南之方ゟ黒雲出，気色悪敷罷成候處、同日未ノ刻ゟ灰之様成物降、屋根之上、地之上ニはきよせる程積り申候，同夜ニ入、右の降物、黒きやき砂之様成もの降、翌朝は砂ニ成、大分ふり申候、世間闇ク、晝も行燈ヲ用イ申候， 一、右之砂富士山焼巖石砂大分ふり申候、	配島伊信伊盛（小田原藩祐筆）覚書	千代田区皇居外苑（西ノ御丸下）
		（十一月二十三日条） 〇小田原に今夜佐藤善次右衛門宿す、終夜雷、此雷と云は鳴動なるべし、実の雷にはあらじ、強く且つ地の動く事やまず、富士と足高山の間、十間余り燃炎の登る事二丈斗、石の焼て飛散る事甚しと、上着して咄しなり、予若林元右に直に聞之、 〇松平大膳大夫（：毛利吉廣　萩藩主　宝永四年十月十三日死去）飛脚三郎左衛門、今月廿七日の朝、熱田の咄しに云、廿三日昼過、江戸近辺黒雲覆ひ闇の如し、而灰砂降、廿四日未刻上州小田原へ参候処、富士山焼て五六匁ゟ十匁迄之小石降る、黒雲覆ひ道筋見へ不申候、往還通路無之故、彼地にて逗留いたし本陣ゟ通路無之手形取、国元へ参候、廿五日平塚にて承候へば、戸塚・梅沢迄、廿四日同様と、三嶋・沼津・原・吉原辺未毎日余程地震仕、所之者共何も脇へ立退申候由、	鸚鵡籠中記 若林元右・ 松平大膳大夫飛脚三郎左衛門、からの伝聞	東京都・神奈川県横浜市戸塚区・二宮町梅沢・小田原史・静岡県三島市、沼津市、富士市
		一、宝永四亥ノ十一月廿三日昼ニ石降リ、砂降夜ゟ砂降、十二月八日迄降積リ田畑ニ三寸余麦作荒田方砂除普請仕候依之、	富士山噴火救助金桜山村割合帳	逗子市桜山
		廿三日　九時雷數聲也、昨夜ハ地震もしたり、九半時出仕、道より灰ふる、天くらし、今日ハ御城へ被爲入、八時還御、進講之節ハ乗燭也、たゝし七つ時也、それより灰ふる事夜の五つ過に至る、「昨」（補入）夜中より地ひゝきする事絶す、	新井白石日記　下	千代田区一ツ橋
		十一月廿三日午後參るへき由を仰下さる、よへ地震ひ此日乃午時雷の聲す、家を出るに及ひて雪乃降り下るかことくなるをよく見るに、白灰の下れる也、西南の方を望むに黒き雲起りて雷乃こへしきりにす、西城に參リつきしにおよひてハ白灰地を埋みて草木もまた皆白くなりぬ、此日ハ大城に參らせ給ひ、未の半に還らせ給ひ ［割注：此日吉保朝臣の男二人叙爵のありし故なり］やかて御前に參るに天甚た暗かりけれは燭を挙て講に侍る、戌の時はかりに灰下る事はやみしかと、或は地鳴り或ハ地震ふ事ハ絶す、	折たく柴の記	千代田区一ツ橋
		一、宝永四年亥十一月廿三日朝青天ニ而寒ク同日四ツ時ゟ俄ニ空曇リ、如雷震動、此時クラクシテトモシヒ立ル、西方ゟ白カル石八ツ時迄フリ、夫ゟ暮六ツ時迄雪ニ雨フリ雷鳴ル、少シノ内チ青天ニ成テ又六ツ時ゟ空曇リ雷鳴リ稲光リ有テ黒砂降(フリ)、同夜九ツ時ゟ細カナル黒砂フリ、雷殊外鳴リ、同八ツ半時ゟ北ノ方ゟ晴レ南ノ方へ曇リ行、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		十一月廿三日九つ時岩石ふり、又さる（申）、石ゟゆき成、くれ六つニやみ、又それより、くろすな廿四日のよの九つ時分迄ふり、其内かみなり、しんとう者、同廿六日迄致候、又其内ちしんも入候、	千葉県君津市大井石出茂雄氏史料	千葉県君津市大井
		〇廿三日辛未、午上刻ヨリ西南ノ方曇リ雷ノ如ク鳴動不絶、戸障子鳴響キ、折々地震、未上刻ヨリ天曇リ、灰降ル、酉刻ヨリ丑刻マテ度々鳴響キ砂降ル、寅上刻ヨリ風吹キ明發ニ止ム、	伊達氏治家記録肯山公 續編 一	港区東新橋
		同年霜月廿三日午ノ刻雷鳴空ノケシキ焼ホコリフスボル如クシテ砂石降ル、俄ニ闇ト成人ノ面ミヘズ、初ハカル石ノクダケタルモノ降、後ハ黒キ砂フル、皆人前後ヲ忘却シテ動□（転）（にんべん　に　転）スル斗也、申ノ刻雪降リ天晴皆人安諸ノ思ヲナス、又夜ニ入黒砂降、極深闇ト成、晝ナレバ則闇(クラ)ヤミ也、此砂石フル叟同十二月八日迄也、富士山ニ大成穴出、大地ノ底ヨリ火出山土焼飛来也、此後風ヲ引煩事無限一人も風引ぬ者ハナシ、	一代記付リ津波ノ叟	千葉県長生郡白子町
		廿三日(十一月)(略) 一、今日、九つ半過に、雷鳴し灰降る、其後、小砂ふる、晝夜の間降るもあり、止むもあり、	楽只堂年録２１１巻	千代田区大手町
		一、廿三日薄晴天、昼過八ツ時ヨリ雷雲のことくニ成、南辰巳方ヨリ黒雲出、震動雷有之、戸障子へひゞき渡り、砂降夜ニ入別而くらく雪少まざり黒砂降、	伊能勘解由日記	千葉県香取市佐原
		宝永四年亥霜月廿三日くもり空、昼八ツ過より雷共不知南ノ方より鳴有之地震のことく戸障子へひゞき候而、空ハ雪空のごとく罷成天より灰降、空の色うつりニ而色こぬかのことく黄色ニ見ゆる、取置候を其後見候得者灰也、風も無之空ハ静ニ相見へ雪空のごとくニ而有之草木の葉へ降溜り候ハ白ク相見へ申候、暮候而も不相止降、但歩行致候ニ頭へたまり候をなで見候得ハ砂のごとくニ而目へ入候得者痛申候、夜ニ入候而ハ黒砂降小雨まぢり候而降、夜四ツ半時降止、此節昼中も暮合のごとくくらく候而、所ニより昼之内ともし立候所も有之由、	入目録	千葉県香取市佐原

十一月二十三日 （12月16日）	1日目	一、宝永四年亥ノ霜月廿一日晝八つ過（日付誤り）より俄に國土くらく成り、小石ましり（交じり）の砂ふり、段々くらがり、日中に火をとほし物を見る躰なり、夜に入て鐵砂のことく成る砂三寸斗降り積り、其より廿四日まて方々くらく成り、少しはれ、何事か出來可仕と諸人肝をひやし（冷やし）罷有候處に、廿五日に至り富士山の焼候て焼砂のよし江戸より申來、其時皆々氣を直し安と（安堵）申候、富士山より東に當り候國計砂ふり、房州なとハ砂もふり不申候、富士山近所ハ田畑は申におよはす家も所□里砂に埋り申候、相州内郡八万石余田地砂に埋り關東八州にて御領私領共に百石に金弐兩つゝ砂はき金御公儀様より被仰付出し申候、富士ふもとすはしり（須走）町下淺間の御宮と寺計家形見へ、町屋の大方ハ形もミへぬ躰に埋り、御公儀様より御配借（ママ）金下り　町屋立申候、此節富士町近所人も牛馬も大分に死亡申由、富士山ニ辰み（辰巳：南東）に當り小山出來、宝永山と名付申候、富士山近所駿州の内・相州の内にて田地に成兼候地所々御座候由、	萬覚書写	千葉県長生郡一宮町東浪見
		宝永四年(1707)十一月二十三日　富士山焼る、近国は地震焼る響き雷の如く炭成砂降、当国へは焼音聞ず、七ッ時南方より雷鳴しめ、始は糠の様成物降、其後は黒砂夜中降、富士の焼とは知ず、甚驚、	平山静江家過去帳	千葉県香取郡多古町
		寶永四亥(い)十一月廿三日大震動昼申之刻（后四 - 六時）石フル、同夜八丑刻（前二時ころ）砂フル、十二月十一日迄不レ止、積事五寸、	高照寺過去帳	千葉県勝浦市勝浦
		宝永四丁(1707)亥暦西國大地震津波入テ死人不レ知其数ヲ、前代未タ聞、当國ニハ霜月廿三日夜半ヨリ沙石降ル事経レ月不レ止、積事二寸ニ余リ（略）富士山焼ル叟　月経テ不レ消、	妙音寺過去帳	千葉県夷隅郡御宿町浜
		同廿三日朝初雪少し降、 一、小田原より為見分、畔柳門兵衛組茨木十五右衛門と申者、御関所町中替儀も無之段承届罷帰候、同夜、夜ニ入黒キ砂少し降、尤同日申ノ刻頃冨士山焼、黒煙御番所より見候、火之手も見申候、	箱根御関所日記書抜	神奈川県足柄下郡箱根町
		（一、廿七日ニ江島岩本院ゟ状被差越、如此被申越候、） 一筆啓上仕候、其御地御静誼ニて御手前様弥御堅固被成御座候哉承度奉存候、然者當地一昨廿三日之暮ゟ大雷石降、同夜夥敷雷鳴、砂降、震動戸障子響、翌廿四日朝少晴、巳之刻過夥敷雷鳴砂降震動、月夜ゟ昏、燈用申候、終日砂降、雷電強響、夜入迄止不申候、今廿五日止候得共、于今雷鳴響動止不申、落付不申候、併上下無恙罷在候、其元如何御座候哉、承度存飛脚申上候、取込早々申残候、恐惶謹言、 十一月廿五日夜　伊東志摩守様人々御中　　岩本院　書判	伊東志摩守日記（十一月二十七日条　岩本院より書簡）	藤沢市江の島
		廿三日終日辰巳ノ方ヨリ震動、廿三日夜ニ入終夜南ノ方へ廻震動夥敷、廿四日明（ママ）等ノ南方ヨリ黒雲夥敷出、東ノ方江タナビクコト鯨ノカシラノコトシ、終日ヤムコトナシ、灰降ル、後ニ知、富士山スバシリロヨリ焼出、富士郡コトゴトク石フル、江戸、砂毎日毎夜降コト都テ一尺余□□羽田一尺三寸降、十一月廿三日ヨリ十二月九日迄降ル、	谷合氏見聞録	東京都青梅市二俣尾（二俣尾村）
		寶永四年□亥ノ十月四日　同十日両日大地震より同十一月廿三日ノ九ッ時より雷天□□富士山辰巳ノ腰に[　　]四方□明道中原吉原より東相武州房州上総下総五ヶ国□黒砂フル□同十二月八日迄フル也又大坂ハ大津波入[　　]寶永山云フコレモ亥ノ年	大沼家過去帳	千葉県長生郡長生村本郷
		宝永四年亥十一月廿三日より十二月朔日二日迄黒キ砂降、尤庭にニ溜り候事，五六分程、右ハ自分祖母物語ニ而承之、（天明三年七月八日条）	天明三年卯日記（豊田村名主日記）	茨城県龍ヶ崎市豊田町
		廿三日　曇（略）　地震、雪おろし度々、	小﨑耕作家　日記	栃木県芳賀郡茂木町小貫
		一、右之大変江戸中ハ不及申、江戸奥細川玄蕃頭殿御在所茂テ木と申所灰砂降候由注進有之、行程江戸ゟ三十六里、（降灰日付無し）	富士山自焼記	栃木県芳賀郡茂木町茂木
		一、去廿二日三日両日富士山焼遠國へはい砂石降り震動夥敷江戸邊もはい砂大分振、旅行ノ人、路を踏違候程之事、今廿四日比邊ハ又今鳴止不申候由、江戸筋ゟ御奉行所へ申來候也、	御番所日記（十一月二十九日条）	栃木県日光市山内
		□廿三日　晴　〇戌半大に鳴、〇夜少しゆる、〇雷遠く聞ゆと云、（中略）	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
		一、十一月廿三日、大ニなりひゝき申候、	長瀧寺文書荘厳講執事帳　第八巻	岐阜県郡上市白鳥町
		廿三日　巳刻時分より地しんのやうニ戸しやうしなとひゞき申候、地しんにては御さなくゆらくといたし、きミわろく候て度々庭へ出申候やうニ御座候、夜へかけさやうに御さ候て空の色も何とやらん打くもりあしく御座候、そのうへにかやうニはい砂のやうなるものふり申候、つゝみてかき付御めにかけまいらせ候、いつかたぞ山なとやけ申候やと申候へとも空のけしき一めんニて何ともみわけかたく御座候、ひる七つ時分よりさしきのうちにてもひをともしまいらせ候やうに御座候、廿三日そとをとをり候者とも目口へはいなと入候てありきかね申候よし、ひゝき申候ハにし南のかたよりに御座候、廿三日夜中たえすひゝき候て廿四日にもおなし通にて御座候、さりなから朝ハそらはれ申候、それゆへにおもて庭の山よりたしかに遠山のやけ申候よく見え申候、それにて地しんにてハ御さなきとあんといたしまいらせ候、大納言様(徳川家宣：夫)も御らんせられ、わたくしもミまいらせ候、さてくすさましくおそろしき事にて御座候、いつかたのともいまたしれ申さす候、やかて注進御座候ハんまゝ、しれ次第さうく申上候へとまつくここもとのやうす、さこそとりくにさたいたして御きつかひあそはし候ハんまま此とをり申上候やうにとの事にて御座候、さてもいまたひゝき御座候てやけ申候煙空ニみち申候て打くもりもふくしき天気にておはしまし、北の方少はれやかに御座候のミにて、はいすなふり候てさしきのうちもけふり申候やうに御座候、何ともさうくしき天気相にて御座候、夕くれにハ神なりさへそひまいらせ候てすさましく御座候、いつぞや下され候たき物なとたき吉来香をもたきまいらせ候てすいふんくつゝしミゐまいらせ候　かしく　廿五日夜	基熙（もとひろ）公記　徳川家宣の正室熙子が父近衛基熙にあてた書簡	千代田区（江戸城西ノ丸）

十一月二十四日 (12月17日)	2日目	同夜（二十三日夜）の五つ過より砂降初メ、二十四日ニハ降砂大雨之ことく、雷電鳴物ハ殊ニ夥敷、砂煙ニ而闇夜の如ク昼中燈を用ユ、（略） 一、砂降内ハ黒雲富士山より出、帯の如ク真東へつらなり、その下耳(のみ)降、何方ニ而も其下に見え申候、箱根山より西南は一円降不レ申候、十一月二十五日より、与風(ふと)津波と言いふらし、小田原西郡ハ不レ及申、中郡迄米穀高山へ運ビ、絶命を相待耳(まつのみ)ニ候、然所ニ小田原御奉行衆より被二仰出一候ハ、津浪見へハ、のろしを立ン、大筒をはなさんと御触ニ付、少シ静居申し候、 一、不二（富士）山焼ル折からハすさましき炎天ニかゝやきて、其上ニ黒雲と見ル時ニハ必大砂降来ル、猶富士山之焼出シ之穴ニハ黒雲三四ケ月は不レ絶、小山一つ出来、則宝永山とやらん、	開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳	神奈川県小田原市小船
		一、二十四日明六時分、夜(ヨ)明(アケ)方少シあかるく相見、追(ヲツケ)付闇(ヤミ)成(ニナリ)、砂降候叉前の叉く、 一、同降暮(クラス)、挑灯(テウチン)抔(ナド)燃(トモシ)候(候テ)而致往来候處ニ、挑灯之あかりも見へがたく、雷地震、山之鳴者前の叉く、	土屋伊太夫文書	静岡県裾野市須山
		廿四日に至って微明(ビメイ)有り、燭(トモシビ)を捨てて始(ハジ)めて親子(オヤコ)の面(カオ)を見る、雨(ウ)砂(シヤ)微(ビ)少(セウ)にして桃李(スモモ)の如く、	降砂記	駿東郡小山町生土
		翌朝（十一月二十四日朝）は砂ニ成、大分ふり申候、世間闇ク、晝も行燈ヲ用イ申候、 一、右之砂富士山焼巖石砂大分ふり申候、	配島伊信伊盛（小田原藩祐筆）覚書	千代田区皇居外苑
		（十一月二十七日条） 翌廿四日朝少晴、巳之刻過夥敷雷鳴砂降震動、月夜ゟ昏、燈用申候、終日砂降、雷電強響、夜入迠止不申候、今廿五日止候得共、于今雷鳴響動止不申、落付不申候、併上下無恙罷在候、其元如何御座候哉、承度存飛脚申上候、取込早々申残候、恐惶謹言、 十一月廿五日夜　伊東志摩守様人々御中　　岩本院　書判	伊東志摩守日記（岩本院より書簡）	神奈川県藤沢市江の島
		（宝永四　十一月廿三日昼四ッ過大地震雷鳴、九ツ過暗夜に成て岩石降出し後砂降、）廿五日漸々朝日輪を拝す、田畑へ五寸程焼砂、麦作ハ不見へ願書畧之、	津村腰越旧志	神奈川県鎌倉市腰越
		宝永四丁亥年 十一月廿三日九つ時岩石ふり、くれ六つニやみ、又それより、くろすな廿四日のよの九つ時分迠ふり、其内かみなり、しんとう者、同廿六日迠致候、又其内ちしんも入候、	君津市大井　石出茂雄氏文書	千葉県君津市大井
		同十一月廿四日ノ日中如レ闇、往来燈行ヲトボス、	高照寺過去帳	千葉県勝浦市勝浦
		（二十四日）天明マデ震動不止、此ノ所ニ居テ落着ヲ見ン欤（か）、先へ行テ遁レン欤（か）、猶豫メ不レ決セ行テハ遁ル方アリト箱根山ニ登ル、東西晦冥更ニメ（して）咫尺モ不レ辨へ山ヲ半腹登リ過レハ天氣清明ナリ、然レ氏（トモ）震動ハ不レ止、三嶋旅店ニ着テ見レハ富士山[割注：半腹ヨリ上ノ方]ヨリ火出テ其ノ火ノハヾ二里許空中ニ燃上ル、或ハ五六間或ハ七八間許ノ磐石火ノ中ニ上ル、焼上ル磐ト下ル磐ト當テ大ニ鳴テ碎ケ散ル、日暮テ大地震、又子ノ刻許ニ大地震、依レ之直ニ旅店ヲ出テ其日（二十五日）駿府ニ至リ宿ス、此所ニテモ震動甚シ、前代未聞絶言語云云、	外宮子良館日記	神奈川県藤沢市・小田原市・箱根町
		廿四日　寅刻北風揚レ沙、天眼快 - 晴震 - 動強シ、戸障子時 - 々動ク、酉ノ中刻地震、	冨士山焼記	東京都
		一、翌廿四日、朝六ツ時之天色、北之方ハ晴、西南黒青き雲厚出、東之方江も少々右雲廻り申候、昨日之通り震動いたし、西南之方ニて雷鳴稲光いたし候、西之方ハ北之方次第ニ黒雲退晴候、五ツ時ゟ日天中晴候処へ登候故、日光出申候、四ツ前ゟ雷聲止、動揺もやミ申候、南之方黒雲は晴不申、九ツ過より西風少々吹、午之刻過ゟ西南之方薄青雲東之方江次第廻り、天中迠白薄雲候、西風少々吹、北之方西半分は晴申候、七ツ時ゟ又震動少々いたし候、西風日入前より止申候、夜入五ツ前少々強地震ゆり申候、地震いたし震動少々やミ、時々少々つゝいたし候、風少も不吹、星出候得共、南西(光無之候)之方黒雲登、半天ニおゝい有之候、南之方ニて稲光強雷聲時々いたし候、九ツ前ニ少々地震いたし候、震動時々少々つゝいたし候、南之方ニ而雷聲、時夜中いたし候、稲光いたし候、西之方半分程、南は一面ニ、東之方江も黒雲かゝり申候、	伊東志摩守日記	墨田区東駒形（北本所）
		廿四日明六つニ出右ひゞき候方を見候得共、四方天ともニはなれ山珍敷見江申候、其山之様成中ニ洞々之有之様ニ見江、御日之出るニ随而かなき山ニ雪之降かゝりたることく見へ候、昼ハ色白ク雲之様ニ見へ候、時々姿替り大小ハ切々也、	大地震之記	長野県下伊那郡下條村
		扨明ル廿四日の朝ハ我も我もと我家ニ帰り扨も恐しきと云ぬ人はなかりけり、よふよふ其日も暮方ニも成しかば、かの墨雲山のごとくに羅（罷ヵ）成、扨火えんのもへる躰火玉の天地へもえあかる事猶いよましになりにけり、其時きせん（貴賤）の人之あつまり、扨駿州領須走村ハ天火にて焼ほろび候と咄(はなし)ければ人々驚キ、是ハ誠じやうつつかと胆をけしあんじわづらひしもかの火煙火玉日中ゟハなを弥増打見へ、人は弥々驚キもはや今宵も我家にたまられじと人々同音に被レ申案じき、かの墨雲の中ニて鳴神ニて候か、またハ天地のなる神ニてか、しんどふのごとく其なるひびきをとのすさまじさは限なし、扨もよも五ッノ頃ニ成しかば、かの火煙火玉光は弥ましになるをみて是ハ何事とて人ハきも魂塊も消果る、我家ニもたまられずして右逃方へと我も我もと逃行、此廿三日の内の地のひゞきは只家小屋打ゆるぎたいぢ（大地）もくつるゝ（崩るる）ばかりなり、	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村内野
		（十一月二十三日条）〇廿四日朝日光顕る、昨日ゟ暖也、昨日南方海上、巳刻ゟ午の刻迠大きに鳴動する事三度、其以後極(メ)て赤き気、南の海上一面に浮、暫ありて赤気変而黒雲となり、黒雲上りて砂降る、 〇奥州ゟ来る者、昨日申の刻、江戸ゟ八里程東にて、砂の降にあいけると語ると、云々、 〇今日終日震動不止、昨日ゟ鳴る事大也、申の刻ゟ黒雲南方一面にして、雲東へなびく、夜中砂降る、夜中余程の地震両度、震動大に鳴事三度、〔割注：或人地一坪之内の降る砂を計量するに、三升五合と云々、〕富士山見ゆる、山の半腹ゟ煙起る、諸人於是富士焼て如此灰降る事を知る、〔割注：原吉原は石降り鳥など死す、廿四五年以前浅間山焼て、郷中灰降と云々、〕	鸚鵡籠中記	新宿区市谷本村町
		一、廿四日　晴天　霜多降、昨日降候砂黒ク罷成煤などのことく草木の葉へ取付底ニも有之、	伊能勘解由日記	千葉県香取市佐原
		一、同廿四日　晴天　朝夥敷霜降、昨夜降候砂草木ノ葉へ取付候而ぬれ色黒ク成煤なとのやうニ有之、昼時西風吹候而焼砂吹散目へ入、	入目録	千葉県香取市佐原

十一月二十四日 （12月17日）	2日目	廿四日朝北ノ方晴レ南ハ曇リ、同六ツ半時ゟ又曇リ少シ砂降、此時一坪計見ルニ弐斗八升八合有リ、同日七ツ時ゟ夜中八ツ半時迄石砂フリ、七ツ時ゟ南ミハ晴レ、北ハ曇リ雷聞ヘル、	富士山辰巳方焼出シ候事	木更津市犬成
		一、廿四日、晴候て辰ノ刻日出候也、併震動残不止候也、 〇今日ハ天氣よく候へ共少風有り、昨日之砂吹立候也、窓へ吹當候ハ秋田之雪を風之吹あて候ニ似候也、震動之残今日も時々有之候、（略）〇暮ニ御殿へ罷出候、いまた震動之残有之候、酉ノ下刻地震有之候、それ程強クハ無之候へ共、御庭へ　御出被成候様ニ申上候而御ゑん迄御出候処止候也、雷少ツヽ時々有之候、〇御しんノ間ニてうとん御相伴いたし候、亥ノ中刻退出、〇今夜もしんどうのきミ有之候、〇子ノ刻又地震有之候、可罷出存候処止候也、	岡本元朝日記	台東区台東
		廿四日明（ママ）等ノ南方ヨリ黒雲夥敷出、東ノ方江タナビクコト鯨ノカシラノコトシ、終日ヤムコトナシ、灰降ル、後ニ知、富士山スバシリ口ヨリ焼出、富士郡コトゴトク石フル、江戸、砂毎日毎夜降コト都テ一尺余□□羽田一尺三寸降、十一月廿三日ヨリ十二月九日迄降ル、	谷合氏見聞録	青梅市二俣尾
		一、廿四日、不動法・千手法始行之、五っ時迄戸障子鳴、折々震動、天曇・四つ時ゟ天晴、戸・障子之鳴も間遠ニ成、	隆光僧正日記	千代田区神田駿河台
		翌廿四日晴天にて別条無之由、此節江戸申成には信州あさま（浅間）嶽焼申由、則降候砂二通来御用状内ニ入置也、右之趣十一月廿四日付にて奥瀬内記ゟ申来、	盛岡藩　雑書　十一月二十八日条	江戸屋敷からの連絡を盛岡で記録
		〇廿四日壬申卯刻ヨリ西南ノ方曇リ、辰刻ヨリ夜ニ入リ不絶鳴響、戌刻、子刻両度地震、	伊達氏治家記録 肯山公　續編　一	港区東新橋
		廿四日朝六つ（午前六時）過に降やみ世上少々静り申候、然る所又昼時より富士の方より黒雲次第次第に南東の方へ覆来候故一切商事相止皆々空を眺め居申候、然に昼の内は震動斗にて無何事少々安堵いたし罷在候所、又々夜五つ時（午後八時）より震動強く成、雷稲光不絶、地震も夜中三度ゆり只々舟中のごとくに存罷在候、併大風無御座候故悦申候、	宝永四年富士焼一件、小澤蘆庵の真面目	中央区日本橋本町
		廿四日には奉日輪拝、	平山静江家過去帳	香取郡多古町
		廿四日、　晴、暫時震動止申候、 一、地震様成震動未止申候ニ付、於護广堂ニ大僧正直ニ普門院へ被仰渡候者、一山衆中へ不動法壹座宛修行致させ申様ニとノ御事故、護广堂ニ被居合候方へ者直ニ申渡候、長屋衆中へ者觀照房へ申渡遣候、今夕醫王院へ御（護國寺寺中、快傳）入被遊御兼約之處、　右之震動止不申故御延引之由、直ニ倭醫王院へ被仰聞候、 一、九ツ時、松平右京太夫（輝貞：側用人）殿ゟ封之御奉書來、御直答ニ而ニ候、相濟候、 一、終日戸障子鳴候事止不申、折々者暫時止事も有之候へとも、透と者止不申、不思議成事と申計ニ候、 （略） 一、五ツ半過ニ、餘程之地震有之、若強震出可申欤（か）と機〔氣〕遣用心申内止申候、	護國寺日記	文京区大塚
		同廿四日　南東少曇、震動、砂も時々ふり申候	弘前藩庁日記（江戸）	墨田区亀沢
		廿四日　癸卯　黒雲南方ニ残、其外は晴及晩景段々黒雲蔓(はびこり)折々光、南当如雷、震動事如昨日、家屋・戸・障子動響、従昨日は少時々少宛鳴、戌刻子后刻頃余程地震、夜中時々動揺如前砂少宛降、	肥前島原藩　江戸幕府日記	千代田区有楽町
		二十四日、晴、震動昨日よりは輕く、晝の内は少時止、申刻よりは朝より強く、戌半刻・子半刻地震、	日記　宮川親良	滋賀県長浜市小室町
		十一月廿四日 一、終日砂降事甚也、震働（動）稲妻折節雷も有之、戸障子鳴事甚也、	津山藩江戸日記	千代田区丸の内
		十一月廿四日　晴天　時々震働（動）有之、夜ニ入、五ツ半時少々地震有之、（以下略）	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷
		同廿四日暮六つ半、同九ツ頃強き地震致両度候、 一、夜迄ニ昼夜無間断致震動、暁夜七ツ時強致震動、夫より震動も止ミ火消し候、	箱根御関所日記書抜	神奈川県足柄下郡箱根町
		廿四日　今朝（×日）中書殿より被仰下、富士山より赤氣たち、南の方より雲たなひくとミゆ、しからは富士やけしなるへし、夜に入六半時地震、今日終日、西南黒雲たなひき、なりおとたえず、	新井白石日記　下	千代田区一ツ橋
		同廿四日　晴、 一、戌刻過地震、	御番所日記	栃木県日光市山内
		□廿四日　〇戌半地震、〇丑過地震、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
		一、廿四日　晴天（中略）夜五つ時地震する、（中略）夜九つ地震、（中略）	寳永四年亥正月吉日歳中行事	長野県下伊那郡高森町
		（廿三日昼頃ゟ廿四日朝迄地震相止不申、）其内廿三日（二十四日の誤りヵ）夜五時同九時両度大地震にて戸建具はつれ、敷居鴨居も離し候、	富士山自焼記（松平美濃守在所より注進状）	甲斐国府中(山梨県甲府市丸の内)
		廿四日　天氣吉、作久山へ勘定ニ由シ、地震西方度々成、	小﨑耕作家　日記	茂木町小貫

十一月二十五日 （12月18日）	3日目	（二十四日）日暮テ大地震、又子ノ刻許ニ大地震、依之直ニ旅店（三島）ヲ出テ、其日（二十五日）駿府ニ至リ宿ス、此所ニテモ震動甚シ前代未聞絶言語云云、	外宮子良館日記	静岡県三島市・静岡市
		廿五日雲中に日(ヒ)の光(ヒカリ)を現(アラハ)す、雨砂尚微少(チイソウ)して豆(マメ)麦(ムギ)の如し、間(アワイ)に桃李の如く有り・前(マヘ)の如く他方(タホウ)に行きし者(モノ)帰って家人に告げて云く是(コレ)士峰(ジホウ)の火災也、冨(フ)東(トウ)数(ス)郡(グン)に及ぶ、尚(ナヲ)平(ヘイ)安(アン)の土地有り、生民焉(コレ)を聞きて蘇息(ソソク)しぬ・資材(シザイ)を捨て重器(テウキ)を忘れて、老衰(ロウスイ)を扶け幼弱(ヨウジャク)を負い牛馬を牽(ヒキ)西南に走る、嗚呼(アヽ)悲しいかな、禽獣(トリケモノ)は地無くして飛(トビ)走(サル)可へきに打殺(ダセツ)して発れぬ、	降砂記	駿東郡小山町生土
		廿五日、夜中も不絶震動有之黒雲大分此方へ曇リ懸候、 一、震動夜明ケ候而も止不申、大分曇リ懸リ故欤、どことなく暗ク罷成、一圓晴不申候、震動と申も如雷電どろどろどろと鳴り出申候、戸障子之ひゞき（響）者少止申候、何とも難得其意事ともニ候、（略） 一、曇懸リ候雲、朝ゟ次第ニ北西之方へ廻リ、諸方晴夜之如ニ成、とろとろとろと鳴事も及暮止不申候、歡喜院へ居被申候中村平介殿、青山播广（磨）守（幸督）殿へ被参候處、上方ゟ之飛脚致到着、其者見届ケ聞及旨慥之噂ニ者、冨士之半腹ゟ燒出、伊豆大嶋燒出不申由具ニ物語ニ候、歡喜院傳説也、（略） 一、酉刻過、雷鳴震動有之、（略） 一、夜中も折々不絶どろどろどろと鳴渡、曇リ懸リすさましき天氣相ニ而、燒砂餘程麁キあられ（霰）の降ことく（如）ニ降、夜中六七分計も留リ申候、	護國寺日記	文京区大塚
		一、廿五日、朝天色西之方半分程、南一面、東之方江雲廻り黒く曇次第ニ天中ニおゝい、日光をおゝい申候、北は晴申有之候、雷夜中の通り時々南方ニて鳴り、地ニひゝきいたし候得て、戸障子ニひゝけ申候、雷聲長く鳴申候、四ツ時ニは次第ニ黒雲東江廻り、天中江南ゟ押出候、風少も無之、震動は止申候、九ツ時ゟ黒雲東之方江廻り候、雷時々如前ニ鳴申候、八ツ過時々天半余曇、東南之方如霧ニ有之、近家も見分無之候、七ツ時より黒き砂少つゝ降申候、雷も時々南之方ニ而鳴申候、日暮候はゝくらく有之、少之先も見江不申候、八ツ半前ニ砂降止申候、北之方空晴申候、夜中時々南方ニて雷鳴候、おとニ遠近有之候、夜中風少も吹不申候、	伊東志摩守日記	墨田区東駒形（北本所）
		廿五日に罷成候へば世上月夜のごとく遠くの人は面體見え不申候、亦々空の気色すさましく人々案居申候所、又南西の方より黒雲段々覆来、昼七つ（午後四時）比より黒き砂降り申候、之より震動雷稲光共ニやみ不申、夜中降つゞき今朝（二十六日）迄不絶降申候故凡二寸三寸ほとづゝ溜申候、	宝永四年富士焼一件、小澤蘆庵の真面目	中央区日本橋本町
		一、同廿五日朝天ヨリ毛降、此日朝ヨリくらく辰巳東南方天ニ黒雲出くらく、西北之方ハ晴天ニ而、昼中も暮合のごとくくらく候而、夜ニ入猶以くらく十方見へす、砂降右降候砂共前書之通日々之分包分ケ置候、 此節道中ヨリ江戸へ御注進書左之通之由、江戸ヨリ写参候〔十一月二十三日付　吉原宿　問屋・年寄からの注進状写、十一月晦日付　市野新八（郎）ほかの見分口上之覚〕、	入目録	千葉県香取市佐原
		扨明ル廿五日にハ皆々我が家へ帰り四方を見れ共鳴ひゞく計何事もなし、扨きせん（貴賤）の人ハ集り云様は最早是ほどの騒動夜ワ重二夜三夜逃けれ共、別儀之事もなしと申さるゝ、郡（群）集の人々申様最早此躰ニ御座候ハヽ逃行べくもなしこよい計は人々心を揃へ逃けまじと相談申、我々が家にすごすごと居申候得バ右に少も不レ違火煙火玉も右之ごとくに罷なり、扨其夜も四ツすぎニも成ければ、ならびの村平野村と申所へ石砂降をち候とて、彼村のもの共是ハ何事とて、我か（ガ）すみかを打捨老若男女はらんべ（童）馬牛迄引つれ内野村之方へと逃来ル、内野村之者共是を見て扨誠に石砂ふり降ルかといけれハをふといふよりも内野邑者共打驚き是ハとて我も我もと馬に鞍をき衣類食物道具馬に附ケてんでに明松ふりたて右逃シ方へと逃行、扨其夜は其中にこざかしきもの云様ハ扨皆ニ今宵ハ行方知らずに逃ケてもへんもなしさらハ道ゟ居村へ帰り可申と頻に云ければ逃行ほどにとり坂と申所迄逃行彼坂半と迄行けるに彼火煙火玉之様子能ニ見れば別像之事もなし、さらハ皆々爰に荷物をろし莚（むしろ）薦（こも）をしきこゝにて夜をあかし候得とあたりの枯木籠くずをかきあつめ火をたきつけ我も我もとかのたきぎあつめ火にあたり終夜うき物がたりしてかたりけれ、され共皆之あれ見給へあの恐しき火煙火玉もえる様子右ニ暮事なく見へ候得共あの火玉の地よりとろとろともえあがるをよくみれハ八まいのくまくらい程ゟまたもをふきなどふ（大きな胴）どつと地ゟもへいつる躰のすさまじさは限なし、扨其よりもよはんのころまでとりうちざかに罷り候へ共別したる事もなし、人々申様もはやこよいよりして詠見るにあの火煙火玉のもえいつるていのすざまじさは恐しきといふもをろかなり、然れとも此躰ニ候ハヽ皆々我家に帰り可レ申と頻にせいすればさらば別したる事も御座なきに我か屋へかえるべきとて皆々我かやへ帰りけり、扨其夜こざかしき者云やうハ然ハあの火煙火玉はへんげましやう（変化魔性）のわざと覚たり、昔ゟ悪魔外道たいじに弓箭鉄鉋鎧甲をしたてたいじすると申伝候、さらば鉄鉋弓矢を放し申さんと其よ中ゟして当所氏神様御誓とて鉄鉋弓箭を放し始此鳴鎮候迄ハ放シ兼其時ゟ有村方ニハ人形を拵鎧甲きせ餝たておき候、然ハ此火煙罷出ル時ゟ鎮ル時まてハ東ゟ南中天迄彼煙懸日天朝ゟ日中過迄ハ日顔見え不レ申候日中過ゟハ日入迄御日顔照鎮給ふ是ゟ凡夫申様日天様御先だに見申せば此世は何の子細なしと一心に南無諸神仏之祈念しわななきながら我か屋にすみ暮ニけり、扨其時吹出砂の降候様子平野村と申ハ壱尺三寸、長池村八寸、山中村二寸五分降積候、扨又内野村と申ハ作場所ニ一粒もふり不申、扨亦山の内に平野坂と申峠迄少々ヅツハふり候得共諸神の御み恵かや石砂壱ッも降申さぬによりきせん人々集能も悪も万民御悦限なし、扨亦当邑へ降申候砂ハ色青墨キ細成砂にて御座候如レ斯之砂ハ何く迄も降申候と聞及申候、扨当村三里南ニ当り須走村ゟして廿（二十）里四方之間ハ砂之降候躰何丈何尺とも可レ云様もなし、大分降重り村里も悉転退致候、	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村，山中湖村
		一、廿五日朝五ツ過又地震強御座候、右注進申上候、以上、	富士山自焼記（松平美濃守在所（甲斐甲府）より注進状）	甲斐国府中(山梨県甲府市丸の内)
		（十一月二十三日条） 〇廿五日　辰の刻日光少し見ゆ、天気朧々今日の寒難凌位也、大に響、震動時々聞ゆ、未刻比は天真暗になり奥深なる座敷には燈を点す、御祐筆部屋等未(この間に絵図あり)比ゟ火を点す〇申の刻ゟ夥敷黒砂降る、皆焼石也、天甚暗し、今夜中降つゞけ厚く積る、 〇尾州ゟ来る者の云く、藤沢にて小石降り、地の隠るゝ程積る、石の大さ胡桃ばかり也、皆焼石なり、（略）	鸚鵡籠中記	東京都・神奈川県藤沢市

十一月二十五日 (12月18日)	3日目	一、廿五日、曇ル、雷有り、〇巳ノ刻御殿へ罷出候、〇今日も時々震動有り、暗候なり、（略）〇やくらゟ申上候ハ、世間暗なり候て和泉守様之やくらも不見得候、出火候ても見得ましき由申候間、山方太郎左衛門へ申候而今夜ハ御山邊へ御足軽二三人附置、火も候ハヽ早々為知候様ニと申候、尤和泉守様衆へも為知可然と申付候也、申ノ刻御暇ニて退出致候、〇暮時ゟ又砂降候、先日ゟ砂黒色ニ候、多降候也、〇下山田新五郎今日井上河内守様御用番也にて承候、伊豆之大嶋焼候て小石ヲ為飛、箱根邊一昨日ハ通り留候由、御代官衆被申立候由なり、〇暮ニ御殿へ罷出候、さし笠ニてあるき候也、砂地へ溜り候也、亥ノ中刻退出、いまた砂降ル、〇今日寒候也、〇今日御舞臺棟上也、	岡本元朝日記	台東区台東（下谷七軒丁）
		〇廿五日癸酉卯刻ヨリ西南東曇リ、巳刻少晴、午刻東西南曇リ鳴響ク、未下刻ヨリ天曇リ砂降ル、申刻ヨリ雷鳴ノ如シ、入夜砂降リ鳴動、寅刻砂止ム、冨士山焼却スト云々、	伊達氏治家記録 肯山公 續編 一	港区東新橋
		廿五日　雷震動、天暗く、夜に入り灰降る事廿三日より猶深し、大嶋やくると云々、	新井白石日記　下	千代田区一ツ橋
		廿五日にまた天暗くして雷の震することくなる聲し、夜に入ぬれは灰また下る事甚し、此日冨士山に火出て焼ぬるによれりといふ事は聞へたりき、これよりのち黒灰下る事やますして十二月の初めおよひ九日の夜に至て雪降りぬ、此ほと世の人咳嗽をうれへすといふものあらす、かくて年明けぬれハ、戊子正月元日大雨よのつねならす、閏正月七日、去年冨士山やけしによりて、ほとりの國々の地埋みし灰砂を除らるへき役を諸国當らる、［割注：武相駿三州の地のため也、百石の地より黄金二両を献すへしと也、］	折たく柴の記	千代田区一ツ橋
		（翌廿四日朝少晴、巳之刻過夥敷雷鳴砂降震動、月夜ゟ昏、燈用申候、終日砂降、雷電強響、夜入迚止不申候、）今廿五日止候得共、于今雷鳴響動止不申、落付不申候、併上下無恙罷在候、其元如何御座候哉、承度存飛脚申上候、取込早々申残候、恐惶謹言、 十一月廿五日夜　伊東志摩守様人々御中　　岩本院　書判（廿七日ニ江島岩本院ゟ状被差越、如此被申越候、）	伊東志摩守日記（十一月二十七日条　岩本院より書簡）	江ノ島（神奈川県藤沢市江の島）
		二十五六（日）ハ砂静ニ降、鳴物ハ猶前ニ同シ、	開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳	神奈川県小田原市小船
		一、二十五日ニ少鳴も、響も止(ヤミ)申候得者、砂(スナ)者止不申、雷地震山之鳴少計ニ御座候、	土屋伊太夫文書	静岡県裾野市須山
		（二三日巳刻より申刻迄降申候、但し色白き岩石にて候、）同日（二十三日）申刻よりねずみ色の小砂ふり候義三日、それより後はくらき小砂ふり申候、	久良岐郡根岸村 高橋家文書 『覚書』	神奈川県横浜市中区．磯子区（根岸村）
		一、廿五日朝よりくらく暮合のごとく也、夜ニ入砂降、	伊能勘解由日記	千葉県香取市佐原
		一、廿五日、登城、昨夜中五時、中分之地震有之、折々震動并雷鳴、砂降り、戸・障子鳴、夜明ヶも同斷、天曇、七っ時ゟ 者家内火ともす程也、何方ゟも注進無之・冨士山燒ルノ由風説有之、依之、今日見聞之者被遣、冨士山昨朝見ル、随分御祈禱仕之旨被仰付、夜ニ入、九っ過、松平右京殿ゟ手紙來ル、駿゛吉原ゟ注進之書付來、其趣者廿二日八っ時ゟ廿三日朝五っ時迄、地震三十度程有之、去月四日地震ニ■(ツブレ)（金へんに列）殘候家大方■(ツブレ)候、廿二日七っ時ゟ冨士山黒雲巻上り、鳴動度々有之候、夜ニ入候而火焔見江候、廿三日之朝も弥不相替炎上申之由、依之、今日立願状相調、精誠御祈禱申也、	隆光僧正日記	千代田区神田駿河台
		廿五日　甲辰　陰、一天闇事如一昨日、日中採燭震動雷鳴、寒気甚、従黄昏黒砂降積及二三寸、夜入闇事不知、同刻（ヵ）ニ動揺夜中同前也、 一、今日従駿州吉原宿道中支配石尾阿波守氏信・安藤筑後守重玄方迄以宿次註進之趣 （駿州富士郡吉原宿　問屋・年寄共から十一月二十三日付注進状　略）	肥前島原藩　江戸幕府日記	千代田区有楽町
		十一月廿五日　□(日偏に雲　曇ヵ)天　時々震働（動）雷有之、申下刻ゟ夜中砂降六分積、	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷
		同月廿五日 今暮六ツ過ゟ又々砂降リ、雷も有之、風は無之、夜中すなふり通シ候、終日曇、又南方ゟ黒亦白ク曇、間々地震、震働（動）も有之候、	鹿島藩日記	港区六本木
		同月廿日（廿五ヵ） 一、今日、終日曇リ、又南之方ゟ黒赤白ク曇リ、間ニ震働（動）地震も有之、 一、御忌中故、天神御名代、且又、御供物等無之 一、今暮六ツ過又すなふり、雪も有之、風は無之、夜中すなふり申候、	直堅公御在府日記	港区六本木
		十一月廿五日 一、終日砂降事甚、震働（動）稲妻甚敷雷在之、戸障子鳴事甚也、	津山藩江戸日記	千代田区丸の内
		廿五日　子ノ刻過地震、従（より）二南方一次第ニ陰、北方少霽冷、戸障子時々動、及レ晩四方曇ル、因二申ノ下刻一黒沙降、此陰リ冨士山炎上之沙也云々、御徒目付三人、御小人目付六人、冨士山見分被レ遣、今夜亥刻迄之中可レ令二發足一云々、	冨士山焼記	東京都
		廿五日震動殊外強ク、同夜入五ツ時少シ地震有ツテ空晴レ、日和中分ナリ、	富士山辰巳方焼出シ候事	木更津市犬成
		又廿五日、廿六日黒砂降暗しめ、日夜の分ち無、明を立候由、	平山静江家過去帳	香取郡多古町
		廿五日　天氣吉、地しん天なる声、	小崎耕作家　日記	茂木町小貫
		翌廿五日之晩ゟ其かたニ而一時程づゝ間有てハひかりつゞいてハひかり申候、世間江ばつと光る事も御座候、又其処計少ひかる事も御座候、それヨリ日々夜々前方之ことくかわらず十二月三日迄見へ候、其後も少之地震ハ折々致し、又同月五日之昼時分ニ前度之やうに少ひゞき日々一度程宛風にひゞき聞申候、	大地震之記	長野県下伊那郡下條村
		□廿五日　昼前遠来の如く一つ聞ゆ、（略）	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市

十一月二十五日 (12月18日)	3日目	（十一月二十三日条） 一、冨士山ノ木立焼トヘ（ママ）出、夫より石砂吹出し、依レ之江城より為(して)二御検使と一十一月廿五日　一、市野新八郎様、一、馬場藤左衛門様、一、安田茂兵衛様、上河利助様、一、安原助八郎様、岡田四郎兵衛様、野村太兵衛様、矢沢竹四郎様、中村兵助様、都合九様、十一月廿五日ノ晩小田原御宿ニ而御出し、同晦日小田原昼ニ而御通可レ被レ成候、惣郡中石砂降田畑荒地ニ成候付、小田原御役人中様江御願甲上候、江府殿様江御訴訟ニ罷越候、御願書并御訴訴状乍レ恐（以下欠）	篠窪村名主（大地震噴火の一件）	神奈川県足柄上郡大井町篠窪
		（十一月二十九日条）○富士山又ハ其外之大山も焼候由、為見分御徒目付市野新八郎・安田彦太夫・馬場藤左衛門、御小人目付安田助八郎・黒川理助・小林兵助・野村太兵衛・矢沢文四郎・岡田次郎兵衛、此衆廿五日被　仰付其日出足之由也、	岡本元朝日記	台東区台東
十一月二十六日 (12月19日)	4日目	（一、二十五日ニ少鳴も、響も止(ヤミ)申候得者、砂(スナ)者止不申、雷地震山之鳴少計ニ御座候、）廿六日同断(ドウダン)、	土屋伊太夫文書	静岡県裾野市須山
		廿六日に至って半(ナカバ)は晴半は暗(クモル)、雨砂微塵(ミジン)の如く間(マヽ)有り豆麦(マメムギ)の如くなり	降砂記	駿東郡小山町生土
		一、廿六日朝ヨリくらく砂降、戌亥の方天少晴レ見ゆる、其外者雨空のごとくニ而くらく有之、（略）今日夜ニ入候而別而闇ク砂降、九ツ時ヨリ星少々見ゆル、	伊能勘解由日記	千葉県香取市佐原
		二十五六（日）ハ砂静ニ降、鳴物ハ猶前ニ同シ、	開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳	神奈川県小田原市小船
		廿六日　陰、北方南方少‐霽、震‐動時‐々、従二辰中刻一沙降、晝少シ日‐影‐差ス、入レ夜沙彌々（いよいよ）‐降四方闇シ、子刻南方光リ移レ壁云々、	冨士山焼記	東京都
		廿六日朝晴レ、同四ツ時ゟ日和ウヅム、暮六ツ時ゟ少曇リ砂チラチラニフリ夜九ツ時ゟ日和晴レ、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		（廿五日）昼七つ（午後四時）比より黒き砂降り申候、之より震動雷稲光共ニやみ不申、夜中降つゞき今朝（二十六日）迄不絶降申候故凡二寸三寸ほとづゝ溜申候、然に先々大風吹不申候に付諸人安堵致居罷在候、何とぞ雨降候様にと願居申候、今日も砂降申候へ共、さのみ震動不仕候故先々息を致罷在候、然る所右様子為御覧駿州え段々御飛脚参申候処に駿州豆州御役所方より御註進在之、「此度駿州富士山中宮より焼出申候て殊外震動夥敷仕、砂を吹出し虚空へ吹上げ道中返路も成兼申候位に御座候、殊に小田原小磯辺へは人の手足なども吹落し人々肝を潰し申候事にて候、最早砂も五尺斗も溜り申候」段御註進在之依之江戸より方々寺社貴僧高僧方社家山伏衆も御祈禱被成候由依之先々人々様子相知候故安堵仕罷在候就中小田原辺大磯辺へは五六寸斗ほど宛の礫石軽石のごとくに成降申候に付、諸人返路も成不申候て往還も留り人馬共に返路難成候、箱根など駕籠弐貫位取申候由、馬も急返り三貫位漸かり出申候由申候事にて候、定て段々上方への早飛脚返り御気遣敷御思召候かと爰元先々様子申上候、此位にて段々おだやかに成可申候間、御気遣被遊被下間敷候、右之様子にて御座候へば畢意命の気遣は御座在間敷候、儘母人様へも兄弟中並御一家中え□□(フメイ)に御心得奉願上候、尚又変事御座候はゞ追て可申上候以上、	宝永四年富士焼一件、小澤蘆庵の真面目	中央区日本橋本町
		一、廿六日、朝東南ゟ黒雲天中半余おゝい、北之方計晴申候、辰下刻ゟ南風少々吹、黒雲次第おゝい出、黒き砂頃日ゟは大きく粟つぶ程の多降、屋根へ落候ニ雨の叟くにおといたし候、雷時々南東ニて鳴候、昼過ゟ天中之黒雲少々薄なり、日光のかけ見江申候、東ゟ黒雲北之方江廻り黒雲厚おゝい申候、雷聲は八ツ時ゟ鳴不申候、暮六ツ時前ゟ少砂小降に成申候、天中之黒雲薄有之、昨夜程ニくらく無之候、夜九ツ半時ゟ砂降止候、砂二三分もつもり申候、天中少晴申候、雷時々東南之方ニて鳴申候、頃日ゟは雷聲遠きこへ間遠ニ鳴申候、夜中ゟ西北之風少々吹申候、	伊東志摩守日記	墨田区東駒形
		廿六日　乙巳　陰、従辰刻砂降終日南鳴時々有寒、従昨日薄、従巳刻南方少雲薄ツキ日ノ出モ折々見、北方江段々黒雲一面成及亥刻頃降止、 一、富士根方焼付而久能御山別条無之、御宮御安全之為御儀哉、委細可申越旨徳音院江従執事以宿次奉書相達之、 一、富士山辺焼旨相聞付、日光御門跡道中無異儀被有旅行哉、無御心元被　思召、御諚之趣役者信解院護法院江駅路迄従執事以宿次奉書相達之、	肥前島原藩　江戸幕府日記	千代田区有楽町
		廿六日、　今朝も曇懸、五ッ半之頃漸々六時過□晴之様ニ見候、（略） 一、（略）冨士山焼申ニ付、駿州吉原宿問屋年寄共ゟ御注進申上候趣、大僧正具ニ御物語被遊候、其注進之状、〔吉原宿　問屋　年寄からの注進状〕	護國寺日記	文京区大塚
		（十一月二十三日条） ○廿六日　曇、寒気甚時々雷鳴る、雷は戸障子に響かず、震動は障子びりびりがたがたいたす、震動も度々有之、風変して方角難レ定、○午の刻ゟ灰降、地色黒くなる、雲候御玄関前のくり石不レ見程積る、六七分積る、諸人笠を着す、 ○午刻大に雷鳴、坤(コン：南西)ゟ艮(ゴン：北東)へ鳴行、それより黒気一面に散す、	鸚鵡籠中記 (十一月二十三日条)	新宿区市谷本村町
		一、廿六日、登城、今日も折々砂降、天曇ル、鳴動ハ輕ク成ル、	隆光僧正日記	千代田区神田駿河台
		□廿六日　○昼前地震、○子刻地震、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
		一、廿六日、曇ル暗候也、雷時々有り、砂降候也、（略）○暮に御殿へ罷出候、○御納戸ニて如毎夜御相手いたし亥ノ中刻退出、砂少々小晴ニ成候也、	岡本元朝日記	台東区台東
		同　二十六日　日和、ふり物、其外昨日の通り、（略）	直堅公御在府日記	港区六本木
		同月廿六日 日和、相降物其外、雷も有之、昨日同前也、	鹿島藩日記	港区六本木
		十一月廿六日 一、終日黒砂降、三寸計溜ル、	津山藩江戸日記	千代田区丸の内
		十一月廿六日　曇天　時々震働（動）、雷有之、砂降、夜ニ入候迄降ル、	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷

十一月二十六日 （12月19日）	4日目	廿六日　雷震、灰降りて夜に入、今日承ル、富士の八分めほとの所よりやけ出し也、［吉原問屋からの注進状写］、相州のあたりへも百目ハかりの石ふりくたり（✕る）、麥作ことことくやふれうせたりといふ、	新井白石日記　下	千代田区一ツ橋
		又廿五日、廿六日黒砂降暗しめ、日夜の分ち無明を立候由、	平山静江家過去帳	香取郡多古町
		同廿六日　夜中時々砂ふり申也、	弘前藩庁日記（江戸）	墨田区亀沢
		当地ゑも廿六日の暮より廿七日の八ツ時まで砂降る、あつさ弐寸程なり、	年代記并過去帳 （清瀬市史 村野家）	東京都清瀬市上清戸
		廿六日　天氣吉、時ならずだんき、天なる、	小﨑耕作家　日記	茂木町小貫
		（同月廿七日条）昨夜も余程砂降曇、今日も同前、（略）	鹿島藩日記	港区六本木
十一月二十七日 （12月20日）	5日目	廿七日〇寅刻少地震（略） （十一月二十三日条　富士山噴火廿七日の江戸の記事に続き） 〇尾州名古屋にても、鍛冶屋町の下などにては富士の焼る煙よく見ゆ、寅刻ゟ卯の刻過迄火気能見ゆ、朝の内は煙り黒雲の如く見ゆ、〔割注：昼の内も時により見ゆ、〕予か辺（名古屋百人町：名古屋市東区）にては、日の出前に夥敷黒雲大磐石の重りたるか如く、立雲有り、端々日の映するにや、頼の如シ、真東に見へ次第に少宛北の方へ寄ると、是則、富士の煙也、其外所々にて見ゆる、世俗立雲と号す、毎朝見ゆ、〔割注：但シ曇は不見、〕	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
		（略）二十七（日）より又砂夥敷降、雷平等（同じ）、二十九（日）迄鳴申候、其内度々地震も仕候、二十九（日）より段々雷も静ニ、砂又同シ、十二月八日迄日数十五之日降続候、鳴物も何つとなく静申候、 一、砂降内ハ黒雲富士山より出、帯の如ク真東へつらなり、その下耳(のみ)降、何方ニ而も其下に見え申候、箱根山より西南は一円降不レ申候、十一月二十五日より、与風(ふと)津波と言いふらし、小田原西郡ハ不レ及申、中郡迄米穀高山へ運ビ、絶命を相待耳(まつのみ)ニ候、然所ニ小田原御奉行衆より被二仰出レ候ハ、津浪見へハ、のろしを立ン、大筒をはなさんと御触ニ付、少シ静居申し候、 一、不二（富士）山焼ル折からハすさましき炎天ニかゝやきて、其上ニ黒雲と見ル時ニハ必大砂降来ル、猶富士山之焼出シ之穴ニハ黒雲三四ケ月は不レ絶、小山一つ出来、則宝永山とやらん、	開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳	神奈川県小田原市小船
		宝永四年十一月一日より七日迄、富士山やくる、此間日本冥動すること夥し、武蔵・相模・伊豆三ヶ国のうちゑ砂降る、あつさ壱尺より壱丈迄なり、砂降り候所の百姓の助けとして、御領・私領共に高百石に付、金弐両つつりんじの天役かかる、但当地ゑも廿六日の暮より廿七日の八ツ時まで砂降る、あつさ弐寸程なり、	年代記并過去帳	東京都清瀬市上清戸
		廿七日　曇、完戸（ししど：笠間市宍戸）ゟさき（南）ハ砂大分ふり壱寸程たまる、府中（常陸府中：石岡)邊ニてハ朝食をあかしニて給候由、七ツ時ゟ少ツヽ晴ル、	小﨑耕作家　日記	栃木県芳賀郡茂木町小貫
		寶永四年亥　同廿七日迄やみ入はいの樣成砂ふり申候、皆々人々廿七日迄ハ燈を立て罷在候、湊村之義ハ廿七日斗也闇ニ相成皆々燈をともして罷在候、	湊村古記雑書	茨城県ひたちなか市
		扨廿七日は煙も高く見へけれハ昼の頃ゟ日かけさす、	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村内野
		廿七日、漸天氣、南之方ゟ晴曇懸北へ廻り申候、 一、夜明テ巳後五ツ前後、曇北之方へ廻リ、少々雷なと鳴リ渡リ申候、燒砂も随而降止申候、（略） 一、七ツ前ゟ燒砂降リ、餘程澤山ニ降留リ申候、常州水戸當〔邊〕り迄も、少々宛降り申沙汰有之候、	護國寺日記	文京区大塚
		一、廿七日、東南黒雲退、四方一面ニ白雲ニなり、雪降空の叟くに有之、西北之風少々吹申候、頃日ゟ天色静ニ見江申候、昼前ゟ東南之方ニ薄黒雲出候へ而、次第ニ北之方江黒雲東ゟおゝい申候、風少も吹不申候、七ツ時ゟ北風少々吹、北之方江おゝい候黒雲南之方江廻り、北之かた晴、右黒雲天中ニおゝい七ツ半時ゟおゝい、黒き砂降申候、次第ニ黒雲南江行、夜四ツ半時ゟ砂降止、空少々晴、星出候、夜中時々震動いたし候、雷聲遠少々きこへ申候、時々ニ、 一、廿七日ニ江島岩本院ゟ状被差越、如此被申越候、（以下　岩本院　書簡　写　内容は前掲）	伊東志摩守日記	墨田区東駒形（北本所）
		廿七日ニ者朝(アサ)砂(スナ)止(ヤミ)、空(ソラ)も(モ)晴(ハレ)候得者、晩(バンノ)七ツ時分ゟ又砂降り夜ニ入候而も止不申、	土屋伊太夫文書	静岡県裾野市須山
		一廿七日、曇候、（略）〇巳ノ刻御殿へ罷出候（略）〇御勘定衆ゟ樣躰書写来候、去廿三日駿河地震、朝ゟ三十度計有之、冨士山鳴出煙り立候処へ雪流かゝり煙巻上り震動、近郡之者共男女氣を失候者多候へ共、死人ハ無之由、昼ゟ晩迄黒煙ニて不見分候、暮ゟ煙りと見得候處火災ニ候由、駿州吉原村名主・老百姓御代官へ申上候由也、然ハ御當地へ砂降り候ハ右冨士山之巻上候砂灰等ちり降り候と相見得候、震動も右之ひゞきニ御座候、大山ニ右之通り候ハヽ関八州へひゞき可有之事ニ候也、震動ハ廿二日ゟ有之候とも申候、〇今晩御納戸ニて御相伴いたし申ノ刻退出、（略）〇暮ニ御殿へ罷出、亥ノ中刻退出、〇今晩も申ノ下刻ゟ砂ふり戌ノ刻止候也、〇冨士山近郷家も潰候由也、	岡本元朝日記	台東区台東
		一、廿七日、登城、今朝ゟ鳴動無之、折々晦明也、夜ニ入砂降ル、	隆光僧正日記	千代田区神田駿河台
		廿七日　晝之内ハくもる、日暮より又灰降、	新井白石日記　下	千代田区一ツ橋
		一、廿七日晴天、	伊能勘解由日記	千葉県香取市佐原
		（二十三日四日は、江戸ところによりて闇のごとくにて見えず）二十七八日もかくのごとし、燈火を昼も立て、物の色を見る、一尺先の見えざる時あり、東の国は所によりて不同あり、（略）煙の高き事、二十三日と七日とは極天に至る、そのほかは天の半ばなり、	一宮浅間宮帳	山梨県西八代郡市川三郷町

十一月二十七日 （12月20日）	5日目	（十一月二十三日条） 〇廿七日、日光雲間に少し時々見ゆ、寒気甚、未刻ゟ天曇り、申刻ゟ又砂降る、戌の前に止む、	鸚鵡籠中記	新宿区市谷本村町
		廿七日　東南西晴、北大ニ曇、従（より）㆓申ノ‐刻㆒沙降及㆓黄昏ニ㆒東南西大ニ‐陰、北方少‐霽及㆓亥刻㆒屬晴、此間世上咳氣甚盛、一人無免者、是冨士山炎上之含㆓毒氣㆒故云々、	冨士山焼記	東京都
		廿七日　丙午　少曇従申半刻西北之方響成、従酉刻小砂降、鳴動は無之、	肥前島原藩　江戸幕府日記	千代田区有楽町
		廿七日朝空ウツム、寒クシテ同暮六ツ時ゟ四方クラクシテ又砂フリ、（夫ゟ廿八日モフリ少シ晴テモ砂ハフリ、）	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		同　二十七日　此夜も、すなふりくもり申候、今日も曇り申候(略)	直堅公御在府日記	港区六本木
		十一月廿七日　曇天　砂石夜ニ入候迄も降ル、冨士山焼候故、右之通砂落、	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷
		廿七日は少々宛降、	平山静江家過去帳	香取郡多古町
十一月二十八日 （12月21日）	6日目	廿八日明方迄降、朝晴(ハレ)、 二十八日明け方まで降り、朝晴る、同二十九日、晦日、朔日右四日は昼の間は砂降り申さず晴天にて、然れども、山の鳴、地震は絶え申さず、	土屋伊太夫文書	静岡県裾野市須山
		一、廿八日、朝霜多降申候、北之方晴、南之方曇申候、五ツ半前震動余程致、四ツ時ゟ惣天白薄曇候、雲薄故日光は有之候、東南薄黒雲少も不退つかへ、終日天半分内ニ有之候、北西は晴申候、夜中雲右之通にニて東南の方ニて雷聲遠く時々いたし候、	伊東志摩守日記	墨田区東駒形
		一廿八日、昨夜中薄雪少降候、今朝天氣晴候なり、 〇（略）今日寒候也、〇今晩御相伴いたし申ノ刻退出、〇暮に御殿へ罷出、御納戸ニて御相手いたし、亥ノ中刻致退出候、 〇今日ハ晴候てよく候、いまた南ノ方雲有之候へ共時々雲切有之能候也、	岡本元朝日記	台東区台東
		廿八日　丁未　晴、朝霜厚、砂不降震動相止	肥前島原藩　江戸幕府日記	千代田区有楽町
		廿八日ハ鳴も煙和て日陰てり鎮給ふ、其日ニ当り当村之者共申様ハ最早他国ニハ石砂大分降積人民ことごとく退転と承及心細キ折節に当村にをいてハきのふ迄も其日迄も其砂ニても石ニてもふりをち申さぬにより、最早此ほとの乱剰日柄も程久敷候、唯偏諸神の御無僧かと皆人同音に被㆑申いついつより御悦ハ限なし、	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村内野
		廿八日、　晴、（略） 四ツ前地震少有之、響なとも少々有之候、	護國寺日記	文京区大塚
		廿八日モフリ少シ晴テモ砂ハフリ、同四ツ時一坪計見ルニ五升四合有リ、亦昼九ツ時ゟ又砂夜中フリ、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		廿八日　天眼快霽、霜大降太冷、大納言家御風氣、尾張殿、紀伊殿（徳川吉宗）、水戸中将殿御‐風‐氣云々、今日大名四十六人依㆓風氣㆒不㆓出仕㆒、	冨士山焼記	東京都
		一廿八日、登城、月次之御礼如常、但シ大納言様（徳川 家宣：江戸幕府第6代将軍（在職：1709年 – 1712年））御風氣ニ付御出仕不被遊、尾張殿（徳川吉通）・水戸中將殿（徳川吉孚：水戸藩世嗣）御風氣、御出仕無之、其外大名六拾人程風氣之御斷、出仕無之、殊之外風はやる、今日は天晴ル、七っ時ゟ天曇ル、	隆光僧正日記	千代田区神田駿河台
		十一月廿八日　陰天　時々少砂降、	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷
		同廿八日　今日もすな降申候、	直堅公御在府日記	港区六本木
		廿八日　今日は灰降す、後聞、駿府の邊よりハ富士足高の間より煙みえて、山やくると見えたり、地震もかろかりしよし、今日大納言様（家宣）御風氣にて、御本丸へ不被爲入之由、	新井白石日記　下	千代田区一ツ橋
		一、廿八日薄晴天、	伊能勘解由日記	香取市佐原
		廿八日に止、諸人安堵、	平山静江家過去帳	香取郡多古町
		□廿八日　〇酉半地震、〇亥前少しゆる、（愛知県名古屋市） (略) 〇於江戸、公（将軍綱吉）御風気故御登城無之、惣而諸大名大方風引、今日の出仕例月の三分一ばかりなり、其外朝市一篇に咳気甚流行、貴賤悉感冒、 （略） 〇今夜も砂降る、（東京都）	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市・新宿区市谷本村町
十一月二十九日 （12月22日）	7日目	廿八日明方迄降、朝晴(ハレ)、同二十九日、晦日(ミソカ)、朔日(ツイタチ)右四日者昼之間ハ砂降不申晴天(セイテン)ニ而、然共、山之鳴、地震者絶(タイ)不申、	土屋伊太夫文書	静岡県裾野市須山
		（略）二十九（日）迄鳴申候、其内度々地震も仕候、二十九（日）より段々雷も静ニ、砂又同シ、	開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳	神奈川県小田原市小船

十一月二十九日 （12月22日）	7日目	一、廿九日、冬至、朝霜余程降候、東南ニ薄黒雲出不退有之候、西北は晴申候、昼時より次第東南之薄雲天中江おゝい、日光を覆申候、北風少々吹申候、七ツ時ニは黒雲天中ニおゝい、西北も白雲ニなり申候、暮れ六ツ時、東南之方ゟ薄黒き雲、天中江押おゝい、星も見江不申候、西北之方は白雲ニ成候、風、よい之内は少も吹不申候、四ツ半時より砂少々降、七ツ過時迄降候へ而止候、八ツ半時、震動時々いたし、稲光度々致候、雷時々東南之方遠天ニ而鳴申候、七ツ半時ゟ雨降出し候得て、震動雷止申候、 〔吉原宿問屋年寄からの注進状写（略）〕	伊東志摩守日記	墨田区東駒形
		一廿九日、天氣よし、今日午ノ三刻冬至也、（略）〇今日之御飛脚ニ去廿五日上着之連状返事遣候、此度砂ふり震動之様子も委申遣候、御用別帳ニ有之故不記、（略）	岡本元朝日記	台東区台東
		一廿九日、登城、今日も晦明不定、	隆光僧正日記	千代田区神田駿河台
		一廿九日晴天八ツ時辰巳之方ヨリ青雲出夜ニ入くらく候而不見へ、（略）夜ニ入雨少し降砂降、	伊能勘解由日記	千葉県香取市佐原
		廿九日朝晴レ砂ハフル、同四ツ時一坪見ルニ壱斗四升四合有リ、同日夜ニ入テモフリ、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		廿九日　天氣吉、世間はい砂ふり天なる故神事、昼七ツ時より南ノ方ニて太鼓ノ叟く度々、夜中迄なる、夜ノ四ツ時ゟ南ニていな光度々、空、あかし、	小﨑耕作家　日記	栃木県芳賀郡茂木町小貫
		廿九日　戊申　晴、従未刻曇、少響成、夜入砂少宛降、夜半後一両度震動　但今日天気之曇ニ而は無之、従富士山之方相陰、 一、御被官吉本加右衛門・杉本源兵衛事身延山江為見分被遣之付、白銀十枚宛賜之、於焼火間稲垣対馬守重富（若年寄）伝達頂戴之、久世大和守重之（若年寄）列座、且伝馬七疋、御朱印内二疋宛加右衛門・源兵衛一疋宛、町棟梁三人江被下、右御朱印一通御作事奉行柳沢八郎右衛門江対馬守渡之、是　順性院殿御石塔有之、先頃之地震及破損付而被差遣之、	肥前島原藩　江戸幕府日記	千代田区有楽町
		十一月廿九日　陰天　夜ニ入少雨降、	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷
		廿九日　晴天、夜中沙降、従午中刻陰、此間於　御本丸、毎日御触有之云々、	冨士山焼記	東京都
十一月三十日 （12月23日）	8日目	一、晦日、昨夜中ゟ少雨降ル、（略）〇今夜（三十日）中も又砂降り候也、震動ハ廿七日ゟ無之候、いまた冨士山焼候と相見得候也、	岡本元朝日記	台東区台東
		同晦日 今暁又砂降リ、夜明而ゟ雨ましり、すな少しふり候也、	鹿島藩日記	港区六本木
		卅日、夜七ツ半之頃ゟ雨天懸リニ罷成、六ツ過ニ者餘程小雨降、後八ツ時ニ者晴、	護國寺日記	文京区大塚
		三十日朝七ツ時ゟ雨ニ成、又三十日五ツ時ゟ石砂フル、同夜ニ入テモチラチラニフル、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		晦日　曇、戸障子時々動、辰刻過雨降、晝ル沙少降、及申刻晴、大納言家御小験云々、 冨士山見分ニ被レ遣御徒(カチ)目付御小人目付帰参メ（して）申メ云、去廿五日丑刻着二箱根一自レ夫（それ）弥々（いよいよ）飛シレ駕ヲ駿河ノ國着二淺間ノ宮一［割注：自二淺間一到二 冨士山ニ一行程三里］因リレ是レ遥ニ冨士山之方ヲ望‐見候ニ頂上ニ者（は）雪如レ常‐住、東方従二中央一火柱立ㄱ高サ一間廻リ三尺程ニ見ユ、烟リ東方江靡（なびき）、沙ヲ巻‐上、根‐方甚‐闇メ如レ夜、小‐石降ルㄱ如レ雨ノ、自レ是先キ不レ能レ行ㄱ、中‐々非ンハ二御‐威‐光ニ一是レ迄茂（も）不レ能レ来ルㄱ之由、以二繪圖ヲ一言上云々、	冨士山焼記	東京都
		一、卅日、朝南東黒雲退、四方白雲ニ成、雨降申候、少々之間止候得ては又小降ニ雨降申候、北風少々つゝ吹申候、昼九ツ過ゟ雨止薄曇りニなり雲中ゟ日光差出申候、夕方ニ成西北晴申候、東南ゟ薄黒き雲、天半内ニおゝい有之候、薄黒き雲之内ニ白雲引はへ、黒雲之内ときれ有之候、頃日之叟く根黒き雲は無之候、暮候へ而四ツ過ゟ砂少々降出シ四ツ半過迄ふり申候へ而止申候、夫ゟあかるくなり申候、又八ツゟくらく黒おゝい出、砂多く七ツ迄降、六ツ前迄ニ少々つゝ降、夜明候へ而止申候、夜中風吹不申候 （年代記から延暦噴火、貞観噴火の記事引用）	伊東志摩守日記	墨田区東駒形
		□晦日　〇朝之内薄曇、昼前後須輿微雨して止、未より晴、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
		廿八日明方迄降、朝晴(ハレ)、同二十九日、晦日(ミソカ)、朔日(ツイタチ)右四日者昼之間ハ砂降不申晴天(セイテン)ニ而、然共、山之鳴、地震者絶(タイ)不申、	土屋伊太夫文書	静岡県裾野市須山
		晦日は其日当り何ゟも地震も火煙も繁り相見へ候、扨又火玉之事ハ本のことく天地へ燃上り焼出ルこと右のごとく冷鋪（すさまじ）さは限なし、	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村内野
		晦日　己酉　微雨、昼夜折々砂少宛降、	肥前島原藩　江戸幕府日記	千代田区有楽町
		十一月晦日　陰天　夜ニ入砂降、	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷
		一、晦日くもり空小雨少降夜ニ入別而闇ク砂降今日夜ニ入毛降、今朝五ツ時小倉三次郎江戸ヨリ帰佐原屋庄兵衛方ヨリ状ニ小田原雷度々ニ而家の梁引物なと落立木なと折れ候由、神奈川ヨリ上ハ昼夜のわかち無之昼も火をともし候由、降候砂に石まざりニ而壱尺余程宛溜り候由、御注進書写シ候由参候、 御注進書〔吉原宿から〕	伊能勘解由日記	千葉県香取市佐原

十一月三十日 (12月23日)	8日目	晦日 一、冨士山のやく(焼)る所を見分せし、徒目付の書付を、御目付衆より來らすによりて、爰に記す、 亥十一月廿八日、駿州駿東郡、冨士山麓、須走り村邊へ罷越、富士山焼候様子、見分仕候處、冨士東、西南之角、山三分二程下ニ而焼上申候、案内仕候所之者江相尋候処、大方木山木なし、山之間、せんすい(泉水)洞邊ニ而可有之由申候、今以、餘程強焼申候、時ニ ゟ、山少相見へ候事茂有之、又者煙強立候得者、相見不申候、煙先ハ、東北之方江参候、 一、須走り村江罷越、樣子見分仕候処、此所ニハ、冨士浅間社有之候、唯今焼立候所ゟ道法(程)、四五里茂可有之由申候、並焼殘之人家茂、軒際迄降埋申候、人者皆立退居不申候、降積候ハ、大方者九尺餘、壹丈餘茂積り候樣ニ相見江申候、今以こまか成焼石、又者大キ成茂交り降申候、拙者共、罷越候節茂、浅間社江半道程有之所ゟ、焼石大小共降申候、貳里程之内ハ、林之木葉透と無之、木茂焼相見申候、谷川茂透と降埋申候、夫故、近在之井之水茂透与拂底之由申候、 一、降候石、見分仕候所、かる(軽)石之樣成茂有之、又ハ小田原石之こまか(細)成樣ニ相見へ申候、大キ成分ハ、壹寸四方、或ハ二寸程茂御座候、 一、道中筋之儀、段々御注進申上候通御座候、田畑江砂大分ニ降積候故、麥作透与、無御座候付、百姓難儀仕候由、所々ニ而申候、右之外、替候風聞ハ不羊(詳)候、此外相替儀、無御座候、以上、 御徒目付 市野新八郎 十一月晦日　安田藤兵衛 馬場藤左衛門	楽只堂年録２１１巻	千代田区大手町
		晦日　天氣悪敷、雨雪少ふる、	小﨑耕作家　日記	栃木県芳賀郡茂木町小貫
十二月一日 (12月24日)	9日目	十二月朔日　曇、昨夜もすなふり申候、（略）	鹿島藩日記	港区六本木
		十二月朔日　くもり、昨夜もすなふり申候、(略)	直堅公御在府日記	港区六本木
		十二月朔日朝少シ晴レ、マタ曇リ砂フル、夜入雨フリ、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		一、朔日朝ヨリくもり空闇ク有之、昨夜毛降候由ニ而人々拾ひ申候、戌亥の方少晴見ゆる、其外ハくらく有之、（略）夜晴レ星出ル、	伊能勘解由日記	千葉県香取市佐原
		師走の朔日ニハ日神朝より奉拝ス、二日ハ同樣成、三日の日ハ日雲宛、四日のあさハ雪降白ク見へけれは、	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村内野
		一、十二月朔日、朝薄黒き雲東南ニ引はへ候、根黒き雲不出候、西北は晴候、四ツ時ニは惣天白雲ニ成、東之方ゟ黒雲天中江登り、日光をおゝい、西ゟ東へ薄黒き雲大筋立曇り、霧降候樣ニ成候、夕方ゟ西北之方少々晴、西ゟ東へ黒雲引はへ申候て、少薄くなり霧の叟くに有之、隣家も見へ不分候、六ツ時西北は晴、星出、東南は曇り申候、北風少々吹申候、夜五ツ半時西北晴、星出候、西南之角ゟ薄黒き雲東之方江引はへ有之候、夜中西北は晴、東南は薄曇り有之候	伊東志摩守日記	墨田区東駒形
		十二月朔日　曇天　時々少宛砂降、	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷
		十二月朔日、朝之内曇懸、夜之内ゟ大分強降、黒砂なと二三分計降リ積候、	護國寺日記	文京区大塚
		朔日　陰、夜中砂降、	冨士山焼記	東京都
		廿八日明方迄降、朝晴(ハレ)、同二十九日、晦日(ミソカ)、朔日(ツイタチ)右四日者昼之間ハ砂降不申晴天(セイテン)ニ而、然共、山之鳴、地震者絶(タイ)不申、	土屋伊太夫文書	静岡県裾野市須山
		十二月大己卯朔日、二日庚辰日未だ神火鎮まらず、煙は常に江戸へ行く、	一宮浅間宮帳	山梨県西八代郡市川三郷町
		（十一月二十八日条） 〇十二月朔日昨夜砂多降、 （十一月二十三日条） 〇十二月の初、相州佐川(酒匂川ヵ)へ人の首又は手足など多く流れ来るも、富士の山下の村々、石にうたれ形くだけて、かゝるものも流れ出けるにや、運上を取あけられて下部いたみ療治するがの富士三里焼く、 〇富士焼候処、為見分、御歩行衆被遣候と云々、〇みくりや十里木村、檜木平と申所、駿河表ゟ富士詣之道東郡内駿州の内、檜木平と申所ゟ焼る、富士より高く煙上ると、云々、 〇みくりや十里木村は、小田原領なり、伝法村は曽我播磨守・杉浦兵九郎・安藤内記領分也、伝法村ゟ焼出す所迄は、指渡し三里有之、 〇焼穴大さ一里余り、〇杉浦兵九郎領分三千石の処永荒になる、〇右の辺大方永荒になり砂積て家を没す、〇右焼之所砂を除け申候に付、大名三人御手伝に被仰付、	鸚鵡籠中記	新宿区市谷本村町
		一、朔日、曇ル、（略）〇西ノ丸大納言樣（徳川 家宣）御風氣ニて去廿八日・今日共ニ御本丸へ御出無之ニ付、明日御大名樣方西丸へ為窺御機嫌御　登城可然旨、御手寄之御老中樣ゟ被　仰渡候、此方樣へも秋元但馬守樣（十二月月番老中）ゟ下山田新五郎被為呼、御書付を以被　仰越候也、	岡本元朝日記	台東区台東
		朔日　庚戌　甚陰、砂不降、 一、今度地震付而道中筋所々御普請之御手伝被仰付面々、酒井左衛門尉忠真（忠直：庄内藩主ヵ）名代酒井石見守□（忠宗　出羽松山藩主）・真田伊豆守幸道（信濃松代藩主）名代真田出羽守（信宏　嫡子）・本田吉十郎（忠孝　越後村上藩主　幼少）名代本多淡路守　一同秋元但馬守（喬朝　川越藩主　宝永四年十二月月番老中）伝達之、右御普請御用之儀は井上河内守（老中）江可相談旨伝之、執事列席、御白書院縁頬、	肥前島原藩　江戸幕府日記	千代田区有楽町
		十二月朔日　今朝市正殿（村上正直）ゟ、御用之儀ニ付可令出仕之由ニて、九時出仕、上方（近衛基熙）より來る年中御儀式（當時年中行事）之書中の御たつねあり、今日きく、富山(士)山下焼るところ、三里四方ハかりあたりによられす、二里ハかり近くへよりて、ようようにうかゝひ見し所也、御林へやけつくへしやと云々、今日も御成ハなし、	新井白石日記　下	千代田区一ツ橋

十二月二日 (12月25日)	10日目	二日ゟ終(ヲワリ)迄者、又昼夜(チウヤ)共砂も降、雷地震も強、山之鳴響も一倍ニ多ク打続、八日之夜中九日之明七時分迄ハ、山も焼(ヤケ)止(トドマル)、雷地震響も静(シズカニ)、晴天ニ罷成候、然共、廿三日ゟ終迄、風者透(スキ)と吹(フキ)不申候、	土屋伊太夫文書	静岡県裾野市須山
		(師走の朔日ニハ日神朝より奉拝ス、) 二日ハ同様成、(三日の日ハ曇、宛四日のあさハ雪降白ク見へけれは)	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村内野
		一、二日、朝四方白曇に成候、東南村雲立、雲切いたし候、風吹不申候、四ツ前ゟ四方雲晴、頃日ニ無之晴ニ而日光出候、北風少ツヽ吹候、七ツ時前ゟ西南之角ゟ黒雲、東之方江引はへ、日光をゝい次第ニ南東曇り候、夜中弥曇り、四ツ半過候時分ゟ七ツ前迄少ツヽ砂降申候、風は無之候、	伊東志摩守日記	墨田区東駒形
		一、二日、天氣よし、(略) ○東海道筋地震破損所々御普請御手傳、酒井左衛門尉様・真田伊豆守様・本田吉十郎様、昨日被　仰付候よし也、(略) ○今日ハ天氣能あたゝかなり、○戌ノ刻ゟ曇也、○今夜中も少砂降候也、	岡本元朝日記	台東区台東
		十二月二日　今朝ゟ晴天ニ而、近日一之日和也、(略)	直堅公御在府日記	港区六本木
		十二月二日　晴天	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷
		十二月二日ヨリ三日迄白キ毛降ル、長サ一寸二寸余リ、富士山焼ル叟月経テ不レ消、	妙音寺過去帳	千葉県夷隅郡御宿町浜
		一、二日晴天昼過ヨリくもり夜ニ入闇ク有之今夜も砂降、	伊能勘解由日記	千葉県香取市佐原
		二日朝少シ晴レ、又四ツ時ゟ曇リ砂、同日夜ニ入雨少シ降リ、風此間一向ナシ、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		二日　辛亥　晴、至晩曇、砂少降、	肥前島原藩　江戸幕府日記	千代田区有楽町
		二日　(略) 去比より毎夜灰降、たゝし昨夕ハふらす、	新井白石日記　下	千代田区一ツ橋
		二日　霽曇、夜中黒沙降、 東海道沙 - 除御手 - 傳被二仰付一　酒井左衛門尉・真田伊豆守・本多吉十郎	冨士山焼記	東京都
十二月三日 (12月26日)	11日目	三日、朝曇、夜中少々砂降リ申候、	護國寺日記	文京区大塚
		同三日朝日和中間ニシテ五ツ時分ゟウスグモリニテ砂降、晴レ日少シ照ル、北方曇リ、同九ツ時一面ニ曇り砂フリ余程七ツ時ゟ少シ晴レ、東方曇ル、同夜ニ入砂フリ、富士見ユル、山ノ南ノ方クラクシテケブリ立見ル、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		一、三日、朝西北之方は晴、西南之角ゟ黒雲南東江引はへ、黒雲村々立有之候、日光を終日雲おゝい、夕方東南霧煙之如くニ有之候、夜中東南は曇り、西北は晴、星出申候、風吹不申候、砂降不申候、	伊東志摩守日記	墨田区東駒形
		十二月三日　今朝、又すなふり、終日くもり申候、(略) 一、遠州袋井御本陣田代八左衛門、先頃之地震家居破損仕候付金子弐百疋今于被下之、	直堅公御在府日記	港区六本木
		□三日　辰半過震動少しゆる、○午八刻大に震動少しゆる、大地震以来加程強き震動なし、午刻、黒雲一筋坤(南西)より艮(北東)に至りて、橋を渡すが如くたなびきたりと、天野信景(あまの さだかげ：江戸時代中期の国学者，尾張藩士) 云へり、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
		(十二月) ○三日巳刻地震及暮砂降、(十一月廿八日条)	鸚鵡籠中記	新宿区市谷本村町
		三日の日ハ日雲宛、	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村内野
		一、三日、曇ル、(略) 今夜高霜降ル、	岡本元朝日記	台東区台東
		十二月三日　曇天　夜ニ入砂降、	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷
		三日　陰、夜中黒沙降、迄レ晩屬晴、　冨士山ノ方霽ル、火氣如レ雲東方靡ク、見レ之者ノ如レ堵ノ、	冨士山焼記	東京都
十二月四日 (12月27日)	12日目	(十二月) ○四日霜満砂上、(十一月廿八日条)	鸚鵡籠中記	新宿区市谷本村町
		四日のあさハ雪降白ク見へけれは亦其日に当り地震大分大動し夜半之頃まてハしずまらず、其夜に限火玉燃出前度之ごとく恐しさは限なし、	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村内野
		一、四日、昨朝之空之如くニて霧煙深く下り、隣家も見わけかたく候、四ツ時ゟ段々白曇りニ成、四方一面ニ曇り、日光不出候、川叟の外鳴申候、九ツ過地震少々ゆり、黒雲少々薄なり、雲中ゟ日光薄出候、九ツ半時ゟ砂少々降候、八時は惣天白曇ニ成候、川鳴止不申、八ツ半前ゟ南風吹出シ候へ而川鳴少々止候、南風暮六ツ半時ゟ段々止申候、薄曇り星所々ニ出候、九ツ時少之間砂少々降申候、其後空晴星見へ候、七ツ少前ニ地震少々ゆり候、夜中風吹不申候、	伊東志摩守日記	墨田区東駒形
		四日、終日曇り晴、四ツ半之比地震、九ツ過地震餘程、	護國寺日記	文京区大塚
		一、四日、朝曇ル、時々晴ル、(略) ○昼より砂又候降り候、風少々有之吹立候也、昼ノ内地震アリ、(略) ○今晩御相伴いたし、それより部屋ニて与左衛門と壱岐守様御意之趣相談いたし、申ノ刻退出いたし候、砂多ふり候て、から笠さし歸候也、○暮ゟ御殿へ罷出、亥ノ中刻退出、其節砂晴候て夜よし、	岡本元朝日記	台東区台東
		四日　曇、及レ晝黒沙降、午中刻地震及レ晩北風揚クレ沙ヲ、一 - 人トメ無二面ヲ不レ覆ハ者一	冨士山焼記	東京都
		同四日 終日曇、西南ゟ風吹、目口も明キ不申程ニ有之候、夜ニ入止ム、	鹿島藩日記	港区六本木

十二月四日 (12月27日)	12日目	十二月四日 一、今日、終日曇リ、西南ゟ風吹、すな降、目・口も明不申候様ニ有之、夜ニ入止申候、(略)	直堅公御在府日記	港区六本木
		十二月四日　曇天　夜ニ入少宛砂降、	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷
		四日朝[　　]晴レ曇ナシ、富士ノケムリ計見へ五ツ時ゟケムクモリ[　]風ヨホドフク、此時フリ砂フキ立夜ノゴトク夜ニ入テ空晴レ[　　]計見へ砂フル、九ツ時ゟ晴レ、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		一、四日くもり空昼時ヨリ砂降、夜ニ入止星出ル、此夕飯貞徳へ被呼参近江屋文左衛門子息平八今朝生國近江国日野ヨリ下り候由、去ル廿三日御油宿ヨリ本坂越致シ見付宿ニ泊り候處ニ夜中事之外あかるく昼中のことくニ而書物等も相見へ候由、冨士山之方火見へ候由、廿四日夕江尻泊廿五日夕沼津泊ニ致候處ニ惣而廿三日ヨリ鳴有之冨士山すは尻（須走）ロノ方昼ハ黒けむり立東ノ方へ吹寄上候由、夜ハ火見へ候由道中原吉原邊諸道具へ纏付致用心罷有候由、箱根ヨリ上ハあかるく有之箱根ヨリ下ハくらく昼之内も火をともし候程之事ニ而候由、砂降候事も箱根畑ヨリ上ハ不降畑ヨリ東國方降候由、廿六日夕小田原ニ泊候處ニ町中男女并旅人共ニ津浪入候事無心許存夜中ふせり不申候由、小田原ヨリ品川近所迄最前ハかる石のことく大キサ三四寸廻り有之石降候由、其後ハ黒砂降候由小田原ヨリ品川迄之内旅人合羽笠着馬子なとハ古あわせなとかふり往還致候由咄申候、今日昼時御代官細田伊左衛門様御手代、〔中略〕	伊能勘解由日記	千葉県香取市佐原
		四日　天氣吉、風有、昼過ゟ風止、大分きりノことくくらし、伊豆・相模邊ニて先月中石ふり、上方へ之往来止候由、	小﨑耕作家　日記	茂木町小貫
		□四日　今朝、薄曇、東方の黒雲みへず、五日も如此、夫ゟ後不見、○昼前少地震、○深更も同じ、○其後少鳴る、（略）暮比少雨して止、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十二月五日 (12月28日)	13日目	五日朝七ツ時ゟ四方クラクシテ砂フル、南方ハ晴レ、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		五日は南風吹鳴動き其日の内より煙も鳴もしつかにて、	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村内野
		一、五日、朝西南角ゟ南東江薄青黒雲引はへ、西北は晴、九ツ過ゟ西北之風吹出、南西ゟ黒雲押出シ、日光おゝい曇候、八ツ過ゟ西北之風少々出雲晴、夕方ゟ又黒雲登り、一面ニ曇り、星出候、四ツ過ゟ北風強吹出、夜明方迄吹申候、黒雲南之方江吹入、白曇りニ惣天なり申候、 川崎とつか邊江石砂降申候と申候、石かる石の叟くの焼石、色ねつミ色、やけ石故軽候、五六分四方、大小有之候、大き成はりんご程候由、砂もあらく候、壱坪ニ九斗壱石も降申候、冨士近所程石多大き有之、砂多降申候、	伊東志摩守日記	墨田区東駒形（北本所）
		一、五日、曇ル、（略）○今日総泉寺へ　御佛参被遊候故御先へ参候、天氣能候へ共風少有之、町屋上之砂吹立申候也、未ノ刻御歸弥天氣よし、御馬にて御歸被成候、御相伴いたし申ノ刻退出いたし候、○暮ニ御殿へ罷出、亥ノ中刻退出、	岡本元朝日記	台東区台東
		十二月五日　終日曇リ、(略)	直堅公御在府日記	港区六本木
		十二月五日　晴天　今日ゟ砂降止、	對馬藩　江戸藩邸毎日記	台東区下谷
		五日　晴天、南風揚クレ沙、	富士山焼記	東京都
		又同月五日之昼時分ニ前度之やうに少ひゞき日々一度程宛風にひゞき聞申候、	大地震之記	下伊那郡下條村
		□五日　亥刻少地震、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
		一、夜中餘程風吹、焼灰砂吹拂申候、	護國寺日記	文京区大塚
十二月六日 (12月29日)	14日目	一、六日、朝北風少ツヽ吹候、黒雲南之方江吹入、南之方根ニ黒雲少々有之候、惣天白曇りニ成、日光不出寒氣強く有之候、如頃日之東南より黒雲東江今夕は引はへ不申候得て一面ニ白曇りニ成候、風吹不申候、夜中晴、北風少々吹候、	伊東志摩守日記	墨田区東駒形
		扨六日七日は朝よりも地震もたびたびニて夜半の頃迄大動し火玉も猶恐しく出ければ皆人是らをみて最早只事ならぬことかなときも魂も消果て居たりけりさればにや其日より火煙も墨雲もみなしつまりて国土繁昌と成申に新不思議や御山こんりんさいよりをい出給ふ人ハ見つけたもふ扨あら有難やと貴賤之人之吾もくと手合礼拝申事社(こそ)有難けれ其中にも南駿東郡足柄弓手妻手の村里ニは石砂大分降積さてまた人は通路の水絶て可レ及よふさらになし富士山本道吉田口治る御代之ためしとて太平閑の声そふて靏の郡の御代懸てつきせぬ恵ぞ有難、	富士山焼砂吹出乱剰	山梨県南都留郡忍野村内野
		□六日　薄曇寒、○昼前少地震、○夜更雪（略） ○頃日、風気甚流行す、家を並べて或三入、或は五人、或家内不残風引、しかも平生の感冒にあらず、時疫の類也、天地不正の気によつて、一面に感する故なるべし、木薬屋、来三四月比迄売るべき拵薬を、当時売り切と、云々、是にて病人の多き事知るべし、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
		六日、終日曇懸リたる天氣ノ相、	護國寺日記	文京区大塚
		一、六日、曇ル、	岡本元朝日記	台東区台東
		六日　陰、	富士山焼記	東京都
		六日寒クシテ又砂フリ、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		一、六日くもり空西風吹寒シ観福寺法事昼前ニ私宅へ御出、	伊能勘解由日記	香取市佐原
十二月七日 (12月30日)	15日目	七日サムク四ツ時ゟ雪チラチラとフル、晴ル、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		一、七日、朝村雲出、東南ニ黒雲少々切々ニ出、北風少々吹候所ニ四ツ時より北風強立、村雲南方江吹入、七ツ半時ゟ風少々止、夜入風無之、夜中晴、月星さへ出ル、	伊東志摩守日記	墨田区東駒形
		七日、晴天、餘程有風、焼灰砂吹立難義、	護國寺日記	文京区大塚

十二月七日 (12月30日)	15日目	一、七日、天氣よし、併風少々有り、（略）〇巳ノ中刻御屋敷罷出鍛冶橋へ参候、老女中弥右衛門ニ御様子相尋候処、今日ハ御快候由也、未御食事御進ニ無之旨也、午ノ中刻あなたニて餅被下候而罷歸候、御裏御門出候時火事と申候、何方と承候処小石川と申候、風ハ御屋敷・東叡山ともに能候、北風ニ候也、しかし馬を早め罷歸候、風有之此中之砂を家上より吹落、世間ほこり立候て目へ入こととく難儀いたし、午ノ下刻御屋敷へ歸候、（略）	岡本元朝日記	台東区台東
		一、七日、（略）風強、冨士之降砂吹立、東西不見、（略）	隆光僧正日記	千代田区神田駿河台
		七日　（略）今日小石川筋火事、（略）今日承、富士の燒くる事、すこしく火勢衰へしやと云々、此二三日來灰降らす、但し風北より吹故なるへし、西南にハいまに雲ふかくして、やゝもすれハ日色くらし、	新井白石日記　下	千代田区一ツ橋
		一、七日薄晴天西大風吹寒シ夜ニ入晴天月星出ル、	伊能勘解由日記	香取市佐原
		七日　霽天、北風揚クレ沙甚冷、午剋自リ二傳通院近所金剛寺坂一出‐火、炎如レ飛定火消小出民部類‐燒餘焔　御本丸ノ方江向、因（より）レ茲（ここに）稲垣對馬守重富来テ二火事場一下‐二知メ火消ヲ一防レ之仍火先東方靡キ金‐杉村天神 俗ニ云フ二丑天神一非也水‐戸殿御‐屋敷‐隣也□、回禄水戸殿御‐屋‐敷甚危依レ之八重姫君 御懐胎也 為二供奉一松平美濃守吉保、秋元但馬守喬朝馳参回テ二重冨カ相圖ニ一御駕候セント左右ニ各歩行立ニ成リ相‐待依レ及二大火ニ一大名十人被二仰付一各盡二粉骨ヲ一申‐刻過火‐鎮ル、水戸殿御屋鋪免ル二其災一、自二今日一沙不レ降、是冨士山火‐鎮歟云々、	冨士山燒記	東京都
		□七日雪止積、一寸ばかり、辰比晴、而又曇、昼前後雪降而止、曇、夜晴、（略）〇終日寒、	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十二月八日 (12月31日)	16日目	(十一月二十三日条)〇十二月八日の朝富士燒止る、〇足高山とふじの間に新に山出来す、大さ尾州の小牧山程あり、小富士と称すべからす、宝永山と可称と、云々、 〇富士の麓、すばしり口一村、大地ぬけをちいり泥水に化す、大小民家人畜器財に至るまで、皆没す、富士川へ人馬雞犬等死したる、多く流れ出づ、	鸚鵡籠中記	富士山近傍
		一、八日、朝惣天晴、南之根ニ青黒薄雲少々有之、四ツ時ゟ村雲出、北風少々吹、八ツ時止、白曇りニ惣天なり、南之方ニ青薄黒雲引はへ申候、根はすき有之候、寒気強シ、	伊東志摩守日記	墨田区東駒形
		八日、晴天、	護國寺日記	文京区大塚
		一、八日、天氣よし、風少有り、（略）〇一昨日より殊之外氷寒候也、硯水も氷候也、	岡本元朝日記	台東区台東
		八日 一、今度富士山燒付而、先頃御祈禱被　仰付致執行者共御祈禱料被下之、寺社奉行本多弾正少弼忠晴江土屋相模守政直伝達、左之書付渡之、 駿州富士本宮浅間 大宮司　富士山城 公　文　富士長門 案　主　富士 別　当　宝 幢 院 同所村山浅間本山方 辻方坊 池大学西坊 大鏡坊 右之者共今度御祈禱修行候付而、惣様江白銀百枚被下之、不限当時御祈禱不断絶精出修行仕候様可被申渡候也、	肥前島原藩　江戸幕府日記	千代田区有楽町（すきや橋内）
		八日晴レ、七ツ時ゟ西方曇リ砂チラチラフル、夜入晴レ、	富士山辰巳方燒出シ候事	千葉県木更津市犬成
		一、八日薄くもり空寒シ、	伊能勘解由日記	香取市佐原
		則八日之晩ニハ八つ時分ニ強クひゞきわたり戸かべ抔もなり、扨々珍敷被存候、	大地震之記	下伊那郡下條村
		□八日　晴、甚寒、硯水氷、〇亥刻地震、〇夜中東北の間ゟ、鳴動する事八九度、（略）	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
		八日　晴天、	冨士山燒記	東京都
		越前殿（間部詮房）申・富士の焚ル事も、八日迄にて消たり、只餘烟のミにて、九日より雪ふりしよし注進あり、山二つハかり出來しよし、吉原の（駿河国）邊よりみゆると也、（十三日条）	新井白石日記　下	千代田区一ツ橋
		十二月初八日に至って雷鳴(ライセイ)尽(ツ)きて雨砂尚止む、	降砂記	駿東郡小山町生土
十二月九日 (1月1日)	17日目	【燒納り乃景氣　絵図中の説明文】 右十六日之間燒ヶ十二月九日之朝明ヶ七ツ時比大キに壱つ鳴(ナ)ル九日にて山晴渡り見ゆる如此宝永山出来ル、	土屋家文書『（覚書）』	静岡県沼津市原
		一、九日、朝ゟ四方白曇りニ成、日光不出、東南ニ黒雲引はへ不申候、終日寒氣甚敷有之候、夜中四ツ前ゟミそれ降、夫ゟ雪ニ成、夜中降申候、北風吹候少々、頃日、駿河ゟ注進ニ、冨士未燒候得共、和ニ有之候、石なとハ最早降不申候由也、并冨士燒申候繪圖、駿州御代官ゟ公儀到来候写シ也、九日朝六ツ半時ゟも燒申候煙止申候、［割注：八日夜五ツ半前夥しく震動いたし、夫ゟ冨士燒止申候由也、］	伊東志摩守日記	墨田区東駒形（北本所）
		九日、終日曇、　　九ツ過少晴テ後亦曇、（略） 一、五ツ半之比ゟ少宛雪降リ出、夜九ツ過ニ者壹貳寸計も積リ候、	護國寺日記	文京区大塚
		一、九日、曇ル、（略） 〇暮過ゟ雪夜中降ル、（略）〇殊之外氷候也、	岡本元朝日記	台東区台東

十二月九日 （1月1日）	17日目	九日朝ゟウスクモリ、サムクシテ夜五ツ時ゟ雪夜中降、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		一、九日薄くもり空寒シ今、	伊能勘解由日記	香取市佐原
		○今日聞ク、富士は九日にやけ止ム、漸々にやむにハあらす、忽に火盡、烟散したり、そのあとに新山(寶永山)一つ出たり、箱根山のかたよりみれは、富士に大きなる穴開けてみゆる也、溝口源右(勝興)、駿府より帰ル時にみられしなり、（十二月十四日条）	新井白石日記　下	千代田区一ツ橋
		九日　陰、從二亥刻一雪降ル、	富士山焼記	東京都
		□九日　曇、戌過ゟ雪降、深更ゟ止、霤（あまだれ）となりて落、（略） ○今月切に富士山焼留り、側に小山新に出来、或八日までに焼留る共云、（略）	鸚鵡籠中記	愛知県名古屋市
十二月十日 （1月2日）	18日目	十日、雪降リ五ツ時迄ニ壹尺計積リ候、四ツ前ゟ晴天ニ成候、	護國寺日記	文京区大塚
		一、十日残雪降地ニたまり候也平地ハ壱尺ハカリナリ、（略） ○今日昼ゟ雪晴候なり、無風静也、○夜中風よほと有之寒候なり、雪ハいよいよはれ候なり、戌ノ刻御用仕廻休候也、	岡本元朝日記	台東区台東
		同月十日　昨夜五時ゟ雪ふり、今朝五時迄ふり申候、一尺余りふり申候、(略)	直堅公御在府日記	港区六本木
		十日　雪降積ル丁二尺、巳刻雨降及二巳中刻ニ一属レ霽ニ、	富士山焼記	東京都
		□十日寒積雪二寸斗、辰半ゟ属晴、○於江戸昨夜ゟ雪降、今朝に至り積八寸余、巳刻ゟ舞、	鸚鵡籠中記	名古屋市・東京都
		十日朝空ウづゝム少雨降、雪深サ六寸余留り（溜りヵ）同夜中北風フキ、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
		一、十日雨降、	伊能勘解由日記	香取市佐原
		同十日ニハ餘程之雪降申候、右之一通只今迄申傳江にも不承候故為以後之印置候也、	大地震之記	下伊那郡下條村
十二月十一日 （1月3日）	19日目	十一日、晴、	護國寺日記	文京区大塚
		一、十一日、晴又ハ曇ル、	岡本元朝日記	台東区台東
		十一日　晴天、北風甚冷、	富士山焼記	東京都
		□十一日晴、昼前後曇、後晴、夜微雪、寅刻一つ鳴る、	鸚鵡籠中記	名古屋市
		十一日寒クシテ雪氷ル、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
十二月十二日 （1月4日）	20日目	十二日　天眼映霽酷冷、凡昨今ノ寒氣八九年已来稀也云々、	富士山焼記	東京都
		十二日ゟ晴天成世上ヲタヤカニナル、	富士山辰巳方焼出シ候事	千葉県木更津市犬成
宝永五年 十月二十八日 （1708年12月9日）	360日目	当十月廿八日夜九ツ半過時分震動之様成音仕候、方角之儀は富士山去冬出来仕候宝永山之方ニ而ひゞき申候、所之者共も余程音と聞覚申候、砂灰抔ハ曾而降り不申侯、冬ニ成申候得ハ富士山惣而雪深ク積り申侯得共、宝永山近所ニハ雪積り不申候、此外可申上儀無御座候、	口書（富士山鳴動につき須走村届書控）	静岡県駿東郡小山町須走
		江戸今日暮より少々灰降、鳴動も少々あり富士も少々煙立、	鸚鵡籠中記	東京都
宝永五年十一月二十八日（1709月1月8日）	390日目	寶永五年戊子十一月廿八日、信州淺間山焼ル、其響如レ雷、近國砂降ル、	温故年表	

富士山宝永噴火史料集

令和六年（２０２４）二月二十九日　発行

編集・発行　津久井　雅志
安藤　広太
金子　徹

〒２６３－８５２２
千葉県千葉市稲毛区弥生町一－三十三
千葉大学大学院理学研究院